

2008年度博士論文

主査教授 江藤 直純

副査教授 平山 佳須美

「在宅高齢者の自己実現尺度の開発の研究」

—自己実現尺度開発と自己実現概念の操作的定義—

Development of the Self-Actualization Scale

for the Elderly Living at Home

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科

社会福祉学専攻博士後期課程

04G-D001

清重哲男

## 目 次

テーマ：「在宅高齢者の自己実現尺度の開発の研究」

はじめに	.....	1
序章	.....	4
第1節	自己実現を研究のテーマとして取り上げた背景	
第2節	自己実現研究の目的	
<b>第1章</b>	<b>自己実現の構成概念の基本原理</b>	<b>..... 9</b>
第1節	カントの実践哲学について	..... 10
第1項	カントの実践哲学と自己実現の概念	
第2項	カント哲学より取り上げた概念	
第2節	ニーチェの実存主義哲学について	..... 14
第1項	ニーチェの実存主義哲学と自己実現の概念	
第2項	ニーチェの実存主義哲学より取り上げた概念	
第3節	マスローの心理学について	..... 19
第1項	マスローの心理学と自己実現の概念	
第2項	マスローの心理学より取り上げた概念	
第4節	マックス・シェーラーの価値倫理学	..... 23
第1項	シェーラーの価値倫理学と自己実現の概念	
第2項	シェーラーの価値倫理学取り上げた概念より	
<b>第2章</b>	<b>生活の質（QOL）に関する先行研究</b>	<b>..... 33</b>
第1節	サクセスフル・エイジングの理論	..... 33
第2節	QOL尺度の先行研究	..... 35
第1項	生活の質（QOL）の理論	
第2項	生活の質（QOL）尺度の先行研究	
第2項の1	包括的健康関連 QOL 尺度 Short Form36 (SF-36)	
第2項の2	WHO/QOL 26 尺度について	
第2項の3	PGC モラール（M o r a l e）スケール	

第2項の4	カッター (Kutner, B.) のモラール・スケール		
第2項の5	RDQ日本語版マニュアルについて		
第2項の6	諸外国のQOL尺度の先行研究		
第3項	最近のわが国の高齢者の生活の質(QOL)尺度の先行研究		
第3節	生きがいと自己決定の先行研究	.....	68
第1項	「生きがい」について		
第2項	「自己決定」について		
<b>第3章</b>	<b>予備尺度の作成と自己実現の概念定義</b>	.....	75
第1節	自己実現の概念定義	.....	75
第2節	自己実現の構成概念の操作的な仮定義	.....	76
第1項	自己実現の構成概念の操作的仮定義の手順		
第2項	自己実現の構成概念の大項目, 中項目, 小項目		
第3節	予備尺度の完成	.....	80
第1項	大項目「他者との関係性」について		
第2項	大項目「個人の生活」について		
第4節	調査票に採用する質問項目原案文	.....	100
<b>第4章</b>	<b>プリテストの準備と実施</b>	.....	103
第1節	調査項目の選定準備	.....	103
第2節	自己実現尺度構成の予測	.....	104
第3節	質問項目の抽出	.....	106
第4節	プリテスト調査票の作成	.....	108
第5節	プリテストの方法	.....	109
第6節	基本属性の調査結果	.....	100
第7節	質問項目の削減方法	.....	111
第1項	選ワーディング検討会による項目削除		
第2項	選択された32質問項目		
第8節	信頼性分析による項目選定	..... 55	..... 113

第 1 項	選定のための項目分析		
第 2 項	25 項目からの項目分析		
第 9 節	因子分析による項目選定の確認	.....	116
<b>第 5 章</b>	<b>本調査の実施</b>	.....	119
第 1 節	本調査の実施の方法	.....	119
第 2 節	本調査に使用した自己実現質問項目	.....	121
第 3 節	本調査用基本属性の項目選定	.....	123
第 4 節	サンプルの基本属性	.....	125
第 1 項	16 基本属性の度数分布の分布		
第 2 項	基本属性の度数分布の分析結果の考察		
第 5 節	本調査のデータによる項目分布	.....	131
第 6 節	全項目の度数分布とヒストグラム	.....	132
第 7 節	信頼性分析による自己実現項目の選定	.....	137
第 8 節	因子分析による項目選定	.....	145
第 9 節	因子分析による項目選定の最終確認	.....	150
第 10 節	項目選定作業の総括	.....	157
<b>第 6 章</b>	<b>自己実現尺度の因子分析による因子構造の選定</b>	.....	163
第 1 節	自己実現構成概念の仮定義	.....	163
第 2 節	因子抽出の方法	.....	164
第 1 項	主成分分析を採用した理由		
第 2 項	因子抽出の方法について		
第 3 項	直行回転を採用した理由について		
第 3 節	因子数「7」の因子分析	.....	165
第 1 項	7 因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第 2 項	7 因子モデルの評価		
第 4 節	因子数「6」の因子分析	.....	168
第 1 項	6 因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		

第 2 項	6 因子モデルの評価		
第 5 節	因子数「5」の因子分析	.....	170
第 1 項	5 因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第 2 項	5 因子モデルの評価		
第 6 節	因子数「4」の因子分析	.....	172
第 1 項	4 因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第 2 項	4 因子モデルの評価		
第 7 節	5 因子モデルの潜在因子への命名	.....	175
第 1 項	第 1 因子への命名		
第 2 項	第 2 因子への命名		
第 3 項	第 3 因子への命名		
第 4 項	第 4 因子への命名		
第 5 項	第 5 因子への命名		
<b>第 7 章</b>	<b>基本属性が自己実現トータルスコアと下位尺度に及ぼす影響</b>		
第 1 節	自己実現トータルスコアと下位尺度スコアの計算	.....	183
第 2 節	自己実現トータルスコアの分布	.....	186
第 3 節	基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響	.....	187
第 1 項	基本属性の項目名と内容		
第 2 項	自己実現トータルスコアと基本属性の一元配置の分散分析		
第 3 項	自己実現トータルスコアと基本属性の多元配置分散分析		
第 4 項	一元配置分散分析と多元配置分散分析の結果の比較		
第 4 節	下位尺度に及ぼす基本属性の影響	.....	201
第 1 項	一元配置分散分析による下位尺度に及ぼす基本属性の影響		
第 2 項	多元配置分散分析による基本属性の下位尺度への影響		
第 5 節	分散分析による基本属性の影響力の分析の総合的考察	.....	204
		.....	208
		.....	208

<b>第8章</b>	<b>自己実現スケールの確認的因子分析による検証</b>	.....	211
第1節	1次因子モデルの確認的因子分析		
第2節	2次の確認的因子分析		
第1項	2次因子の確認的因子分析の潜在変数と観測変数		
第2項	2次因子の仮設モデルの確認的因子分析		
<b>第9章</b>	<b>要約と結論</b>	.....	217
第1節	自己実現概念の構築	.....	217
第1項	カント他4人の思想家の理念と自己実現の基礎理念		
第2項	自己実現の概念的定義		
第3項	構成概念の操作的定義		
第2節	自己実現尺度（SAT-17）の開発	.....	220
第1項	自己実現尺度開発のプロセス		
第1項の1	キーワードプールの作成		
第1項の2	調査項目76原案文のステートメント		
第1項の3	プリテスト用50項目の作成		
第1項の4	本尺度24項目の観測変数の選定と本調査		
第2項	尺度の検証		
第2項の1	確認的因子分析による検証		
第2項の1	自己実現尺度の信頼性		
第3項	尺度の特性		
第3節	結論	.....	228
第1項	自己実現尺度（SAT-17）の構成		
第2項	自己実現の操作的定義の確定		
第4節	残された課題	.....	229
・	謝辞	.....	230
・	巻末資料		

## はじめに

本論文は、在宅高齢者の自己実現尺度を開発し、自己実現概念の因子構造を明らかにすることにより、自己実現の概念を操作的に定義することを目的としている。

自己実現は、各人がそれぞれ独自の概念で多様な意味に定義することができる。たとえば、健康や社会的な成功、経済力の獲得、また生きがいや才能を発揮することなど、いわば生きていく上で個人や社会から承認されているあらゆる良いといわれていることを、自己実現の概念に組み入れることができる。

社会福祉制度の中でも同様な傾向が見られる。平成 14 年に公布された、障害者基本計画の中では、「基本的な方針」として、「自己選択」と「自己決定」に並び、「自らの能力を最大限発揮し自己実現できるよう支援する」ことが規定されている。しかし、その具体的な内容は明示されていない。また、平成 17 年に改定された社団法人日本社会福祉士会の倫理綱領の前文の中に、社会福祉士は「サービス利用者の自己実現をめざす専門職である」ことが規定されている。しかし、自己実現についての内容は明確に提示されていない。このように、自己実現ということばが法律の理念や目標に組み込まれてきているが、自己実現の重要性を取り上げる程度で止まっているのである。

心理学の分野では、自己実現はゴールドシュタインが 1939 年に『*The Organism*』(Goldstein 1939) の中で最初に使用した概念であるといわれている(Maslow =1992:72)。その後、マズローが「欠乏欲求理論」の中で最上位概念として自己実現を理論化し、自己実現に関する概念を論証している(Maslow =1992:55-71)。

また、ロジャースは「完全に機能する人間」<sup>1)</sup>(Maslow =1973:89) という表現で、マズローの自己実現の理論を継承している。これらの心理学分野での研究の業績は、心理学の視点を通じて心理療法の範疇で人間を捉えていると解釈することができる。また、これらのアメリカの心理学は、歴史的にニーチェ及び他のヨーロッパの実存主義哲学の思想から、人間に関する哲学的思考の影響を受け、心理学の基礎哲学として進化してきている(Maslow =1964:27-8)。

心理学や医学、および社会福祉学の分野で、生活の質：Quality of Life (以下 QOL) 及び満足度に関する研究が多くの研究者により行われ、その成果が多数

報告されてきている。しかし、自己実現に関する社会福祉学分野での研究は、ほとんど行われてきていない。

介護保険制度が実施され、権利擁護が特に強く求められてきている今日、ソーシャルワークの援助目標や社会福祉の支援方法の領域では、QOLの理念を越えた支援目標の到達の把握の方法の基準に、利用者の日常の生活の在り方を中心に捉え、その生活を評価する自己実現尺度の開発が非常に重要になってきている。さらにいえば、自己実現尺度の開発は、これからの新たな国民的課題であると同時に、社会福祉政策における、重要な目標の一つになるといえる。

研究に先立ち、福祉先進国であるデンマークにおいて、在宅高齢者の自己実現に取り組んでいる生活支援の実践モデルの先行予備調査を行った。そのことを契機として、本研究では、哲学、心理学、価値倫理学、及び社会福祉学の自己実現に隣接するQOLなどの先行研究を行い、それを基礎とした自己実現の尺度開発の研究を行った。以下の各章において、その結果について報告する。



## 目次

序章	社会福祉のサービス支援における自己実現の意義	
第1節	自己実現を研究テーマに取り上げた背景	..... 4
第2節	自己実現研究の目的	..... 6
第1章	自己実現の構成概念の基本原理	..... 9
第1節	カントの実践哲学	.....10
第1項	カントの実践哲学と自己実現の概念	
第2項	カント哲学より取り上げた概念	
第2節	ニーチェの実存主義哲学	.....14
第1項	ニーチェの実存主義哲学と自己実現の概念	
第2項	ニーチェの実存主義哲学より取り上げた概念	
第3節	マスローの心理学	.....19
第1項	マスローの心理学と自己実現の概念	
第2項	マスローの心理学より取り上げた概念	
第4節	マックス・シェーラーの価値倫理学	.....23
第1項	シェーラーの価値倫理学と自己実現の概念	
第2項	シェーラーの価値倫理学より取り上げた概念	

## 序章 社会福祉のサービス支援における自己実現の意義

本章では、自己実現を研究のテーマとして取り上げた背景及び本研究の目的について述べる。

### 第1節 「自己実現」を研究テーマに取り上げた背景

高齢化が進む中で、医療制度や保健衛生の充実及び食生活の向上などにより平均寿命が延びてきたことから、現役引退後の長期化した人間の生活の過ごし方が大きな問題となってきた。元気な高齢者が生活に目的を持たずに日々を過ごし、加齢にともない生じる疾病の治療のために、高度医療や延命処置を一方的に受け、医療中心の生活を送ることに疑問を感じている。それよりも、住み慣れた地域で社会参加し、他者からの介護支援を受けながらも、生き生きと元気で人的交流の中で生きることの方が重要である。そしてそれを支援することの方が社会福祉の本来の目的であると考えられる。

日常生活の活動性を評価する概念として、1945年、リハビリテーション医療の分野から日常生活動作能力：Activities of Daily Living（以下ADL）が論じられるようになった（江藤 1995：12-22）。次いで、1960年代にリハビリテーション医学の領域で、生活目的の手段として活用する新しいADL概念である手段的ADL：Instrumental Activities of Daily Living（以下IADL）が開発された（江藤 1995：23-32）。生活全体の質を捉える概念のQOLは、がん治療の分野で1970年代に始まり、1980年代に様々な分野に波及し広められた（高橋 1995）。

田崎・中根(1997)は、世界保健機構：World Health Organization（以下WHO）が、主観的幸福感の測定を主眼としたQOLの定義およびQOL測定尺度の研究を報告したことを契機に、世界各国で急速にQOL研究が盛んになったことを報告している。

このように社会福祉サービスの評価方法であるQOLは、リハビリテーション医学中心のADL概念から出発し、日常生活の具体的内容に関連したIADLへと移行した。さらに、生きがいや人生の幸福感及び生活満足度を追求する時代へと移行してきている。人生の幸福感や生活満足度に関連したQOL研究の1つと

して、久保田・ほか（2006）は、Lawton(1991)の「Well-Being」に基づいたQOL概念を紹介している。

また、池上・ほか（2001）は、人間が経験を通して獲得する達成感の程度や幸福の程度をポジティブに測定するWHOの主観的幸福感尺度（WHO Subjective Well-Being Inventory）（Sell 1992）について述べるとともに、家族、友人や人とのつき合いを含めた Short-Form Survey(SF-36) (Ware, et al 1992)の36項目8下位尺度から構成されるプロフィール型QOL尺度について報告している。

人間の幸福感や満足度について、米国ではLawton(1975)らが老年学の立場から主観的幸福感の測定尺度PGCモラル・スケール<sup>2)</sup>を開発している。わが国では、前田・ほか（1979）がPGCモラル・スケールの22項目の日本語版による『老人の主観的幸福感の研究』を報告している。また、古谷野（1983）は「生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性」の研究を報告している。

WHOの新しく改訂された国際生活機能分類：International Classification of Function（以下ICF）は、従来のADL評価から「生活機能」を「参加」(Participation)と「活動」(Activities)などの肯定的な表現で概念化をしている（障害者福祉研究会 2002）。このように、一人ひとりが社会参加や活動を通して、生活の満足や生きがいを求め、大切にすることが正当に社会評価される時代になってきている。

わが国では、団塊の世代が65歳を迎える2015年には、介護保険制度のサービス利用量が大幅に増大することが予測される。そのため、高齢者が健康で、地域で自立生活を継続し、いつまでも元気に社会参加しながら生き生きとした人生が送られるよう支援する方法が論議され、社会福祉政策の重要な今日的課題となってきた。

すでにこのことは、「ゴールドプラン21」の社会参加や「2015年の高齢者介護」報告書の地域での包括的支援として具体的施策に組み込まれている。（表1）

こうした時代の変化にともない、ソーシャルワークの基本的な考え方は、治療的な考え方から、個性を尊重した生きがいや社会活動を目標とする生活中心の新しい考え方へと移行してきている。筆者は、利用者の側に立って、生きがいや自

己実現の程度を評価する尺度が現実が必要とされてきていることを強く感じている。

社会的な生活や家庭の中心としての主婦の役割を退いた後の長い高齢期を、元気で目標を持ち、新たに潜在能力を開拓し社会活用をするなど、自己実現に向けてその人らしい生きがいのある人生を送ることを、高齢期の個人の人生の過ごし方の問題としてだけ捉えるのではなく、社会福祉全体の重要な目標として捉える必要がある。

表1 近年の各種指針による自己実現関連表記内容

指針の理念	自己実現に関連する表記
ゴールドプラン 21	自らの意思に基づく 高齢者の尊厳 社会参加 若々しい高齢者 生きがい
2015年の高齢者介護	自ら選択・決定 生活を自ら組み立て 尊厳の保持 潜在能力 活動能力 充実した生活 個別ケア 一人ひとりの個性 社会とのかかわり
ICF	活動 参加 環境因子 個人因子 健康状態 心身機能
日本社会福祉士会 倫理綱領	ウェルビーイング 解放 社会正義 自己実現 エンパワーメント

## 第2節 自己実現研究の目的

社会福祉学の分野で、「自己実現」に関する実証的研究及び概念の理論化の研究はほとんどされてきていない。従って、「自己実現」を測定する尺度の開発は、これからの課題である。本研究では、自己実現を概念化し、「自己実現」の評価尺度を開発することにより、因子構造を明らかにし、「自己実現」の構成概念を操作的に定義することを目的としている。

本論文は、カント哲学の「行為と意志」、ニーチェの実存主義哲学の「権力への意志」、マズロー心理学の「欠乏と欲求」、マックス・シェーラーの「価値倫理学」などの人間の本质論から出発している。高齢者は社会福祉サービス利用者である以前に人間であることに重点を置き、在宅高齢者の自己実現尺度の開発を行う。

契約制度にともない社会福祉理念を实践する地域における各機関や社会福祉現場では、社会福祉サービス情報の開示、自己決定権、QOL（生活の質）の向上、さらに、最近では自己実現が強く求められてきている。また、高齢者が社会的な場から自由に出て、社会参加ができるよう「自己実現」理念と高齢者の自律に基づく新しい生き方が社会に浸透し、高齢者の自己実現に向けた社会福祉支援システムの構築が求められているといえる。

このようなことから、本研究では、研究の成果が高齢期の人間の生き方の本質を高め、相談支援方法や社会福祉サービスの評価方法の有効な道具になることを最終的な目的としている。

#### （注）

- 1) ロジャース：心理学者でマズローの欲求説に理解を示し、人間を成長と自己実現にむかう健康な人間と捉えている。；Decarvalho, R. J. (1991) *The Growth Hypothesis in Psychology.*, Roy Jose Decarvalho. (=1994 伊藤博訳『ヒューマニスティック心理学—マズローとロジャース—』新水社,152-53.)
- 2) PGC モラールスケール：Philadelphia Geriatric Center モラールスケール（ロートンが開発したモラールスケールである。）；前田・ほか（1975）

#### 【引用文献】

池上直己・福原俊一・下妻晃二郎・池田俊也編(2001)『臨床のための QOL 評価ハンドブック』医学書院.

江藤文夫（1995）「ADL の評価方法」『高齢者の生活機能評価ガイド』医歯薬出版, 12-22 v.

Goldstein, K. (1939) *The Organism*, New York : American Book.

古谷野亘(1982)「生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性」『社会老年学』（4）, 142-154.

- 久保田晃・波多野義郎 (2006) 「社会福祉学における QOL 研究の意義」『社会福祉学』  
47 (2) , 43-51.
- Lawton, M. P. (1975). The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A  
revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- Lawton, M. P. (1991). A Multidimensional View of Quality of Life in Frail  
Elders, Birren, J. E. (eds). The Concept and Measurement of Quality of  
life in the Frail Elderly, *Academic Press*, 3-27.
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 (1979) 「老人の主観的幸福感の研究」 『社会老年  
学』 (11) : 15-31.
- Maslow, A. H. (1971). *The Farther Reaches of Human Nature.*, Viking Press Inc.  
(=1973 上田吉一訳 『人間性の最高価値』 誠信書房).
- Maslow, A. H. (1971). *Motivation and Personality, Second edition.* Harper & Row,  
Publishers, Inc. (=1987 小口忠彦訳 『人間性の心理学』 産能大学出版部. )
- 障害者福祉研究会編 (2002) 『 I C F 国際生活機能分類—国際障害分類改訂版—』  
中央法規出版.
- Sell, H. et al (1992). Assessment of Subjective Well-being : The Subjective  
Well-being inventory (SUB1) . *Regional Office for South-East Asia, World  
Health Organization.*
- 高橋龍太郎 (1995) 『精神機能評価法 意欲・モラール・QOL の評価法』 『高齢者の  
生活機能評価ガイド』 医歯薬出版 (株) , 51-58.
- 田崎美弥子・中根允文 (1997) 『WHO/QOL-26 手引』 金子書房.
- Ware, I. E, et al (1992) The MOS 36-Item Short-Form Health Survey (SF-36) I.  
Conceptual Framework and Item Selection. *Medical Care* , 30, 473-483.

## 第1章 自己実現の構成概念の基本原則

自己実現の尺度開発を行うには、自己実現の基本概念的構築が重要となる。自己実現の基本概念的構築を行うにあたり、カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の哲学者や心理学者の思想を参考とした。以下に、4人の思想家を参考とした理由について述べる。

カントは近代倫理学の実践哲学を確立し、人間が行う行為と行為を実際に行う主体の人間の善い意志のあり方の関係に論及している。ニーチェは、実存主義哲学を確立し、生きることの本質について論及し、自己否定し虚無に陥った人間の生きている存在の意義の大切さと<生>きる意欲の重要性を述べている。マズローは、自己実現をゴールドシュタインから受け継ぎ、自己実現の概念を欲求5段階説の最上位に自己実現の欲求として位置付けた初めての心理学者である。シェーラーは、人間の行為の善と悪及び「財」に関する価値を4段階の序列として定義し、最上位の聖なる価値の中に「愛の作用」を位置づけ、世界との関わりと他者へのかかわりの重要性を論述している。これらは、筆者が4人の思想家を自己実現概念的根拠として選択した概要である。

以下、これらの4人を自己実現の概念化に選択した理由を、一人ひとりについてさらに詳しく論述する。

カントは、人間が行為を行う場合に、本人が自分の意志で自由に行為を選択し、本人の意思で主体的に自己決定をすることを基本理念とし、このことが人格の自律であると論じている。また、人間の人格は現に存在すること自体に目的があり、人間を手段や道具として利用してはならないと主張している。この思想を提唱したことから、筆者はカントを自己実現の概念的根拠の思想家として選択した。

ニーチェは実存主義哲学を確立し、人間の存在は、意志が真に<生>きることを意欲することであり、<生>きるとは「理性を持ち、一定の方向を目指し新しい自分を生成していく」ことであると論及している。この思想を提唱したことから、筆者はニーチェを自己実現の概念的根拠の思想家として選択した。

5段階の「欠乏欲求理論」を提唱し、自己実現を最初に理論化したのがマズローである。自己実現(Self-actualization)の欲求を高次欲求の最上位に位置づけ、低次欲求である食欲や睡眠などの基本的欲求は、生命維持のため、高次欲求であ

る自己実現の欲求や他の欲求に先行して充足させる必要がある。しかし、低次欲求を犠牲にして、高次欲求を充足させたいという欲求もあるとマズローは論じている。この思想を提唱したことから、筆者はマズローを自己実現の概念の思想家として選択した。

シェーラーは、「人間とは何か」という命題に、人間は「いつも世界との関わりにおいて存在している」と答え、世界との関わりが人間の存在の根拠であると論じている。また、4段階の価値序列を唱え、最高位に聖価値を位置付け、現実的な自己成長を目指し、「愛の作用」により他者に関わり合い、世界平和や人類の幸せを絶対者に祈る普遍妥当性の必要性を説いている。この思想を提唱したことから、筆者はシェーラーを自己実現の概念の思想家として選択した。

これらの4人の思想に共通した理念は、「人間とはなにか」そして「生きることとは何か」について論じ、生きるという行為の主体は個人の人間であるとの本質論を出発点として、人間の人格の主体的行為と人間の自己の成長を基本理念として展開している。

## 第1節 カントの実践哲学

### 第1項 カントの実践哲学と自己実現概念

カントは近代倫理学の原理の確立者であり、人間が行う行為と行為を行う主体である人間の善い意志のあり方の関係を論述している。カントは、行為を実際に行う場合の意志のあり方と人間が幸福を求めることについての妥当性は、人間が生きていく上での核心的原理であると論じている。

カントはこの理念を痛風の患者の例、「足指の痛風に苦しむ患者は、好きなものを満喫できれば、苦しみはできるだけ我慢するほうがましだと思えるかもしれない・・・その患者は健康になれば得られるはずの幸運なんてあてにできそうもないと考え、目前の楽しみを奪われたくない・・・」を取り上げて説明している(Kant = 2000 : 21)。この原理は、自己実現の本質に直接的に関連していると、筆者は考えている。

また、カントはこの患者の幸福を求める普遍的な意志の決定のあり方について



論じている (Kant=2000 : 21)。この例の患者の意志の決定のあり方は、福祉サービス利用者が日々の生活の中で実践する行為 (動作) に関する意志の決定のあり方の原理の具体的例として考えることができる。

倫理的に行為の主体である「人格」の概念を明確に確立したのは、カントである。カントの実践哲学の論理の中心課題である人間が行為を行う場合に、行為の主体である本人の意志が自由であることを前提に、意志が自分で選択し行為を行うという意志のあり方は、自己実現を構成する意志の自律の基本概念の重要な要因になると筆者は考えている。

## 第2項 カント哲学より取り上げた概念

カントの実践哲学 (倫理学) の本質が集約的に論じられている『人倫の形而上学の基礎づけ』及び『実践理性批判』、そして『人倫の形而上学』のこれらの著作の中でカントが論述している、行為への意志の働きに関する理念は、自己実現の重要な基本理念であると考えられる。カントの倫理学を理解するにあたり、小倉 (1989) の『倫理学概論』及び山崎 (1986) の『倫理学基本』に記述されている論述は非常に有用であった。

これらの論述を参考とし、主に、個人の主体的行為と人間的成長を基本に据えて、筆者の観点から、社会福祉サービス支援に関する理念に関連性があると思われるカント哲学の7つの概念を取り上げる。

それらの7つの概念は、主にカント哲学の意志の自律と自由、選択意志、幸福、人格の本質など人間の行為に関する思考の基本部分である。カント哲学の人間に対する考えの原則は、人間の存在は目的自体として実在し、人間を手段として、また道具として、別の目的に利用してはならないという論理であるといえる (Kant = 2000 : 64)。

第1の概念に、「意志は、すべての行為において自分自身が1個の法則である」 (Kant=2000 : 91) という理念を取り上げる。つまり、意志は他律 (他者への依存や強制) によるのではなく自律を前提としている。つまり、われわれが行為を行う場合に、行為の主体の意志が自由であることは、行為を行う主体みずからが

1つの法則となり、主体が行う行為を決定する基準になるということである。

第2の概念に、「意志の自己決定の客観的根拠として、意志に用いられるのが目的である」(Kant=2000:63)と述べられている理念を取り上げる。人間は自分の意志で、行う行為を決定することが重要である。その根拠は、その行為が自分自身に向けられる場合においても、他者に向けられる場合においても、意志が行為を行う目的を設定すること自体が、行為を行うことと同時に目的であるということの意味している。つまり、意志が主役となり行為の結果である、何のためにという目的を設定するという、この意思決定の過程自体が行為を行うことの目的である。

第3の概念に、カントが、人格について「人格は客体的な目的であり、現に存在すること自体が目的である」(Kant=2000:64)と述べている理念と、カントが自由について「選択意志の自由とは、感性的衝動による規定からの独立ということ」(Kant=2002:26)であると述べている理念を取り上げる。このことについて山崎(1986:190)は、カントのいう人格と選択意志の自由について、人間の行為への「選択意志が自由であることは、人格の本質である」と簡潔に説明している。つまり、人間の人格は手段とされるものでなく、人間の存在自体が目的であり、すべての条件づけられた傾向性や感性から人格は自由で独立した絶対的価値を持つ存在自体であるということである。

第4の概念に、カントが自律について「純粹実践理性の自律はすなわち自由に他ならない」(Kant=2000:170)と述べている理念を取り上げる。このことは、意志の「自律こそが真の自由である」(カント研究会 1997:65)という概念と同一の解釈であるといえる。意志が意志以外のどこにも法則を求めることがないこと、即ち自律とは別の外的原因から独立しているということ、つまり自由であるということに他ならないのである(Kant=2000:90)。

第5の概念に、「人間は物件ではなく、単に手段としてのみ必要とされるのではなく、人間は、自分のすべての行為の実践に際して、いつでもそれ自身が目的自体だと見なされなければならない」(Kant=2000:66)と述べられている理念を取り上げる。ここでいう物件とは、存在していることが本人の意志ではなく、また本性に基づく目的としてではなく、手段として相対的な価値を持つにすぎない、理性を待たない存在者を物件と呼んでいる(Kant=2000:64)。

つまり人間は、手段として、たとえば単に労働として利用価値がある物件として存在するのではなく、行為を行う存在者として、存在していること自体が目的である存在である。このことは、高齢者や障害者が労働力としてだけでなく、存在していること自体が目的であるということにつながると考えられる。

第6の概念に、カントが「幸福、すなわち、自分の状態についてその永続を確信するかぎりで満足することを希求するということは、人間の本性にとって避けえぬことである……幸福は、同時に義務となる目的ではない」(Kant=2002:252)と述べている理念を取り上げる。このことは次のように解釈できる。自分の現在の生活の状態が、いつまでも続くことは確実であるということに満足していることを幸福と呼び、幸福を求めることは人間の本性である。しかし、自分の幸福、つまり現在の生活の状態が変化せず永遠に続くことを求めることは義務ではなく、またそのことを生きる目的にしてはならないと筆者は解釈している。

第7の最後の概念として、カントの幸福についての「私の目的として実現に努めることが義務であるような幸福が問題となるならば、それはほかのひとたちの幸福でなければならない」と、「私のほかのひとたちの許された目的を自分の目的とすることである」(Kant=2002:253)の2つの理念をを取り上げる。他者の幸福の追求や達成のため、つまりその人の現状の生活状態が永遠に続いて欲しいということの達成のために手助けをすることは、人間の義務であり生きることの目的としてよい、という意味である。

小倉(1989:44)は、カントが論じる幸福について、カントの『判断力批判』(Kant=2002)の中で、「幸福を単に個人的なことではなく、世界福祉のことと考えて」と論じていることをあげている。つまり、自己実現は、単に個人のことに終始するのではなく、社会的な福祉に貢献することに関与するべきであるという考え方は妥当であるといえる。

7つのカント哲学から抽出した「人間が行為を行う場合は、行為の目的を他者から独立して主体的に自由に自己決定し、自律している」という理念は重要である。「人間を手段としてみなすのではなく、目的自体としてみなし、自分の幸福ではなく、他者の幸福に参与することを自分の人生の目的としてよい」というカント哲学の理念は、自己実現の概念の操作的定義を担う理念として参考になりうると考える。

## 第2節 ニーチェの実存主義哲学

### 第1項 ニーチェの実存主義哲学と自己実現の概念

ニーチェは生の哲学者として、実存主義哲学を確立した。特に『権力への意志』の著作の中で、ニーチェ哲学の生きることの本質に関してが論及されている（木田 2002）。

ニーチェは、「何が存在を存在たらしめているか」そして生きるためには「何を生成しなければならないか」について論じ、存在に値する者は「権力への意志」として把握されると論じている。またニーチェは、「意志が意欲することにより、〈生〉きること」を〈権力への意志〉という独特のことばを用いて表現している（Nietzsche=1968）。

この「意志が意欲することにより〈生〉きる」ことは、従来の自分の能力や人間への世界観から脱皮し、より大きな自分の能力や価値観へと高め、自分が持っていない能力や人間観、価値観を持った新しい自分を創造することを目指し意欲的に生きるということである。これは、自己実現の構成概念の基本原理の1つとして重要であるといえる。

〈生〉きることと本人の〈意志〉に関する思考を、ニーチェはショウペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』から多くを学び、ショウペンハウアーが意志と呼んでいる〈生〉と明確に区別するため、ニーチェは生きることを「権力への意志」という独特の表現を用いたのである（木田 2002）。

またハイデッガーは、ニーチェ哲学の影響を受け、ハイデッガーの主著『存在と時間』の創作にその影響力を反映し、ニーチェ哲学に関する論評を著作『ニーチェ I』として著している（Heidegger=2007）（木田 2002：22）。

〈生〉きることに関する思考は、ショウペンハウアーからニーチェへ、ニーチェからハイデッガーへと時代を超えて影響力を継承しているのである。ニーチェは、〈生〉きることを「理性を持ち、一定の方向を目指し生成していく」ものとダーウィンの進化論の考えを取り入れて説明している。ニーチェ特有の〈生〉を定義し、単なる自己保存の生とは異なり、〈生〉きることは生成していくものと論じているのである（木田 2002：245）。

またニーチェは、近代科学である力学や物理学により作られた合理性が、人間社会に及ぼした弊害について述べている。近代科学は人間を虚無にし、人々をニ

ヒリズムへと陥れる危険性を孕んでいると論及している。ニヒリズム（虚無）に陥った人間がニヒリズムから脱却することの重要性を説き、自己が現存していること自体の絶対的価値の重みを述べ、真に自己が〈生〉きることの重要性を論じている（木田 2002：255）。

つまり、ニーチェは近代科学により力学や物理学が生み出され、人間が生きることよりも合理性が重要であり大切であるとしてきたことは誤りであると述べている。科学技術よりも人間が現に生きていることを優先し、そこに絶対的価値があること、つまり、真に自分が自分らしく積極的に生きることが重要であり、そのことに価値があると論じている。

筆者が勤務していた特別養護老人ホームに、90歳近い小柄な女性で、ベッド周りの歩行しかできず、体力もなく、趣味もなく、訪れる人もなく、毎日ベッドの上に正座をして静かに時を過ごす以外に具体的に何も活動をしていない長期入所者の方がいた。少しの食事を食べるだけで、老人ホームで世話を受けてただ生きていることだけの生活から、生存の意味を失い、社会から必要とされなくなった自分への虚無感から「はやく死んでしまいたい」と自分に向けて度々話す自己否定のことばを聞き、そのたびにニーチェの「ニヒリズムからの脱却」の重要性と真に生きることへの支援のあり方について考えてきた。

社会福祉の仕事に従事して以来、単にサービスを利用者に合理的に支給することだけが社会福祉の目的ではなく、利用者が生きていることの存在の大切さを実感し、施設の閉鎖性などの影響から、自己存在を否定する虚無感に陥らずに真に生きることには希望を持ち、生き生きとした日々の生活を送ることができる生活の支援を行うことが社会福祉の目的であると思い続けてきた。その1つの方法が高齢者への自己実現に向けた支援である。

ニーチェのいう「生存は生成することとして把握される」（Nietzsche=1968：187）という実存主義哲学の思考は自己実現の基本原理として重要だといえる。

## 第2項 ニーチェの実存主義哲学より取り上げた概念

ニーチェの実存主義哲学の本質は『権力への意志』上・下の著作の中にその概念が示されている。断片的著作『人間的な、あまりに人間的な』を含めたニーチェの3著作に示された<生>きることに関する意志と「ニヒリズムからの脱却」(Nietzsche=1970)への思考が、高齢者の自己実現概念を構成する要因として有用であると筆者は考えている。また、ハイデッガーの『ニーチェ I』の著作に示された「権力への意志」に関する論評は、ニーチェの考え方の理解に有効である(Heidegger=2007)。特にここでは、ニーチェ哲学に関する特徴的8つの概念を取り上げる。以下に、筆者が取り上げた哲学的な概念について述べる。

まず第1の概念に、「無意味なものが永遠に、これがニヒリズムの極限的形式である」(Nietzsche=1970: 62)と述べている理念を取り上げる。このことは、文明社会は物理学などの科学的な合理性が支配し、それまでの価値あるものがその価値を失い、結果として人々は生きる意欲を失い、人間性が否定され、真に人間的に生きることの価値を見失い、生きることに価値が感じられず、無意味となった生が、今後も永遠に続くということをいっているのである。そしてニーチェは、このニヒリズムから一人ひとりの人間が脱却することの重要性を論及している。

第2の概念に、「至高の諸価値がその価値を剥奪されるということ、目標がかけられている。『何のために?』への答えが欠けている」(Nietzsche=1970: 22)と述べている理念を取り上げる。このことは、文明社会は科学によりこれまで続けてきた最高の価値がその価値を失い、人々は『何のために?』生きているのかという、生きる目標や価値を見失っている状態を指している。

第3の概念に、「存在よりも非存在の方がましではないかという問いは、それ自身すでに、一つの衰退を表すものである」(Nietzsche=1970: 46)と述べている理念と、「人間に対する無力が生存に対するこの上なく絶望的な嫌悪を生み出す」(Nietzsche =1970: 64)と述べている理念を取り上げる。

最初のニーチェのことばは、「自分が今ここに現実に存在しているよりもむしろいない方がましである、又は死んでいなくなった方がましである」と、そのように思考をすること自体が、すでに人間が衰退していることを示しているという意味である。また、もう1つのことばは、「自分の人間としての存在を無力に感じ

るために、生きていくことが絶望的で嫌な気持ちになる」という意味である。

第4の概念に、「高級な人間か低級な人間かを区別する基準は、恐怖をいใดかず不幸に挑戦する点である」(Nietzsche=1970:195)と述べている理念を取り上げる。このことは、「人間が高級であるか、低級であるかを区別する根拠は、その人間が不幸に陥っている場合に、恐れを抱かず、不幸を乗り越えるために挑戦しているか、していないかにある」という意味である。

第5の概念に、強さについて「強さの基準は、逆の価値評価のもとで生きることができ、それを永遠に繰り返して生きることを意欲すること」(Nietzsche=1970:404)であると述べている理念を取り上げる。このことは「人間の強さを決める判断基準は、自分が大切に保っている価値基準に相反する別の価値基準のもとで、いつまでも自分の価値基準を保ち、生き続けられることである。」という意味である。つまり、「効率性や経済力が価値評価の基準である文明社会の中で、人間の意志や意欲を価値基準として保ち、生き続けられることが強い人間の基準である」という意味である。

第6の概念に、ニーチェが「意志はそれ自体力である。そして力とは、それ自体において絶えることなき意欲である。意志は力であり、力は意志である。」(Heidegger=2007:57)と述べている理念を取り上げる。

つまり、意志とは意欲することにおいてはじめて意志となり、意欲することにおいてエネルギーを生み出し、意欲し続けることにより意欲の連続が力となり、その結果、意志は力となるという意味である。

第7の概念に、ニーチェの「願望はまだ意欲ではない。ひたすら純粋に願望する人は、まさに意欲していないので、願望されたことが彼の干渉なしに生起することを望んでいる・・・意欲とは、自らの命令下に置くこと、自己命令への決断、それ自体すでに実行であるような決断である。」(Heidegger=2007:54)と述べている理念を取り上げる。

このことは、次のように解釈できる。「願望と意欲は別である。願望は、単なる望みであり、自らの努力により願望を実現するための行動に踏み出していない。自分の行動以外に周りの他の条件が好転することにより願望が実現することを願っているに過ぎない。しかし、意欲することは自分自身に行動することを命令し、行動を起こすことを決断し、現在の生活を変更する方向へと踏み出すことから、意欲することはすでにそれ自体実行である」ということである。

第8の概念に、「上昇は価値のそれぞれの成長を意味し、この段階における下降は価値の低減を意味する」「目標が意識の増大ではなく、権力の上昇である」(Nietzsche=1968:202)と述べている理念を取り上げる(木田 2002:243)。このことは、「生きることは、権力(生)の上昇であり、意欲を高めることである。自分がより大きく、より強くなろうと成長を意欲する意志だけが価値を高める」という意味である。現状維持に甘んじるなら、それはすでに生ではない。つまり、「生」即ち、ニーチェのいう「権力への意志」とは、成長することなのである。

第9の最後の概念に、「何かに従属しているを感じない間は、われわれは自分が独立していると思うのは、誤っている」(Nietzsche=1997:228)という理念を取り上げる。このことは、「ある従属関係において、長い間の慣れから、自分が独立性を失っていることに気づいていないにも関わらず、自分は自由だと勘違いしていることが多い」という意味である。

これらのニーチェの9つの概念から抽出した「物理学などの科学的合理性が支配する現代社会では、人間性が否定され、自己の存在の価値を見失った人間は生きる目標を失い、自分がない方がましであると自己の存在を否定する。この自己否定のことばは人間の衰退を意味している。生存するとは生きることを意欲することであり、真に<生>きることは意欲的に自己を成長させ高めることを求め続けることである」というニーチェの実存主義哲学の理念は、高齢者や障害者が自己の生存に価値があるものと自覚し、自己実現に向けて意欲的に生きることの意義と関連があると考えられる。また、自己実現尺度開発の質問項目の作成に参考になるとと思われる。



## 第3節 マスローの心理学

### 第1項 マスローの心理学と自己実現概念

マスローは、自己実現に関して、最初に「自己実現」のことはを使用したゴールドシュタインの影響を受けている。マスローの心理学の特徴は、人間を消極的、病的側面から捉えるのではなく、健康で正常な心理学的内面生活を科学的に、裏づけに基づいた研究により捉えていることである。その代表的研究が欲求理論と自己実現である。マスローは、心理学の側面から、自己実現について論理的なデータに基礎を置いて研究した唯一の心理学者である。

マスローは、自己実現に到達していると思われる、人生の大半を終えた尊敬できる 20～30 人の被験者に質問を行っている。欲求が欠乏している状態から人間の行動を分析し、そこから自己実現の性格やその特徴を探索し、自己実現の操作的定義を行っている(Maslow =1991 : 52)。つまり、マスローは、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求の階層的欲求説を説いている。つまり、人間は食欲や睡眠等の低次欲求(生理的欲求)が満たされた後に、その上位にある精神的な高次欲求(人格的欲求)の充足に向かって成長するという理論を説いている。

そして、高次欲求の上位に自己実現(Self-actualization)の欲求を位置づけている。マスローは、さらに階層的欲求説の自己実現の上位に、いわば祈りや瞑想のような日常性から離脱した精神的な世界を体験する、超越経験、至高経験(self-transcendence)を位置づけ、そこに到達した人間を「完全なる人間」と名づけている(Maslow =1987 : 444)。そこには「日常生活を維持する」という現実生活の観点を中心に据える社会福祉学の範疇を超える心理学的な特殊な一面が感じられる。

一方、欲求説の中には、社会福祉学に直接的に関連する普遍的な考え方も述べられている(Maslow =1964:121-22)。例えば、食欲や睡眠のような生活に直結している基本的欲求は低次欲求であるが、他の欲求に先行して充足する必要がある。生物としての人間が生きるために必要な最低限度の生活は、生活保護制度として優先し充足されなければならない。

マスローの思想はオリジナルではなく、カント哲学やニーチェの実存主義哲学

の思想の影響を受けている (Maslow =1964 : 26-36)。また、マズローはロジャースや彼の門下生たちに自分の欲求理論の影響を与えている (Maslow =1964 : 149)。

## 第2項 マズローの心理学より取り上げた概念

マズローの著作から本論文に引用した諸概念について説明する。マズローの心理学の本質が集約的に論じられている『人間性の最高価値』及び『完全なる人間』そして『人間性の心理学』の3著作の中でマズローが述べている欲求説と自己実現に関する理論を現代に普遍化できる理念は、自己実現の概念の基本原理として利用できると考えている。

人間に対するマズローの考え方の根本的な特徴は、人間そのものへの受容的態度である。人間は生来善なるものとして生まれ、「存在」価値「B」<sup>1)</sup>を追求する欲求をもつものと捉えている (Maslow =1991)。

本項では、主に、マズローが論じている欲求説及び自己実現に関する論述と社会福祉サービスの支援との関連性について、筆者の考え方を述べる。ここでは、特に6つの概念を取り上げる。

第1の概念に「自己実現とは、完全に熱中し、全面的に没頭し、無欲になって十分に生きいきと経験することを意味する。この経験の刹那に人間は、まったく完全に人間になるのである。この瞬間において自己が自ら実現しつつある時なのである」(Maslow =1991 : 56)と「彼らにおいては労働と喜びの二分法は消滅する」(Maslow =1991 : 54)の2つの理念を取り上げる。このことは、ある仕事や芸術作品の製作などに、すべての他のことを忘れ熱中し損得も意識せず、目を輝かせて打ち込む状態を指している。その没頭している瞬間に人間は、完全にその人らしい本来の人間になるのである。そしてその時が、自己が実現しつつある時なのである。その人間にとって、目標の仕事に従事する労働の負担とそこから得られる喜びは一体となり、労働と喜びを区別し分離することはできないのである。

第2の概念に、マズローはある目標について「自己実現しつつある人びとは一人の例外もなく、体外にある目標、すなわち自分自身の外にある何かに従事して

いる」「ある人は自己の生涯を、私が「存在」価値「B」と呼んでいる、それ以上究極的なものに還元できない本質的究極価値の探求に捧げている」(Maslow =1991 : 54)という理念をを取り上げる。自己実現しつつある人びとは、法律や建築、研究などに打ち込み、また小説や絵を描く芸術作品など自己の外にある仕事に目標を持って従事している。その人たちは、真、善、美、正義、秩序、完成などと表現されている、マズローが「存在」価値「B」と呼んでいる「究極的な価値」の目標の探求に生涯を捧げている。

第3の概念に、「自己実現とは成長への選択であり、自己実現とは前進の過程である」(Maslow =1991 : 57)という理念をを取り上げる。このことは、自己実現とは、その人間が成長し、より大きくなることに意欲を示し選択することである。つまり、目標の実現に向けて取り組むことを選択し、目標の達成に向けて前進する過程であることを意味している。

ここでニーチェは先に、生きることは上への「上昇」であるといい、マズローは自己実現を水平方向への「前進」であると述べている。2人のいう「上と横」の方向性に違いがあることは特徴的である。つまり、ニーチェは、生きる意欲への意志と捉え精神的に意欲を高めていくこと、意欲を上昇させることであるといい、一方マズローは、生きることを生命の維持する生活レベルで捉え、今日より明日へと水平方向に進歩することとして捉えている。

第4の概念に、「自己実現というのは、潜在的な能力、人間の可能性を実現することである」(Maslow =1964 : 260)と述べている理念を取り上げる。自己実現とは、その人間の外面にまだ現れず、個人の内部に潜んでいる能力を引き出し、潜んでいる小さな可能性を育て、大きく成長させ現実のものとして具現化し、可能性を実現させるという意味である。

第5の概念に、「自己実現について語ることは、実現されるべき自己のあることを示している。人間は白紙でもなければ、粘土のかたまりでもない。彼は、すでにそこに存在する何ものかである」(Maslow =1991 : 57)という理念をを取り上げる。ここでマズローのいう「自己のあること」とは、自己実現を行う主体である個人が、自己を人間として認識し、確固とした人格的な自己が存在することを前提としていることを示している。

ニーチェのいう実存主義哲学の中心課題である自己の現実存在の価値を認めることと同じ思想をマズローは述べている。自己否定やニヒリズムに陥るのでなく、肯定的に、能動的により大きくなることを意欲し生きることは自己実現の前提である。

第6の最後の概念として、「彼らは働き、試み、そして野心的である。彼らにとって動機づけとはまさに人格の成長であり、性格の表現であり、発展である」(Maslow =1987 : 238 )という理念を取り上げる。自己実現しつつある人びとは、可能性の実現を求め実際に行動し、一生懸命に働き、いろいろな事象に繰り返し挑戦する野心家である。人間としての人格を成長させ、発展させることに熱中し、事象の実現を通じ個性を積極的に表現することは自己実現への動機であるという意味である。このことは、人間が低次欲求の基本的欲求を満たそうとする一般的な動機とは異なり、高次欲求を充足しようとする働きであり、動機である。

これまでに説明したマズローの6つの概念は、次のようにまとめることができる。

自己実現とは、ある仕事に全てを忘れ熱中して打ち込み、その時もっともその人らしい本来の人間に変化することをいう。ある仕事に目標を持ち、その実現に向け潜在能力の成長とともに、前進する。目標の実現に向けて一生懸命働き、繰り返し挑戦を続ける。自己実現を論じるには、自己実現を行う主体の人間が、人格的自己の存在を自覚していることが前提となる。

このようなマズローの自己実現に関する思考は、在宅高齢者の自己実現の概念に共通している要因であるといえる。また、自己実現の尺度開発において下位尺度概念を決定する場合の要因になると考えられる。

## 第4節 マックス・シェーラーの価値倫理学

### 第1項 シェーラーの価値倫理学と自己実現概念

シェーラーの価値倫理学は、カントの倫理学を批判することを通して、シェーラー独自の新たな実質的倫理学を構築している (Scheler =1976 : 45)。基本的にカント倫理学の思考を対象とするところが大きい。シェーラーの価値倫理学は、主著である『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』に述べられている。ここでは、人間の行為の対象となる善と悪を含め、それ以外の他の諸価値に関する価値論に言及し、特に価値の序列について論述していることがシェーラーの価値倫理学の特徴である。

カントの諸法則に従い善悪の価値を述べる形式主義に対し、シェーラーはカントの実践哲学を認めつつ、物である「財」を含めた実質的な価値倫理学を論述し、そのことがシェーラー倫理学の特徴となっている (Scheler =1976 : 80 )。シェーラーのいう「実質的」とは、実際の日々の生活場面に即したという意味である。

山崎は、シェーラーの実質的価値を具体的に、「実質的価値の区別はすべて先天的な関係の中で最も重要であり、常に感情によって認識され、人間存在や感情生活に応じて区別し、感情生活において実現される」と説明し、さらに感情生活を基本としたシェーラーの実質的価値がカントの理性に基づく形式主義倫理学と違っていることを述べている (山崎 1986:213)。

シェーラーの価値倫理学の特徴の1つは「人格主義」を論じ、後述する4つの価値様態とその価値序列の上位に人格価値を位置づけ、人格価値の下位に生命価値を位置づけていることである。(図1-1)

シェーラーは、「人間とは何か」について、「人間は単に存在するのではなく、そこに出て存在する、現存在であり、いつも世界との関わりにおいて存在している」と述べている (Frings=1989 : 16)。この世界とのかかわりは、第4の価値序列に位置づけている聖なる価値の「愛の作用」の働きによる他者へのかかわりとして論述されている。

世界との関わりを存在の根拠とする思考と価値の序列の理論は、自己実現の概念構成をする上で、重要な理念になると考えられ、筆者がシェーラーの価値倫理

学を取り上げた理由のひとつとなっている。

## 第2項 シェーラーの価値倫理学より取り上げた概念

本項ではシェーラーの著作から引用した諸概念について説明する。シェーラーの実質的価値倫理学の基本は、シェーラーの主著である『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（上）（中）（下）』（Scheler =1976）（Scheler =1980）の著作の中にその特質が示されている。

シェーラーの価値倫理学の全体構成は、フリングスの『マックス・シェーラーの倫理思想』（Frings =1989）の著作の論証を参考とした。これは、シェーラーがカント及びニーチェの哲学思想をどのように捉えているかを理解するのに有用であった。また、シェーラーの倫理学については、小倉（1989）の『倫理学概論』及び山崎（1986）の『倫理学基本』の論述も活用した。

シェーラーの価値倫理学の概念は、シェーラーが提唱した4つの価値様態である、感性的価値、生命的価値、精神的価値、聖価値の価値序列にその本質が集約されている。シェーラーが位置づけた価値の高低の基準を、小倉（1989:102）は、分割されないものであればあるほど価値は高く、また他の価値に基礎づけられない価値ほど、つまり他の価値から独立的に存在している価値ほど、価値が高いと説明している。シェーラーの価値倫理学の特徴は、「物」である「財」を価値評価の対象に組み入れ、実質的価値の倫理的位置づけを行った点にある。具体的に、「物」である「財」とは「クーラー」や「照明の明るさ」などであり、冷たさや明るさがもたらす快適さを「感覚的価値」として論述している。特に、ここではシェーラーの価値序列に関する5つの概念を取り上げる。

第1の概念に、第1の様態と規定されている「快適または不快という感覚的価値」についてである。この概念の価値系列には「感覚感情」の感性的快苦が対応し、「財」の物件価値及び、機能価値が含まれている（Scheler =1976 : 201）。

この価値は、次のように理解できる。感覚的価値は、価値序列の最も低い価値として位置づけられている。快適さである価値とは、「財」である「物」、例えば

「クーラー」という「物」が持つ夏に涼しいという感覚的に快適な価値をいう。このような道具が持つ機能価値は感覚的価値の範疇に入る。「感覚的価値」は、社会福祉サービスの支援に直接的に関連している。「クーラー」や「照明の明るさ」や「ベッド」の快適さは、社会福祉サービスのADLやQOLを高めるための必需品であり、社会福祉サービスの支援に大きく関係している。社会福祉の基本サービスである食事についても、温かい、冷めている、適温であるなどと感覚的価値に関連している。

第2の概念に、シェーラーが「第2の価値様態として生命的感得作用を把握する諸価値の相対が際立てられる」「これらの価値に対応するのは、『幸い』あるいは『福祉』『生命の感情』『健康や病気の感情』『老齢や死の感情』が、この価値様態に属している」と述べている理念を取り上げる(Scheler =1976 : 201)。

第2の価値の生命価値は、一般的福祉や幸せにかかわる。この生命価値が意味している人間の状態は、健康である、病気である、老化している、死に向かう感情状態などである。この健康の維持のための体温の保持や、健康に生きるための栄養素が計算された食事等は、社会福祉の介護支援サービスの基本目標であり、他のサービスに先行して充足されるべきである。社会福祉サービスの優先順位の決定に大きく影響を与える要因となる価値である。

第3の概念に、シェーラーが「精神的諸価値の領域がある。・・・精神的諸価値のためには生命価値を犠牲にする『べき』であるという統一体である」「作用や機能には、精神的感得の機能や精神的先取および愛憎の作用がある」「所属する価値の種類は、美と醜の価値、義と不義、正と不正、哲学が実現しようとする真理認識の価値、精神的な喜びや悲しみ」と述べている理念を取り上げる。「この価値に所属する応答は、気に入る、気に入らない、尊敬と軽蔑、友情の精神的同情など」である(Scheler =1976 : 204)。

第3の価値の精神的価値は、生命価値より価値が高く上位に位置づけられている。精神的価値は、人間の愛と憎しみの作用として感じる事ができる。精神的価値に所属する価値の種類は、美しいと醜い、すべての法秩序の基底である正と不正、哲学で認識される純粋な真理認識などが帰属している。文化的価値は精神的価値に含まれている。対応する感情状態は、精神的な喜びや悲しみ、尊敬する気持ちや軽蔑する気持ちなどである (Frings=1989 : 118)。精神的なよろこびや

悲しみは社会福祉サービスのQOLや安心できる生活の要因に関連している。

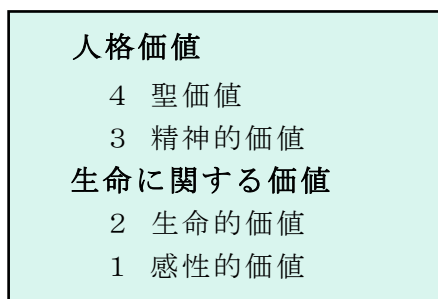
第4の概念に、シェーラーが「最後の価値様態は、聖または聖でないという様態である。絶対的な諸対象として与えられ、この価値系列に対応する状態は、浄福と絶望の感情である」、「この価値様態への応答作用は信と不信、畏敬と崇拜的な態度であり、聖の価値を根源的に把捉するのは愛の作用である」、「聖価値の領域の自体価値は、人格価値である」と述べている理念を取り上げる(Scheler=1976:206)。

第4の価値の聖価値は、精神的価値より上位に位置する。絶対者に関するすべての対象が聖価値に帰属する。帰属する他の価値に礼拝の価値がある。聖価値に対応する感情状態は、浄福感や絶望感という感情である。聖価値は、代表的に時間的な質的永続力を表す「愛の作用」として捉えることができる(Frings=1989:120)。小倉(1989)は、「愛の作用」について、シェーラーの聖価値を「愛は人格ないし、人格的なものに向かう作用である。聖価値は、また人格価値である」と説明している(小倉1989:105)。愛の作用は個人の間としての存在の本質である人格に働きかける絶対的な純粋性であり、永続することを必要としている。

第5の最後の概念に、フリングスが説明しているシェーラーの4つの価値様態の直接的な(ア・プリオリな)秩序について述べる(Frings=1989:115)。人格価値の範疇に、聖価値と精神的価値の2つの価値が所属している。生命に関する価値に、生命的価値と感性的価値の2つの価値が所属している。人格価値は、生命に関する価値の上位に位置づけしている。

4つの価値の序列は、最上位に聖価値が位置し、次いで精神的価値、さらに生命的価値が下位に続き、最下位に感性的価値が位置づけられている。(図1-1)

図1-1 M・シェーラーの価値序列





シェーラーはこれらの4つの価値序列を、論理的に位置づけている (Frings = 1989 : 119)。

感性的価値は基礎的な価値であり、価値序列の中で最も低い価値として位置づけている。感性的価値の上位に生命的価値が位置づけられている。たとえば室温が快適であるという快適価値の本質は、持続することにおいて、健康を維持するという生命的価値に従属していることになる。快適さを基礎として生命が維持されることになり、生命的価値が上位に位置づけられている。

精神的価値は、これを把握することがいかなる生物的条件にも無関係に、生命的価値の上位に独立的に区別され、存在している。例えば精神的価値である美しいという気持ちは、空腹で病気になるという生命的価値から独立的に区別され、上位に位置づけられ、存在しているといえる (Scheler =1976 : 204)。

聖価値は精神的価値よりもさらに高く、独立的に存在している。絶対的価値は、死に向かう時の神への祈りのように、生きていることの本質に依存しない価値である。絶対的価値は、独立し、純粋な、先取作用と愛の作用においてのみ存在する。純粋に愛された人格の価値は、絶対性を保証することにおいて直接的であり、感性的価値や生命的価値に属するすべての価値から独立して離脱している (Scheler =1976)。「人間はあらゆる生命価値を超越し、その方向が神的なものを目指す傾向の担い手である」と聖価値の優位性を論述している (Scheler =1976 : 213)。

そこで価値の高さを決定づける本質的基準は、ある絶対的価値、つまり生きていることに相対的でない聖価値 (例えば、平和への祈りなど) に対して持つ相対性の度合いに根拠がある。シェーラーは『『価値と価値存在一般は生命に相対的である』という命題は決して妥当し得ない』と述べ、生命価値の絶対性に根拠のないことを論じている (Scheler =1976 : 192)。

ある価値が絶対的価値に相対的であることが少なければ少ないほど、この価値はより高いといえる (小倉 1989:102)。筆者の考察として、自己実現の概念には、現実的な生活の達成や成長の先に、世界平和や人類の幸せを絶対者に祈るという意味合いの宗教的要素、つまり、シェーラーのいう聖価値に基づく普遍妥当性が必要であると考えている。

最後に、シェーラーは、ニーチェとカントの人格主義を次のように論評してい

る。即ち、「われわれの倫理学は、ニーチェの側に立っている。最高価値の担い手としては、人格そのものの存在が・・・人格の個性はその価値の増加の方向としてみなされる・・・」と述べている(Scheler =1980 : 224)。また、カントについて「カントにとって人格の(自律的理性的人格)としての仕上げは各人のうちであり、この仕上げの基準は倫理的な究極目標であり・・・これはカントにとってはまさに『善なる』人格であり、・・・両者はともに「個人主義」であるが、ニーチェは経験的主観主義と結びつき、カントは、超越論的主観主義である・・・」と論じている(Scheler =1980 : 224-225)。

ここで説明したシェーラーの4つの概念を集約すると、最初の「財」が持つ感性的価値は最も低い価値であるが、社会福祉サービスの質を評価するADLやQOLに直接的に関連した価値である。次の生命的価値は体温の維持や栄養素を計算した糖尿病患者の食事など生命に直接影響する価値である。第3の精神的価値は喜びや悲しみなどが含まれ、精神的価値のために生命的価値を犠牲にする場合もある。第4の価値は聖価値であり「愛の作用」による人間の人格に働きかける永続的な価値がある。このシェーラーの価値序列の概念は、在宅高齢者の自己実現に向けて社会福祉サービスを提供する優先順位決定の基準になると考える。また、本研究で自己実現尺度を開発するにあたり、質問項目の選定基準として有効である。

これまで述べてきた4人の思想家が提唱する理念のうち、自己実現の概念を操作的に定義することに活用できると思われる理念をもう一度整理すると次のようになる。カントのいう行為を行う目的を他者から独立して自律的に自己決定することの重要性及び他者の幸福に参与することを人生の目的としてよいという思考は、自己実現の基本理念として活用できると考えられる。また、ニーチェが論じる「何のために」生きているのかという自己の生存の目的を見失った人びとが自己の生存していることの確信を求め、自己成長に向かい、積極的に生きることを意欲し、繰り返し求め続けることが、真に<生>きることであるという思考は、生きている存在の意義を見失った高齢者や障害者の存在の意義の回復の支えとなる概念として有効であるといえる。マズローが論じている自分の外に目標を持ち、目標の実現に向けて熱中し打ち込むことにより、その人らしい本来の人間の

生きている姿が現れるという思考は、高齢者の目的をもった自己実現に向けた、支援方法に関連していると考えられる。シェーラーが論じる最も低位の価値である感性的価値を基礎とした価値序列は、自己実現に向けた社会福祉サービス提供の優先順位の決定基準になると考えられ、このような機能から自己実現との関連性が確認できる。

これらの4人に共通した思想は、「人間とはなにか」そして「生きることとは何か」という命題であり、生きるという行為の主体者は個人の間人であるとの本質論から出発し、人間の人格に基づく主体的行為と自己の成長を基本として論じている。人格的人間として自己の存在を確信する事実に基づいて、自己実現は成立するという共通する普遍的真理が、4人の思想家の先行研究から確認された。これまで取り上げてきた4人の思想家の概念は、自己実現尺度開発において、下位尺度の因子の選定及び命名、質問項目内容の決定に参考となり、また質問項目の選定基準に直接的または間接的に有用であると考えられる。

自己実現に関する先行研究はこれまでほとんど行われていない。そのため、第2章では、本章に続き、自己実現の概念に近接していると考えられる生きがいや主観的幸福感を包括するQOLに関する先行研究を検討する。QOLの先行研究を自己実現尺度開発の研究に生かすことは、研究開発の基本的手順であり、かつ非常に有効な方法であることから、QOLと自己実現とを関連性させながら論考していく。

(注)

1) マスローのいう「B」価値とは、「Being 価値」のことである。

## 【引用文献】 第1章

カント研究会編 (1997) 『自由と行為』晃洋書房。

Kant, I. (1785) *Grundlegung zur Metaphysic der Sitten.*, (1788) *Kritik der praktischen Vernunft.*, Vorarbeit zur Kritik der praktischen Vernunft. (=2000 坂部恵・平田俊博・伊古田理訳『カント全集 7 実践理性批判 人倫論の形而上学の基礎づけ』岩波書店.)

Kant, I. (1797) *Die Metaphysik der Sitten.*, (=2002 樽井正義・池尾恭一『カント全集 2 人倫の形而上学』岩波書店.)

Kant, I. (1790) *Die Meta Kritik der Urteilskraft.*, (=2000 坂部恵・有福孝岳・牧野英二『カント全集 9 判断力批判下』岩波書店.)

木田元著 (2002) 『マッハとニーチェ』新書館。

Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, D. Van Nostrand Co, Inc. (=1964 上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房.)

Maslow, A. H. (1971) *Motivation and Personality, second ed.*, Harper & Row, Publishers, Inc. (=1987 小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大学出版部.)

Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press Inc. (=1991 上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房.)

Heidegger, M. (1961) *Nietzsche*, 2Bde., Verlag Gunther Neske. (=2007(1976) 藺田宗人訳『ニーチェ I』白水社.)

Nietzsche, F. (1901) *Nietzsches Werk, Taschen-Ausgabe 10.* (=1968 原佑訳『ニーチェ全集第 12 巻 権力への意志』理想社.)

Nietzsche, F. (1901) *Nietzsches Werk, Taschen-Ausgabe 9.* (=1970 原佑訳『ニーチェ全集第 11 巻 権力への意志』理想社.)

Nietzsche, F. (1968) *Nietzsche Werk, Kritische Gesamtausgabe, ( 1 ~ VIII Abteilung), herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter.* (=1997 浅井真男・手塚耕哉訳『ニーチェ全集第 7 巻 人間的な、あまりに人間的な』白水社.)

- Frings, M. S. (1965) *A Maxschler. A Concise Introduction into the World of a Great Thinker*, Duguesne University Press. (=1989, 深谷昭三・高見保則訳『マックス シェーラーの倫理思想』 似文社.)
- 小倉志祥著 (1989)『倫理学概論』 似文社.
- Scheler, M. (1913-16) *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, Neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, Sachregister, Max Niemeyer Verlag, Hall a. d. S. (=1976, 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎訳『シェーラー著作集 1 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (上)』 白水社.)
- Scheler, M. (1913-16) *Der Formalismus in der Ethik und die materiale ertethik, Neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, Sachregister, Max Niemeyer Verlag, Hall a. d. S. (=1976, 吉沢伝三郎・岡田紀子訳『シェーラー著作集 2 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (中)』 白水社.)
- Scheler, M. (1913-16) *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, Neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, Sachregister, Max Niemeyer Verlag, Hall a. d. S. (=1980, 小倉志祥訳『シェーラー著作集 2 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (下)』 白水社.)
- 山崎照雄著 (1986)『倫理学基本』 有信堂高文社.

## 目 次

第 2 章	生活の質 (QOL) に関する先行研究	
第 1 節	サクセスフル・エイジングの理論	..... 33
第 2 節	QOL 尺度の先行研究	..... 35
第 1 項	生活の質 (QOL) の理論	
第 2 項	生活の質 (QOL) 尺度の先行研究	
第 2 項の 1	包括的健康関連 QOL 尺度 Short Form36 (SF-36)	
第 2 項の 2	WHO/QOL 26 尺度について	
第 2 項の 3	PGC モラール (M o r a l e) スケール	
第 2 項の 4	カットナー (Kutner, B.) のモラール・スケール	
第 2 項の 5	RDQ 日本語版マニュアルについて	
第 2 項の 6	諸外国の QOL 尺度の先行研究	
第 3 項	最近のわが国の高齢者の生活の質 (QOL) 尺度の先行研究	
第 3 項の 1	在宅痴呆性老人に対する介護にかかわる社会・家庭的負担評価票 (CBS) の作成とその臨床的意義の検討	
第 3 項の 2	地域高齢者を対象とした ADL・IADL 統合尺度の構成概念の検討	
第 3 項の 3	高齢者のセクシュアリティに関する知識と態度の日本語版評価尺度 (ASKA-J)	
第 3 項の 4	日本語版フラボニ (Fraboni) エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成	
第 3 項の 5	介護技術の測定 (ダイヤ式介護技術チェックシートの開発)	
第 3 項の 6	わが国の近年の高齢者関連 QOL 尺度の先行研究	
第 3 節	生きがいと自己決定の先行研究	..... 68
第 1 項	「生きがい」について	
第 2 項	「自己決定」について	

## 第2章 生活の質(QOL)に関する先行研究

社会福祉分野において、提供する社会福祉サービスが適切であるかどうかを評価する方法として、提供するサービスの要素である室温や照明の明るさ、食物のやわらかさや大きさ、部屋の広さなど「財」そのものの品質を高めて評価する方法と、利用者がサービスを利用した結果、利用者の生活に直接どのような結果がもたらされたかを調べ評価する2つの方法がある。後者をアウトカム評価という。

アウトカム評価は医療の分野で始まり、「健康」概念を基本とした日常生活の活動性を評価するADLや新たなADL概念である生活目的の手段を評価する手段的ADL(IADL)、さらに生きがいや人生の幸福感、生活満足度が組み入れられ、また「生活機能」に「参加」(Participation)や「活動」(Activities)の視点が加わり、肯定的に生活全体の質を捉えて評価する「生活の質」(QOL)が広く用いられ研究されてきている。

「自己実現」はQOL概念の到達目標として捉えることができ、社会福祉のサービス利用者の最高の生活状態として評価することができる。

このような理由から、第2章では、「生活の質」(QOL)に関する先行研究を取り上げ説明する。

### 第1節 サクセスフル・エイジングの理論

高齢者の自己実現と「サクセスフル・エイジング」は近接した関係があると考えられる。本節では、サクセスフル・エイジングとは何か、について検討し、本研究との関係を述べる。

サクセスフル・エイジングは、老年学(Gerontology)領域の学術用語として、1960年以降、老年学研究の主要な研究テーマの1つとして研究されてきている(小田 2004: 2)。サクセスフル・エイジングということばを直訳すれば「成功した老化」となるが、実際には「順調な老い」、「うまく年をとる」などの意味であり、「健康で長生きをして満足と幸福が感じられるような老いの過程」と理解されてきている(小田 2004: 6)。

つまり、サクセスフル・エイジングとは、病気や病気による障害がない又はそ

れらが生じる可能性が低く、若い頃の認知機能や身体機能の諸機能が高い水準に維持されていると同時に、日常生活に積極的に関与し、他の人との関係や交流を継続し、何らかの社会的な価値活動を行うことで、活動的な生活を送るということであると説明できる。

サクセスフル・エイジングの構成要素に含まれ、客観的に測定可能な要素として、生存や長寿、健康、行動能力、環境が上げられる。さらに、本人の主観的評価により測定される幸福や、モラール、これらを包括的に表現した主観的幸福感なども構成要素として上げられる（小田 2004：15）。

「生活満足」はサクセスフル・エイジングの基礎要件と理解されている。「生活満足」は、自己実現のような高次の欲求の充足に向かう初期段階の一步であると認識されている。つまり、サクセスフル・エイジングは、自己実現の概念にきわめて近い意味を持つ概念であると考えられる（小田 2004：12）。

小田によると、Ryff は論文の中で、高齢期における成長と発達（growth and development）、自己実現（self-realization）、生涯発達理論（life-span developmental theory）、成長の臨床理論（clinical theories of personal growth）、精神的健康論（mental health perspective）に根拠を置いている。サクセスフル・エイジングの6つの要因には、「自己受容」、「他者との肯定的関係」、「自律」、「環境統御」、「人生における目的」、「成長」があるといわれている（小田 2004：23）。

また谷垣・ほか（2005:26-30）は、サクセスフル・エイジングは「健康感を持ち、生活にはりがあり、生活に満足していること」と有意な関係があると述べている。さらに松本・渡辺（2004:25-30）は、サクセスフル・エイジングは、6カテゴリー「満足」「チャレンジ」「健康」「自負心」「参加（社会や人との関わりに興味を見出しでいること）」「自己保存」から構成されることを示している。

今日、世界各国で、高齢問題が社会的に大きな問題となってきた。このようなことから、サクセスフル・エイジングの課題として、個人の側からの生き方として捉えるだけでなく、社会的な課題として、いつまでも自立して元気な生活を送り、社会的に有効な活動を続け、自律的生活を送る加齢のあり方として注目されてきている。

サクセスフル・エイジングと本論文のテーマである在宅高齢者の自己実現との関係性について述べる。前述した論者らに共通しているサクセスフル・エイジングの構成要素として、「自己受容」、「他者との肯定的関係」、「自律」、「環境統御」、



「人生における目的」、「成長」（小田 2004：23）がある。このうち、「他者との肯定的関係」、「自律」、「人生における目的」、「成長」の4概念は、表現は少し異なるが自己実現の下位概念に共通する考え方であるといえる。つまり、サクセスフル・エイジングは自己実現の概念にきわめて近い意味を持つ概念であるといえる。しかし、小田の研究（小田 2004）から考えると、自己実現が利用者の側に立った主体的評価を中心とした概念であることに対し、サクセスフル・エイジングの概念は、支援者の側から見た客観的視点が強い評価概念であるといえる。

## 第2節 QOL尺度の先行研究

### 第1項 生活の質(QOL)の理論

利用者の生活全体の質を捉える概念のQOLは、がん治療の分野で1970年代に始まり、1980年代に様々な分野に波及し広められ、多くのQOL尺度が開発されてきた（高橋 1995）。それらは、医療の介入前と介入後の健康状態を比較する医療成果のアウトカム評価の1つの方法として展開されてきた（岩谷・飛松 2005:17）。

QOLには、健康と身体機能、社会・経済的状态が影響する客観的QOL（健康関連）と、人生の満足度や自尊心が含まれる主観的QOL（幸福感）の2つに分けられる。これらのQOLの中心概念は「well-being」の概念である（岩谷・飛松 2005:17）。健康関連QOL尺度（health related QOL）は、対象を限定しない「包括的QOL尺度」と、ある症状や疾患を限定した「疾患特異的QOL尺度」の2つに分けることができる（福原 2004:9）。

QOLは医療分野だけでなく、社会福祉分野でも、社会福祉サービスの質を論じる共通言語として早くから学術的に研究され、使用されてきている。最近では福祉サービス利用者の生活全体の質や到達状態を表すことばとして用いられている。生活の満足度の研究もQOLの研究に含まれていることから、QOLは実践的社会福祉サービス全体を包括することばであるといえる。また、医療分野を始め、社会福祉分野においても多様なQOL尺度が開発されてきている。

こうしたことから、本研究では、QOLの理論の中から自己実現の尺度開発に有用なキーワードを活用することとした。

## 第2項 生活の質(QOL)尺度の先行研究

本論文の目的は、自己実現尺度の開発と自己実現概念の操作的定義である。自己実現概念は、心理学者マズローの概念定義以外に先行研究はなく、特に、社会福祉分野では自己実現の学術的研究の報告はほとんどされてきていない。現在、自己実現に最も近い概念は、生きがいはまたは人生の満足度及び自尊心を含む主観的幸福感(QOL)であるといえる。このことから、本項では、QOL尺度の先行研究を取り上げる。

次に、ここで取り上げる5つのQOL尺度と自己実現概念の関係及びここで取り上げる理由を説明する。SF-36(池上・ほか2001)は、対象を限定しない「包括的健康関連QOL尺度」のモデル的尺度である。サービスの受け手の患者側の主観的視点で評価するアウトカム尺度であり、この評価の方法は自己実現尺度の開発に関連があると考えて取り上げている。

次のQOL26(田崎・中根1997)は、WHO/QOL-100の短縮版である。WHO/QOLによるQOLの定義は、「個人の固有の人生に対する目標や期待、身体的、精神的、経済的等の基準に対する、個人の主観的な関心に基づいた認識」とされている。この個人の固有の人生に対する目標は、自己実現の概念に共通した概念であるといえる。また、WHO/QOL基本調査票(WHO/QOL-100)は100項目から構成され、QOL26は26項目と少ないことが、自己実現の尺度開発の項目作成に参考になると考え、取り上げたのである。

次のPGCモラルスケール(前田・ほか1979)は主観的幸福感(subjective well-being)の測定にもっとも適している評価方法であるといわれている。PGCモラル・スケールには、純粋に内面的な主観的幸福感を測定する意向が質問項目の中に盛り込まれており、このことが自己実現尺度の開発に参考になると考えて取り上げたのである。また、因子分析の結果から主観的幸福感の構成因子の内容が詳細に確認できることも参考となる。

次に、カットナー(Kutner, B.)のモラル・スケールは、主観的幸福感の測

定に適しているといわれるモラール・スケールの1つに分類され、7つの基本となる質問項目から構成されている。少ない質問項目を通じ、現在から未来に向けて肯定的な人生を生きる主観的幸福感を現在の生活の満足度やしあわせに関する質問から測定しようとしている。このことは自己実現の尺度開発に参考になると考える。

5番目の最後の Roland-Morris Disability Questionnaire (RDQ日本語版)は、腰痛という疾患に限定した「疾患特異的QOL尺度」であり、「今日」の日に限定し、かつ腰痛に限定し「自覚された健康」の状態を患者に尋ね、身体機能や日常生活及び社会生活機能への影響を測定している。この時間と状況を限定し、自覚された健康の状態を確認する方法は自己実現の尺度開発に参考になると考え取り上げる。

代表的に、1) SF-36、2) WHO/QOL26、3) PGCモラールスケール、4) カットナー (Kutner, B.) のモラール・スケール、5) Roland-Morris Disability Questionnaire (日本語版) の5つのQOL尺度について順に説明していく。

## 第2項の1 包括的健康関連 QOL 尺度 Short Form36(SF-36)

### ア. SF-36の概要

SF-36は、一般の健康な人々に共通する要素を組み入れて評価するプロフィール型包括的健康関連QOL尺度である。SF-36は、主要慢性疾患患者を調査対象とした Medical Outcome Study (MOS : 医療評価研究) の一環として米国で作成された包括的QOL尺度である(池上・ほか2001:34)。MOSとは、米国の5大都市で1986年から開始され、大規模に展開された横断的観察研究のアウトカム研究である(池上・ほか2001:35)。

SF-36は、サービスの受け手である患者の側の主観的視点から見たアウトカム尺度である。死亡率のような従来の伝統的な客観的な指標に基づくアウトカムに対し、患者立脚型の新しいアウトカム評価である(池上・ほか2001:3)。

## イ. SF-36の尺度構成について

SF-36は、「身体的健康度」と「精神的健康度」の2因子、8下位尺度36質問項目から構成されている。

下位尺度の8領域の概念名と各概念への36質問項目の所属項目数は、①身体機能に10項目、②日常役割機能（身体）に5項目、③日常役割機能（精神）に4項目、④全体的健康感に3項目、⑤社会生活機能に2項目、⑥体のいたみに5項目、⑦活力に4項目、⑧心の健康に2項目となっている（池上・ほか2001:35）。

各質問項目の回答選択肢の評価段階数は、2段階、3段階、5段階、6段階の4種類あり、①身体機能は3段階、②日常役割機能（身体）は6段階、③日常役割機能（精神）は2段階、④全体的健康感は2段階、⑤社会生活機能は6段階と5段階、⑥体は5段階、⑦活力は6段階、⑧心の健康は5段階、となっている。各質問項目の回答は、3段階評価が最も多く、10質問項目であり、次いで6段階評価が5質問項目となっている（池上・ほか2001:37）。

## ウ. 下位尺度得点の計算と評価

各下位尺度に所属する質問項目ごとの得点を計算式に基づき計算し、8領域の下位尺度の得点が計算され、多面的に健康状態が評価される。また、身体的健康と精神的健康の2因子で構成されており、単純なわかりやすい健康評価を行うことができる（池上・ほか2001:38）。

## エ. SF-36の尺度の質問項目について

SF-36の36質問項目は、表2-2-1に示した通りである（池上・ほか2001:36）（岩谷・飛松2005:138-139）。健康上の理由の質問は3者択一形式となっており、他の領域の質問は5者択一形式が多い。

本尺度は、生活を評価する質問項目がバランスよく配置されており、ある大きな集団全員の健康に関する特徴を把握する場合に適切な尺度である。健康上の問題が原因で、活動やある役割を果たすことができないという質問に特徴のある尺度である（小澤・ほか1999:54）。

表 2 - 2 - 1 SF-36の尺度の36質問項目

- 1 あなたの健康状態は？（一番よくあてはまるものに印をつけてください）  
 1. 最高によい 2. とてもよい 3. 良い 4. あまり良くない 5. 良くない
- 2 1年前とくらべて、現在の健康状態はいかがですか
- 健康上の理由で
- 3 激しい活動、たとえば、一生けんめい走る、重い荷物を持ち上げる、激しいスポーツをするなど  
 1. とてもむずかしい 2. 少しむずかしい 3. ぜんぜんむずかしくない
- 4 適度の活動、たとえば、家や庭の掃除をする、1～2時間散歩するなど
- 5 少し重い荷物を持ち上げたり、運んだりする（たとえば買い物袋など）
- 6 階段を数段上までのぼる
- 7 階段を1階上まで上る
- 8 体を前に曲げる、ひざまずく、かがむ
- 9 1キロメートル以上歩く
- 10 数百メートルくらい歩く
- 11 百メートルくらい歩く
- 12 自分でお風呂に入ったり、着替えたりする
- 身体的な理由で
- 13 仕事や普段の活動をする時間を減らした
- 14 仕事や普段の活動が思ったほど、できなかった
- 15 仕事や普段の活動の内容によっては、できないものがあった
- 16 仕事や普段の活動をすることがむずかしかった（たとえばいつもより努力を要したなど）
- 心理的な理由で
- 17 仕事や普段の活動をする時間を減らした
- 18 仕事や普段の活動が思ったほど、できなかった
- 19 仕事や普段の活動がいつもほど、集中してできなかった
- 20 過去一ヶ月間に、家族、友人、近所の人、その他の仲間との普段の付き合いが、身体的あるいは心理的な理由で、どのくらい妨げられましたか
- 21 過去一ヶ月間に、体の痛みをどのくらい感じましたか
- 22 過去一ヶ月間に、いつもの仕事（家事も含みます）が痛みのために、どのくらい妨げられましたか
- 過去一ヶ月間に、どのように感じたか
- 23 元気いっぱいでしたか
- 24 かなり神経質でしたか
- 25 どうにもならないくらい、気分が落ち込んでいましたか
- 26 おちついていて、おだやかな気分でしたか
- 27 活力（エネルギー）にあふれていましたか
- 28 おちこんで、ゆううつな気分でしたか
- 29 疲れはてていましたか
- 30 楽しい気分でしたか
- 31 疲れを感じましたか
- 32 過去一ヶ月間に、友人や親戚を訪れるなど、人との付き合いが、身体的あるいは心理的な理由で、時間内にどのくらい妨げられましたか
- 33 私は他の人に比べて病気になりやすいと思う
- 34 私は、人並みに健康である
- 35 私の健康は、悪くなるような気がする
- 36 私の健康状態は非常によい

## 第2項の2 WHO/QOL26尺度について

次に、WHO/QOL26尺度構成について説明する。

### ア. WHOのQOLの定義

WHO/QOLでは、QOL (Quality of Life) を「個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準、関心に関連した自分自身の人生の状況に関する認識」と定義している (田崎・中根 1997: 4)。つまりQOLは、個人の固有の人生に対する目標や期待、身体的、精神的、経済的等の基準に対する、個人の主観的な関心に基づいた認識であるといえる。それは、個人が生活する地域や社会がもつ特有の文化や価値、生活環境を前提とした広範囲に概念を捉え、異文化の国々からなる世界各国に共通する普遍的な定義としている。

医療現場において、疾病や症状の除去だけに注目してきたことを反省し、人間的な要素を加え、包括的で「自分自身の人生の状況に関する認識」とした利用者の主観的なQOLを測定する必要性が求められたのである (田崎・中根 1997: 3)。

### イ. WHO/QOL26 について

WHO/QOL26は、WHO/QOLの短縮版である。WHO/QOL基本調査票(WHO/QOL-100)は100項目と24の下位項目から構成されている。この尺度を臨床現場で使用するには、項目数が多すぎることから、各国からの調査データに基づき、信頼性及び妥当性 (内的整合性、弁別妥当性) の検討、確認的因子分析を行い、1996年に26項目の短縮版が開発された。これは、身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境の4領域から構成されている。統計ソフトはSPSS第7版が使用されている (田崎・中根 1997: 10)。

### ウ. 下位尺度得点の計算と評価

4つの領域の下位尺度に所属する質問項目を1から5のスコアで配点し、それらを合計して、下位尺度得点とする。高い得点は、よりよいQOLを示している。

### エ. 構成と質問項目

尺度を構成する4領域に所属する下位項目は、合計26項目である。下位尺度の各質問項目数は、身体的領域に7質問項目、心理的領域に6質問項目、社会的関係に3質問項目、環境に8質問項目である。「全般的な生活の質」として2つの質問項目が追加され、合計26質問項目となっている。社会的領域の3質問項目を説明すると、1)人間関係に「人間関係に満足していますか」、2)社会的支援に「友人たちの支えに満足していますか」、3)性的活動に「性生活に満足していますか」のように3質問項目から構成されている。他の、身体的領域、心理的領域、環境の領域に所属する質問項目については、表2-2-2に領域別の質問項目を示した。4領域に所属する質問項目数は全数24質問項目であるが、基本調査票においては、2つの質問項目が追加され、全数26項目となっている。

本尺度は臨床現場で使用することに適し、文化や価値観、生活環境が異なる世界の国々で、26項目の共通した尺度で使用が可能であり、簡便に利用者の主観的なQOLを測定し、比較することができる。

WHO/QOLはQOLを「個人の固有の人生に対する目標や期待、身体的、精神的、経済的等の基準に対する、個人の主観的な関心に基づいた認識」と定義しており、この中の「個人の固有の人生に対する目標や期待」は、自己実現の概念と共通していることから、自己実現尺度開発に参考となる概念である。

表 2-2-2 WHO/QOL 短縮版 (QOL26) の領域別質問項目

身体的領域	1 毎日の活動をやり遂げる能力に満足していますか。 2 毎日の生活の中で治療 (医療) がどのくらい必要ですか 3 毎日の生活を送るための活力はありますか 4 家の周囲を出まわることがよくありますか 5 体の痛みや不快のせいでしなければならないことがどのくらい制限されていますか 6 睡眠は満足のいくものですか 7 自分の仕事をする能力に満足していますか
心理的領域	8 自分の容姿 (外見) を受け入れることができますか 9 気分がすぐれなかったり、絶望、不安、落ち込みといったいやな気分をどのくらいひんぱんに感じますか 10 毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか 11 自分自身に満足していますか 12 自分の生活をどのくらい意味のあるものと感じていますか 13 物事にどのくらい集中することができますか
社会的関係	14 人間関係に満足していますか 15 友人たちの考えに満足していますか 16 性生活に満足していますか
環境	17 必要なものが買えるだけのお金をもっていますか 18 毎日の生活はどのくらい安全ですか 19 医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか 20 家と家のまわりの環境に満足していますか 21 毎日の生活に必要な情報をどのくらい得ることができますか 22 余暇を楽しむ機会はどのくらいありますか 23 あなたの生活環境はどのくらい健康的ですか 24 周辺の交通の便に満足していますか 25 あなたの生活の質をどのように評価しますか 26 自分の健康状態に満足していますか

## 第2項の3 PGC モラル (Morale) スケールについて

高齢者の主観的幸福感の測定は、モラル・スケールが最も適しているといわれている。米国で議論されるモラル・スケールは2種類あり、カットナー (Kutner, B.) らのモラル・スケールとロートンら (Lawton, M.) の PGC Morale Scale である (前田・ほか 1979: 16)。

### ア. PGCモラル・スケールの概要について

モラル (Morale) は、もともと兵士や職員の士気の高さをあらわすことばとし



で使われていた。PGCモラール・スケールは、フィラデルフィア老年学センターのロートンらによって開発された。

このPGCモラール・スケールは、「満足感を持っている」「安定した居場所がある」「老いていく自分を受容している」などの個人の主観的幸福感を客観化することから、科学的な測定ができるスケールである。この尺度は個人の健康に関し焦点を当てた主観的幸福感 (subjective well-being) を測定するQOLの評価方法に分類できる。純粋に内面的な主観的幸福感を測定する意向が質問項目の中に盛り込まれていることが特徴である (前田・ほか 1979:19)。調査から得られたデータの因子分析結果から、主観的幸福感の因子構造を詳細に確認することができる。

#### **イ. PGCモラール・スケールの尺度構成について**

PGCモラール・スケールは、22質問項目から構成されている (改訂版は17質問項目)。尺度は、1) 心理的動揺に関わる因子、2) 自分の老化についての態度、3) 孤独感、不満感にかかわる因子の3つの因子から構成されている。基本属性の項目にADL評価項目を組み入れ、ADL評価が可能となっている。ADL項目は、PGCモラール・スケールの22尺度質問項目の中には含まれていない。質問への回答は、Yes/ No またはそれに準じた2者択一の回答方法となっている (前田・ほか 1979:17)。

#### **ウ. 尺度得点の計算と評価**

モラール得点の計算は、質問の回答の、Yes/ No またはそれに準じた2者択一的な回答でモラールの高い方の回答を1点、モラールの低い回答を0点とする。各質問の得点を合計し、その人のモラールの得点とする。わが国で始めてPGCモラール・スケールを用い高齢者のモラールに関する研究を行ったのは、前田らの研究 (前田・ほか 1979) である。前田らの研究では、東京都区部所在の老人福祉センターと老人大学に通う高齢者を対象にPGCモラール・スケールの日本語版を使用し、検証した。この研究によると、日本の老人全体の主観的幸福感を代表する結果ではないが、高齢者のモラールが質問項目22項目中21項目のモラール得点が0.4以上であったことから、一般的に考えられているより高い値であったことが報告されている (前田・ほか 1979:22)。

## エ. PGCモラル・スケールの質問項目について

PGCモラル・スケールの日本語版の22質問項目は、表2-2-3のとおりである（前田・ほか 1979:17）。

本研究からモラルの平均値は一般に考えられているよりかなり高いことが確認された。また、慢性疾患を持つ患者では低くなることも確認された。前田・ほか（1979）の研究により、日本語版の22項目PGCモラル・スケールが開発された。

PGCモラル・スケールには、純粋に自己実現に関連する高齢者の内面的な主観的幸福感を定義する意向が質問項目の中に盛り込まれており、さらにこのことに加えて、因子分析の結果が、自己実現尺度の項目開発に参考になると考えられる。

表2-2-3 PGCモラル・スケールの22質問項目（日本語版）

- 1 自分の人生は、年をとるにしたがって、だんだんわるくなっていくとあなたは感じますか？
- 2 あなたは去年と同じように元気だと思っ  
ていますか？
- 3 さびしいと感じることがあります  
か？
- 4 最近になって、小さなことを気にす  
るようになったと思いますか？
- 5 家族や、親せきや、友人とのゆきき  
に満足していますか？
- 6 あなたは、年をとって、前よりも役  
立たなくなったと思いますか？
- 7 もし望むところに住めるとしたら、  
どこに住みますか？
- 8 心配だったり、気になったりして、  
ねむれないことがありますか？
- 9 年をとるということは、若い時に考  
えていたより、よいと思いますか？
- 10 毎日の生活をどのくらい楽しく過  
ごしていますか？
- 11 自分自身に満足していますか？
- 12 自分の生活をどのくらい意味のある  
ものと感じていますか？
- 13 物事にどのくらい集中することが  
できますか？
- 14 世の中は昔の方がよかったと思  
いますか？
- 15 あなたは、心配なことがたくさん  
ありますか？
- 16 あなたの健康はよいと思  
いますか、よくないと思  
いますか？
- 17 前よりも腹を立てる回数  
が多くなったと思  
いますか？
- 18 生きることは大変さ  
びしいと思  
いますか？
- 19 今の生活に満足  
していますか？
- 20 物事を、いつも  
深刻に考  
える方  
ですか？
- 21 人は、今日  
のことを考  
えて生  
きてい  
けばよ  
いので、  
明日の  
ことは  
思い  
わ  
ずら  
う必  
要が  
ない、  
とい  
う人  
が  
い  
ま  
す  
が  
あ  
な  
た  
は、  
ど  
う  
思  
い  
ま  
す  
か？
- 22 あなたは、心配ごとがあると、すぐおろおろする方ですか？

## 第2項の4 カットナー(Kutner, B.)のモラール・スケールについて

米国で開発されたモラール・スケールの2種類の1つであるカットナー(Kutner)のモラール・スケールについて説明する。

### ア. カットナーのモラール・スケールの概要について

調査項目が7項目の質問で構成されている。質問数が7項目であり、実際の高齢者への調査には単純で便利な尺度である。(表2-2-4)

ただ、項目が単一次元(unidimensional)であることを前提に作成されており、このことは、大きな問題を含んでいる。

この問題を考慮して開発されたのが、前項のロートンのPGCモラール・スケールである。

### イ. カットナーのモラール・スケールの尺度構成について

質問項目が単一次元であることから、因子分析など多変量解析による内容の検討に不適當であると考えられている(前田・ほか 1979:20)。

質問項目1~3の3項目が否定的質問であり、質問項目4~7の4項目が肯定的な質問となっている。回答について2者択一形式が1項目、3者択一形式が6項目となっている。過去から現在にかけての質問が2項目、現在から未来に向けての質問が5項目である。

次に、身体的・具体的な生活に関する質問(項目3~項目5)が3項目、身体的・精神的質問が項目1と項目5であり、身体的・具体的かつ身体的・精神的な両者に関係する質問が項目2と項目7であった。

このような質問項目の構成から類推すると、カットナーのモラール・スケールは、現在から未来に向けての肯定的な人生を身体的・具体的な生活に関する質問項目で、主観的幸福感を測定することを意図した尺度であるといえる。

### ウ. 尺度得点の計算と評価

モラール得点は、表2-2-4の質問項目の回答を1点、または0点とし、7項目の合計点を算出し、モラール得点とする。合計の点数により、「高い」「中」「低い」の3段階で評価をする。「高い」は、5~6点、「中」は3~4点、「低い」

は0～2点である（前田・ほか 1979:16）。

## エ. カットナーのモラール・スケールの質問項目について

カットナーのモラール・スケールの7項目は、表2-2-4のとおりである（前田・ほか 1979:17）。カッコ内は、選択する回答の項目を示している。

自己実現概念との関係は、本尺度はモラール・スケールの1つであり、現在の生活の満足度やしあわせに関する7つの少ない質問項目を通じ、現在から未来に向けて、肯定的な人生を生きるための主観的幸福感を測定しようとしていることは、自己実現の尺度開発に参考になると考えられる。

表2-2-4 カットナーのモラール・スケールの7質問項目

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 生きていても仕方がないと思うことが度々ありますか？<br/>（よくある。時々ある。めったにない。）</li><li>2 自分の人生は、年をとるにしたがって、だんだん悪くなってゆくとあなたは感じますか？（そう思う。そう思わない。）</li><li>3 今までの人生で、あの時こうすればよかったと思うようなことがたくさんありますか？（全くない。少しはある。たくさんある。）</li><li>4 ひっくるめて考えてみて、今の生活に不しあわせなことがどのくらいあると思いますか？（ほとんどない。いくらかる。たくさんある）</li><li>5 全体として、あなたは今の生活についてどの程度満足していますか？（非常に満足。まあ満足。あまり満足していない。）</li><li>6 来週、あるいは来々週にやろうと思うことについて、あなたはどのくらい計画していますか。それとも、あまり計画は立てない方ですか？（たくさん計画する。少しは計画する。ほとんど計画しない。）</li><li>7 年をとるということは、若い時に考えていた時より、よいと思いますか？（よいと思う。悪いと思う。同じである。）</li></ol> |
|--|

## 第2項の5 RDQ日本語版マニュアルについて

Roland-Morris Disability Questionnaire（以下、RDQ）はイギリスでプライマリ・ケアの研究をしている Roland と Morris によって開発され、多くの国で利用されている腰痛特異的 QOL 尺度である（福原 2004:5）。

疾患ではなく、腰痛という「自覚された健康問題」によりもたらされた身体機能、メンタルヘルス、及び日常生活、社会生活機能への影響などを定量化する尺度である。RDQ は「今日」に限定した状態を尋ねる尺度であることが特徴である。

### ア. RDQ日本語版マニュアルの概要

第2節第1項で前述したように、健康関連 QOL 尺度を大きく分類すると、対象を限定しない「包括的 QOL 尺度」と、ある症状や疾患を限定した特異的な「疾患特異的 QOL 尺度」の2つに分けることができる（福原 2004:9）。

QOL 尺度は主観的なアウトカム（結果）であり、項目数が限定されていることや信頼性に限界があり、このような理由から、RDQ のような QOL 尺度は、個々の患者への診療に直接的に使用ができない。介入研究の説明変数やアウトカム（結果）変数の1つとして使用することができる。RDQ はこれまで、1）腰痛が患者にどのくらい負担になっているか、2）腰痛に関連する要因と患者の QOL との関連を検討する、3）腰痛の治療やケアが有効であったかどうかを検討する、などの研究に活用されてきた。こうした研究から、疾患に対する最良な診断や治療方法を見出し、より良いアウトカムを導くための示唆を得てきた（福原 2004:7）。

翻訳者 2 名が英語からの翻訳をし、相違点を討議し、1 つの統合した日本語の翻訳が完成した。次に、日本語を英語へ逆翻訳を行い、原作者に送り、繰り返し修正を受けて、翻訳版が完成している。

### イ. RDQ日本語版の尺度構成

福原（2004）ら研究者グループは、日本国内 9 施設の整形外科外来に通院していた腰痛患者 214 名を対象に調査を行った。質問は腰痛に関する 24 質問項目から構成されている。「はい」、「いいえ」のどちらかに○をつけて回答を求める。日

本語版の調査票には、包括的健康関連QOL調査票「SF-36」が、妥当性を検証するため、同時調査として組み込まれている。

#### ①□ 信頼性の検証

RDQオリジナル版では、信頼性の内的整合性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数が、治療前で $\alpha = 0.93$ 、1週間後 $\alpha = 0.90$ 、4週間後 $\alpha = 0.84$ と非常に高い値を示している。再現性の検討では、被験者は回答した同じ日の夜に再度回答を求められた。再テストとの相関係数は、 $r=0.91$ と高い値であり、再現性が認められた(Roland M. et al 1983)。

日本語版でも、再テスト法による再現性と内的整合性が検証された。クロンバックの $\alpha$ 係数は、0.85と十分な値であった。24項目から1項目を削除し23項目で順次 $\alpha$ 係数を求めた結果、0.840~0.857の範囲にあり、内的整合性を大きく変化させる項目がないことから、内的整合性の保持が確認された(福原 2004:21)。

#### ② 妥当性の検証

RDQは、包括的健康関連QOL尺度であるSF-36の「身体機能」やSIP (sickness impact profile: 疾病による個人の活動変化を評価する包括的尺度)の「身体機能」と強く関連を示している(Deye, R. A., et al. 1986; Patrick, D. L., et al. 1995)。またQuebec Back Scale (Kopec, J. A., et al. 1996)とも強い関連性を示している(福原 2004:11) (岩谷・飛松 2005:145)。

さらに痛みの程度とも強い相関を示している。一方、腰痛による精神的ストレスの概念を測定する尺度との関連性は弱い関係であった。包括的健康関連QOL尺度「SF-36」の下位尺度との相関は、 $r=-0.28\sim-0.62$ であった。強い相関が見られたのは「身体機能」であった。本尺度の開発者が事前に立てた仮説を支持する値であった。RDQ得点とSF-36の「体の痛み」得点との相関は中程度以上であった(福原 2004:22)。

#### ウ. RDQ日本語版の尺度の質問項目

RDQ日本語版の尺度の24質問項目を、表2-2-5に示した(福原 2004:4-5)。「腰痛のため」と各質問項目の最初に疾患名を指定している。24項目すべて

に、「はい」、「いいえ」のどちらかで回答を求める。

本尺度は、個々の患者への診療場面では直接的に使用しないが、腰痛疾患の治療の説明変数やアウトカム（結果）変数の1つとして使用し、最適な診断や治療方法の発見や、患者へのより良いアウトカムを導くことへ効果的な役割を果たす機能を持つ。この研究によりRDQ日本語訳の尺度が作成された。

RDQ日本語版尺度は、「今日」の日に限定し、かつ腰痛に限定し「自覚された健康」の状態を患者に尋ね、身体機能や日常生活及び社会生活機能への影響を測定している。この「日」を限定して患者に確認する方法は、自己実現概念の構築に参考になると考えられる。

表 2 - 2 - 5 RDQ日本語版の尺度の 24 質問項目

- 1 腰痛のため、大半の時間、家にいる
- 2 腰痛を和らげるために、何回も姿勢を変える
- 3 腰痛のため、いつもよりゆっくり歩く
- 4 腰痛のため、ふだんしている家の仕事をまったくしていない
- 5 腰痛のため、手すりを使って階段を上がる
- 6 腰痛のため、いつもより横になって休むことが多い
- 7 腰痛のため、何かにつかまらないと、安楽椅子（体を預けて楽に座れる椅子、深く腰掛けた姿勢）から立ち上れない
- 8 腰痛のため、人に何かしてもらおうよう頼むことがある
- 9 腰痛のため、服を着るのにいつもより時間がかかる
- 10 腰痛のため、短時間しか立たないようにしている
- 11 腰痛のため、腰を曲げたりひざまじりしないようにしている
- 12 腰痛のため、椅子からなかなか立ち上がれない
- 13 ほとんどいつも腰が痛い
- 14 腰痛のため、寝返りが打ちにくい
- 15 腰痛のため、余り食欲がない
- 16 腰痛のため、靴下やストッキングをはくとき苦勞する
- 17 腰痛のため、短い距離しか歩かないようにしている
- 18 腰痛のため、余り良く眠れない（痛みのために睡眠薬を飲んでいる場合は、「はい」を選択してください）
- 19 腰痛のため、服を着るのを誰かに手伝ってもらおう
- 20 腰痛のため、一日の大半を座って過ごす
- 21 腰痛のため、家の仕事をするとき力仕事をしないようにしている。
- 22 腰痛のため、いつもより人に対していらいらしたり腹が立ったりする
- 23 腰痛のため、いつもよりゆっくり階段を上がる
- 24 腰痛のため、大半の時間、ベッド（布団）の中にいる

## 第2項の6 諸外国のQOL尺度の先行研究について

先に基本となる主要な5つのQOL尺度の内容について説明したが、ここではそれら以外の諸外国で開発されたQOL尺度について説明する。

ここで取り上げたQOL尺度は、ICF（国際生活機能分類）の分類を基本として「障害」と「活動」に関連した分野で、計量心理学的に信頼性、妥当性が検証されている尺度を対象に取り上げた。分類すると、心身機能尺度（ICFでは、8分類・7段階評価をしている）、活動と参加尺度、QOL健康尺度、特異的疾患尺度の4分類に整理できる（岩谷・飛松 2005:6）。

ここで示すQOL尺度の先行研究をまとめて、表2-3-1に示した。ここでいう尺度とは、対象や事象を測定する物差しのことである。事象に応じて、例えば体温や脈拍数などの変数を用い、事象を測定する。測定した結果に意味づけをすることを評価という。つまり、体温や脈拍数から健康状態を評価することになる。こうして、医療やリハビリテーション（QOLを含む）の世界では、生物学の特性を変数で表現し、病気と健康の領域を区別してきた（岩谷・飛松 2005:18）。

こうして、多様な評価尺度が開発されてきているが、しかし、生物学の特性の変数では、病気を持っている患者の日常生活を営む困難性や、不自由な体験から悩みを抱えている病人の病状全体を表現し、疾患から患者が受けている悩みの大きさを把握し治療の対象に組み入れるには、食事などから受ける漠然とした生活の不自由さを概念化し、その概念を測る尺度の開発が必要となる（岩谷・飛松 2005）。

医療の分野では近年、医者が主体となるのではなく、患者が主体となり疾患を評価する「患者立脚型QOL尺度」の開発が主流となってきている（岩谷・飛松 2005:8・10）。こうした背景から、利用者の満足度を利用者自らが評価する医療評価基準のQOL尺度が生まれてきた（福原 2004:3）。その研究の中心的課題は、ADL, IADL, 特定疾患QOL, 主観的幸福感などである。近年は、患者自身が評価する疾患特異的QOL尺度の適用範囲が広まるとともに、包括的QOL尺度 SF-36 のように疾患患者だけではなく健康な者にも適用可能な尺度も開発されてきている（福原 2004:5）。



こうして誕生し開発されてきたQOL尺度は、観察研究の説明変数やアウトカム（結果）変数の1つとして活用され、利用者のQOLの改善に活用されてきている（福原 2004:7）。

QOL尺度の先行研究を調査した結果、主要な先行研究の概要を表2-3-1に示した。他の先行研究は巻末資料<表2-3-2~4>にすべてを示した。

表2-3-1に示した高齢者の認知度を測定する尺度については、本研究で取り組む自己実現尺度開発が認知症を持たない健康な認知機能を保持する高齢者を対象としていることから、逆に、認知機能を測定する尺度質問項目の内容が、自己実現尺度項目の作成に参考となる。また、基本的なADL機能評価を行うADL評価尺度は、自己実現尺度の属性項目の作成に参考となる。また、食事を作るなどの高次のIADL尺度は、自己実現尺度項目に近似した生活に関する質問項目として、自己実現尺度項目の表現の参考となる。

健康状態を利用者が主観的に評価する健康尺度（EQ-5D）や健康な者の調査にも使用可能な包括的健康プロファイルQOL尺度（SF-36）の利用者から見た基本的な健康を測定する尺度項目の内容は、自己実現尺度の健康の項目作成の表現の参考となる。世界22カ国が共同で作成したWHOの主観的QOLなど普遍性のある健康QOL尺度は、世界で使用可能な自己実現の質問項目の表現方法として参考となる。

最も広い概念でQOLを捉えている高齢者の主観的幸福感を測定する尺度は、現在、自己実現の概念に最も近いQOL尺度であると位置づけることができ、自己実現概念の構成要素の作成に参考となる。また、腰痛という特異疾患の利用者の生活に関するQOL尺度の特定の疾患を持つ利用者から見た項目表現は、自己実現尺度項目の表現の仕方に参考となる。

総じて、基本的ADL、IADL、健康の基本項目、世界の国々に共通する項目表現、最も自己実現に近似した高齢者の幸福感尺度内容などを参考として、これらを総合した基礎の上に、自己実現尺度開発が行われることが重要な要件であると考えられる。

表 2 - 3 - 1 諸外国の Q O L 関連評価尺度の先行研究一覧

(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (岩瀬・飛松 2005: 187-216)

分野	尺度名称 開発者 開発年	特徴	構成	信頼性	妥当性
1 心身機能 認知機能 尺度	HDS-R 改定長谷川式簡易知能 評価スケール 長谷川和夫他 1974	短時間で道具なし、 ‘ベッドサイド’でも可能。 カットオフポイント(20/21)で 認知を識別。30満点	9項目から構成。時間・場 所の見当識、連続原産、数 字の逆唱、単語の干渉後 再生、物品の即時再生、 語の流暢性。口頭回答	原著、その後の研究で 高い信頼性を確認。	高い妥当性を確認。
2 活動と参 加 基本的ADL 尺度	BI(Barthel index) 尺度 Mahoney FI. Barthel DW. 1965	最も基本的なADL尺 度である。2~3段階 に評点化。100点総点 問題点抽出に不向き	10項目の遂行能力を 3段階で評価。100点満 点 0.5.10 又は、5.10.15 の評点とする	再テストによる信頼性あり。 内的整合性あり。	構成概念妥当性の 証明あり 同時妥当性の証明 あり
3 活動と参 加 基本的ADL 尺度	FIM (functional independen- ce measure) 尺度 Buffalo大学 1986	認知機能障害を伴う 患者の機能障害に適 する。7段階評価 リハビリテーションに向く。	6領域 全18項目 セルフケア・排便コントロール 移乗・社会的認知 移動・コミュニケーション	証明されている	証明されている
4 活動と参 加 手段的ADL 尺度	老研式活動能力指標 尺度 古谷野亘 1987	Lawtonの生活機能 自立性の7集移住の 手段的自己維持とエ フェクタンズに対応する	13項目の質問から構成 (バスや電車を使用し外 出、自分で食事など)	証明されている	証明されている
5 活動と参 加 手段的ADL 尺度	Frenchay拡大ADL 尺度 英国のFrechay病院 1983	ADLのうち自己維持 移動能力より高次機 能を測定する	食事を作る、選択をする など15項目の行為につ いて最近3ヶ月間の結果 を4段階で評価する	証明されている	証明されている
6 QOL健康 選好に 基づく健康 尺度	EQ-5D (EuroQol) EuroQol group. 1990	健康状態を主観的に 評価する感覚尺度 自記式、面接回答共 に可能	5質問に3段階評価する 5項目法、線分上に健康 状態を表示の視覚評価 法の2方法からなる	再テスト法により信頼 性確認あり。 5項目のK係数は0.63 ~0.80で再現性検証	並行的妥当性 判別的妥当性確認。 他の尺度との相関が 高いことを確認。
7 QOL健康 包括的健康 プロフィール型 QOL尺度	SF-36 (MOS short-form 36) Ware JE. 1992 (福原 2004)	16歳以上の健康 関連QOLを測定 自記式、インタビュー共に 可能	8つの下位尺度を持つ36 の質問項目から構成。下 位尺度毎の素点を100点 満点の得点に換算する。	証明されている	証明されている
8 QOL健康 包括的健康 プロフィール型 QOL尺度	LS I K (Life satisfaction index k) 生活満足度尺度 古谷野亘 1982	高齢者の主観的幸 福の測定尺度LS I A PGCモラルスケール 基としている	3領域9質問項目から構 成。回答は選択肢から 選び、9領域ごとの点数 を単純合計をする。	脳卒中方麻痺で証明 あり	脳卒中方麻痺で証明 あり
9 QOL健康 包括的健康 プロフィール型 QOL尺度	WHOQOL(World Health Organization quality of life assessment instrument) WHO 1995	主観的QOL尺度。22 国が開発に参加。異 文化間で測定可能。	身体的・心理的・社会的 環境の4領域24回項目 に2つ加わり26項目から 構成される。5段階評価	信頼性は証明されて いる	妥当性は証明されて いる
10 QOL健康 包括的健康 尺度	NHP (Nottingham health profile) Hunt SM. 1981	被検者の健康状態を 主観的に評価する 包括的尺度である	第1部: 6領域38項目 第2部: 7つの活動への 質問から構成される。 100~0(健康)で評価	信頼性テストが行われ ている。	多くの報告があり 他の健康尺度との 比較もある。
11 特異疾患 腰痛疾患 尺度	ROQ (Roland-Morris disability questionnaire) Roland M. Morris A. 1983	腰痛による日常生活 の障害を評価する 尺度	腰痛による日常生活活 動が障害されるか否か を確認する24項目から 構成される。	十分な検討が行われ ている。	十分な検討が行われ ている。

### 第3項 最近のわが国の高齢者の生活の質(QOL)尺度の先行研究

先行研究の調査に当たり、1997年から2007年までの過去10年間の老年社会科学学会誌(第18巻第2号1997～第28巻第2号2007)を調査し、掲載されている高齢者に関連するQOL尺度の論文及び学会研究発表の中から、近年における高齢者のQOL尺度に関する研究を全て選び出した。これらの先行研究から、わが国の高齢者のQOL尺度開発は、介護保険法の実施にまつわる、ADL, IADL(石橋・他1998:42-49)、介護技術の質や介護の量や密度、介護者の負担感や高齢者の記憶、高齢者の認知症の程度の評価、高齢者の性、生きがいや主観的満足度などを測定する尺度開発が行われてきた変遷を理解できる。

#### 第3項の1 在宅痴呆性老人に対する介護にかかわる社会・家庭的負担評価票(CBS)の作成とその臨床的意義の検討

まず、在宅認知症高齢者の介護の世話をする主たる介護者を対象とした社会・家庭的負担評価票(Caregivers Burden Scale: CBS)の開発と、その信頼性と妥当性の検討結果を概観する。

##### ア. 社会・家庭的負担評価票(CBS)の概要

本評価票は、介護者の介護負担を精神的側面から捉えるのではなく、社会・家庭生活上に及ぼす制約から負担の大きさを把握する尺度である。尺度を使用する臨床現場の実用性や簡便性を配慮し、WHO(世界保健機構)の障害の3分類に含まれている「社会生活上の障害(handicap)」の障害概念を応用して作成されている(木之下・朝田1999:76)。

本尺度は、利用者が抱えているhandicapにより、認知症高齢者を介護する者が実際に経験するであろうと思われる調査項目から構成されている。

##### イ. 社会・家庭的負担評価票(CBS)の尺度構成

本尺度の開発者らは、在宅認知症高齢者とその主たる介護者145組に調査を行っている(木之下・朝田1999)。介護にかかわる社会・家庭的負担評価票(CBS)は、5質問項目から構成されている。各質問項目に対し、1～4のいずれかを選択する4件法の回答方式となっている。回答は、(1)できた、(2)すこし

できた、(3) できなかった、(4) まったくできなかった、の 1~4 の選択肢から択一される。

#### ウ. 尺度得点の計算と評価及び信頼性、妥当性

5つの質問項目個々にそれぞれに配点し、リッカート得点法（素点を合計する方法）と GHQ 得点法（4段階の選択肢にそれぞれ 0, 0, 1, 1 点を与え、得点を 2 値化する得点法）の完全一致率などから得点が算出された。テスト・再テスト法による信頼性分析により、十分な満足すべき内的整合性が確認された。信頼性係数  $\alpha$  の値は 0.67 であった。妥当性については、十分な構成概念妥当性が確認されている（木之下・朝田 1999 : 77）。

#### エ. 社会・家庭的負担評価票 (CBS) の尺度項目について

社会・家庭的負担評価票 (CBS) の 5 質問項目の内容を、表 2-3-6 に示した（木之下・朝田 1999 : 77）。各質問の 4 つのカッコのうち、1 つを選択し回答する。

表 2-3-6 社会・家庭的負担評価票 (CBS) の 5 質問項目

1	冠婚葬祭や寄り合いなどおつきあいに出ることができましたか (1) できた、(2) すこしできた、(3) できなかった、 (4) まったくできなかった
2	職業や家事に専念することができましたか (1) できた、(2) すこしできた、(3) できなかった、 (4) まったくできなかった
3	趣味や旅行などで余暇を楽しむことができましたか (1) できた、(2) すこしできた、(3) できなかった、 (4) まったくできなかった
4	医療や介護に必要な経費で家計はどうになりましたか (1) 変わらない、(2) あまり変わらない、(3) 悪くなった、 (4) とても悪くなった
5	介護に関して、家族や親戚との間で困った問題がありましたか。 (1) なかった、(2) あまりなかった、(3) あった、 (4) たびたびあった

木之下らにより、在宅認知症高齢者の介護の世話をする主たる介護者を対象とした社会・家庭的負担評価票 (Caregivers Burden Scale : CBS) が開発さ

れた（木之下・朝田 1999）。調査票の信頼性が確認され、また構成概念妥当性も証明された。また、臨床的意義が検討され、CBSの測定内容に焦点を当てた支援により介護者の「精神的健康」は改善された。その結果、1年以内の介護疲れを理由とする短期間の施設利用の改善が示唆された。

自己実現との関連性について説明する。介護者の介護負担の大きさを測定する尺度であるが、尺度の5項目を見ると、質問内容は介護者の自己実現を調査する内容であると考えられる。たとえば、「冠婚葬祭や寄り合いなどおつきあいに出る」や「職業や家事に専念する」「趣味や旅行などで余暇を楽しむ」の質問項目は、高齢者を調査対象とした自己実現の調査項目に重なる要素が多く含まれていると考えられる。

### **第3項の2 地域高齢者を対象としたADL・IADL統合尺度の構成概念の検討**

#### **ア. 拡大ADL尺度の概要**

高齢者の自立支援の主要な対象は、社会的に独立した日常生活を営む能力のADLやIADLを阻害している「障害」である。また、IADLの予防的介入の必要性が近年指摘されてきている（石橋・他 1998:42-49）。

こうしたことからADLのみならずIADLの水準を包括的に測定できる評価尺度の開発が望まれてきた。こうした要請を受けて開発されたのが拡大ADL尺度である。「拡大ADL尺度」の評価項目を基本とし、確証的因子分析を行いADLとIADLの統合尺度としての構成概念妥当性の検討を目的とし、開発が行われた。

すでに、IADL尺度としては、LawtonのIADL尺度(Lawton, M. P. 1975)及びFillenbaum IADL尺度(Fillenbaum GD 1985)が開発されている。

#### **イ. 拡大ADL尺度の構成**

調査は、農業を主たる産業とした65歳以上の地域高齢者を対象としている。ADL8項目（食事、移乗、整容、排泄、入浴、水平面の移動、階段昇降、更衣動作）、IADL4項目（バスや電車で外出、日用品の買い物、食事の用意、預貯

金の出し入れ)の合計12項目から構成されている。

因子分析により、身辺処理(5項目)とIADL(4項目)の2因子が抽出され(合計9項目)、さらに2次因子モデルの適合度が統計学的に有意な水準を満たしていることが確認された。

#### ウ. 尺度得点の計算と評価及び信頼性と妥当性

身辺処理や移動についてBarthel Indexの項目から8項目を用いて12項目版を作成した。回答方法は2件法とした。得点化は、開発者と同じく、自立の回答に1点を配点し、それ以外には0点を配点した。10項目の修正版の平均得点数は、8.30点(男8.38、女8.23)であった。得点の平均点は、年齢が高くなると低くなる傾向が見られた(齋藤・他 2001:35)。

12項目からなる因子モデルの適合度指標は統計学的な許容水準に達しなかった。移動因子の関連項目を除去した9項目からなる2次因子モデルは、信頼性係数は $\alpha = 0.906$ と高く、適合度が統計学的な許容水準を満足した。本尺度の構成概念妥当性の検討は、共分散構造分析の確証的因子分析により行った。その結果、統計学的な確証が得られたことから、2因子9項目・2次因子モデル構造の構成概念妥当性が確認された。

#### エ. 拡大ADL尺度の尺度項目について

拡大ADL尺度の12質問項目は、表2-3-7に示したとおりである(齋藤・他 2001:35)。回答は、各質問の2つのうち(カッコ内)1つを選択し回答する。回答は、自立とそれ以外の二者択一形式となっている(齋藤・他 2001:34)。

移動動作はIADLの「自立」と重複する要素であることが確認されたため削除されている。その結果「身辺自立」と「IADL」の2つの潜在変数を拡大ADLの下位概念とする2因子2次因子モデル(2因子9項目)が確認され、内的妥当性ならびに構成概念妥当性も高いモデルであることが確認されている(齋藤・他 2001)。

IADLを含めた拡大ADL尺度という考え方は、自己実現を「拡大QOL」という視点で捉えることもできる。また、IADLの中の「バスや電車で外出する」「日用品の買い物をする」「食事の用意をする」などの質問項目は、自己実現の質問項目としても使用できる内容であり、自己実現との関連性は大きい。

表 2 - 3 - 7 拡大ADL尺度の12質問項目

1	食事動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
2	移乗動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
3	整容動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
4	排泄動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
5	入浴動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
6	水平面の移動 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
7	階段昇降 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
8	更衣動作 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
9	バスや電車で外出 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
10	日用品の買い物 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
11	食事の用意 (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)
12	預貯金の出し入れ (1) 自立	(2) それ以外 (自立できていない)

### 第3項の3 高齢者のセクシュアリティに関する知識と態度の日本語版評価尺度(ASKA-J)

#### ア. 「高齢者のセクシュアリティに関する知識と態度の日本語版評価尺度」の概要

高齢者の人口増加に伴い、高齢者の性は老後の生きがいや心身の健康と密接に関連し、その科学的理解の必要性から、この領域に関する研究が増えてきている。高齢者の性の重要性は、認知されてきているが十分ではなく、掘り下げて議論をする必要がある。国内では、高齢者の性について客観性のある尺度により知識や態度を測定した先行研究はみられない。

わが国では、すでに内的一貫性と構成概念妥当性が確認されている Aging Sexuality Knowledge and Attitudes Scale (ASKAS) を活用した高齢者の性に関する研究が進められてきていることから、ASKASの日本語版が作成されている。高齢者の性に関する知識と態度を評価する尺度の標準化を目指すことを目的として、日本語版評価尺度(ASKA-J)の有用性を確認した(赤嶺・他

2002 : 72)。

#### イ. 日本語版評価尺度(ASKA-J)の構成

将来高齢者医療に携わる可能性のある保健医療系学生を対象とし、高齢者の性に対する知識と態度を測定した。

日本語版尺度は、因子分析によって2因子が抽出された。2因子は「知識」と「態度」に解釈でき、尺度項目は知識項目35項目、態度項目26項目、合計61項目から構成されている(赤嶺・他 2002 : 73)。

#### ウ. 尺度得点の計算と評価及び信頼性と妥当性

知識に関する設問は、1. 正しい 2. 正しくない 3. わからないの3選択肢で回答を求めている。得点は、設問1に1点、設問2に2点、設問3に3点を配点し、低得点ほど高齢者の性に関する知識度が高いといえる。

態度に関する設問は、1. まったくそう思わない 2. そう思わない 3. あまりそう思わない 4. どちらでもない 5. ある程度そう思う 6. そう思う 7. とてもそう思う の7選択肢で回答を求めている。得点は、設問1に7点、設問2に6点、設問3に5点と順番に配点を下げ、設問7に1点を配点し、低得点ほど高齢者への性に関する態度が寛容的であるとなっている。

信頼性の検討: Test-retest 法におけるピアソンの相関係数は「知識」が0.82、「態度」が0.76と高い値を示していた。クロンバックの $\alpha$ 係数は、「知識」が0.90~0.94、「態度」が0.85~0.88であった。これらの結果から内的整合性が許容水準であることが確認された(赤嶺・他 2002 : 74)。

妥当性は、妥当性を評価する明確な基準となる他の尺度と比較することにより、基準関連妥当性を検討することになる。わが国には有用性のある測定尺度がないため、本研究では、構成概念妥当性を探索的因子分析により抽出された2因子の解釈で確認されている。第1因子は、因子負荷量が全35変数のうち31項目で0.35以上、第2因子は、26項目中22項目で因子負荷量が0.35以上であり、構成概念妥当性がおおむね確認されたといえる。

#### エ. 日本語版評価尺度(ASKA-J)の質問項目について

日本語版評価尺度(ASKA-J)の知識に関する35項目及び態度に関する26



質問項目は、表 2-3-8 のようになっている（赤嶺・他 2002：75）。

表 2-3-8 日本語版評価尺度（ASKA-J）質問項目

（A）知識に関する 35 質問項目 （10 項目のみ一部を記載）

- 1 高齢者の性生活はしばしば健康に害を及ぼす。
- 2 セクシュアリティは一般に生涯を通じての欲求である。
- 3 大多数の高齢女性は性的に敏感に反応しない。
- 4 一般的に 65 歳以上の男性は加齢とともに性衝動が高まる。
- 5 高齢者の性への無関心はうつ状態に影響される場合がある。
- 6 男性は女性に比べ加齢による性能力減退が著しい
- 7 高齢者の性活動が身体に良い影響を与えることは明らかである。
- 8 性活動は高齢者に心理的に良い影響を与えることがある。
- 9 多くの場合、高齢男性の性活動終止は生物学的・身体的理由よりも、社会的・心理学的理由が原因になる。
- 10 重い身体障害がなければ、80 歳代、90 歳代になっても性欲は持続し性活動はありえる。

（B）態度に関する 26 質問項目 （10 項目のみ一部を記載）

- 1 高齢者は性への関心がほとんどない。
- 2 老人ホームのような高齢者施設では入居者の性活動をすすめたり支援すべきでない。
- 3 老人ホームでは、男女の部屋を遠くに離し、別の階にするなどして分けるべきである。
- 4 老人ホームに入居している高齢者のための性教育が必要である。
- 5 老人ホームで働くスタッフのための性教育が必要である。
- 6 私は高齢者の性について知るべきことは知っている。
- 7 老人ホームに入居している高齢者は性行為をしてはならない。
- 8 高齢者がセックスを楽しむことは不道徳である。
- 9 老年期の性的機能の変化についてもっと知りたい。
- 10 夫婦以外の性的関係はいかなる場合でもよくない。

高齢者の性に対するタブー視や偏見をなくし、自己実現に関連する高齢者の人間性を正しく把握するためには、高齢者の人格、価値観、生きがいなどを尊重した、社会全体からのアプローチが必要である。わが国の老人ホームのケアスタッフや保健医療系学生を対象とした本調査研究により、支援関係者が持つ高齢者への性に関する知識と態度の測定に使用可能な尺度が開発された。尺度の今後の使用により、高齢者の性に対するタブー視や偏見をなくし、高齢者の人間性をより正しく把握するための取り組みの指標としていくことが可能となった。

自己実現との関連性について説明する。本研究の ASKA-J は、「2. 老人ホームのような高齢者施設では入居者の性活動をすすめ、支援すべきでない」、及

び「3. 老人ホームでは、男女の部屋を遠くに離したり別の階にするなどして分けるべきである」、の2つの質問項目に見られるように、特別養護老人ホームの入所者が、「あの人と結婚したい」という望みや高齢者のフォークダンスクラブに人気が集まり、身だしなみをきれいにして参加するなどの現実問題を測定することが可能な尺度であると考えられる。異性への関心が生活意欲やアクティビティ活動への参加に与える影響力は大きく、それを支える支援者の意識を把握することは重要である。老人クラブの運営役員を意欲的に行うなど自己実現にむけた行動の意欲の動機付けに大きな要因が関係しているといえる。これらの内容を、自己実現尺度に反映することは意義深いと考える。

### **第3項の4 日本語版フラボニ(Fraboni)エイジズム尺度(FSA)短縮版**

(原田・他 2004)

#### **ア. フラボニ(Fraboni)エイジズム尺度「FSA短縮版尺度」の概要**

Butler はエイジズムの概念を「高齢であることを理由とする、人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス」と定義している (Butler 1969)。

わが国では本研究は、都市部における 25～39 歳の 1,289 人の男性への調査から Fraboni エイジズム尺度 (Fraboni Scale of Ageism; F S A) の因子構造を検討し、日本語版を作成した (原田・他 2004)。

それを、個人的レベルと制度的レベルの現象として捉えられる。Fraboni は、誹謗、回避、差別の3つの構成概念を措定し、敵対・差別的な態度や高齢者との接触を回避するような感情成分を含めて測定する Fraboni エイジズム尺度を開発した。

#### **イ. 「FSA短縮版尺度」の構成**

「誹謗 (Antilocution)」、「差別 (Discrimination)」、「回避 (Avoidance)」の3因子 19 項目から構成される F S A 基本モデルは、適合度が統計学的な許容水準に達しなかった。I-T 関連の結果、基本モデルから個々の項目得点と全体得点の間の相関係数が低い 0.4 未満の 5 項目を除いた 14 項目を用いて、探索的因子分析を行った結果、「嫌悪・差別」「回避」「誹謗」の3因子 14 項目の2次因子モ

デルの適合度が統計学的な許容水準を満たすことが確認された（原田・他 2004 : 315）。

#### ウ. 尺度得点の計算と評価及び信頼性と妥当性

設問は、1. そう思う 2. まあそう思う 3. どちらともいえない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない の5選択肢で回答を求めている。得点は、各回答の設問1に1点、設問2に2点、設問3に3点、設問4に2点、設問5に1点を配点し、得点化した。各3因子別に項目得点を求め合計をした。いずれの下位尺度も $\alpha$ 係数は、0.7を越え、内的整合性が確認された。合計得点に対する信頼性を示す $\alpha$ 係数の値は0.85と高い値であった（原田・他 2004 : 314）。

日本語版FSA短縮版は、検証的因子分析の結果、モデルの適合度であるGAI = 0.943、AGFI = 0.920、RMSEA = 0.068であった。これらの値から、一定の構成概念妥当性と信頼性の適合が確認された（原田・ほか 2004 : 314）。

#### エ. 「FSA短縮版尺度」の質問項目について

日本語版フラボニ (Fraboni) エイジズム尺度短縮版 (14項目) の質問項目は、表2-3-9のようになっている（原田・他 2004 : 312）。

表2-3-9 日本語版フラボニ (Fraboni) エイジズム尺度短縮版 (14項目)

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 多くの高齢者はけちでお金や物を貯めている</li><li>2 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない</li><li>3 多くの高齢者は過去に生きている</li><li>4 高齢者と会うと時々目を合わせないようにしている</li><li>5 高齢者が私に話しかけてきても私は話をしたくない</li><li>6 高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時には感謝すべきだ</li><li>7 もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない</li><li>8 個人的には、高齢者と長い時間を過ごしたくない</li><li>9 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない</li><li>10 ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない</li><li>11 高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ</li><li>12 高齢者との付き合いは結構楽しい</li><li>13 できれば高齢者と一緒に住みたくない</li><li>14 ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる</li></ol> |
|--|

「高齢であることを理由とする人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別」であるエイジズムの概念を測定する尺度として日本語版フラボニ（Fraboni）エイジズム尺度（FSA）短縮版を開発された。若年男性を対象とした研究の結果、高齢者への直接的な嫌悪・差別的な態度や高齢者との接触を回避する感情成分を含む、「嫌悪・差別」「回避」「誹謗」の3因子14項目からなる2次因子モデルの検証的因子分析を行った。その結果、統計学的な許容水準を満たしている日本語版フラボニ（Fraboni）エイジズム尺度（FSA）短縮版が開発された。

また、この尺度は十分な内的整合性と構成概念妥当性及び信頼性を有していることも確認された。

一般社会からエイジズムをなくすことにより、高齢者の自己実現に向けた社会的支援体制を構築することは、最も大きな普遍的な課題であるといえる。高齢者の社会参加を進め、差別することなく、地域の人々が高齢者を地域の住民の一人として受け入れることが重要である。質問項目の9の「高齢者には、地域のスポーツ施設を使って欲しくない」の質問や2、6、7、9、11、13番の質問項目は、ノーマライゼーションに反する内容であり、かつ、高齢者虐待につながる内容であるといえる。このような視点からエイジズムを少なくすることは、自己実現の支援に直接結びついているといえる。

### **第3項の5 介護技術の測定（ダイヤ式介護技術チェックシートの開発）**

#### **ア. ダイヤ式介護技術チェックシートの概要**

2008年現在、介護保険制度が8年を経過し、在宅福祉サービスがますます重要となり、訪問介護員（ホームヘルパー）には介護技術の高い専門性が要求されてきている。介護技術は、看護やリハビリテーションの技術の一部を取り入れて成立をしているが、まだ体系化された介護技術には至っていない。

ダイヤ式介護技術チェックシートは、訪問介護員養成研修2級課程の基本介護技術を元に、ホームヘルパーの介護技術を簡便かつ客観的に評価できる手法である。

ここでは、尺度構成に関する信頼性、妥当性を確認し、整理する（滝波・他

2005)。

#### **イ. ダイヤ式介護技術チェックシートの構成**

訪問介護員養成研修 2 級課程のテキスト、及び他の教科書から 23 課題 465 項目からなるチェックシートの原案が作成された。膨大で実際の使用に適さない原案の探索的因子分析の結果から、最終的に、4 課題 20 項目から構成されるダイヤ式介護技術チェックシートが開発された。4 課題とは、「おむつ交換」「嚥下困難者への食事介助」「ベッド上での洗髪」「車椅子への移乗」の 4 課題である（滝波・他 2005:25）。

#### **ウ. 尺度得点の計算と評価及び信頼性と妥当性**

介護を受けるモデルを使い、被験者に介護課題を 4 分間で実技試験し、評価者が被験者の介護技術を評価する。5 項目につき各実技をチェックし、1. できた 2. できなかった の 2 水準で評価する。2 人の評価者が同時に「できた」と評価した場合 1 点、「できなかった」と評価した場合 0 点とし、合計し総得点を算出している。1 つの第二次因子と 3 つの第一次因子及び 10 個の質問項目から構成される二次因子モデルの適合度の検証を行い、構成概念妥当性を確認した。適合度の確認は、 $\chi^2$  乗/DF 比、GFI、AGFI、RMSEA で評価した。（滝波・他 2005:27）。

次に、因子得点を算出し、合計得点との相関を求め、決定係数を信頼性の指標とした。また、介護福祉士と訪問介護員の平均値の差の検定を行い、基準関連妥当性を検討している。

#### **エ. ダイヤ式介護技術チェックシートの質問項目について**

ダイヤ式介護技術チェックシート（10 項目）の質問項目は、表 2-3-10 のようになっている（滝波・他 2005:27）。

従来、介護技術は評価者の主観や評価者自身の介護動作により評価されてきた。本チェックシートの開発により、共通因子と課題の必須動作による少数の介護課題とチェックシートの項目から介護技術の水準が得点評価できるようになった。「介護技術」を客観的に評価する「コミュニケーション」「体位保持」「差し入れ動作」の 3 因子を第 1 因子とする 2 次因子モデルは高い適合度を持つことが確認され、介護技術チェック・シートの構成概念妥当性が十分であることが検証さ

れた。

自己実現との関連性について述べる。従来、介護技術の評価が評価者の主観や

表 2-3-10 ダイヤ式介護技術チェックシート (10 項目)

- |    |  |
|----|--|
| 1  | これから食事であることを知らせる                       |
| 2  | これから起きて車椅子に移ることを知らせる                   |
| 3  | ベッドの上部を上げることを知らせる                      |
| 4  | 体を密着させ、被験者の背中が介護者の方を向くようにして(背面法)側臥位にする |
| 5  | 被介護者の背中が介護者の方を向くようにして(背面法)側臥位にする       |
| 6  | 腕を被介護者の肩の下から差し入れ、脇の下で支える(車椅子への)移乗      |
| 7  | ベッドの折れ目に臀部を合わせる(嚥下困難者への食事介助)           |
| 8  | 両脇の下にクッションを差し入れる(ベッド上での洗髪)             |
| 9  | 防水布とバスタオルを重ねた敷物を、肩の下に差し入れる(ベッド上での洗髪)   |
| 10 | 汚れたおむつを丸めて陰部の下まで差し入れる(おむつ交換)           |

評価者自身が持っている固有の介護技術により評価されてきた。このことは、自己実現についても同様で、自己実現を論じる者の主観や論者が持っている自己実現に関する知識の度合いにより評価されてきたといえる。そのため、介護技術チェック・シートの開発手順のように、自己実現の概念の共通因子を発見し、客観的評価項目に従って評価可能な自己実現尺度の開発が重要であると考えている。

### 第3項の6 わが国の近年の高齢者関連 QOL 尺度の先行研究について

本論文の目的から、先行研究は、高齢者に限定して尺度開発の調査を行った。1997 年から 2007 年までの過去 10 年間の老年社会科学会の学会誌に発表された論文及び学会発表要旨から、尺度開発の先行研究をすべて選び出し、その概要をまとめた。ここでは特に尺度として、高齢者の QOL の信頼性及び妥当性まで論及している研究のみを取り上げ、その研究の概要をまとめた。

#### ア. 先行研究の尺度の概要

わが国では、社会福祉制度の大きな転換である介護保険法が 2000 年に施行さ

れ、その後、介護者を対象とした介護技術の質や水準、介護の量や密度、介護負担度などを決定する尺度開発が多く報告されてきている。

A D L ・ I A D L からみた日常生活自立度判定基準(石橋・他 1998 : 42-49 ) のように、高齢者から直接回答を求める調査研究も報告されているが、直接回答を高齢者から求める場合の調査対象母集団を準備することは、近年個人情報保護の問題から倫理性の検討など困難性が高いため、高齢者から直接回答を求める調査研究がかなり少なくなっている。このことは、これからの高齢者に関する尺度研究の課題の1つであると思われる。

#### イ. 「先行研究の尺度」の構成

先行研究の中で尺度の因子構造を明らかにしている 24 種類の尺度研究を取り上げて分析した。その分析結果から、開発された高齢者の Q O L 尺度は、概ね平均的尺度構成が 3 領域、16 質問項目、4 因子又は 3 因子構造、回答は 4 件法であることが明らかとなった。領域は 2 ～ 8 領域、項目数は 5 ～ 64 項目、回答は 3 ～ 7 件法、因子数は、2 ～ 5 因子の範囲で多様な尺度構成で作成されていた。

#### ウ. 「先行研究の尺度」の質問項目

質問文は、「です、ます」文(①・②)と「である」文(③・④)の2種類の文体が使用されていた。回答は「はい、いいえ」(①・②)に近い単純な回答の求め方と程度を詳しく聞く回答法(4又は5件法)(③・④)の2つの方法が見られた。

- ①「・・・が必要ですか」 3 件法で回答 (1. 必要ない 2. 一部必要 3. 必要)
- ②「・・・ができますか」 2 件法で回答 (1. できる 2. できない)
- ③「・・・したことがある」 4 又は 5 件法 で回答
- ④「・・・ことが多い」 4 又は 5 件法 で回答

先行研究を調査した結果、主要な先行研究の概要を、表 2 - 7 - 1 に示した。他の先行研究の結果は、巻末資料 4 ～ 5 (表 2 - 7 - 2 ～ 3) に示した。

先行研究の表 2 - 7 - 1 に示した在宅認知症高齢者の介護者を対象に開発した社会・家庭的負担評価票の質問項目のうち「冠婚葬祭や寄り合いなどおつきあいにいる」や「趣味や旅行などで余暇を楽しむ」の質問項目は、在宅高齢者を調査対象とする自己実現尺度の開発において、参加・活動の調査項目の作成に参考となる。また、A D L に I A D L を加えた「拡大 A D L 尺度」という考え方は、

自己実現を「拡大したQOL」という視点で捉えた場合の概念の関連性として参考となる。IADLの質問項目のうち、「バスや電車で外出する」「日用品の買い物をする」等の質問項目は、自己実現の質問項目の作成に参考となり、自己実現との関連性は大きい。

表2-7-1 日本の近年のQOL関連尺度の先行研究

(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (老年社会学会誌 1997~2007)

分野	論文名称 著者 発表年	特徴	構成	信頼性	妥当性
1 高齢者 在宅痴呆性 高齢者 尺度	在宅痴呆性老人に対する 介護に関わる・社会・家庭 負担評価表(CBS)の作成 とその臨床的意義の検討 木之下明美・他 1999	在宅痴呆性老人の 主たる介護者の社会 家庭的負担評価表 (OBS)を開発し信頼 性と妥当性を検討。	5質問項目から構成され る。各項目を4段階評 価(できた、少しできた、 できなかった、まったく できなかった)	テスト・再テストにより、 内的整合性は、 $\alpha$ 係 数0.67であった。信 頼性は確認された。	構成概念妥当性が確 確認された。
2 高齢者 希望評価 尺度	日本語版Health Hope Indexの開発 小泉美佐子・他 1999	希望の評価に開発 されたHealth Hope indexの日本語版開 発である。	3領域12項目から構成 される。4段階評価。1 ~4得点化する。因子 分析で2領域を確認。	$\alpha$ 係数0.86で内的整 合性が確認された。	PGCモデルスケールとの 相関は、0.53であった
3 高齢者 生きがい 尺度	高齢者の生きがい感スケール (K-1式)の作成及び生きがい 感の定義(その1・2) 近藤勉・鎌田次郎 2000	1994年の生きがい感 仮定義から生きがい 感項目を選定しスケール を作成。分析した	16質問項目を選定 質問は、3件法評価 因子分析から4因子 抽出した。	16項目の内的一貫性 確認(相関係数0.4~ 0.7)	内容的妥当性確認 基準関連妥当性確認 積率相関値0.87と 高かった。
4 高齢者 ADL 尺度	地域高齢者を対象とした ADL,IADL統合尺度の構成 概念の検討 齋藤・他 2001	拡大ADL尺度を元に ADL,IADLの統合 尺度の構成概念を 確認的因子分析で検討	1因子12項目から 2因子9項目への変更 の適合性が確認された。	9項目版の $\alpha$ 係数 0.906と高い信頼性が が確認された。	2因子9項目の因子 構造モデルは、内容的 妥当性、構成概念 妥当性が確認された。
5 高齢者 セクシャリ ティ 尺度	高齢者のセクシャリティに関す 知識と態度の日本語版評 価尺度(ASKAS-J)の作成 高峰依子 2002	高齢者のセクシャリ ティの知識と態度を評価 する尺度の日本語版 の作成と標準化を目 的とする。	知識評価尺度35項目 態度評価尺度26項目 2つの尺度から構成さ れている。	ピアソンの相関係数: 0.85~0.94であった。 高い信頼性が 示された。	因子分析で2因子が 抽出され、因子負荷 量が0.35以上であっ た。妥当性が概ね 支持された。
6 高齢者 訪問介護 尺度	訪問介護の質を測る利用 者満足度尺度案の交差 妥当性の検討 須賀美明 2003	訪問介護の質を評価 する信頼性と妥当性 が検討された満足度 尺度の開発が目的	15質問項目から因子 分析により2因子が 抽出された。	$\alpha$ 係数は0.90であ った。十分であるこ とが、確認された。	利用者との面接により 表面的妥当性を確認。 因子分析で構成概念 妥当性を確認した。
7 高齢者 エイジス ム 尺度	日本語版Fraboni エイジス ム尺度(FSA)短縮版の作成 原田謙・他 2004	Fraboni エイジス ム尺度(FSA)の日本語短縮 版の目的。都市部 25~29歳男性対象。	19項目を因子分析で 3因子を抽出した。確認 的因子分析から、3因子 14項目が最終的に確認。	信頼性は、 $\alpha$ 係数: 0.85 内適正合成 が確認された。	因子分析により3因子 に解釈可能であり、構 成概念妥当性が確認 された。
8 高齢者 生活満足度 尺度	在宅要介護高齢者の生活 満足度感に影響を及ぼす 環境因子の内容的妥当性 の検討 藪脇健治・他 2006	環境要因の調査票 の測定尺度の開発の ため16項目の内容的 妥当性を判定した	16項目を5件法で評価 ビデオカメラを用い、質的 的データを収集した。	信頼性に触れて いない。	継続研究により、内容 的妥当性が確認され た。

自己実現に関連する高齢者の人間性を正しく把握するには、高齢者の人格、価値観、セクシュアリティ、生きがいなどを尊重することが大切である。高齢者の男女を共にしたフォークダンスクラブが栄え、身だしなみをきれいにして参加するなど、セクシュアリティの要因の1つである異性への関心がアクティビティ活動への参加や生活の張り合いに及ぼす効果は大きい。また、一般社会からエイジズムをなくすことは、高齢者の自己実現に向けた社会的支援体制を構築する大き



な普遍的な課題の1つである。地域の人々に高齢者の社会参加を地域住民の一人として、普通の人と同様に受け入れるよう働きかけることは重要である。

評価者自身の固有の主観や技術により評価されてきた介護技術を、共通因子として「コミュニケーション」などの共通因子を探索し客観的に評価することは、自己実現尺度の開発においても同様な開発手法であり参考となる。生きがい感は、自己実現に非常に近い概念である。高齢者の生きがい感を仮定義し、生きがい感の測定スケールを開発することは、尺度項目の作成が自己実現尺度開発の質問項目の作成の手順として参考となる。

訪問介護の質を測る利用者の視点から捉え評価する利用者満足度尺度の研究は、自己実現尺度開発の質問項目の作成に参考となる。在宅要介護高齢者の生活満足度感に影響を及ぼす環境因子の尺度開発については、環境因子の構成内容が自己実現尺度開発の環境因子の項目内容の検討に参考となる。

わが国の先行研究から得られた要点を次のようにまとめることができる。介護者の介護負担感の少ない状態は、自己実現の概念と共通する要因を持っている。ADLを拡大したIADLの概念の捉え方は、「QOLを拡大した概念が自己実現」につながるという把握の方法と関連性がある。また高齢者の異性感情をプラス思考で配慮した支援方法やエイジズムへの取り組みは、高齢者の自己実現に向けた社会的支援体制を構築するために必要とする内容である。このことは同時に、環境因子として地域活動への参加を可能とする取り組みを推進することにつながる。

こうした生活要因を高齢者が主観的に評価する生きがいや生活の満足度評価の方法は、自己実現を高齢者が主観的に評価する内容や方法に共通する多くの要因が含まれている。これらの最近の尺度開発の研究から、本論文の在宅高齢者の自己実現尺度の開発に特に強い関連性があると思われる5つの尺度研究について、これまでに詳細に報告してきた。

### 第3節 生きがいと自己決定の先行研究

「生きがい」と「自己決定」に関する先行研究を検討し、それぞれの概念について述べる。

生きがいとは、趣味や仕事、子育てなどの生活上の目標を持ち、個人が目標の実現に取り組むことにより喜びあるいは生活の充実感を感じる場合や、家族との人間関係に心のやすらぎや充実感を味わい、生きていることが楽しいと感じる状態である（前田・ほか 1979）。このことは自己実現が持つ一側面と共通している。

また、自己決定は、他者から強制されることなく、自由に自分の意志で行為や行動の方法を選択し、他者の協力を得ながらも、自分で自分の行為や生活を決定することである。このことは自己実現に至るプロセスの初期段階と同様であるといえる。このように生きがいと自己決定は、ともに自己実現の概念を構成する一部を担う要素であるといえる。

本節で参考にした「生きがい」と「自己決定」に関する先行論文は、インターネットで「社会老年学文献データベース」を検索し、社会老年学の論文の一覧から論文の抄録を入手し、引用した。

検索したホームページのURLは、以下の通りである。

[http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji\\_ronbun/meisai.asp](http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji_ronbun/meisai.asp), 2007.11.21

#### 第1項 「生きがい」について

先行研究の調査から「生きがい」の概念について説明する。次の3つの先行研究の内容をもとに、生きがいについて述べる。

##### 第1項の1 前田・ほかの「生きがい」の概念

「生きがい」という概念は、2つの考え方がある。第1は、「個人の心の充実感としての生きがい」である。第2は、「あなたの生きがいは何ですか」という場合の充実感を与える事物としての生きがいである（前田・ほか 1979:20）。

ここでは、第1の生きがいについて述べる。第1の「生きがい」は、「あなたはどのような時に生きがいを感じますか」という表現をする場合であり、「生きていてよかったと感じている心の状態」や「生きていて生活してゆく価値があると考

え、しあわせであると感じている心の状態」という意味である（前田・ほか1979:15）。「生きがいのある生活」とはどのようなことかという場合には「生きがい」という概念について定義しなければならない。前田・ほか（1979:16）は、「生きがい」を「主観的な幸福感」と簡略に定義している。

## 第1項の2 藤原・ほかの「生きがい」の概念

長谷川・ほか（2001:147-170）は、『高齢者の生きがいとその関連要因についての文献的考察』の論文の中で、次のように述べている。「生きがい」を、①生きがいの「対象」、②湧いてくる「対象」への感情、を総合したものとして捉えている。「対象」には、過去の経験、現在の出来事、未来へのイメージが含まれている。一方「伴う感情」には、①自己実現と意欲、②生活充実感、③生きる意欲、④存在感の4つの感情が含まれている。

## 第1項の3 高橋・ほかの「生きがい」の概念

高橋・ほか（1999:109-118）は、『中国における都市高齢者の「生きがい」』の論文の中で、生きがいの対象と生きがい感を区別して捉え、中国の都市高齢者の「生きがい」について次のように述べている。生きがい感は、①よろこび、②満足感、③幸福感、④充実感と深く関連している。そして、中国の都市高齢者の生きがいは、1）仕事を通じての社会的貢献や奉仕、2）伝統的な家族制度における家族・親族との交流と深いかかわりがあることを報告している。

これらの3つの先行研究の共通点として、生きがいとは、「生きていることにしあわせやよろこびを感じ、日々の生活をしていることに充実感を持ち、満足し、幸福な状態にあり、自己実現に向けて生きる意欲が湧いてくる心の状態」とすることができる。

## 第2項 「自己決定」について

「自己決定」の概念を考える場合に、次の2種類の自己決定のあり方が考えられる。まず第1は、「他者からの強制力がなく、自分自身で自由に選択し決定できる」というあり方である。つまり、特定の者から指示や限定された情報が意図的に与えられ、制限を受けた状況の元で自己決定を行うという外的制約の有無を検討する。外的制約がなく、自己決定を取り巻く外的環境が良好に整い、自由に自己決定を行うことができるという自己決定のあり方のことである。

第2は、「自律的に自己決定を行うことに必要な判断能力を保持している」という前提である。自分自身で複数の選択肢の中から自由に選択し、自己決定を行うには、必要とする最低限度の認知能力を保持していなければならない。つまり、自分で他人の意見を求め情報を収集し、多数の情報の中から自由に選択し、自己決定を行うための判断力を保持しているという場合の自己決定のあり方のことである。このことは、知的障害者や認知症高齢者の判断能力が欠けている場合に問題となる。

次に、先行研究の検討から得られた「自己決定」の概念について述べる。3つのそれぞれの先行研究において、自己決定に関する支援を行う場合の重要な諸条件が述べられている。

### 第2項の1 松村・ほか(2001:19-25)の「自己決定」

松村・ほか(2001:19-25)は、『熟練訪問看護者の意思決定の構造』の論文の中で、在宅療養者の自己決定を支えるためには、家族と本人との人間関係の不一致が自己決定を阻害することから、①家族と本人が共に納得できるケアの方向性の提供、②療養者本人の利益の優先の2点が重要であることを述べている。

### 第2項の2 佐藤(1998:96~105)の「自己決定」

佐藤(1998:96~105)は、『在宅療養者の自己決定を支える訪問看護婦の認識と方略』の論文の中で、自己決定の方法として次の7つのカテゴリーがあることを

述べている。①意志や希望を聞く、②動機づけをする、③情報を提供する、④一緒に考える、⑤同意を得る、⑥認める、⑦意欲を引き出す、の7つである。

### 第2項の3 佐瀬(1997:87～96)の「自己決定」

佐瀬(1997:87～96)は、『老人保健施設への入所にかかわる老人の自己決定に関する研究』の論文の中で、次の7つの自己決定のプロセスを説明している。①主体的決定、②与えられた選択に順応、③家族の決定に委託、④家族の決定に忍従、⑤家族の決定に譲歩、⑥決定不能、⑦決定に関与しない=他者決定である。

自己決定の先行研究の数は少なく、また各論文が提示する内容も、援助者側の支援のあり方に関する研究が中心であり、自己決定については今後の研究に期待するところが大きい。

生きがい及び自己決定は、ともにQOLの概念の範疇に含まれている。生きがい及び自己決定はQOLの中で、本人の意志を尊重する社会福祉サービスの質を論じる概念として研究されてきている。現在、介護保険制度に伴う契約制度により、社会福祉サービス利用者の自己選択が重要となり、特に地域福祉権利擁護事業や成年後見制度において、社会福祉サービス利用者の生きがい及び自己決定権は重要性が増してきている。生活満足度の研究と重なる部分があるが、高齢者や障害者の自己決定権は社会福祉の支援方法として大きな柱として、今後の研究への取り組みに期待するところが大きい。

#### (注)

1) 第1節で参考とした「サクセスフル・エイジング」に関する先行論文は、インターネットで「社会老年学文献データベース」を検索し、社会老年学の論文の一覧から「サクセスフル・エイジング」の論文の抄録を入手し、引用した。検索

したホームページの URL を以下に示した。

([http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji\\_ronbun/meisai.asp](http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji_ronbun/meisai.asp), 2007.3.1).

#### 【引用文献】

- 赤嶺依子・萩原明人・興古田孝夫・他 (2001) 「高齢者のセクシュアリティに関する知識と態度の日本語版評価尺度 (ASKA-J) の作成」『老年社会科学』24(1), 71-79.
- Butler, R.N. (1969). Age-ism: Another Form of Bigotry. *The Gerontologist*, (9), 243-246.
- Deyo, R.A., Center, RM. (1986). Assessing the Responsiveness of Functional Scales to Clinical Change: An Analogy to Diagnostic Test Performance. *J Chronic Dis*, 39(11), 897-906.
- Fillenbaum, G.D. (1985). Screening The Elderly: A brief Instrumental activities of daily living measure. *Journal of the American Geriatrics Society*, 33, 698-706.
- 福原俊一 (2004) 『RDQ 日本語版マニュアルー腰痛特異的 QOL』医療文化社, 9.
- 長谷川・藤原佳典・星旦二 (2001) 「高齢者の『生きがい』とその関連要因についての文献的考察」『総合都市研究』(75), 147-170.
- 原田謙・杉澤秀博・杉原陽子・他 (2004) 「日本語版エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成」『老年社会科学』26(3), 308-319.
- 池上直己・福原俊一・下妻晃二郎・他編 (2001) 『臨床のための QOL 評価ハンドブック』医学書院.
- 石橋智昭・西村昌樹・山田ゆかり・他 (1998) 「ADL・IADL からみた日常生活自立度判定基準」『老年社会科学』, 20(1), 42-49.
- 岩谷力・飛松良子 (2005) 『障害と活動測定・評価ハンドブックー機能から QOL まで』南江堂, 17.
- Kopec, JA., Esdaile, JM., Abrahamowicz, M., Abenhaim, L., Wood-Dauphinee, S., Lamping, DL., and Williams, JI. (1996). The Quebec Back Pain Disability Scale. :Conceptualization and development. *Clin Epidemiol*, 49(2), 151-61.

- Lawton, M. P., Brody, E. M. (1969). Assessment of older people: Self-maintaining and instrumental activities of daily living. *The Gerontologist*, 9, 179-186
- 前田大作・浅野仁・谷口和江 (1979) 「老人の主観的幸福感の研究」『社会老年学』(11), 15-31.
- 松本啓子・渡辺文子 (2004) 「後期高齢者の Successful Aging の意味」『日本看護研究学会誌』 27(5), 25-30.
- 小田利勝著 (2004) 『サクセスフル・エイジングの研究』学文社.
- Patrick, D.L., Deyo, R.A., Atlas, S.J., Singer, D. E., Chapin, A., Keller, R. B. (1995). Assessing health-related quality of life in patients with sciatica. *Spine*, 20(17), 899-908, discussion. 1909.
- Roland, M. and Morris, R. (1983). A study of the natural history of back pain Part I :Development of a reliable and sensitive measure of disability in low back. *Spine*, 8(2), 141-144.
- 齋藤圭介・原田和宏・香川幸次郎・他 (2001) 「地域高齢者を対象とした ADL・IADL 統合尺度の構成概念の検討」『老年社会科学』 23(1), 31-39.
- 佐瀬真粧美 (1997) 「老人保健施設への入所にかかわる老人の自己決定に関する研究」『老年看護学』 2(1), 87-96.
- 佐藤富美子 (1998) 「在宅療養者の自己決定を支える訪問看護婦の認識と方略」『日本看護科学学会誌』 18(3), 96-105.
- 高橋龍太郎 (1995) 「精神機能評価法 意欲・モラール・QOL の評価法」『高齢者の生活機能評価ガイド』医歯薬出版, 51-58.
- 高橋勇悦・黒岩亮子 (1999) 「中国における都市高齢者の『生きがい』」『総合都市研究』 (69), 109-118.
- 滝波順子・古谷野亘・石橋智昭・他 (2005) 「介護技術の測定」『老年社会科学』 27(1), 24-33.
- 田崎美弥子・中根允文 (1997) 『WHO/QOL-26 手引』金子書房
- 谷垣静子・黒沢洋一・細田武伸・他 (2005) 『厚生指標』 52(15), 26-30.
- インターネットホームページ URL: 生きがい、自己決定を検索したホームページ  
URL: [http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji\\_ronbun/meisai.asp](http://www2.yume-net.ne.jp/dia/hyouji_ronbun/meisai.asp)

## 目 次

### 第 3 章 予備尺度の作成と自己実現の概念定義

第 1 節	自己実現の概念定義	..... 75
第 2 節	自己実現の構成概念の操作的な仮定義	..... 76
第 1 項	自己実現の構成概念の操作的仮定義の手順	
第 2 項	自己実現の構成概念の大項目、中項目及び小項目	
第 3 節	予備尺度の完成	..... 80
第 1 項	大項目「他者との関係性」について	
第 1 項の 1	「健康な生活」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 1 項の 2	「生活の協力関係」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 1 項の 3	「他者への貢献」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 2 項	大項目「個人の生活」について	
第 1 項の 1	「人間性」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 1 項の 2	「自由な行動」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 1 項の 3	「自律性」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 1 項の 4	「生きている喜び」に所属するキーワード からの質問文の作成	
第 4 節	調査票に採用する質問項目原案文	.....100



### 第3章 予備尺度の作成と自己実現の概念定義

自己実現の測定尺度を開発するには、まず、自己実現とは何かという自己実現の概念を仮に定義することから始まる。次に、自己実現の仮の概念を測定する尺度となる1つ1つの質問項目を作成することとなる。そのため、自己実現関連のキーワードを先行研究から多数抽出し、項目プールを作成する。ここでは、第1章で論じたカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の先行研究及び第2章で論じたサクセスフル・エイジング、QOL、生きがい、自己決定の先行研究及びデンマークでの自己実現先行調査などから自己実現関連のキーワードを抽出した。収集した多数のキーワードを分類し、大・中・小の項目に統合化するプロセスを通じ、自己実現の構成概念の操作的定義を試みた。

また、小項目に分類しまとめたキーワードの中から、測定尺度となる質問項目文を作成した。

#### 第1節 自己実現の概念定義

第1章で論じたカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の先行研究による自己実現の基礎概念及びデンマークでの自己実現先行調査で得られた自己実現生活の実例等を取り入れ、高齢者施設での実務経験から、本論文で筆者が論じる在宅高齢者の自己実現の概念を定義した。つまり自己実現とは「日々の生活の中で、自己の新しい人間の創造を目標とし、他者の協力を得ながら潜在能力を生かし、自己を成長させ、自由に生き生きと意欲的に生きている状態をいい、そのことを通じ他者の幸福に貢献していること」と定義する。

筆者の自己実現の概念の特質は、第1点として個人の日々の生活を中心に捉えていること（高齢者福祉の実務経験から）、第2点は、目標が達成された結果の評価だけではなく、むしろ結果にいたるプロセスの生き方に注目していること、そしてそこに小さな自己実現の存在を認めていること、第3点は個人の成長に留まらず、他者との関係性や他者の幸福に関与していることが条件であること（カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーらの理念）の3点である。

## 第2節 自己実現の構成概念の操作的定義

### 第1項 自己実現の構成概念の操作的仮定義の手順

自己実現の構成概念の操作的定義を行うには、まず自己実現に関連すると思われる先行研究から自己実現に関するキーワードを抽出し、項目プールを作成することとなる。

これまでの第1章で論じたカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の先行研究及びさらに第2章で論じたサクセスフル・エイジング、QOL、生きがい、自己決定の先行研究及びデンマークでの自己実現先行調査、及び筆者が働いていた高齢者施設での実務経験などから自己実現関連のキーワードを抽出し451個の項目プールを作成した(巻末資料6～11 P237～P242)。

作成した項目プールを元に、KJ法により同じ意味を持つ項目の分類整理を繰り返し行い、各領域に名称を付し、領域の名称と所属キーワードを自己実現の概念の構成要素とし、自己実現の構成概念の操作的定義を試みた。

高齢者が自ら人生の目標を選択し設定し、実現していくことを自己実現の概念の基本要素とした。特に、成長、個人の意欲、人生の目標、目標を達成していく過程、他者との互いの協力をキーワードの抽出の基本視点としている。

抽出した項目プールの1つ1つのキーワードをすべてカードに書き出した。次

表3-1-1 中項目7領域の項目名と所属小項目数

	中項目名 (構成概念)	所属する25小項目
1)	健康な生活	3小項目
2)	生活の協力関係	4小項目
3)	他者への愛 (貢献)	3小項目
4)	自由な行動	3小項目
5)	自律性	4小項目
6)	人間性	4小項目
7)	生きている喜び	4小項目

に、カード上に書かれたことばの意味が同じカードをKJ法により1つのグループにまとめ、同一カテゴリーとし、中項目、大項目、小項目の順にカテゴリーと

なる分類を繰り返し行った。(巻末資料 13 参照 P249)

まず、全キーワードを 7 領域に分類し、中項目とした(表 3-1-1 参照)。

中項目の 7 領域の項目名の内容は次のとおりである。1) の「健康な生活」とは、身体的な健康と社会性を保持することをいう。2) の「生活の協力関係」とは、家族、友人、知人との生活上の助け合いの関係のことである。3) の「他者への愛」とは、自分の幸福以外に他者の幸せや幸福に手助けや支援を行うことの意味である。4) の「自由な行動」とは、他者からの強制や命令に本人の行動が制限されていないという内容である。5) の「自律性」とは、自分の判断力に基づく行動により日々の自分の生活を適切に維持・運営することである。6) の「人間性」とは、その人らしい個性的な生き方をすることである。7) の「生きている喜び」とは、創造的な目標に向けて生命感に満ちて充実した生活を送るという意味である。

7 領域とした理由は次の 3 つの理由による。第 1 の理由は、収集した多数のキーワードを分類するには、10 項目以内に収めることが適切であると判断したか

表 3-2-1 個人の生活に所属する中・小項目名

大項目	中項目	小項目
個人の生活	人間性	その人らしさ 趣味の生活 個別性 完全への意志
	自由な行動	選択 自由 人間の存在意義
	自律性	意思の自由 生きる意欲 生き方 強くなる意志
	生きている喜び	生命感 創造性 成長 文化的要素

らである。第 2 の理由は、QOL 尺度の先行研究から、尺度の構成概念の因子数は、標準的に最大 7~8 因子が適切であること。第 3 の理由は、カードを分類整理すると結果として 7~8 グループにまとめられたことである。

次に、KJ法で得られた中項目の7領域から同じカテゴリーと思われる領域をグループ化し、2つのグループに分け、大項目とした。一方の「人間性」「自由な行動」「自律性」「生きている喜び」の4領域が所属するカテゴリーを「個人の生活」と名づけた(表3-2-1)。

また、もう一方の「健康な生活」「生活の協力関係」「他者への愛」の3領域が所属するカテゴリーを「他者との関係性」と名づけた(表3-2-2)。「健康な生活」の領域に社会的な交流を健康の要素として組み入れ、他者との社会的関係を「他者との関係性」と命名した。

これらの7領域の個々の名称の由来は、「自由な行動」及び「自律性」はカント哲学の先行研究の「意志と行為」から、「生きている喜び」はニーチェの実存哲学の先行研究の「生への意志」から、「人間性」はマズローの心理学の先行研究から導き出している。「健康な生活」は、QOLの先行研究から、「生活の協力関係」は、デンマークの先行調査からきている。「他者への愛」はシェーラーの価値倫理学の「愛の作用」及びカント哲学などをヒントとして、名づけている。

表3-2-2 他者との関係性に所属する中・小項目名

大項目	中項目	小項目
他者との関係性	健康な生活	社会的要因 心理的健康 健康な生活
	生活の協力関係	配偶者 家族 友人 知人・他人
	他者への愛	自分の幸福 人間愛 文化的要素

こうして収集したキーワードをKJ法により、大項目、中項目、小項目と順次分類する作業を通して、自己実現の構成概念の操作的定義を試みた。

つまり、自己実現の構成概念は、『「個人の生活」と「他者との関係性」の2つの上位概念から構成され、上位概念の「個人の生活」には「人間性」「自由な行動」「自律性」「生きている喜び」の4つの下位概念が所属し、上位概念の「他者との関係性」には「健康な生活」「生活の協力関係」「他者への愛」の3つの下位

概念が所属している』、と操作的に仮定義することができる。

## 第2項 自己実現の構成概念の大項目、中項目及び小項目

7領域の全キーワードを整理し、否定語や、不適切な表現のキーワードを削除し、フィールド調査を行う質問項目に重要なキーワードを残した。7領域の中項目を、さらに表現が似ているキーワードを同一カテゴリに分類し、各中領域を3～4個の小項目に分類した。

最終的に、自己実現の項目プールを整理し重要と思われるキーワードを選択し残した。結果として111個のキーワードを残し、25種類の小項目に分類した。各小項目に所属するキーワードが示している特性に応じ、操作的に小項目に名称を付した。(表3-2-1・-2)

小項目への分類は、3つの条件に従い行った。第1の条件は、1つの中項目に所属する小項目数を3～4個とした。第2の条件は、1つの小項目に所属するキーワードの数を10個までとした。第3の条件は、各小項目には調査票の質問項目にふさわしいと思われるキーワードを残し、他のキーワードは削除した。

大項目「個人の生活」に所属する中項目及び小項目とした項目名を、表3-2-1に示した。大項目「個人の生活」には、4つの中項目「人間性」、「自由な行動」、「自律性」、「生きている喜び」が所属し、15個の小項目から構成されている。これまでの項目分類を整理すると、自己実現構成概念は、2つの大項目、7つの中項目、25個の小項目から構成されている。

大項目の1つである「他者との関係性」に所属する中項目及び小項目の項目名を、表3-2-2に示した。大項目「他者との関係性」には、3つの中項目「健康な生活」、「生活の協力関係」、「他者への愛」が所属し、10個の小項目から構成されている。

### 第3節 予備尺度の完成

カテゴリー別に、各小項目に所属するキーワードから質問項目文を作成した。

#### 第1項 大項目「他者との関係性」について

大項目「他者との関係性」には、3つの中項目「健康な生活」、「生活の協力関係」、「他者への愛」が所属している。中項目別に所属する各小項目のキーワードからの質問項目文の作成手順を説明する。

##### 第1項1 中項目「健康な生活」に所属するキーワードからの質問文の作成

中項目「健康な生活」には、3つの小項目「社会的要因」、「心理的健康」、「健康な生活」が所属している。(表3-2-2)

##### 第1項1の1 「社会的要因」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「社会的要因」に所属する5つのキーワードを表3-3-1に示した。

表3-3-1 小項目「社会的要因」に所属のキーワード

	キーワード
社会的要因	社会的要因
	社会参加活動
	周囲を幸せにする
	社会生活行動
	社会的適応の場

「社会的要因」に所属する5つのキーワード「1. 社会的要因、2. 社会参加活動、3. 周囲を幸せにする、4. 社会生活行動、5. 社会的適応の場」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目として、11質問文(巻末資料12表3-1)を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 周囲の人が幸せになるために何か手助けをしていますか

- (2) 地域活動や交流の場に参加することを希望していますか
- (3) 社会的な集まりの場に参加していますか

### 第1項1の2 「心理的健康」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「心理的健康」に所属する5つのキーワードを表3-3-2 に示した。

表3-3-2 小項目「心理的健康」に所属のキーワード

	キーワード
理 的 健	生活を楽しむことができる 健康な成長 知的能動性 不健康な精神でないもの やりたい余暇の活動を行うのに支障を感じる

「心理的健康」に所属する5つのキーワード「1. 生活を楽しむことができる、2. 健康な成長、3. 知的能動性、4. 不健康な精神でないもの、5. やりたい余暇の活動を行うのに支障を感じる」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、健康な生活の心理的健康に関する文章化を検討したが、結論として、心の健康の項目は多要因が関連するため、複雑にならないよう自己実現の概念に含めないことが適切であると判断し、質問文の文章化を行わないこととした。よって、小項目は、25から24小項目に減少した。

### 第1項1の3 「健康な生活」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「健康な生活」に所属する4つのキーワードを表3-3-3 に示した。

表 3 - 3 - 3 小項目「健康な生活」に所属のキーワード

	キーワード
康 な 生 活	健康志向意欲 主観的健康感 いつも余暇を楽しんでいる 健康という生命価値

「健康な生活」に所属する4つのキーワード「1. 健康志向意欲、2. 主観的健康感、3. いつも余暇を楽しんでいる、4. 健康という生命価値」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、6個の質問文（巻末資料12表3-2）を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 毎日の生活の中で楽しいことがありますか
- (2) 現在、何か余暇活動をしていますか
- (3) 人との出会いは、楽しいと思いますか

## 第1項2 「生活の協力関係」に所属のキーワードからの質問文の作成

中項目「生活の協力関係」には、4つの小項目「配偶者」、「家族」、「友人」、「知人・他人」が所属している。（表3-2-2）

### 第1項2の1 「配偶者」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「配偶者」に所属する3つのキーワードを表3-3-4に示した。

「配偶者」に所属の3つのキーワード「1. 日常的な夫婦間の情緒、2. 夫の満足度、3. 配偶者満足度」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、3個の質問文（巻末資料12表3-3）を作成し、次の3質問文を採用した。



表 3 - 3 - 4 小項目「配偶者」に所属のキーワード

	キーワード
偶 者	日常的な夫婦間の情緒 夫の満足度 配偶者満足度

- (1) 配偶者からの協力が得られますか
- (2) 配偶者と生活を助け合っていますか
- (3) 配偶者に配慮していますか

## 第1項2の2 「家族」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「家族」に所属する3つのキーワードを表 3 - 3 - 5 に示した。

表 3 - 3 - 5 小項目「家族」に所属のキーワード

	キーワード
族	家族を親密に感じる 家族による支援 家族と一緒にいる時間

「家族」に所属の3つのキーワード「1. 家族を親密に感じる、2. 家族による支援、3. 家族と一緒にいる時間」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査文の候補として、5個の質問文（巻末資料12 表3-4）を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 毎日、家族と食事をともにしていますか
- (2) 自分の人生を犠牲にせずに、家族の幸せを配慮していますか
- (3) 家族の方の考えを尊重して、生活していますか

### 第1項2の3 「友人」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「友人」に所属する4つのキーワードを表3-3-6 に示した。

表3-3-6 小項目「友人」に所属のキーワード

	キーワード
人	友人からの助け 友人と一緒にいる時間 一緒に外出する 電話をする

「友人」に所属の4つのキーワード「1. 家族を親密に感じる、2. 家族による支援、3. 家族と一緒にいる時間、4. 電話をする」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、4個の質問文（巻末資料13-3-5）を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 日常生活で困った時に、助けをお願いできる友人がいますか
- (2) 最近、友人に何回くらい電話をしましたか
- (3) 最近、友人と会って一緒に過ごす時が、ありましたか

### 第1項2の4 「知人・他人」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「知人・他人」に所属する4つのキーワードを表3-3-7 に示した。

表3-3-7 小項目「知人・他人」に所属のキーワード

	キーワード
人 . 他	お祭りや集会への参加 他人の自分への反応 社会生活機能 付き合いの会合に出席したか

「知人・他人」に所属の4つのキーワード「1. お祭りや集会への参加、2. 他人の自分への反応、3. 社会生活機能、4. 付き合いの会合に出席したか」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、7個の質問文(巻末資料13 表3-6)を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 近所の人との付き合いがありますか
- (2) 地域の人との付き合いがありますか
- (3) 何かを目的とした、集まりに参加することがありますか

### 第1項3 「他者への愛」に所属するキーワードからの質問文の作成

中項目「他者への愛」には、3つの小項目「自分の幸福」、「人間愛」、「文化的要素」が所属している。(表3-2-1)

#### 第1項3の1 「自分の幸福」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「自分の幸福」に所属する3つのキーワードを表3-3-8 に示した。

表3-3-8 小項目「自分の幸福」に所属のキーワード

	キーワード
分	自分の傾向性や必需が全部充足
の	自分が幸福になる
幸	幸福促進の必然性

「自分の幸福」に所属する3つのキーワード「1. 自分の必需や傾向性が全部充足、2. 自分が幸福になる、3. 幸福促進の必然性」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、8個の質問文(巻末資料13 表3-7)を作成し、次の3質問文を採用した。

- (1) 自分の幸福な生活を希望していますか

- (2) 自分には、幸せな暮らしはあまり縁がないと思いますか
- (3) 自分らしい生活が送れていると思いますか

### 第1項3の2 「人間愛」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「人間愛」に所属する4つのキーワードを表3-3-9 に示した。

「人間愛」に所属する4つのキーワード「1. 愛は人格の最も純粋な作用、2. 人間の愛と憎しみ（精神的価値）、3. 自分が幸福になるための手段、4. 愛の

表3-3-9 小項目「人間愛」に所属のキーワード

	キーワード
人間愛	愛は人格の最も純粋な作用 人間の愛と憎しみ（精神的価値） 自分が幸福になるための手段 愛の作用

作用から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、8個の質問文（巻末資料13 表3-8）を作成し、次の4質問文を採用した。

- 1) 他人の幸せや幸福を希望しますか
- 2) 周りの人が幸福になることを望んでいますか
- 3) 他人が幸福になることに何か手を差し伸べたいですか
- 4) 人々が心安らぐことをなにかしていますか

### 第1項3の3 「文化的要素」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「文化的要素」に所属する3つのキーワードを表3-3-10 に示した。

表 3 - 3 - 10 小項目「文化的要素」に所属のキーワード

	キーワード
化 的 要	生命価値を高める
	分割できない高い価値
	美しいものには可分性はない
	芸術は生命感情を高める

「文化的要素」に所属する4つのキーワード「1. 生命価値を高める、2. 分割できない高い価値、3. 美しいものには可分性はない、4. 芸術は生命感情を高める」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、10個の質問文（巻末資料14表3-9）を作成し、本論分の調査の質問文の候補として重要であると判断した次の1質問文だけを採用した。

- 1) 絵葉書を上手に作ることができますか。

## 第2項 大項目「個人の生活」について

大項目「個人の生活」には、4つの中項目「人間性」、「自由な行動」、「自律性」、「生きている喜び」が所属している。4つの中項目別に所属する各小項目のキーワードからの質問項目文の作成手順を説明する。

### 第2項1 中項目「人間性」に所属するキーワードからの質問文の作成

中項目「人間性」には、4つの小項目「その人らしさ」、「趣味の生活」、「個別性」、「完全への意志」が所属している。（表3-2-1）

#### 第2項1の1 「その人らしさ」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「その人らしさ」に所属する5つのキーワードを表3-3-11に示した。

「その人らしさ」に所属する5つのキーワード「1. 充実した生活、2. 真にありのままの自己になる、3. 創作の喜び、4. 落ち着いて穏やかな気分、

表3-3-11 小項目「その人らしさ」所属のキーワード

	キーワード
の 人ら しさ	充実した生活 真にありのままの自己になる 創作の喜び 落ち着いて穏やかな気分 人生の目的

5. 人生の目的」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として、11個の質問文（巻末資料14表3-10）を作成し、次の7質問文を採用した。

- (1) 自分らしい生活を送ることができていると思いますか
- (2) 自分らしい個性的な生活を送っていますか
- (3) 自分らしい能力や持ち味が生かされていますか
- (4) 自分らしい人生を送りたいと思いますか
- (5) 自分らしい個性的な生活を送るのに無理がありますか
- (6) 自分らしい生活習慣を営んでいますか。
- (7) 自分の良いところを生かした生活をしていますか

## 第2項1の2 「趣味の生活」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「趣味の生活」に所属する4つのキーワードを表3-3-12に示した。「趣味の生活」に所属する4つのキーワード「1. 充実した生活、2. 真にありのままの自己になる、3. 創作の喜び、4. 落ち着いて穏やかな気分、」から、

在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として5個の質問文を作成した。

表3-3-12 小項目「趣味の生活」に所属のキーワード

	キーワード
味 の 生	余暇活動 日常生活習慣 キャンプ 活動的日常生活

5個の質問文の中から、本論分の調査の質問文の候補として重要であると判断し、5質問文すべてを採用した。採用した5質問文を次に示した。

採用の判断基準は、「趣味の生活」とは、生活の中に趣味を組み入れ、活動的に生活していると判断したことである。

- (1) 生活サイクルの中で、趣味活動が行なわれていますか
- (2) 自分の好きな趣味や活動を行っていますか
- (3) 趣味が生活の負担になっていると思いますか
- (4) 今の生活では、特に趣味は必要ないと思いますか
- (5) 自分に合った趣味や交流などの活動をしていますか

### 第2項1の3 「個別性」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「個別性」に所属する4つのキーワードとその出典元を表3-3-13に示した。

表3-3-13 小項目「個別性」に所属のキーワード

	キーワード
別 性	個別的対応課題 特性に合わせた活動 個別対応 車椅子で宿泊

「個別性」に所属する4つのキーワード「1. 個別的対応課題、2. 特性に合わせた活動、3. 個別対応 4. 車椅子で宿泊」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として5個の質問文（巻末資料14表3-11）を作成し、重要であると判断した1質問文を採用とした。

- 1) 個人的な生活目標を持っていますか。

## 第2項1の4 「完全への意志」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「趣味の生活」に所属する4つのキーワードを表3-3-14に示した。

「完全への意志」に所属する4つのキーワード及び文章の「1. 完全になろうとする素質は、人間性の自然な目的の一部である、2. 自分の行為に責任を持つ、3. 他人の幸福を望む、4. 人間性のうちには完全になろうとする素質がある」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として7個の質問文（巻末資料14表3-12）を作成し、次の2質問文を採用とした。

表3-3-14 小項目「完全への意志」に所属のキーワード

	キーワード
全 へ の 意	実践的意味の完全性の概念は、人間の性質としてある目的に役立つことである 自分の行為に責任を持つ 他人の幸福を望む 人間の理性のうちには完全になろうとする性質がある

- (1) 人間らしい成長を希望しますか
- (2) 人間らしい生活を希望しますか

## 第2項2 中項目「自由な行動」に所属するキーワードからの質問文の作成



中項目「自由な行動」には、3つの小項目「選択」、「自由」、「人間の存在意義」が所属している。(表3-2-1)

## 第2項2の1 「選択」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「選択」に所属する5つのキーワードを表3-3-15 に示した。

表3-3-15 小項目「選択」所属のキーワード

	キーワード
択	人格の本質は選択意志の自由 選ぶ福祉 Aの代わりに選択できる 選択意志 内部で自己理解が起こり、それは情動的である

「選択」に所属する5つのキーワード「1. 人格の本質は選択意志の自由、2. 選ぶ福祉、3. Aの代わりに選択できる、4. 選択意志、5. 内部で自己理解が起こり、それは情動的である」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として5個の質問文(巻末資料15 表3-13)を作成し、次の4質問文を採用とした。

- (1) 今の生活はご自分の意志で選んで送っていますか
- (2) ご自分で住む場所を選びましたか
- (3) 老後の世話をしていただく人を自分で選ぶことができますか
- (4) あなたの今の生活はだれが選びましたか

## 第2項2の2 「自由」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「自由」に所属する6つのキーワードを表3-3-16 に示した。

「自由」に所属する6つのキーワード「1. 自由で強制がない、2. 自由な選択意志、3. 別様に為しえない、4. 実践的自由、5. 意志の行為への自由、

6. 「自由に行動」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として9個の質問文(巻末資料15 表3-14)を作成し、次の4質問文を採用とした。

表3-3-16 小項目「自由」所属のキーワード

	キーワード
由	自由で強制がない 自由な選択意志 別様に為しえない 実践的自由 意志の行為への自由 自由に行動

- (1) 自分の意志で自由に生活を決めていますか
- (2) だれかに相談してから決めていますか
- (3) あなたの意志で自由に行動することが許されていますか
- (4) 誰にも気兼ねせずに自由に外出できますか

### 第2項2の3 「人間の存在意義」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「人間の存在意義」に所属する5つのキーワードを表3-3-17 に示した。

表3-3-17 小項目「人間の存在意義」所属のキーワード

	キーワード
人間の存在	人間はそれ自身が目的自体として実在する 生はもっとも固有の内面的な本質からして上昇である 生は一定の方向へ生成していく 自己超克 現実存在の自己の価値

「人間の存在意義」に所属する5つのキーワード「1. 人間はそれ自身が目的自

体として実在する、2. 生はもっとも固有の内面的な本質からして上昇である、3. 生は一定の方向へ生成していく、4. 自己超克、5. 現実存在の自己の価値」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として5個の質問文（巻末資料15 表1-15）を作成し、次の4質問文を採用とした。

- (1) あなたは、自分が生きていることに大切な意味があると思いますか
- (2) より大きな人間になろうと思いますか
- (3) これから、自分の生活を高めて(広げて)いきたいですか
- (4) あなたは、よりよい自分になるために努力をしていますか

### 第2項3 中項目「自律性」に所属するキーワードからの質問文の作成

中項目「自律性」には、4つの小項目「意志の自由」、「生きる意欲」、「生き方」、「強くなる意志」が所属している。（表3-2-1）

#### 第2項3の1 「意志の自由」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「意志の自由」に所属する5つのキーワードを表3-3-18 に示した。

表3-3-18 小項目「意志の自由」に所属のキーワード

	キーワード
志 の 自 由	充実した生活 表情が生き生きしている 希望 楽しいと感じる よろこび、満足

「意志の自由」に所属の5つキーワード「1. 充実した生活、2. 表情が生き生きしている、3. 希望、4. 楽しいと感じる、5. よろこび、満足」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として8個の質問文（巻末資料15 表3-16）を作成し、次の3質問文を採用とした。

- (1) あなたは、自分が自律していると思いますか
- (2) あなたは、周りの人々から自律していると思いますか
- (3) 自分自身で問題の解決に取り組めますか

### 第2項3の2 「生きる意欲」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「生きる意欲」に所属する5つのキーワードを表3-3-19 に示した。

表3-3-19 小項目「生きる意欲」に所属のキーワード

	キーワード
き る 意	前向きな心構え
	自分も意欲できる
	毎日することがたくさんある
	主体的な原理に従って行為する

「生きる意欲」に所属の5つのキーワード「1. 前向きな心構え、2. 自分も意欲できる、3. 毎日することがたくさんある、4. 主体的な原理に従って行為する」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として8個の質問文（巻末資料15 表3-17）を作成し、次の4質問文を採用とした。

- (1) 毎日することがたくさんありますか
- (2) 求めているものがたくさんありますか
- (3) 毎日の生活を意欲的に生きていますか
- (4) 活動的な生活をしていますか

### 第2項3の3 「生き方」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「生き方」に所属する5つのキーワードを表3-3-20 に示した。

表 3 - 3 - 20 小項目「生き方」に所属のキーワード

	キーワード
生 き 方	楽しく苦勞する 人生に対する前向きな気持ち 力にあふれている 人間は主体的な価値を持っている 自分自身で問題の解決ができる

「生き方」に所属の5つのキーワード「1. 楽しく苦勞する、2. 人生に対する前向きな気持ち、3. 力にあふれている、4. 人間は主体的な価値を持っている、5. 自分自身で問題の解決ができる」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として6個の質問文（巻末資料16 表3-18）を作成し、次の2質問文を採用とした。

- (1) 行動には、自分でリスクを背負う覚悟でいますか
- (2) 自分の話したことに責任を持つつもりでいますか

#### 第2項3の4 「強くなる意志」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「強くなる意志」に所属する5つのキーワードを表3-3-21に示した。「強くなる意志」に所属の5つのキーワード「1. より大きく、より強くなるうとする意志だけが唯一の实在、2. 意志への意志であってはじめて意志に値する、3. 意志を持っている態度や行動、4. 行為はそれ自体が意志において必然的である、5. 生そのものが「権力への意志」である」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として7個の質問文（巻末資料16 表3-19）を作成し、次の2質問文を採用とした。

表 3 - 3 - 21 小項目「強くなる意志」に所属のキーワード

	キーワード
く な る 意 志	より大きく、より強くなろうとする意志だけが唯一の实在 意志への意志であってはじめて意志に値する 意志を持っている態度や行動 行為はそれ自体が意志において必然的である 「権力への意志」としての「生」という概念

- (1) 自分の意志を態度や行動に表していますか
- (2) 自分の気持ちや意志を表現していますか

#### 第2項4 「生きている喜び」に所属するキーワードからの質問文の作成

中項目「生きている喜び」には、4つの小項目「生命感」、「創造性」、「成長」、「目標の達成」が所属している。(表3-2-1)

##### 第2項4の1 「生命感」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「生命感」に所属する5つのキーワードを表3-3-22に示した。

表 3 - 3 - 22 小項目「生命感」に所属のキーワード

	キーワード
命 感	充実した生活 表情が生き生きしている 希望 楽しいと感じる よろこび、満足

「生命感」に所属の5つのキーワード「1. 充実した生活、2. 表情が生き生きしている、3. 希望、4. 楽しいと感じる、5. よろこび、満足」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として7個の質問文（巻末資料16表3-20）を作成し、次の2質問文を採用とした。

- (1) あなたの生活は、生き生きとしていますか
- (2) 毎日の生活が充実していますか

## 第2項4の2 「創造性」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「創造性」に所属する5つのキーワードを表3-3-23に示した。

表3-3-23 小項目「創造性」に所属のキーワード

	キーワード
造 性	創造的生活
	潜在的能力や可能性の実現
	人間の努力
	表現力
	創造的目的

「創造性」に所属の5つのキーワード「1. 創造的生活、2. 潜在的能力や可能性の実現、3. 人間の努力、4. 表現力、5. 創造的目的」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として7個の質問文(巻末資料17表3-21)を作成し、次の3質問文を採用とした。

- (1) 自分の可能性を高めたいと思いますか
- (2) あなたは、将来に希望を持っていますか
- (3) これから新しい生活を始めたいと思いますか

### 第2項4の3 「成長」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「成長」に所属する6つのキーワードを表3-3-24に示した。

表3-3-24 小項目「成長」に所属のキーワード

	キーワード
長	自己実現への成長 完全に働く 人間の本質に属している意図 人間性や個人の本質を活用する 精神的な自己を受け入れる 自らが目標を設定

「成長」に所属の6つのキーワード「1. 自己実現への成長、2. 完全に働く、3. 人間の本質に属している意図、4. 人間性や個人の本質を活用する、5. 精神的な自己を受け入れる、6. 自らが目標を設定」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として7個の質問文（巻末資料17表3-22）を作成し、次の3質問文を採用とした。

- (1) 自分の夢の実現に向けて成長していますか
- (2) 自己の人間的成長に向けた目標がありますか
- (3) 自分の持つ個性や適性を生かしていますか

### 第2項4の4 「目標の達成」に所属するキーワードからの質問文の作成

小項目「目標の達成」に所属する4つのキーワードを表3-3-25に示した。

「目標の達成」に所属の4つのキーワード「1. 個人が目標を達成していく過程、2. 目標の適正化への課題、3. 人生における目標、4. 人間が本来の自己になる時、自己の内面のメッセージを聞く」から、在宅高齢者への自己実現に関する調査項目文の候補として6つの質問文（巻末資料17表3-23）を作成



し、次の2質問文を採用とした。

表3-3-25 小項目「目標の達成」に所属のキーワード

	キーワード
標 の 達 成	個人が目標を達成していく過程 目標の適正化への課題 人生における目標 人間が本来の自己になる時、自己の内面の メッセージを聞く

「目標の達成」の意味を、人生の目標や生活の中の目標を立て実現していくことであると判断し、次の2質問文を採用した。

- (1) 自己の人的成長に向けた目標がありますか
- (2) 自分の心の中の希望を実現したいですか

## 第4節 調査票に採用する74質問項目原案文

前節で最終的に25小項目にまとめられた111個のキーワードから、作成した調査質問項目の74原案文をすべて一覧表としてまとめた。カント、ニーチェ、マスロー、M・シェーラーの4人の哲学、心理学、価値倫理学を基本原則とした自己実現調査項目となる質問項目の最終原案文を次に示した。(表3-4-1)

表3-4-1 74質問項目原案文

1. 周囲の人が幸せになるために何か手助けをしていますか。
2. 地域活動や交流の場に参加することを希望していますか。
3. 社会的な集まりの場に参加していますか。
4. 毎日の生活の中で楽しいことがありますか。
5. 現在、何か余暇活動をしていますか。
6. 人との出会いは、楽しいと思いますか。
7. 配偶者からの協力が得られますか。
8. 配偶者と生活を助け合っていますか。
9. 配偶者に配慮していますか。
10. 毎日、家族と食事をともにしていますか。
11. 自分の人生を犠牲にせずに、家族の幸せを配慮していますか。
12. 家族の方の考えを尊重して、生活していますか。
13. 日常生活で困った時に、助けをお願いできる友人がいますか。
14. 最近、友人に何回くらい電話をしましたか。
15. 最近、友人と会って一緒に過ごす時間が、ありましたか。
16. 近所の人との付き合いがありますか。
17. 地域の人との付き合いがありますか。
18. 何かの目的とした、集まりに参加することがありますか。
19. 自分の幸福な生活を希望していますか。
20. 自分には、幸せな暮らしはあまり縁がないと思いますか。
  
21. 自分らしい生活が送れていると思いますか。
22. 他人の幸せや幸福を希望しますか。
23. 周りの人が幸福になることを望んでいますか。
24. 他人が幸福になることに何か手を差し伸べたいですか。
25. 人々が心安らぐことをなにかしていますか。
26. 絵葉書を上手に作るができますか。
27. 自分らしい生活が送れていると思いますか。
28. 自分らしい個性的な生活を送っていますか。
29. 自分らしい能力や持ち味が生かしていますか。
30. 自分らしい人生を送りたいと思いますか。
31. 自分らしい個性的な生活を送るのに無理がありますか。
32. 自分らしい生活習慣を営んでいますか。送っていますか。
33. 自分の良いところを生かした生活をしていますか。
34. 生活サイクルの中で、趣味活動が行なわれていますか。
35. ご自分の好きな趣味や活動を行っていますか。

36. 趣味が生活の負担になっていると思いますか。
37. 今の生活では、特に趣味は必要ないと思いますか。
38. 自分に合った趣味や交流などの活動をしていますか。
39. 個人的な生活目標を持っていますか。
40. 人間らしい成長を希望しますか。
41. 人間らしい生活を希望しますか。
42. 今の生活はご自分の意志で選んで送っていますか。
43. 自分で住む場所を選びましたか。
44. 老後の世話をしていただく人を自分で選ぶことができますか。
45. あなたの今の生活はだれが選びましたか。
46. 自分の意志で自由に生活を決めていますか。
47. だれかに相談してから決めていますか。
48. あなたの意志で自由に行動することが許されていますか。
49. 誰にも気兼ねせずに自由に外出できますか。
50. あなたは、自分が生きていることに大切な意味があると思いますか。
51. より大きな人間になろうと思いますか。
52. これから、自分の生活を高めて（広げて）いきたいですか。
53. あなたは、よりよい自分になるために努力していますか。
54. あなたは、ご自分が自律していると思いますか。
55. あなたは、周りの人々から自律していると思いますか。
56. 自分自身で問題の解決に取り組みますか。
57. 毎日することがたくさんありますか。
58. 求めているものがたくさんありますか。
59. 毎日の生活を意欲的に生きていますか。
60. 活動的な生活をしていますか。
  
61. 行動には、自分でリスクを背負う覚悟でいますか。
62. 自分の話したことに責任を持つつもりでいますか。
63. 自分の意志を態度や行動に表していますか。
64. 自分の気持ちや意志を表現していますか。
65. あなたの生活は、生き生きとしていると思いますか。
66. 毎日の生活が充実していると思いますか。
67. 自分の可能性を高めたいと思いますか。
68. あなたは、将来に希望を持っていますか。
69. これから新しい生活を始めたいと思いますか。
70. 自分の夢の実現に向けて成長していますか。
71. 自己の人間的成長に向けた目標がありますか。
72. 自分の持つ個性や適性を生かしていますか。
73. 自己の人間的成長に向けた目標がありますか。
74. 自分の心の中の希望を実現したいですか。

以上が調査質問項目となる最初の 74 原案文である。

## 目 次

### 第4章 プリテストの準備と実施

第1節	調査項目の選定準備	103
第2節	自己実現尺度構成の予測	104
第3節	質問項目の抽出	106
第4節	プリテスト調査票の作成	108
第5節	プリテストの方法	109
第6節	基本属性の調査結果	110
第7節	質問項目の削減方法	111
第1項	ワーディング検討会による項目削除	
第2項	選択された32質問項目	
第8節	信頼性分析による項目選定	113
第1項	選定のための項目分析	
第2項	25項目からの項目分析	
第9節	因子分析による項目選定の確認	116

## 第4章 プリテストの準備と実施

本章では、プリテストに先行し実施した事前準備及びプリテストの実施内容とその結果について説明する。

プリテストは、趣旨説明文を同封した書面による質問票の郵送調査法によって実施した。回収した調査票の内、有効回答数42のデータを分析し、本調査用の24質問項目を選定した。

### 第1節 調査項目の選定準備

プリテストを実施する前に、C市の老人クラブに所属する3人の高齢者を対象にヒヤリングを行い、原案である74質問項目の必要性和各質問項目の文章表現の適正を評価し、その結果から63質問項目に削減した。

こうして採用された63項目の質問項目について、その後さらにデイサービスセンター利用者11人、福祉系大学教員1人、社会福祉士1人を対象に、3回の事前予備テストを実施した。

まず、東京都23区内の特別養護老人ホーム併設のデイサービスセンターの利用者11人を対象とした事前予備テストでは、実施前に施設職員に対して、手調査票の配布と質問票への回答の仕方の説明を依頼した。約2週間後に調査者がデイサービスセンターを訪問し、会議室で回答者11名と一同に会し、答えにくい質問、わかりにくい質問文など、質問項目に関してのインタビューを行った。その結果から、63質問項目の改善を行った。

続いて行った福祉系大学教員と社会福祉士への事前予備テストでは、1対1の面接形式をとり、各々約3時間のインタビューを行った。老人クラブの高齢者への予備テスト及び3回の事前予備テストの概要を表4-1にまとめて説明した。

表4-1 予備テスト検討会（事前ワーディング）

	対象者	場所	実施日	人数
1	老人クラブ	茅ヶ崎	2004年12月27日	3人（男1人、女2人）
2	デイサービス	東京	2005年03月20日	11人（男4人、女7人）
3	大学教員	平塚	2005年08月11日	1人（女59歳）
4	社会福祉士	東京	2005年08月04日	1人（男68歳）

## 第2節 自己実現の尺度構造の予測

本節では、自己実現に隣接するQOL等の尺度開発の先行研究を調査し、因子の数、下位尺度の数、項目数などの適正な尺度構造の枠組みについて予測した。

QOLに関する尺度は、既に適用分野別に多数の尺度が開発されている。「自己実現」尺度の開発に関連が深いと思われる主なQOL尺度の構造を調査した。

池上・ほか(2001:34-7)は、米国で開発された「QOL健康プロファイル型包括的尺度SF36」は、①身体機能と②日常役割機能(身体)の2因子及び8下位尺度36項目から構成されていることを報告している。

金子(1997)は、世界保健機構(World Health Organization:WHO)が開発した「短縮版WHOQOL-BREF」は26項目から構成され、信頼性・妥当性の検証が行われていると述べている。

池上・ほか(2001:46)は、「健康水準に関するQOL尺度EuroQOL(EQ-5D)5項目法は、健康状態を5つの次元に分解し、各項目を3段階に分けて評価」していることを報告している。

池上・ほか(2001:46)は、カナダでの一般住民調査から開発された、「Health Utilities Index(HUI)MarkIII」について8領域(視覚、聴覚、発話、意欲、痛み、移動、手先の使用、認知)に関する12設問から構成される尺度であると報告している。

英国のZigmond(1983)らが開発した、「うつ精神疾患の生活関連のQOL尺度Hospital Anxiety Depression Scale(HADS)」について、池上・ほか(2001:108-09)は、「不安度」と「抑うつ度」の2つの下位尺度と14質問項目から構成され、各下位尺度は7質問項目が所属していることを報告している。

健康に関する個人のQOL尺度の1つである米国で開発された「PGCモラールスケール(主観的幸福感)」は、Lawton(1975)らが開発し、17質問項目(改訂版)による3領域、すなわち「満足感をもっている」「安定した居場所がある」「老いていく自分を受容している」から構成され、回答は、「はい」、「いいえ」、「わからない」の3段階で評価されている(前田・ほか1979;小澤・ほか1999:53)。

これらの、QOL関連の尺度の分析結果から、尺度は因子数が2~8個、質問

項目数が概ね10から25項目の範囲で開発されることが現実的に妥当であるといえることが確認された。

これらの結果から、本論文で開発する自己実現尺度は、3～7領域、15～20質問項目の尺度構成とすることが現実的に妥当で使用可能な尺度となることが予測される。

### 第3節 質問項目の抽出

プリテストの調査項目数が必要以上に多くなると回収率の低下を招くため、尺度項目数を自己実現調査に必要で十分な適切な項目数に絞り込むことが重要となる。本研究のプリテスト調査の質問項目数は、目標数を概ね50質問項目とした。

第1節で述べたように、事前予備テストでは、表面的妥当性の観点から、選定した63質問項目について文章表現を項目ごとに吟味し、必要な場合は修正を加え、また特に重要性が低いと思われる質問項目は、調査項目から削除した。

たとえば、「配偶者」ということばは、単身者や寡婦、鰥夫または高齢者が解答に際し、自分に問われているかどうか判断に迷うことが予測されるため使用を避け、回答者の全員が迷わずに回答できるよう「家族や他の人」と表現した。

「心の健康」は、回答者が認知症や精神的疾患の質問だと判断する可能性があるため、本調査の項目から除外した。心の強い繋がりがあることを意味する「友人」という言葉は、高齢者にとって現実的でないとの意見から、「知人」に置き換えて質問文を作成した。

このような方針に従い、63質問項目の表現を1項目ごとに丁寧に吟味し、特定の概念を持つステレオタイプの表現や類似した質問項目、内容が重複した質問、2つの回答を同時に求めるダブルバーレル質問とならないよう修正又は削除した。

また、文字を大きく読みやすくし、哲学や心理学の抽象的な専門用語を簡潔な日常用語で置き換え表現し、平易で理解しやすい文章に変更した。

このような作業を慎重に行い、最終的に、プリテスト調査票の質問項目として50項目を選定した。

自己実現に関する「50」の項目を基本とした自己実現の構成概念の枠組みを、図4-3-1に示した。大項目は、「他者との関係性」、「個人の生活」の2つのカテゴリとした。中項目は、「健康な生活」、「生活の協力関係」、「他者への愛」、「人間性」、「自由な行動」、「自律性」、「生きている喜び」の7つのカテゴリとした。小項目は22項目とし、「自己実現」の下位概念を構成している。



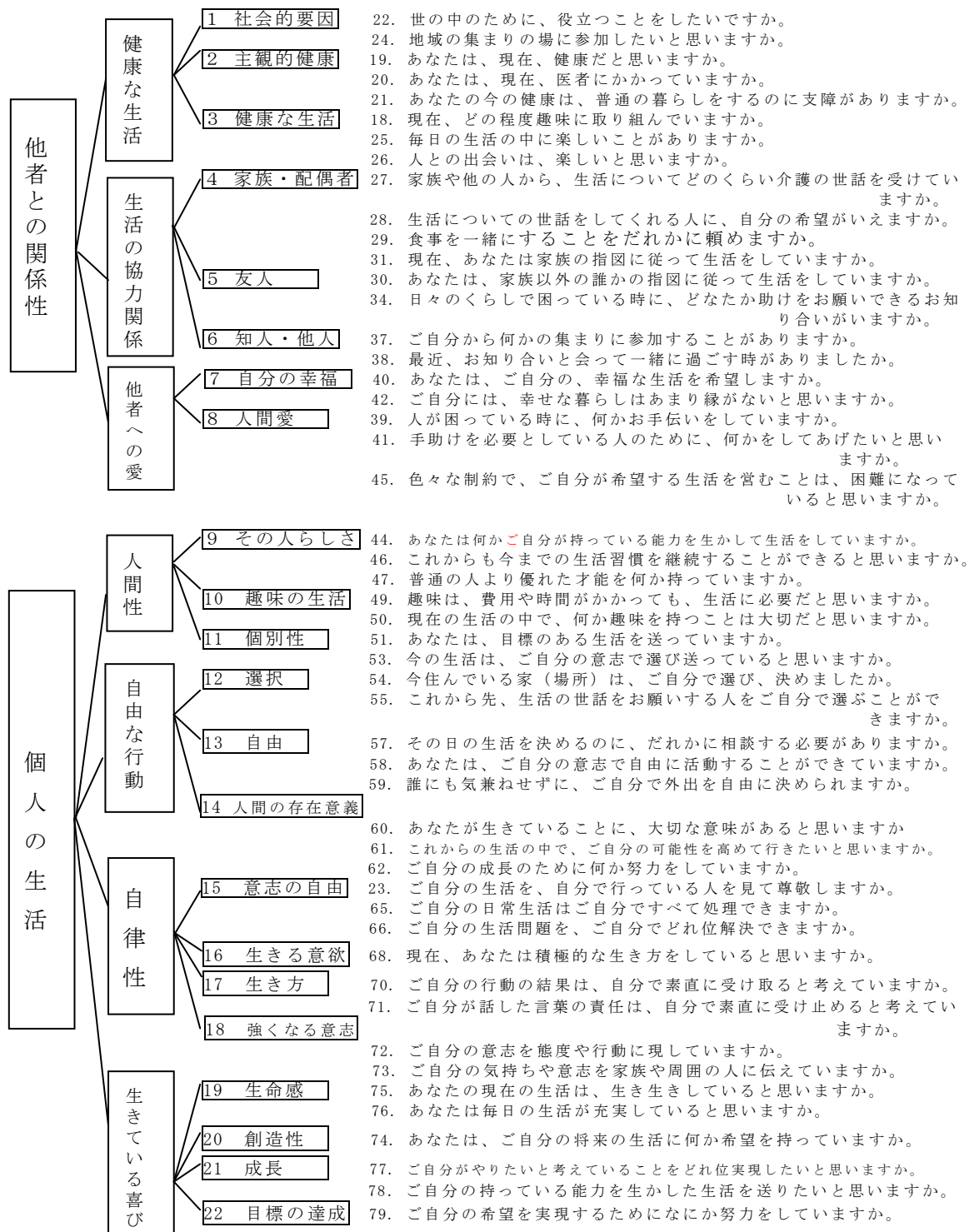


図 4-3-1 質問50項目の自己実現構成概念の枠組み

## 第4節 プリテスト調査票の作成

筆者が、調査票の基本属性を選定した基本的な考え方について述べる。本研究は、自己実現尺度の開発を目的とすることから、基本属性の項目には、自己実現スコアと相関があり、かつ在宅高齢者の日常生活行動を規定していると予測される項目を選定した。そのため、自己実現に関連した項目であると判断される生活関連の I A D L 項目を多く取り入れた。一方、身体動作機能である A D L 項目は少なくし、聴力のみとした。

認知症などの精神状況及び生活との関連性の程度を把握するため、基本属性に「判断力」を組み入れた。自己実現の到達度が高いと、日々の生活が活動的となり、外出し移動する頻度が増え、また電話・メールの頻度も多くなるであろうと予測し、外出頻度、電話・メールの回数を基本属性に組み入れた。収入になる仕事を継続している人は自己実現の達成度が高くなるであろうと予測し、これらの項目を基本属性に加えた。「移動の方法」には、車椅子での移動の項目を含めた。

表 4 - 4 - 1 プリテスト基本属性 15 項目

番号	基本属性 15 質問項目
1	あなたは、いつお生まれになりましたか。（平成 17 年 4 月 1 日現在の年齢）
2	あなたのご住所は、何町ですか。例（浜須賀、赤羽などの地域のみ）
3	あなたの現在のお住まいは、次のどれでしょうか。
4	あなたは、現在、どなたと同居されていますか。お一人の場合独居とお答えください。
5	ご自分を含め同居されているご家族は何人ですか。独居の場合は1人とお答えください。
6	あなたは現在収入になるお仕事をしていますか。
7	あなたのご職業は次のどれに該当しますか。
8	あなたの最終学歴について、お答えください。
9	移動の方法について最も該当するものを1つお選びください。
10	判断力について該当するものを1つお選びください。
11	お食事について該当するものを1つお選びください。
12	入浴について該当するものを1つお選びください。
13	聴力について該当するものを1つお選びください。
14	あなたは、何回くらい電話をかけたり、Eメールを送りますか。（仕事用を含める）
15	あなたは、どの程度の頻度で外出しますか。（買い物や仕事を含めて）

基本属性の項目として、年齢、居住地域、住まいの形態、同居者、同居人数、収入の仕事の頻度、職業の種類、最終学歴、移動の方法、判断力、食事の方法、

入浴、聴力、電話やEメール、外出頻度の15項目を選定し、全基本属性を表4-4-1に示した。

## 第5節 プリテストの方法

プリテストは、原則的に本調査と同じ方法で行った。すなわち、本調査と同じ地域で、同じ年齢層の在宅高齢者を対象に、調査票の留置き郵送法により調査を行った。

プリテストの調査方法を項目別に説明する。

1 調査時期 : 平成17年8月15日～平成18年8月25日

実際は回収数が少なく、回答を督促した葉書を送付し、調査期間を遅れて到着した調査票でも9月中旬まで受け入れ、回収した。

2 調査対象 神奈川県茅ヶ崎市在住の在宅高齢者 65～80歳の比較的元気な高齢者を対象とした。

目標回収人数を41人以上と設定し、回収率を4割前後と予測した。返信用封筒を同封した調査票を郵送し、記入を依頼した。

住民基本台帳の閲覧から、年齢を基準にランダムサンプリング（無作為抽出）を行い、110人を抽出した。抽出には、男女の区分はしていない。

3 郵送による自記式質問票

質問項目数は、自己実現項目数50、基本属性15、合計65質問項目とした。

依頼文を巻末資料20（表4-5-1）に示した。調査票の項目は巻末資料21（表4-5-2）に全項目を示した。

4 郵送配布数 : 110人、回収総数48（43.6%）

回収した48ケースの内、欠損値が多い6ケースは集計から除外した。

回答督促の葉書を回収期限の後の8月末に送付した。

5 有効回収数 : 42（38.1%）

## 第6節 基本属性の調査結果

有効回収数 42 のデータを集計し分析した。平均年齢は 72.3 歳であり、最高年齢 79 歳、最低年齢 65 歳であった。60 歳代が全体の 35%、70 歳代が全体の 65% を占めていた。(図 4-6-1 年齢、巻末資料 22 表 4-6-1)

図 4-6-1 年齢

同居家族は、「配偶者」(66.7%) が最も多く、以下「子供」(19.0%) 「独居」(11.9%) の順であった。「きょうだい」との同居者はいなかった。

(図 4-6-2 同居家族)

収入になる仕事は、「仕事なし」(69.1%) が最も多く、以下「ほぼ毎日勤務」(11.9%)、「月 1 回程度」(7.1%)、「週 1～2 日」(7.1%) の順であった。

最終学歴は、「高等学校」(28.6%) が最も多く、次いで「中学校」(21.4%)、「大学」(19.0%) の順であった。

移動の方法は、「公共機関の利用または自分で車を運転」(78.6%) が特に多く、「付き添いと一緒に公的交通機関」(7.1%)、「タクシーを利用」(4.8%) であった。

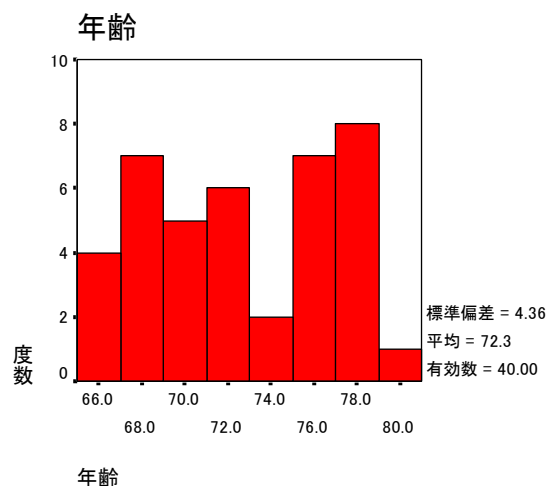
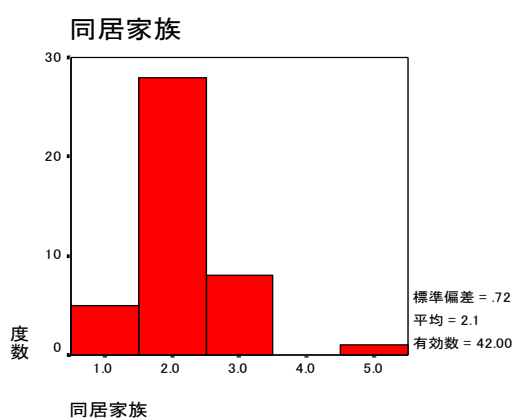


図 4-6-2 同居家族



基本属性の全ての項目の度数分布の分析結果を、巻末資料 23 (表 4-6-2) に示した。

## 第7節 質問項目の削減方法

本調査に使用する質問項目の数を20～25項目に絞り込むことを目的として、以下のような方法で項目分析を行った。

### 第1項 ワーディング検討会による項目削除

項目削除と文章表現の修正を目的として、ワーディング検討会を2回開催し、質問項目の精査を行った。検討会のメンバーは表4-7-1に示す通りである。

表4-7-1 ワーディング検討会実施内容 (平成17年)

参加者	性別	年齢	開催日	時間	検討内容	場所
福祉系大学院教員	男	76歳	9月3日	3時間	全項目	横浜 3名
福祉系大学教員	女	66歳			(属性含む)	
福祉系短期大学教員	女	62歳	11月27日	3時間	全項目	横浜 3名
					(属性含む)	
本研究担当者本人	男	57歳	各回とも出席			

項目削除には、1)回収したデータの度数分布に欠損値(無回答)があること、2)同一カテゴリーに複数の質問項目がある場合は削減の対象とする(図4-3-1)、3)現実的でない日常生活への質問など表面的妥当性に大きな問題がある場合、の3つの条件を削除の基準とした。自己実現の50質問項目の度数分布を巻末資料24(表4-1)に示した。

検討の結果、調査票の自己実現50質問項目から18項目を削除し、32項目を残した。削除項目及び削除理由を巻末資料「表4-2」に示した。削除理由のうち、18項目中16項目が欠損値(無回答)による理由であり、最も多かった。

## 第2項 選定された32質問項目

表面的妥当性の観点から、2回のワーディング検討会を設け、項目ごとに精査し、50項目から「32」の質問項目を選定した。「32」質問項目のステートメントは表4-7-2に示したとおりである。

4-7-2 選定された32質問項目

番号	32質問項目のステートメント
18	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。
19	あなたは、現在、健康だと思いますか。
20	あなたは、現在、医者にかかっていますか。
22	世の中のために、役立つことをしたいですか。
24	地域の集まりの場に参加したいと思いますか。
25	毎日の生活の中に楽しいことがありますか。
26	人との出会いは、楽しいと思いますか。
27	家族や他の人から、生活についてどのくらい介護の世話を受けていますか。
38	最近、お知り合いと会って一緒に過ごす時がありましたか。
39	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。
40	あなたは、ご自分の幸福な生活を希望しますか。
42	ご自分には、幸せな暮らしはあまり縁がないと思いますか。
44	あなたは、何か自分が持っている能力を生かして生活をしていますか。
45	色々な制約で、ご自分が希望する生活を営むことは困難になっていると思いますか。
47	普通の人より優れた才能を何か持っていますか。
50	現在の生活の中で、何か趣味を持つことは大切だと思いますか。
51	あなたは、目標のある生活を送っていますか。
53	今の生活は、ご自分の意志で選び送っていると思いますか。
54	今住んでいる家（場所）は、ご自分で選び、決めましたか。
55	これから先、生活の世話を願う人を、ご自分で選ぶことができますか。
58	あなたは、ご自分の意志で自由に活動することができますか。
59	誰にも気兼ねせずに、ご自分で外出を自由に決められますか。
60	あなたが生きていることに、大切な意味があると思いますか
61	これからの生活の中で、ご自分の可能性を高めて行きたいと思いますか。
65	ご自分の日常生活はご自分ですべて処理できますか。
68	現在、あなたは積極的な生き方をしていると思いますか。
71	ご自分が話した言葉の責任は、自分で素直に受け止めると考えていますか。
73	ご自分の気持ちや意志を家族や周囲の人に伝えていきますか。
74	あなたは、ご自分の将来の生活に何か希望を持っていますか。
76	あなたは毎日の生活が充実していると思いますか。
77	ご自分がやりたいと考えていることをどれ位実現したいと思いますか。
79	ご自分の希望を実現するためになにか努力をしていますか。

## 第8節 信頼性分析による項目選定

前節で行った項目削除の結果、精査され残った32項目の信頼性分析を行い、項目削除の検討を慎重に行い、32項目から24項目に削減することができた。その分析内容を以下に説明する。

### 第1項 選定のための項目分析

#### 削除項目の選定

まず、32項目の信頼性分析を行った。その結果IT関連のもっとも低い項目Q59を最初に削除した。Q59のIT相関は0.0564であり、削除前のクロンバックの $\alpha$ 係数は0.8735であった。削除後の31項目の $\alpha$ 係数は0.8766であり、 $\alpha$ 係数は0.0031高まることが確認され、削除が適切であることが検証された。(表4-8-1)

表4-8-1 信頼性分析32項目 (Q59を選定)

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	74.0119	167.9045	12.9578	32
Item-total Statistics	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	71.5119	156.7313	.3430	.8718
Q19	71.5738	157.7322	.4225	.8693
RQ20	70.5452	163.7845	.1144	.8773
Q22	71.5000	161.5595	.2568	.8729
Q24	71.2048	157.8400	.3873	.8701
Q25	71.9143	158.2803	.4739	.8685
Q26	71.9643	156.1082	.5186	.8673
Q27	72.7429	163.7781	.2762	.8723
Q38	71.2405	159.2493	.3911	.8701
Q39	70.9119	154.0445	.5617	.8660
Q40	71.9738	157.7664	.4459	.8689
RQ42	71.8881	162.2347	.1623	.8764
Q44	71.2881	155.2420	.4754	.8680
RQ45	71.6024	156.5680	.2904	.8744
Q47	70.4524	153.6011	.5046	.8671
Q50	71.8595	150.9966	.6845	.8629
Q51	71.6571	153.1532	.7019	.8636
Q53	72.3643	162.9804	.2940	.8720
Q54	72.0881	163.8299	.1257	.8765
Q55	71.5310	162.3417	.2049	.8742
Q58	72.5976	159.5544	.3395	.8712
<b>Q59</b>	<b>72.3548</b>	<b>166.1484</b>	<b>.0564</b>	<b>.8766</b>
Q60	71.6452	153.5767	.5339	.8664
Q61	71.5071	154.1914	.6109	.8652
Q65	72.4238	161.9702	.2749	.8724
Q68	71.5357	152.9033	.6748	.8638
Q71	72.4024	165.5017	.1536	.8739
Q73	71.8690	159.3651	.3406	.8712

Q74	71.2548	156.2040	.4812	.8680
Q76	71.6548	155.6508	.5058	.8674
Q77	71.7500	159.8260	.4848	.8690
Q79	71.5595	150.2376	.7264	.8619
R E L I A B I L I T Y    A N A L Y S I S    -    S C A L E    ( A L P H A )				
Reliability Coefficients				
N of Cases = 42.0		N of Items = 32		
Alpha = .8735				

同様の方法で、Q20、Q54、Q71、Q42、Q55、Q53の合計7項目を削除し、25項目を残した。一連の削除作業の分析結果を表4-8-2に示した。(巻末資料表4-8-1B～表4-8-7Bを参照)

表4-8-2 32項目からの項目削除の分析結果

No	削除候補	巻末資料番号	IT関連	削除前 α 係数	削除後 α 係数	α 係数 増減	分析 結果	削除後 項目数
1	Q59	2-8-1B	0.0564	0.8735	0.8766	0.0031	削除	31
2	Q20	2-8-2B	0.1044	0.8766	0.8807	0.0041	削除	32
3	Q54	2-8-3B	0.1161	0.8807	0.8843	0.0036	削除	29
4	Q71	2-8-4B	0.1498	0.8843	0.8851	0.0008	削除	28
5	Q42	2-8-5B	0.1691	0.8851	0.8887	0.0036	削除	27
6	Q55	2-8-6B	0.1753	0.8887	0.8911	0.0024	削除	26
7	Q55	2-8-7B	0.2263	0.8911	0.8914	0.0003	削除	25

## 第2項 25項目からの項目分析

前項で行った項目削除の作業により抽出された25項目の信頼性分析を行った結果、IT関連のもっとも低い項目Q27を削除しても、α係数は0.8914と同じ値になり(巻末資料表4-8-8B)、α係数は改善されないことが確認された。つまり、信頼性係数はこの段階で飽和状態となり、項目を削除してもα係数にその効果が表れないことが確認された。(巻末資料4-8-8B)

次のステップとして、目的の項目削減を進展させるため、α係数は同じ値であるが、Q27を削除し、項目数を24項目に減じた。

次に、残った24項目の信頼性分析を行ったところ、IT関連のもっとも低い項目はQ65であり、IT関連は0.2399となり、削除後のα係数は、0.8921であった。α係数は0.0007とわずかに高まることが予測された。(表4-8-9)



表 4 - 8 - 9 信頼性分析 2 4 項目 (Q 6 5 ・ Q 7 9 選定)

R E L I A B I L I T Y   A N A L Y S I S   -   S C A L E   ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	57.8333	138.7550	11.7794	24
Item-total Statistics	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	55.3333	127.3989	.3875	.8903
Q19	55.3952	129.2517	.4334	.8882
Q22	55.3214	132.5593	.2760	.8918
Q24	55.0262	130.2732	.3528	.8903
Q25	55.7357	130.1780	.4621	.8877
Q26	55.7857	126.7705	.5852	.8847
Q38	55.0619	131.5639	.3515	.8900
Q39	54.7333	125.9267	.5719	.8848
Q40	55.7952	129.0224	.4718	.8873
Q44	55.1095	126.2121	.5218	.8860
RQ45	55.4238	129.6121	.2462	.8964
Q47	54.2738	125.5859	.5101	.8863
Q50	55.6810	122.6313	.7223	.8807
Q51	55.4786	125.8081	.6752	.8829
Q58	56.4190	131.9723	.2960	.8914
Q60	55.4667	125.0559	.5637	.8848
Q61	55.3286	125.7187	.6412	.8834
<b>Q65</b>	<b>56.2452</b>	<b>133.9260</b>	<b>.2399</b>	<b>.8921</b>
Q68	55.3571	124.3869	.7150	.8816
Q73	55.6905	130.9438	.3403	.8904
Q74	55.0762	127.1482	.5287	.8859
Q76	55.4762	127.6097	.5045	.8865
Q77	55.5714	131.6733	.4648	.8880
<b>Q79</b>	<b>55.3810</b>	<b>121.6055</b>	<b>.7825</b>	<b>.8792</b>
Reliability Coefficients				
N of Cases =	42.0	N of Items = 24		
Alpha =	.8914			

しかし、本章第 3 節の図 4 - 3 - 1 自己実現構成概念の枠組み から、Q 6 5 は構成概念の中項目の 「 5 ) 意思の自由 」 を代表する残された唯一の測定項目であり、自己実現尺度開発者としてはどうしても除外できない重要項目である。よって Q 6 5 は削除せず、選択方法を変更し、これまでとは逆に、IT 関連の最も高い Q 7 9 (IT 関連 = 0.7825) を削除の対象とした。(表 4 - 8 - 9)

しかし、この項目も自己実現尺度開発者としては、どうしても削除したくない重要項目である。また Q 7 9 と最も高い相関係数 (0.7303) を持つ項目 Q 2 6 も削除したくない重要項目であるため (巻末資料表 4 - 8 - 10 P273)、項目削除の作業は 2 4 項目を残して、この段階で終了することとした。

## 第9節 因子分析による項目選定の確認

前節までに説明した項目分析作業により選定された24質問項目の適否を確認するため、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を最小固有値1以上で行った。その結果、表4-8-1に示すように、7つの因子が抽出された。

この結果を見ると、遊離した項目は存在しないことが明らかであり、プリテストの分析結果、選定された24項目は尺度として適切であると判断できる。

表4-8-1 24尺度項目の因子分析  
回転後の成分行列(a)

	成分						
	1	2	3	4	5	6	7
Q77 77 実現する	<u>.845</u>	-.133	.147	.043	.097	-.069	.059
Q76 76 毎日の生活	<u>.804</u>	-.056	.060	.038	.189	-.018	.189
Q74 74 将来の生活	<u>.680</u>	.180	.005	.026	-.115	.410	.160
Q47 47 優れた才能	<u>.612</u>	.010	.203	.112	.341	.264	-.356
Q61 61 自分の可能性	<u>.554</u>	.238	.361	.380	-.147	.132	.059
Q68 68 積極的な生	<u>.549</u>	.343	.387	.376	.046	.043	.066
Q73 73 自分の気持ち	.064	<u>.836</u>	-.046	-.080	.155	.020	.138
Q65 65 日常生活処理	-.246	<u>.732</u>	.188	.016	.290	.011	-.156
Q40 40 幸福な生活	.081	<u>.691</u>	.482	.077	-.055	.040	.047
Q60 60 大切な意味	.532	<u>.606</u>	-.137	.383	-.098	.025	.158
Q44 44 能力を生かす	.035	.161	<u>.780</u>	.028	.357	.179	.005
Q22 22 役立つ	.315	-.217	<u>.524</u>	.149	-.266	.023	.148
Q50 50 生活の趣味	.460	.277	<u>.486</u>	.065	.073	.458	.077
Q79 79 希望の実現	.348	.339	<u>.471</u>	.097	.264	.359	.378
Q38 38 一緒に過ごす	-.061	-.018	.050	<u>.856</u>	.087	.196	.117
Q24 24 地域の集まり	.435	-.159	-.011	<u>.670</u>	-.138	.200	-.095
Q39 39 人を助ける	.193	.171	.474	<u>.640</u>	.138	-.132	.123
Q45 45 希望の困難	.092	.025	.096	-.013	<u>.849</u>	-.114	-.004
Q51 51 目標の生活	.281	.176	.257	.217	<u>.652</u>	.327	.048
Q58 58 自由な活動	-.137	.468	-.111	-.105	<u>.624</u>	.288	.180
Q18 18 趣味	.058	-.042	.114	.218	.058	<u>.884</u>	.051
Q26 26 出会い	.174	.321	.329	-.057	.159	<u>.409</u>	.577
Q25 25 毎日の生活	.465	-.172	.259	.279	-.120	.080	<u>.573</u>
Q19 19 健康	.089	.212	-.105	.421	.451	-.038	<u>.529</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 10回の反復で回転が収束した。

## 【引用文献】

- 池上直己・福原俊一・下妻晃二郎・池田俊也編（2001）『臨床のためのQOL評価  
ハンドブック』医学書院.
- 金子美弥子・金子允文（1997）『WHO QOL短縮版－使用手引き』金子書房.
- 小澤利男・江藤文雄・高橋龍太郎（1999）『高齢者の生活機能評価ガイド』  
医歯薬出版.
- Lawton, M. P. (1975) The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A  
revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89,
- 前田大作・浅野仁・谷口和江（1979）「老人の主観的幸福感の研究」 『社会老年  
学』（11）：15－31.
- Zigmond, A. S. et al（1983）The Hospital Anxiety and Depression Scale.  
*Acta Psychiatria Scand* 67:361-70,

## 目 次

### 第 5 章 本調査の実施

第 1 節	本調査の実施の方法	.....	119
第 2 節	本調査に使用した自己実現質問項目	.....	119
第 3 節	本調査用基本属性の項目選定	.....	121
第 4 節	サンプルの基本属性	.....	123
第 1 項	16 基本属性の度数分布の分布		
第 2 項	基本属性の度数分布の分析結果の考察		
第 5 節	本調査のデータによる項目分布	.....	131
第 6 節	全項目の度数分布とヒストグラム	.....	132
第 7 節	信頼性分析による自己実現項目の選定	.....	137
第 8 節	因子分析による項目選定	.....	145
第 9 節	因子分析による項目選定の最終確認	.....	150
第 10 節	項目選定作業の総括	.....	157

## 第5章 本調査の実施

本章では、本調査で使用した調査票の準備と調査実施及びその結果について述べる。本調査は、書面による趣旨説明文を同封した質問紙の郵送調査法により実施した。回収した有効回答数413のデータを分析し、自己実現尺度17項目の選定を行った。

### 第1節 本調査の実施の方法

調査対象は、神奈川県茅ヶ崎市（人口230,941人、高齢化率17.6%平成17年、茅ヶ崎市総務部行政総務2005）に居住する65～80歳の在宅高齢者1,120人であった。

プリテストとの相違点は、次の2点である。第1点は、実施開始時期が、プリテストでは夏期の8月15日からであったのに対し、本調査では冬期かつ年末の12月15日に変わったことである。第2点は、調査票の郵送数が10倍に増えたことから、対象者を茅ヶ崎市全域からランダムに抽出できた点である。

本調査の実施方法を項目別に以下に説明する。

#### 1 実施時期：平成17年12月15日～平成17年12月28日

実際は、期間内の回収数が少なく、回答送付の督促の葉書を平成18年1月中旬に発送し、依頼期間を過ぎた後に到着した調査票でも、2月上旬まで受け入れ集計に加えた。

#### 2 調査対象：神奈川県茅ヶ崎市在住の65～80歳の在宅高齢者を対象とした。住民基本台帳の閲覧の許可を得て、平成17年7月から12月まで、閲覧条件に準じ、6ヶ月間をかけて茅ヶ崎市全域からランダムサンプリングにより対象者を抽出した。

調査票の目標回収数を401人以上と設定した。回収率を36～40%と予測し、返信用封筒を同封した調査票を1,120人に郵送し、記入を依頼した。

#### 3 郵送による自記式質問票

質問項目数は、自己実現質問項目数 24、基本属性項目数 16、全質問項目数 40 であった。自己実現質問項目への回答は 5 点式リッカートスケールとした。調査依頼文を巻末資料 3-1 に、調査票全文を巻末資料 3-2 に掲載した。

- 4 郵送配布数 : 1,120 人 回収総数 431 (回収率 38.5%)  
回収した 431 ケースの中から、欠損値が特に多い 18 ケースは集計せずに除外した。
- 5 有効回収数 : 413 (36.8%)  
本調査の各データの分析は、ケース数 :  $n=413$  で行った。
- 6 使用ソフト : 1) SPSS 11.5 J for Windows (信頼性分析 因子分析)  
2) Mplus Ver. 3.11 (確認的因子分析)

## 第2節 本調査に使用した自己実現質問項目

前章のプリテストの結果、選定された本調査用自己実現尺度24項目のステートメントと各変数の簡略化した名称を、表5-2-1に示した。

本論文では、以下この簡略化した略称を主として使用することとする。

表5-2-1 本調査用全24項目のステートメント

観測変数名	24項目のステートメント	項目の略称
Q1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか	趣味の程度
Q2	同年輩の人と比べてあなたは現在健康だと思いますか	現在の健康
Q3	世の中のために、役立つことをしたいですか	世に役立つ
Q4	地域のおまつりや老人クラブなどの集まりに参加したいと思いませんか	集まりに参加
Q5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか	生活の楽しみ
Q6	人との出会いは、楽しいと思いませんか	人との出会い
Q7	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか	一緒に過ごす
Q8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか	何か手伝い
Q9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか	幸福な生活
Q10	ご自分の希望する生活を送ることは難しいと思いませんか(逆転)	希望の生活
Q11	ご自分の能力を生かした生活をしていますか	能力を生かす
Q12	人より優れた能力が何かあると思いませんか	優れた能力
Q13	趣味のある生活は大切だと思いますか	趣味の生活
Q14	あなたは、目標のある生活を送っていますか	目標の生活
Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか	自由にできる
Q16	あなたは生きていることに大切な意味があると思いませんか	生きる意味
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いませんか	自分の可能性
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか	自分で処理
Q19	現在あなたは、積極的な生き方をしていると思いませんか	積極的生き方
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えていませんか	自分の意志
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか	将来の生活
Q22	毎日の生活は、充実していますか	生活の充実
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度実現できると思いませんか	やりたいこと
Q24	ご自分の希望を実現するために、なにか努力をしていますか	希望への努力

注) Q11は、得点を逆転し、集計した。

24質問項目を分類整理し、自己実現概念(仮説)の枠組みを図5-2-1に示した。「他者との関係性」と「個人の生活」の2つの上位概念、及び「健康な生活」、「生活の協力関係」、「他者への愛」、「人間性」、「自由な行動」、「自律性」「生きている喜び」の7つの中位概念は、プリテスト開始時の50質問項目の自己実現概念図5-2-1の中位概念の数と同数である。「友人」及び「選択」の2つの

下位概念は所属する質問項目がすべて削除されたので下位概念自体を削除した。

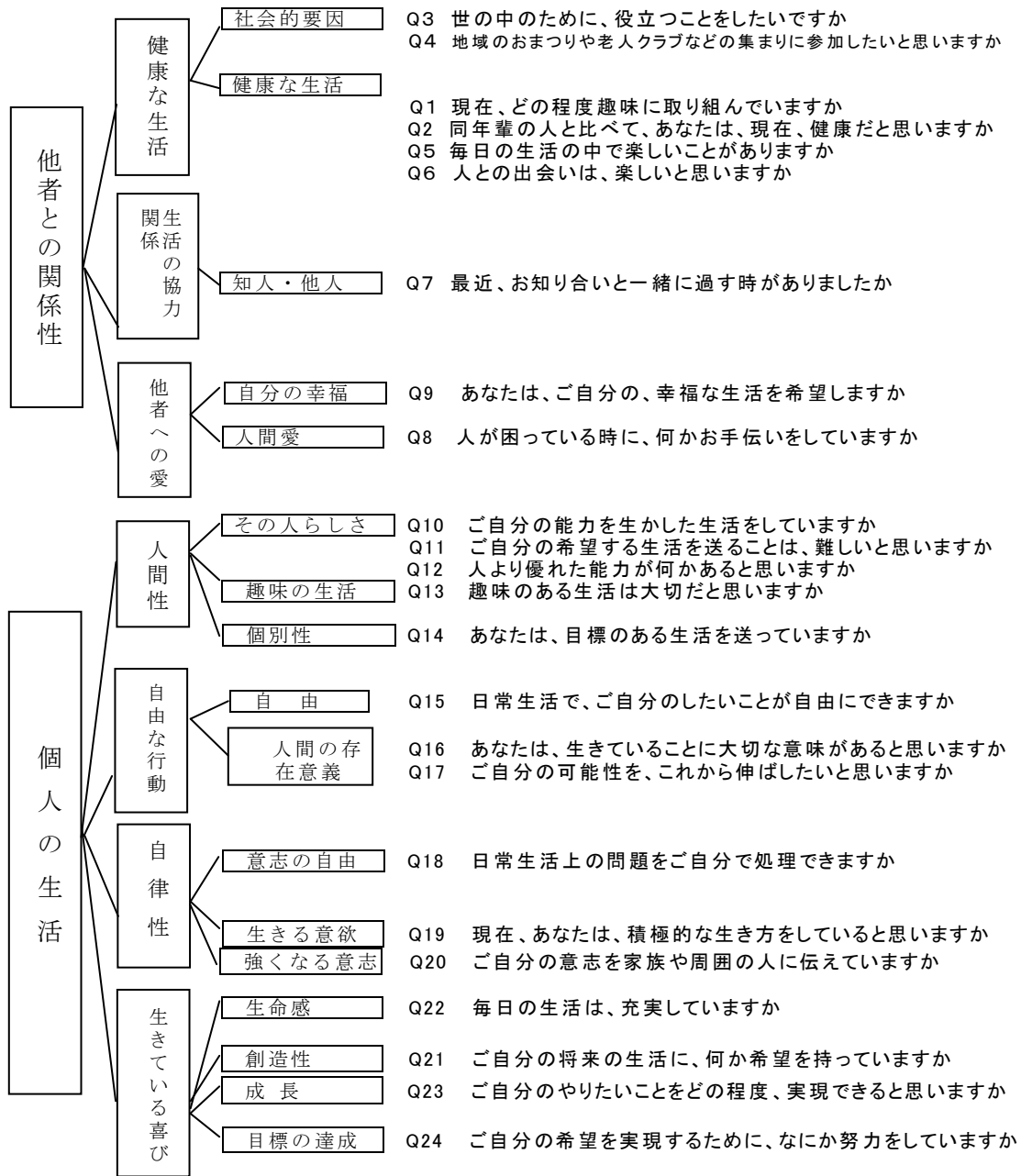


図5-2-1 自己実現 24 質問項目の本調査での概念の枠組み(仮説)

下位概念の「主観的健康度」は、該当質問項目が削除され、単独の 1 項目だけとなったため、3 項目が所属する「健康な生活」項目の小項目「健康な生活」に統合し、「主観的健康度」の小項目は削除した。

第 2 回目のワーディング検討会により全質問項目を表面的妥当性の観点から吟



味し、24 質問項目の内 13 項目を部分修正し、平易な文章とした（第 2 章第 3 節）。本調査に使用した項目は、部分修正を終えた後の平易な文章表現を調査票の自己実現質問項目に使用した。

文章表現を一部修正した項目は、「Q2 現在の健康」、「Q4 集まりに参加」、「Q7 一緒に過ごす」、「Q10 能力を生かす」、「Q11 希望の生活」、「Q12 優れた能力」、「Q15 自由にできる」、「Q17 自分の可能性」、「Q20 自分の意志」、「Q21 将来の生活」、「Q22 生活の充実」、「Q23 やりたいこと」の 13 項目であった。表 5-2-1 及び図 5-2-1 には、部分修正を終了した文章を記載している。

### 第 3 節 本調査用基本属性の項目選定

前章でプリテスト用に選定した 15 項目の基本属性を基本とし、項目の削除、追加、及び表現に修正を加え、本調査用の基本属性を選定した。本調査用の基本属性とプリテストに使用した基本属性の比較を表 5-3-1 に示した。

表 5-3-1 本調査基本属性 16 項目

No	基本属性略称	プリテスト時との比較	
		質問項目の変更	回答の選択肢の変更状況
1	年齢	同一(変更せず)	同一(変更せず)
2	性別	新規追加	新規
3	現在の住まい	同一	一部修正
4	どなたと同居	同一	一部修正
5	同居家族人数	同一	同一
6	収入の仕事	同一	5者択一から6者択一に変更
7	仕事の程度	変更追加	5者択一から6者択一に変更
8	最終学歴	同一	一部修正
9	移動の方法	同一	一部修正
10	自己の判断力	同一	5者択一から4者択一に変更
11	食事について	同一	5者択一から4者択一に変更
12	最長勤務の職業		新規に8者択一とした
13	聴力	同一	一部修正
14	電話やメール	修正	修正
15	外出頻度	同一	修正
16	収入金額		新規に6者択一とした

新たに「性別」、「収入金額」、「最長勤務の職業」の 3 項目をプリテストの基本

属性に追加した。各項目を追加した理由は次のとおりである。まず男女の性差による自己実現スコアの比較を行うため「性別」を追加した。次に年収金額と自己実現スコアの間に関連関係を調べるため、「収入金額」の項目を新たに追加した。また、最も長く勤めた職業がその人の「自己実現」に影響を与えるであろうとの予測から、「最長勤務の職業」の項目を新たに追加した。

本調査の基本属性16項目をすべて表5-3-2に示した。

表5-3-2 本調査基本属性16項目のステートメント

番号	基本属性の質問項目ステートメント
1	あなたは、いつお生まれになりましたか。□の中にご記入ください。 (平成18年1月1日現在の年齢)
2	あなたの性別についてお答えください
3	現在のお住まいは、次のどれでしょうか
4	現在どなたと同居されていますか(一人の場合は独居とお答えください)
5	ご自分を含め同居されているご家族は何人ですか。独居の場合は1人とお答えください。
6	現在の収入になるお仕事は次のどれに該当しますか
7	現在収入になるお仕事を、およそどの程度していますか
8	最終学歴について、お答えください
9	移動の方法について最も該当するものを1つだけお選びください
10	これまでにあなたが最も長く働いた職業は、どのような仕事ですか
11	あなた自身の判断力について該当するものを1つ選び、○印を付けてください。
12	食事について該当するものを1つお選びください
13	聴力について該当するものを1つお選びください
14	あなたは、どの程度の頻度で電話をかけたり、手紙やEメールを送りますか。 (仕事を含めた合計回数)
15	どの程度の頻度で外出しますか。(散歩、買い物や仕事を含め)
16	あなたが属する世帯の最近1年間の合計収入金額(税込み)について、ご回答ください。 お答えになりたくない場合は、7番目に○をお付けください。

本調査は無記名回答のため、プリテストで使用した基本属性の「Q2 住所地」は、本調査の属性から除外した。また、「Q12 入浴」は自己実現と関係性が低いと判断し、削除した。

## 第4節 サンプルの基本属性

有効回収数 413 のデータから基本属性の各項目の度数分布を計算し、結果を巻末資料 39(表 5-3)に示した。一部の項目はクロス集計を行い、属性相互のカイ 2 乗検定による Pearson の有意確率を求め、有意な相関 ( $P < 0.05$ ) を確認した。

### 第 1 項 16 基本属性の度数分布の分析

#### 1) 年齢

「年齢」 ( $n=408$ ) の平均は 72.4 歳であり、最高年齢は 80 歳 (4 人)、最低年齢は 65 歳 (11 人) であった。年代区分では、65~69 歳が 27.0%、70~74 歳が 38.0%、75~80 歳が 35.0% であり、正規分布ではないが天井効果、床効果はなく、正常であった。(図 5-4-1、巻末資料表 5-4)

#### 2) 性別

「性別」 ( $n=401$ ) では、男性が 201 人 (49%)、女性が 209 人 (51%) であり、ほぼ同数であった (巻末資料表 5-5)。

#### 3) 現在の住まい

「現在の住まい」 ( $n=403$ ) は、「持ち家一戸建て」が 87.3% と最も多く、次いで「賃貸県営・民営・住宅その他」7.7% であった。「分譲マンション」は 5.0% であった。(巻末資料表 5-6)

図 5-4-1 年齢の分布

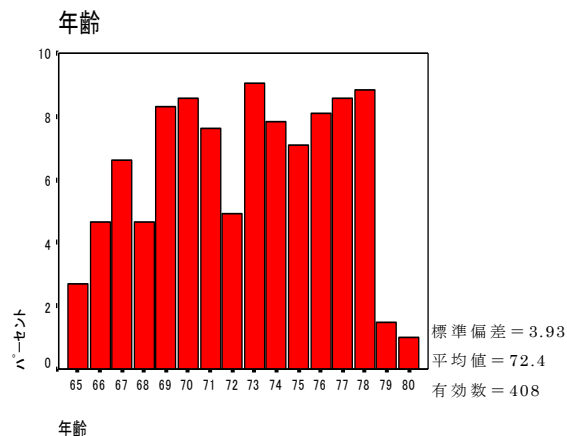
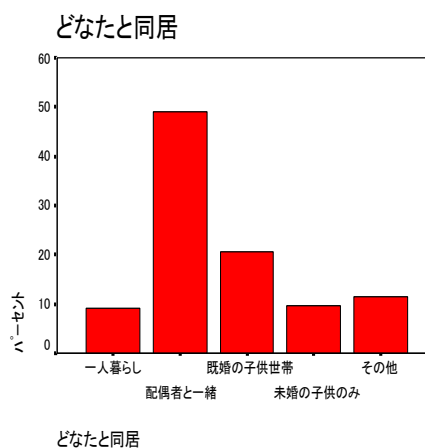


図 5-4-2 どなたと同居



#### 4) どなたと同居

「どなたと同居」(n=431)は、「配偶者」が47.5%と最も多く、以下「既婚の子供」(20.6%)、「その他」(11.5%)、であり「一人暮らしは」9.0%と最も少なかった。(図5-4-2、巻末資料5-7・8)

#### 5) 収入の仕事

「収入の仕事」(n=399)は、「働いていない」が70.2%と最も高く、以下「自営業」と「勤めの仕事」が同率で10.3%であった。(巻末資料5-10)

#### 6) 仕事の程度

「仕事の程度」(n=397)では、少数であるが11人が「ほぼ毎日」(9.1%)働いていた。「働いていない」が70.3%で最も多かった。(巻末資料5-11)

#### 7) 最終学歴

「最終学歴」(n=431)では、「新制高等学校」が最も多く43.4%であった。次いで「新制大学・大学院」(24.7%)、「新制中学校」(19.1%)の順であった。「新制大学・大学院」が24.7%と新制中学校よりも高く、第2位であった。(巻末資料5-12・27)

#### 8) 同居家族人数

「同居家族人数」(n=401)では、2人が最も多く49.9%であった。次に5人以上と3人がほぼ同率で15.6%であった。(図5-4-3、巻末資料5-4-9)

図5-4-3 同居家族人数

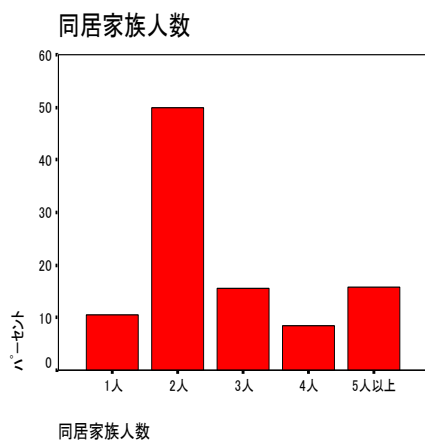
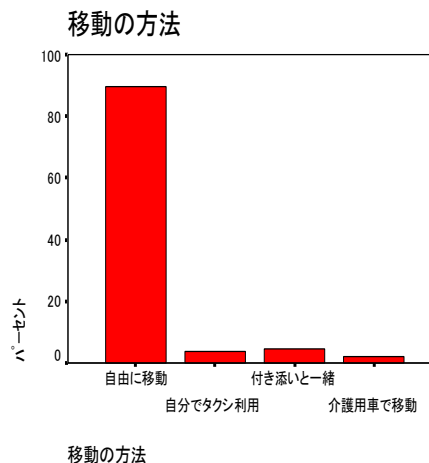


図5-4-4 移動の方法



9) 移動の方法

「移動の方法」(n=401)では、「自由に移動」(89.5%)が極端に多く、特出し、9割を占めていた。他の項目は、2～4%台と低く、差は少なかった。(図5-4-4、巻末資料表5-13)

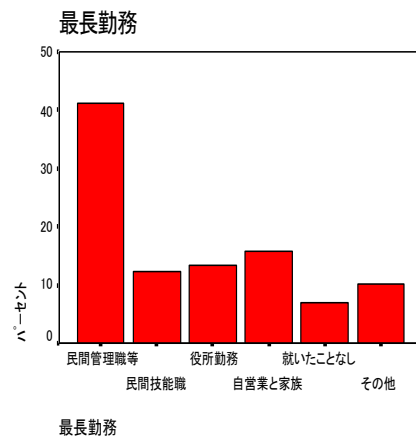
10) 最長勤務

「最長勤務の職業」(n=396)では、41.2%と「民間企業の管理職、技術、事務系」の職業が高く、特に多かった。

「役所勤務」の13.4%を加えると54.6%の者が「役所」または管理職系の仕事であった。「民間技能系」が12.4%と少なく、「自営業とその家族」の15.9%を含めても28.3%と少なかった。また、女性が

半数を占めているが、「仕事についていない人」はわずかに6.8%と少なかった。(図5-4-5、巻末資料表5-14)

図5-4-5 最長勤務の職業



11) 判断力

「判断力」(n=404)では、75.7%の者が日々の問題を解決できると回答し、

図5-4-6 判断力

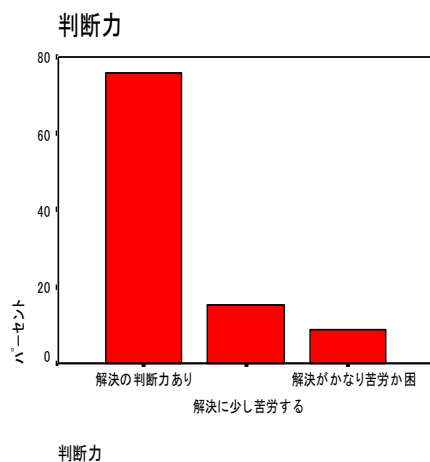
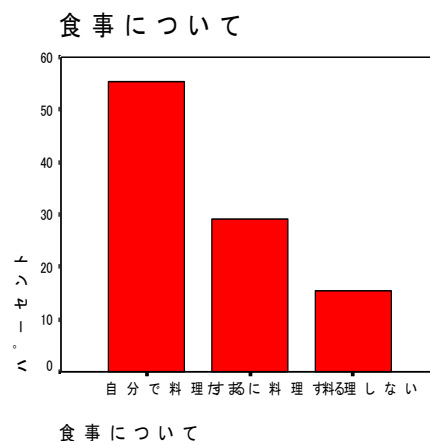


図5-4-7 食事について



15.3%の者が問題の解決に少し苦勞を要するが解決できると回答した。また、問題の解決に何らかの支障がある者は8.9%と非常に少なかった。つまり、

10人中9人(91%)が、自己の判断力がある高齢者であった。(図5-4-6、巻末資料表5-15)

### 12) 食事について

「食事について」(n=401)は、55.4%の者が、自分で料理するかまたは、外食で自分の好みの食事を自由に食べていた。(図5-4-7、巻末資料表5-16・23・24)

### 13) 聴力

「聴力」(n=405)については、79.5%の者が普通に聞こえ、大きな声なら聞こえるの17.8%を加え、97.3%の者がそれほど支障なく聞こえていた。(図5-4-8、巻末資料表5-17)

図5-4-8 聴力

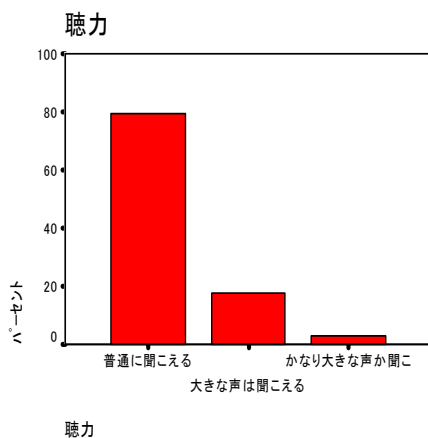
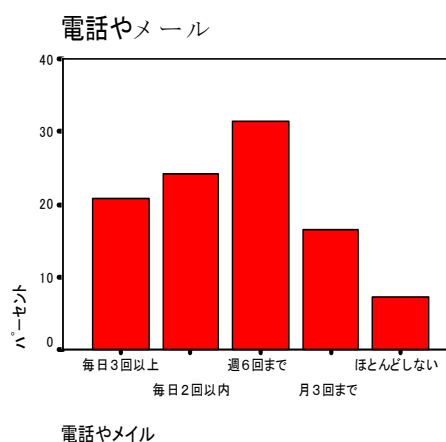


図5-4-9 電話やメール



### 14) 電話やメール

「電話やメール」(n=402)については、「週1~6回」が31.3%と最も多く、順に「毎日2回以内」が24.1%、「毎日3回以上」が20.9%であった。3カテゴリーで76.4%を占めていた。(図5-4-9、巻末資料表5-18・21)

### 15) 外出頻度

「外出頻度」(n=398)については、「毎日1回以上」が57.8%と最も多く、次いで、「週1回~6回」が34.9%であった。約6割近い者が「毎日1回以上」

外出する活動的な高齢者であることが明らかとなった。(図5-4-10、巻末資料表5-19・22)

図5-4-10 外出頻度

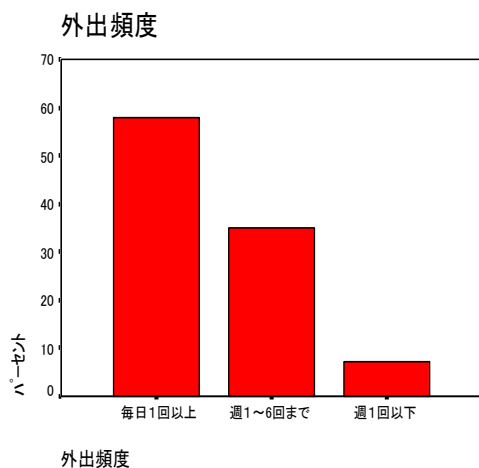
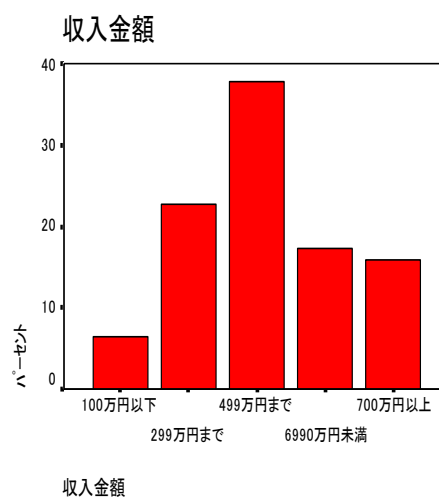


図5-4-11 収入金額



## 16) 収入金額

「収入金額」(n=265)については、年収「300~499万円」の世帯が最も多く37.7%であった。次いで「100~299万円」が22.6%であった。(図5-4-11)

「500~699万円」が17.4%あり、最高収入「700万円以上」の世帯は42人(15.8%)であった。「500万円以上」の「収入金額」は33.2%の世帯であった。これは、本調査研究の対象である在宅高齢者の経済的特徴の1つを示している。(図5-4-11、巻末資料表5-20・25・26)

## 第2項 基本属性の度数分布の分析結果の考察

本研究の調査対象者の基本属性を分析したその特徴について説明する。対象地域はかつて、漁業・農業中心の地域であったが、都市化とともに大都市近郊の住宅地として人口が増加し、地価が高まり、湘南地域有数の住宅地域となった。収入の高い「民間管理・技術・事務系」職業の者が多数移住し、調査地で高齢期を

迎え、生活していることが調査結果から確認された。(巻末資料表 5 - 2 5)

主な特徴について、説明する。

#### 1) 世帯の収入金額

2 世代同居を含めた世帯の年間収入では「500～699 万円」の世帯が 17.4%あり、最高収入「700 万円以上」の世帯は 42 人 (15.8%) であった。つまり、33.2%の世帯が「500 万円以上」の「収入金額」の高齢者世帯であった。これは、本調査研究対象地域の在宅高齢者の経済的特徴の 1 つであるといえる。

総務省の平成 16 年の全国調査 (総務省統計局編 2004) では、65 歳以上の夫婦のみの世帯で「500～699 万円」の世帯が 21.2%、「700 万円以上」の世帯が 16.9%、「500 万円以上」の世帯は 48.6%と報告されている。

#### 2) 最長勤務の職業と女性の就業

190 人の女性のうち、「最長勤務」の職業のうち、28.4%が「管理・技術職」として勤務していた。「役所勤務」の 8.4%を加えると女性のうち 36.8%が、「管理・技術・役所勤務」であり、「自営業と家族」の職業の割合が 15.3%であった。職業に就いたことのない女性は 14.7%と少なかった。女性の勤務職業従事経験者が多いことが 1 つの特徴であるといえる。

総務省の平成 12 年の国勢調査 (総務省統計局編 2000) では、70～74 歳の女性の「自営業・家族」の就業者の割合は 59.4%と報告されている。

#### 3) 最終学歴について (総務省統計局編 2004) (総務省統計局編 2000)

「最終学歴」は、「新制高等学校・旧制中学校」が最も多く 43.4%であった。次いで「新制大学・大学院」が 24.8%であった。高齢者のうち大学・大学院卒業者の居住率が高い地域であるといえる。新制高等学校卒以上の高齢者は 68.1%であった。

総務省の平成 12 年の国勢調査 (総務省統計局編 2000) では、70～74 歳の最終卒業学校は「高校・旧制中学校」の者が 37.5%、「大学・大学院」が 9.8%、「高校卒以上」の者が 53.2%と報告されている。

#### 4) ADL, 健康

本研究の調査対象者は、9 割の者が自分で自由に移動でき、身体的に ADL が高く、活動的で元気な高齢者であることが明らかとなった。(図 5 - 4 - 4、図 5 - 4 - 10、表 5 - 1 3、表 5 - 1 8)



## 第5節 本調査のデータによる項目分析

本調査後の最初の作業として、自己実現スケールの項目数を利用しやすい数まで減らし、またスケールとしての質の向上を目的とし、第二次項目分析を行った。まず、最初の分析として平均値と標準偏差の分析を行った。

24質問項目の夫々の平均値と標準偏差を表5-5-1に示した。項目により、有効度数（ $n$ ）が異なっているのは、有効回収数は「413」であったが、欠損値がある回答を項目ごとに計算から除外したためである。

表5-5-1 質問項目の平均値と標準偏差

観測変数	24項目のステートメント	n	平均値	標準偏差
Q1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか	413	2.48	1.23
Q2	同年輩の人と比べてあなたは現在健康だと思えますか	413	2.56	1.07
Q3	世の中のために、役立つことをしたいですか	408	2.65	0.86
Q4	地域のおまつりや老人クラブなどの集まりに参加したいと思いますか	409	3.25	1.08
Q5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか	405	2.16	0.96
Q6	人との出会いは、楽しいと思えますか	404	1.92	0.81
Q7	最近、お知り合いと一緒に過す時がありましたか	413	2.44	1.01
Q8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか	413	2.65	1.01
Q9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか	408	2.02	0.83
Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか	409	2.49	1.09
Q11	ご自分の希望する生活を送ることは難しいと思えますか(逆転)	405	2.90	0.98
Q12	人より優れた能力が何かあると思えますか	404	2.99	0.82
Q13	趣味のある生活は大切だと思えますか	405	1.77	0.82
Q14	あなたは、目標のある生活を送っていますか	404	2.66	0.99
Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか	405	2.22	0.93
Q16	あなたは生きていることに大切な意味があると思えますか	404	1.86	0.91
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか	405	2.55	0.93
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか	404	1.99	0.90
Q19	現在あなたは、積極的な生き方をしていると思えますか	404	2.50	1.01
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えていきますか	404	2.33	0.98
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか	404	2.81	0.92
Q22	毎日の生活は、充実していますか	404	2.43	0.89
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度実現できると思えますか	404	2.83	0.90
Q24	ご自分の希望を実現するために、なにか努力をしていますか	404	2.69	0.93

## 第6節 全項目の度数分布とヒストグラム

全観測変数 24 項目の度数分布とヒストグラムを、図 5-6-1 ~ 図 5-6-24 に示した。

図 5-6-1 趣味の程度

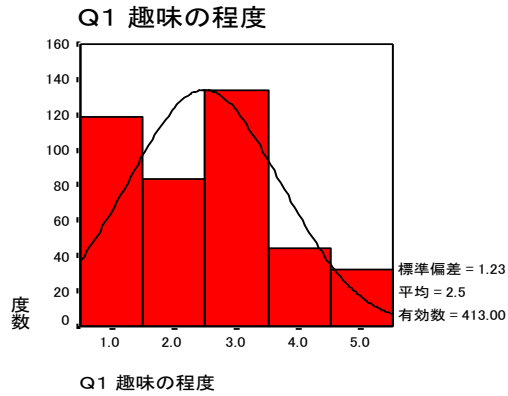


図 5-6-2 現在の健康

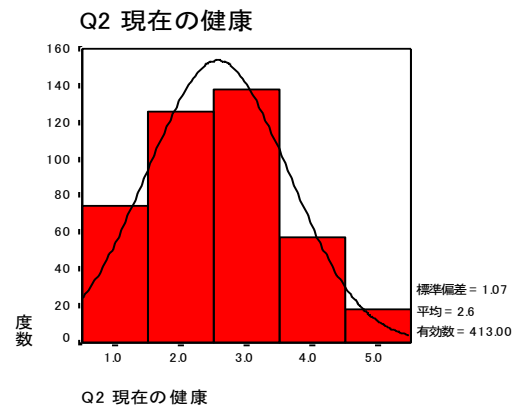


図 5-6-3 世に役立つ

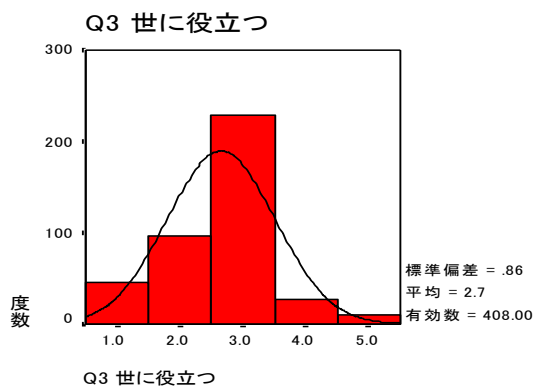


図 5-6-4 集まりに参加

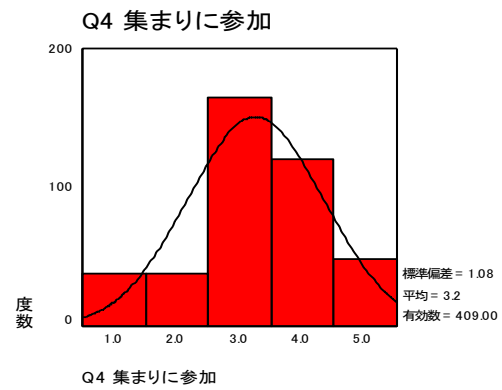


図 5-6-5 生活の楽しみ

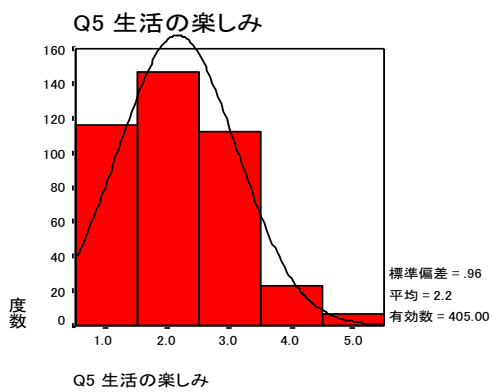


図 5-6-6 人との出会い

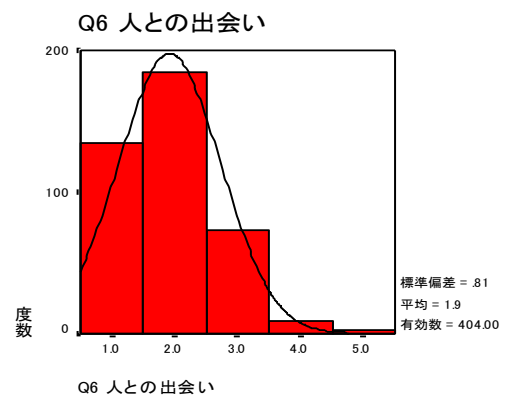


図 5 - 6 - 7 一緒に過ごす

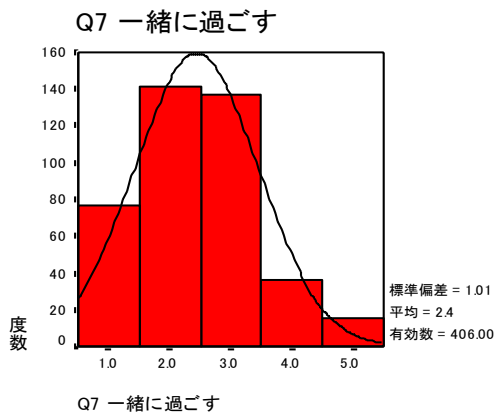


図 5 - 6 - 8 何か手伝い

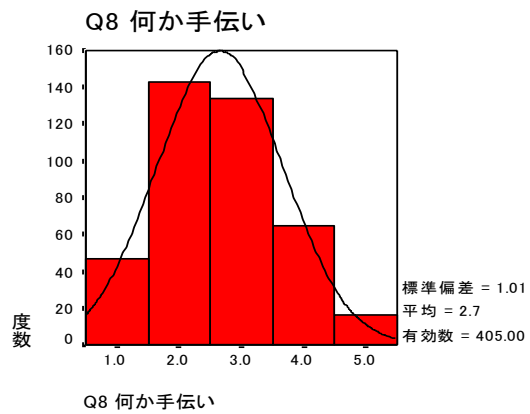


図 5 - 6 - 9 幸福な生活

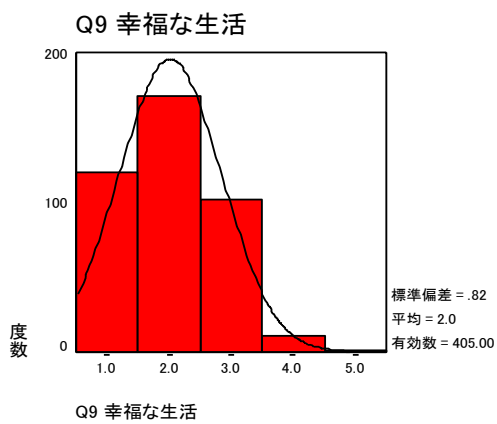


図 5 - 6 - 10 能力を生かす

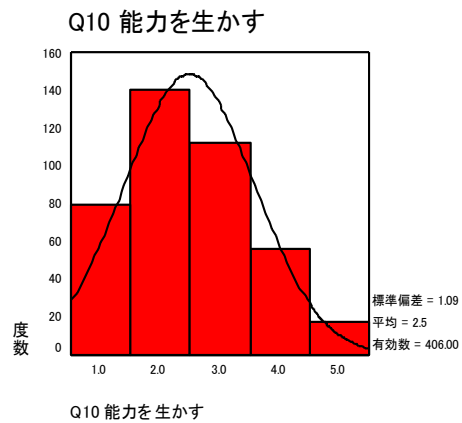


図 5 - 6 - 11 希望の生活

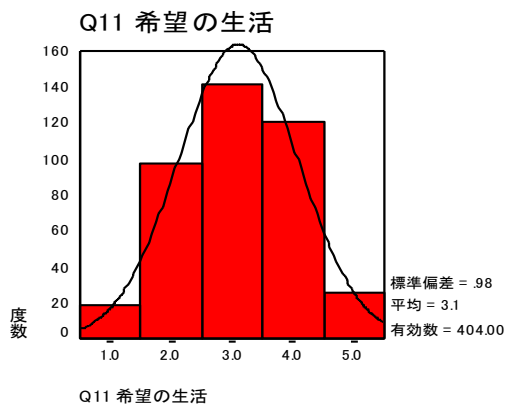


図 5 - 6 - 12 優れた能力

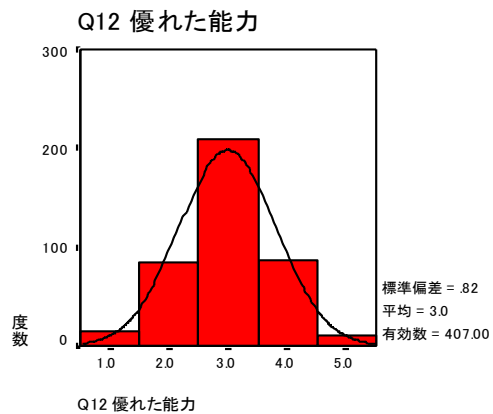


図 5 - 6 - 13 趣味の生活

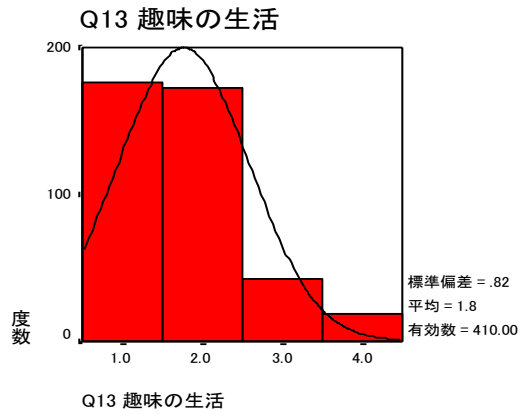


図 5 - 6 - 14 目標の生活

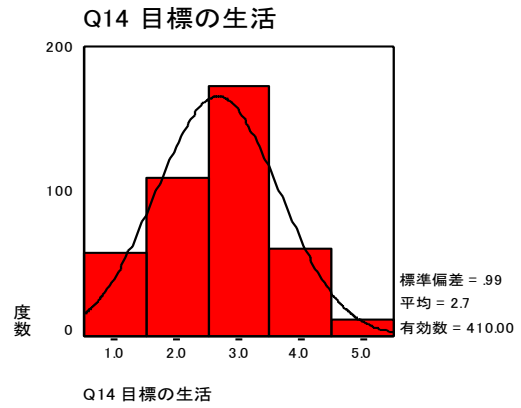


図 5 - 6 - 15 自由にできる

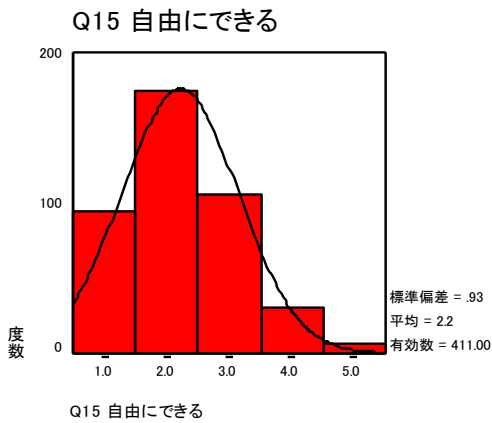


図 5 - 6 - 16 生きる意味

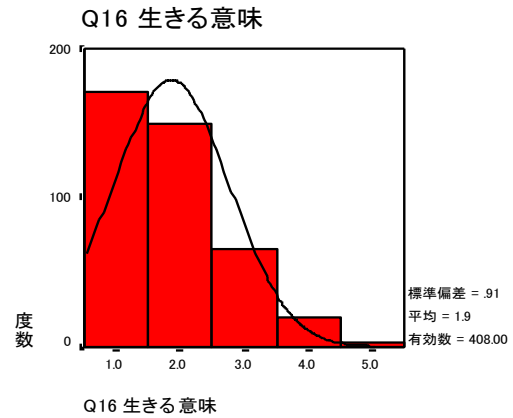


図 5 - 6 - 17 自分の可能性

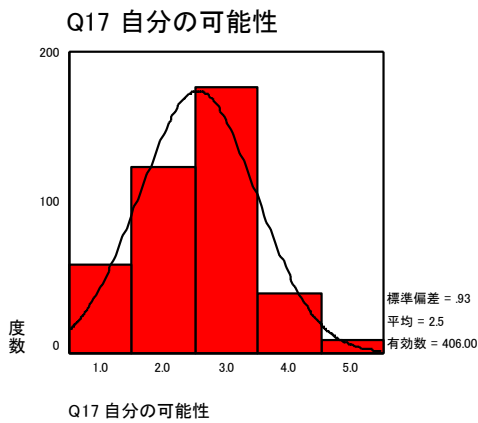


図 5 - 6 - 18 自分で処理

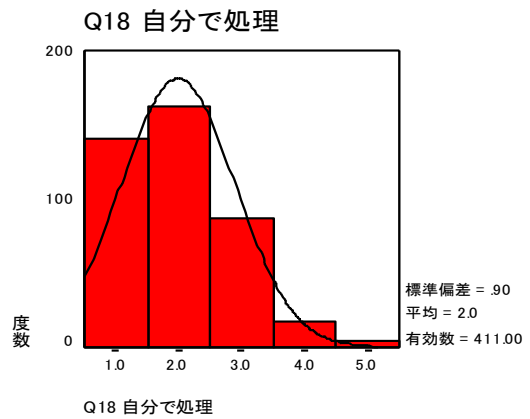


図 5 - 6 - 19 積極的生き方

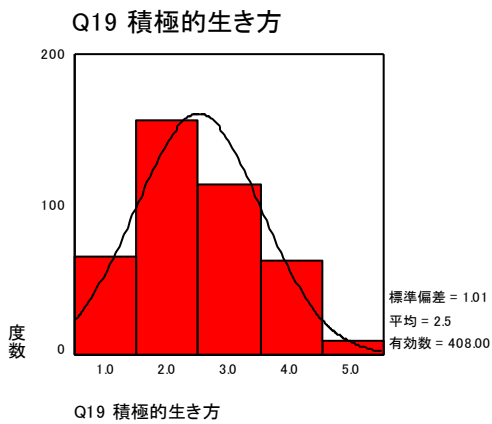


図 5 - 6 - 20 自分の意志

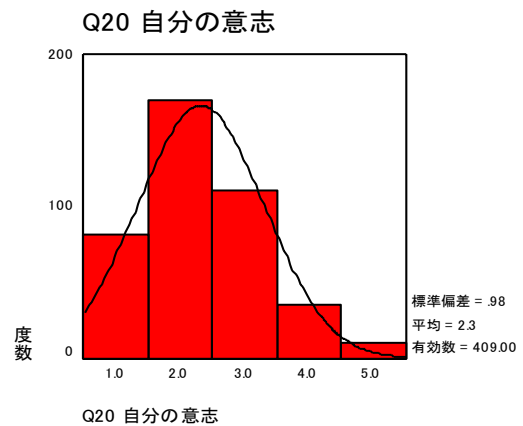


図 5 - 6 - 21 将来の生活

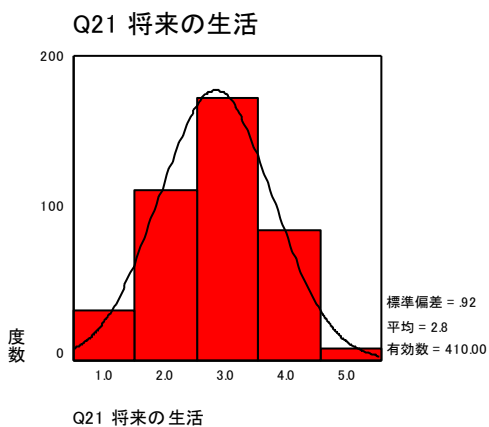


図 5 - 6 - 22 生活の充実

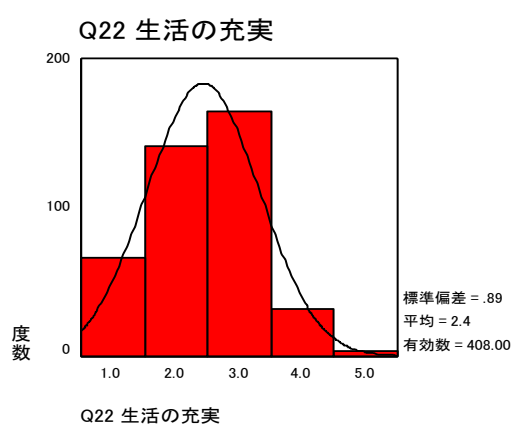


図 5 - 6 - 23 やりたいこと

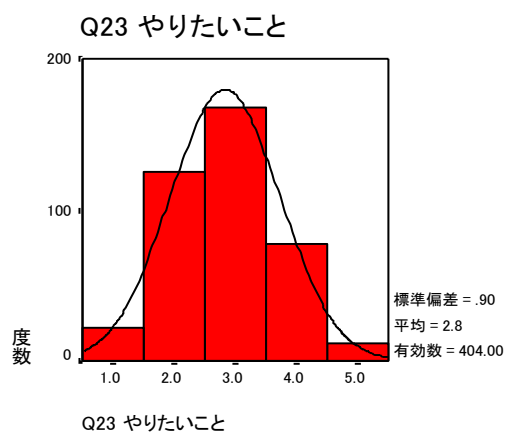
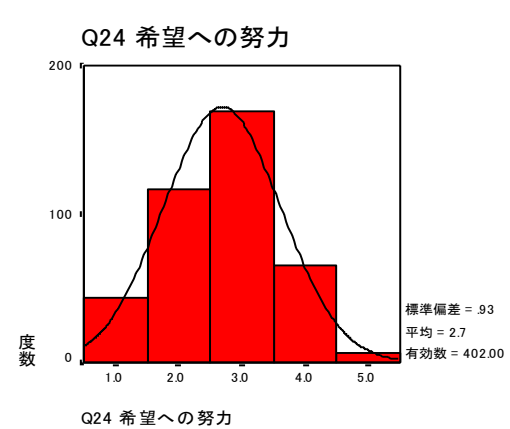


図 5 - 6 - 24 希望への努力



上記 24 項目のヒストグラムを点検した結果、度数分布に偏りのある項目が 3

項目（Q1、Q13、Q16）あることが判明した。

しかし、Q1の「現在、どの程度趣味に取り組んでいますか」は、かなり右下がりの形であるが、得点1の度数が中央値3の度数(32.4%)より少なく(28.8%)、逆L字型ではないので、項目分析の対象として残すこととした。

Q13の「趣味のある生活は大切だと思いますか」は第五選択肢を選んだケースが少なく、しかも第一と第二選択肢にケースが集中し、正規分布からかけ離れているので、以降の分析から除外することとした。

Q16の、「あなたは生きていることに大切な意味があると思いますか」は、第一選択肢から第四選択肢に向かって、直線的に下がっており、正規分布からかけ離れているが、自己実現の基本的質問項目で重要であることから、この段階では除外せず、採否の決定を後に伸ばした。

観測変数Q11「希望の生活」は、質問の仕方により、得点の配点が逆になっていたため、集計の段階で、逆転して得点を計算した。24観測変数の中で逆転の必要がある該当項目は、Q11の1項目のみであった。図5-6-11 「Q11 希望の生活」は、逆転を終えた後の分布である。

図5-6-25 Q1 趣味の程度

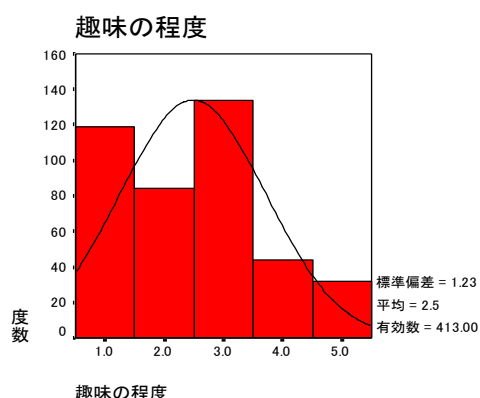
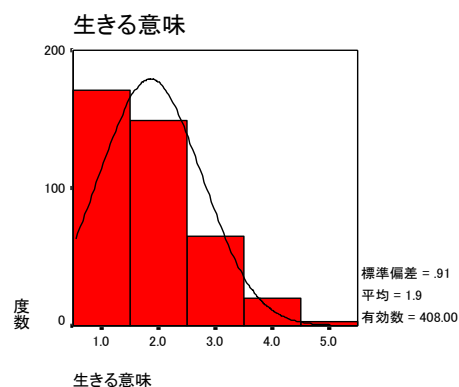


図5-6-26 Q16 生きる意味



## 第7節 信頼性分析による自己実現項目の選定

本調査で、自己実現項目を24観測変数から17観測変数まで削減した各ステップの信頼性分析及び、因子分析による項目分析について述べる。

本論文は自己実現の尺度開発が目的であり、項目削減の最初に信頼性分析を行うこととした。

信頼性分析は、削減する項目が多く尺度として因子が多数抽出される可能性があり、且つ因子の前提が不明確でどのような下位尺度のスケールを開発するのかが明らかでなく、因子の命名がうまく行かないと予想される場合に適している。

本論文では、基本概念に基づく74項目の原案文を出発点とし、ヒヤリングを行い63項目に削減し、さらに類似し、内容が重複した質問を減らしたが、50項目と多くの項目をプリテスト調査項目に選定した。

また、本尺度開発は先行研究がなく、仮定すべき因子構造がはっきりせず、プリテストの項目が50項目と多く(図4-3-1)、因子が数多く抽出され、因子の命名がうまく行かないことが予想される。つまり、項目が少なく因子の前提が明確な場合に適する因子分析を最初に用いる方法は適切ではないといえる。プリテストの結果、不適切な項目を削除し、質問項目を50項目から24項目に削減した。尺度として重要で必要な項目が除去されないよう重要だと思われる項目を多めに残し、24項目で本調査を実施した。

本調査の結果、信頼性分析を行い、**redundant**な項目や遊離した項目を見つけ削除した。次に、項目数を少なくした段階で、残された項目で因子分析を行い、遊離した項目及び因子負荷量が0.4以下の項目を削除することとした。

項目削減の順序を具体的に説明すると、まず、(1)観測変数のバラツキが大きく度数分布が正規分布を示さない質問項目を削除する。次に(2)信頼性分析を行い、I-T相関と信頼性係数の値から削除項目を見出し削除する。つまり、I-T相関が最も低い項目(項目を削除した時、クロンバックの $\alpha$ 係数が最も高い項目)を削除する。相関係数(I-T相関)の最も低い項目は、項目全体の全ての項目との相関が低く、遊離した項目といえる。

それでも項目選定ができない場合は、(3)全ての観測変数相互の相関係数を調べ、最も相関係数の高い一組の2つの項目を選び、その一方を削除する。次に、

ある程度項目数を削減した段階で、(4) 因子分析を行い、スケールとして望ましい下位尺度（因子構造）の確認、抽出された因子に合理的で適切な命名ができることを確認する。これで、最終的に必要な尺度項目が選定されることとなる。

まず、最初に前節で説明した度数分布の分析作業の結果、正規分布から外れていることが明らかなQ13「趣味の生活」（図5-6-13）1観測変数を最初に削除し、23観測変数とした。

1) 削除後の23観測変数の信頼性分析を行ったところ、 $\alpha$ 係数は0.9400であった。

IT関連の最も低い観測変数はQ4「集まりに参加」であり、IT相関=0.2738で、削除後の $\alpha$ 係数は、0.9430であった。（表5-7-1A）

表5-7-1A 信頼性分析 23項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases = 379.0					
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	56.9420	208.5098	14.4399	23	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	54.4960	185.5205	.6411	.4995	.9374
Q2	54.4142	190.1057	.6043	.4374	.9376
Q3	54.3245	193.6325	.6027	.4776	.9377
<b>Q4</b>	<b>53.6913</b>	<b>198.9494</b>	<b>.2738</b>	<b>.2137</b>	<b>.9430</b>
Q5	54.8153	188.3309	.7407	.6188	.9356
Q6	55.0449	194.1805	.6181	.5086	.9375
Q7	54.5277	189.3451	.6506	.5271	.9369
Q8	54.3166	190.5185	.6240	.4695	.9373
Q9	54.9420	197.6104	.4478	.3083	.9396
Q10	54.4776	185.8586	.7302	.6110	.9356
Q12	53.9472	194.6586	.5812	.4229	.9380
Q14	54.3061	188.5516	.7094	.6189	.9360
Q15	54.7493	193.4423	.5567	.4224	.9383
Q16	55.0923	193.0470	.5899	.4314	.9378
Q17	54.4037	190.4107	.6634	.5366	.9367
Q18	54.9736	194.6713	.5291	.3837	.9386
Q19	54.4670	185.7469	.7865	.6956	.9348
Q20	54.6121	189.8677	.6560	.5664	.9368
Q21	54.1504	189.3715	.7120	.5950	.9360
Q22	54.5251	188.9114	.7595	.6455	.9354
Q23	54.1187	190.3959	.7108	.5966	.9362
Q24	54.2665	189.7727	.6950	.5933	.9363
RQ11	54.0607	196.8455	.3901	.2457	.9407
Reliability Coefficients			23 items		
Alpha = .9400			Standardized item alpha = .9410		

しかし、Q4は重要項目であり、残しておく必要がある。次の手順として、



23変数の中で相関係数の最も高い観測変数を調べると、Q22「生活の充実」とQ19「積極的生き方」の相関係数が0.6697で最も高く、Q22は重要度が低いので削除した。削除後の観測変数の数は、22変数となった。(表5-7-2B)

表5-7-2B 相関係数行列 23項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q18	Q19	Q20	Q21	Q22
Q18	1.0000				
Q19	.4948	1.0000			
Q20	.4188	.6632	1.0000		
Q21	.3834	.6508	.5658	1.0000	
Q22	.4554	.6697	.6367	.5989	1.0000
Q23	.4600	.6108	.5848	.5814	.6418
Q24	.3338	.6053	.4451	.5850	.5459
RQ11	.2862	.3451	.2926	.2455	.4110
	Q23	Q24	RQ11		
Q23	1.0000				
Q24	.5848	1.0000			
RQ11	.3735	.2012	1.0000		

2) 次に、22観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$ 係数は0.9366であった。

IT 相関のもっとも低い観測変数は再度Q4「集まりに参加」IT 相関=0.2827であった。(表5-7-3A)

表5-7-3A 信頼性分析 22項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases = 381.0					
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	54.6378	193.1158	13.8966	22	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	52.1890	170.7116	.6465	.5044	.9335
Q2	52.1076	175.0700	.6115	.4445	.9338
Q3	52.0131	178.3919	.6157	.4881	.9338
Q4	51.3806	183.6100	.2827	.2172	.9397
Q5	52.5066	173.4717	.7413	.6123	.9316
Q6	52.7297	178.8715	.6265	.5079	.9337
Q7	52.2283	175.2925	.6260	.4872	.9335
Q8	52.0079	175.4868	.6325	.4740	.9334
Q9	52.6299	182.0443	.4664	.3246	.9358
Q10	52.1680	171.0770	.7354	.6167	.9316
Q12	51.6404	179.7309	.5839	.4245	.9342
Q14	51.9948	173.7579	.7115	.6199	.9321
Q15	52.4357	178.3412	.5612	.4191	.9345
Q16	52.7795	177.7986	.5995	.4446	.9339
Q17	52.0945	175.3647	.6723	.5434	.9328
Q18	52.6588	179.3991	.5373	.3971	.9349
Q19	52.1549	171.1207	.7855	.6943	.9308

Q20	52.3123	175.9996	.6226	.5168	.9336
Q21	51.8425	174.8015	.7080	.5923	.9322
Q23	51.8084	175.6185	.7096	.5939	.9323
Q24	51.9606	175.0800	.6946	.5883	.9324
RQ11	51.7507	181.7508	.3930	.2364	.9373
Reliability Coefficients	22 items				
Alpha =	.9366				
	Standardized item alpha = .9375				

しかし、質問項目 Q 4 は、「地域のおまつりや、老人クラブなどの集まりに参加したいと思いませんか」であり、第 3 章の自己実現の構成概念の大項目「他者との関係性」の下位尺度である「健康な生活」の小項目に所属する「社会的要因」を構成する 2 つの質問項目 Q 3 と Q 4 の一方の質問項目の 1 つである。つまり、自己実現概念の「他者の協力を得ながら、自由に生き生きと意欲的に生きている状態」の実践的生活場面を評価するの 1 つの質問項目であるといえる。よって、自己実現尺度項目として重要であり、残しておく必要があるといえる。

よって、次の手順として、22 観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べると、Q 1 9「積極的生き方」と Q 1 4「目標の生活」の相関係数が 0.6623 でもっとも高く、重要度が低い質問項目 Q 1 9 を削除した。削除後の観測変数の数は、21 変数となった。(表 5-7-3B)

表 5-7-3B 相関係数行列 22 項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q12	Q14	Q15	Q16	Q17
Q12	1.0000				
Q14	.4446	1.0000			
Q15	.3844	.3628	1.0000		
Q16	.3281	.4639	.3406	1.0000	
Q17	.4499	.5269	.3599	.5162	1.0000
Q18	.3139	.3474	.4823	.4137	.3481
Q19	.4969	.6623	.4804	.5126	.5153
Q20	.3784	.5027	.4490	.3874	.4110
Q21	.4336	.6138	.3613	.5106	.6007
Q23	.4003	.5763	.5174	.4044	.5079
Q24	.4601	.6325	.3244	.4463	.5920
RQ11	.1811	.2642	.2735	.2511	.2587

3) 次に、削除後の 21 観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$  係数は 0.9308 であった。IT 相関のもっとも低い観測変数は、再度 Q 4「集まりに参加」IT 相関=0.2950 であった。(表 5-7-4A)

表 5-7-4A 信頼性分析 21項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases =		383.0			
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	52.0862	171.4611	13.0943	21	
Item-total Statistics	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	49.6371	150.4727	.6436	.5000	.9271
Q2	49.5640	154.4350	.6098	.4350	.9275
Q3	49.4648	157.4169	.6219	.4915	.9274
<b>Q4</b>	<b>48.8355</b>	<b>162.0854</b>	<b>.2950</b>	<b>.2168</b>	<b>.9340</b>
Q5	49.9530	153.0868	.7368	.6069	.9251
Q6	50.1775	157.9422	.6302	.5050	.9273
Q7	49.6789	154.6217	.6291	.4856	.9271
Q8	49.4595	154.8563	.6311	.4648	.9271
Q9	50.0836	160.9459	.4688	.3227	.9298
Q10	49.6214	150.8327	.7302	.6120	.9250
Q12	49.0940	158.7555	.5847	.4222	.9280
Q14	49.4439	153.4622	.7027	.6058	.9257
Q15	49.8903	157.5115	.5606	.4195	.9284
Q16	50.2324	157.0532	.5981	.4403	.9277
Q17	49.5431	154.7462	.6731	.5401	.9263
Q18	50.1097	158.6319	.5327	.3841	.9288
Q20	49.7676	155.5453	.6116	.4799	.9274
Q21	49.2924	154.3959	.7006	.5825	.9259
Q23	49.2611	154.9788	.7072	.5934	.9258
Q24	49.4125	154.4995	<b>.6918</b>	<b>.5858</b>	<b>.9260</b>
RQ11	49.2010	160.9464	.3817	.2256	.9317
Reliability Coefficients	21 items				
Alpha =	<b>.9308</b>				
	Standardized item alpha = .9321				

しかし、先の表 5-7-3 で行った説明と同様に、Q4 は自己実現尺度として重要で残したい質問項目である。よって、次の手順として 21 観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べると、Q14 「目標の生活」と Q24 「希望への努力」の相関係数が 0.6327 ともっとも高く、重要度が低いので Q24 を削除した。削除後の観測変数の数は、20 変数となった。(表 5-7-4B)

表 5-7-4B 相関係数行列 21項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q12	<b>Q14</b>	Q15	Q16	Q17
Q12	1.0000				
Q14	.4450	1.0000			
Q15	.3880	.3619	1.0000		
Q16	.3308	.4632	.3447	1.0000	
Q17	.4498	.5276	.3583	.5148	1.0000
Q18	.3180	.3485	.4830	.4147	.3490
Q20	.3823	.5010	.4540	.3914	.4091
Q21	.4352	.6144	.3615	.5105	.6012
Q23	.4081	.5764	.5185	.4058	.5080
<b>Q24</b>	<b>.4660</b>	<b>.6327</b>	.3265	.4469	.5921
RQ11	.1712	.2585	.2732	.2508	.2527

4) 次に、削除後の20観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$ 係数は0.9258であった。IT相関のもっとも低い観測変数は、再度Q4「集まりに参加」IT相関=0.2947であった。(表5-7-5A)

表5-7-5A 信頼性分析 21項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases =		385.0			
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	49.4571	154.0821	12.4130	20	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	47.0052	134.2708	.6417	.4956	.9215
Q2	46.9299	137.9404	.6093	.4344	.9219
Q3	46.8260	140.7847	.6134	.4907	.9219
Q4	46.2026	145.1672	.2947	.2180	.9292
Q5	47.3221	136.6200	.7404	.6057	.9192
Q6	47.5481	141.2640	.6318	.5029	.9217
Q7	47.0494	138.0522	.6331	.4837	.9214
Q8	46.8234	138.3593	.6264	.4594	.9215
Q9	47.4519	144.1181	.4680	.3236	.9246
Q10	46.9896	134.6093	.7287	.6122	.9192
Q12	46.4675	142.1923	.5764	.4109	.9227
Q14	46.8104	137.2634	.6915	.5853	.9202
Q15	47.2571	140.7019	.5678	.4106	.9228
Q16	47.6026	140.4901	.5961	.4381	.9222
Q17	46.9117	138.4557	.6641	.5251	.9208
Q18	47.4805	141.8857	.5352	.3833	.9234
Q20	47.1377	139.0305	.6108	.4788	.9219
Q21	46.6597	138.0688	.6930	.5777	.9202
Q23	46.6364	138.7424	.6933	.5604	.9204
RQ11	46.5740	144.0264	.3848	.2202	.9266
Reliability Coefficients	20 items				
Alpha =	.9258				
	Standardized item alpha = .9272				

しかし、先の表5-7-3で行った説明と同様に、Q4は自己実現尺度として重要で残したい質問項目である。よって、次の手順として、20観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べるとQ21「将来の生活」とQ14「目標の生活」の相関係数が0.6162でもっとも高く、重要度が低いのでQ14を削除した。削除後の観測変数の数は、19変数となった。(表5-7-5B)

表5-7-5B 相関係数行列 20項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q12	Q14 削除	Q15	Q16	Q17
Q12	1.0000				
Q14	.4385	1.0000			
Q15	.3838	.3642	1.0000		
Q16	.3296	.4626	.3447	1.0000	

Q17	.4471	.5281	.3596	.5149	1.0000
Q18	.3173	.3477	.4822	.4147	.3489
Q20	.3823	.4987	.4536	.3912	.4090
Q21	.4293	.6162	.3634	.5099	.6014
Q23	.4093	.5694	.5122	.4041	.5043
RQ11	.1703	.2571	.2706	.2502	.2513

次に、Q 1 4 削除後の 1 9 観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$  係数は 0.9202 であった。IT 関連のもっとも低い観測変数は、再度 Q 4 「集まりに参加」 IT 相関=0.3002 であった。(表 5-7-6 A)

表 5-7-6 A 信頼性分析 1 9 項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases = 385.0					
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	46.8104	137.2634	11.7159	19	
Item-total Statistics	Scale	Scale	Corrected	Squared	Alpha
	Mean	Variance	Item-	Multiple	if Item
	if Item	if Item	Total	Correlation	Deleted
	Deleted	Deleted	Correlation	Correlation	Deleted
Q1	44.3584	118.7045	.6357	.4856	.9153
Q2	44.2831	122.0629	.6071	.4338	.9157
Q3	44.1792	124.7621	.6103	.4802	.9157
Q4	43.5558	128.6642	.3002	.2103	.9237
Q5	44.6753	120.8396	.7379	.6031	.9126
Q6	44.9013	125.0996	.6353	.5021	.9154
Q7	44.4026	122.0693	.6358	.4830	.9149
Q8	44.1766	122.3750	.6283	.4575	.9151
Q9	44.8052	127.7979	.4703	.3202	.9186
Q10	44.3429	119.1530	.7169	.5763	.9128
Q12	43.8208	126.0746	.5739	.4106	.9166
Q15	44.6104	124.5457	.5715	.4092	.9165
Q16	44.9558	124.4902	.5926	.4337	.9160
Q17	44.2649	122.6119	.6590	.5236	.9145
Q18	44.8338	125.6754	.5384	.3792	.9172
Q20	44.4909	123.1672	.6049	.4748	.9157
Q21	44.0130	122.3722	.6816	.5582	.9140
Q23	43.9896	122.9166	.6863	.5508	.9140
RQ11	43.9273	127.7030	.3864	.2184	.9209
Reliability Coefficients	19 items				
Alpha = .9202	Standardized item alpha = .9218				

しかし、先の表 5-7-3 で行った説明と同様に、Q 4 は自己実現尺度として重要で残したい質問項目である。

よって次の手順として、1 9 項目の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べることとし、Q 2 1 「将来の生活」と Q 2 3 「やりたいこと」の相関係数が 0.5785 ともっとも高い値を示し、削除対象となった。

Q 21 の質問項目「ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか」は、大項目「個人の生活」の中項目「生きている喜び」に所属する小項目「創造性」

のただ一つの質問項目である。また Q23 の質問項目「ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか」も、小項目「成長」の唯一の質問項目である。

Q21 を削除すると「創造性」の質問項目は消滅する。同様に、Q23 も削除すると「成長」の質問項目は消滅する。このような理由から自己実現尺度項目として、Q21, Q23 は重要度が高く、残しておく必要のある項目といえる。(表 5-7-6B)

表 5-7-6B 相関係数行列 19項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q12	Q15	Q16	Q17	Q18
Q12	1.0000				
Q15	.3838	1.0000			
Q16	.3296	.3447	1.0000		
Q17	.4471	.3596	.5149	1.0000	
Q18	.3173	.4822	.4147	.3489	1.0000
Q20	.3823	.4536	.3912	.4090	.3986
Q21	.4293	.3634	.5099	.6014	.3890
Q23	.4093	.5122	.4041	.5043	.4723
RQ11	.1703	.2706	.2502	.2513	.2930
	Q20	Q21	Q23	RQ11	
Q20	1.0000				
Q21	.5548	1.0000			
Q23	.5678	.5785	1.0000		
RQ11	.2796	.2444	.3713	1.0000	

そこで、次の手順として、因子分析を行い、どの因子にも属さない無所属の因子の存在の有無を調べることにした。

## 第 8 節 因子分析による項目選定

前節までに説明した項目分析作業を継続して、因子分析による無所属の因子を見出し、19 観測変数から 18 観測変数への項目削減の候補とするため、因子分析（主成分分析、バリマックス回転、）を行った。慎重に確認を行うため、抽出の基準の因子数の指定を「6」、「5」、「4」の 3 種類を指定し分析を行った。

分析結果は表 5-8-1～3 に示す通りである。それぞれの結果が示すように、観測変数 Q11 「希望の生活」がどの因子にも所属せず遊離していた。そこで Q11 を削除することとした。削除後の観測変数の数は 18 観測変数となった。

表 5-8-1 因子分析（バリマックス回転, 因子数 6）19 項目

		成分					
		1	2	3	4	5	6
Q21	将来の生活	<u>.717</u>	.172	.178	.272	.091	.158
Q20	自分の意志	<u>.678</u>	.107	.292	.103	.010	.264
Q12	優れた能力	<u>.608</u>	.485	.073	.087	-.003	-.157
Q23	やりたいこと	<u>.589</u>	.195	.438	.051	.137	.301
Q10	能力を生かす	<u>.589</u>	.504	.134	.194	.033	.119
Q17	自分の可能性	<u>.574</u>	.215	.198	.401	.150	.031
Q8	何か手伝い	<u>.497</u>	.378	.101	.217	.334	-.016
Q1	趣味の程度	.243	<u>.743</u>	.216	.047	.116	.142
Q7	一緒に過ごす	.217	<u>.640</u>	.107	.163	.221	.319
Q2	現在の健康	.150	<u>.629</u>	.436	.215	-.041	.033
Q5	生活の楽しみ	.377	<u>.493</u>	.164	.293	.130	.442
Q18	自分で処理	.205	.145	<u>.798</u>	.169	.007	.124
Q15	自由にできる	.262	.282	<u>.685</u>	.035	.092	.128
Q9	幸福な生活	.179	.157	.040	<u>.841</u>	.021	.021
Q16	生きる意味	.415	.032	.266	<u>.561</u>	.118	.213
Q6	人との出会い	.128	.424	.117	<u>.514</u>	.357	.285
Q4	集まりに参加	.075	.092	.021	.076	<u>.927</u>	.040
Q3	世に役立つ	.326	.365	.294	.366	<u>.386</u>	-.250
Q11	希望の生活	.139	.160	.168	.078	-.004	<u>.773</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 11 回の反復で回転が収束した。

表 5-8-2 因子分析（バリマックス回転, 因子数 5）19 項目

回転後の成分行列(a)

		成分				
		1	2	3	4	5
Q1	趣味の程度	.742	.055	.220	.158	.252
Q12	優れた能力	.660	.328	.231	-.032	-.164
Q10	能力を生かす	.626	.402	.296	.007	.120
Q2	現在の健康	.609	.122	.336	.070	.181
Q7	一緒に過ごす	.605	.169	.136	.243	.415
Q5	生活の楽しみ	.495	.374	.265	.128	.484
Q8	何か手伝い	.486	.391	.228	.311	-.014
Q9	幸福な生活	.140	.762	-.042	.123	.150
Q16	生きる意味	.085	.652	.347	.133	.205
Q17	自分の可能性	.342	.589	.336	.138	.011
Q21	将来の生活	.343	.572	.424	.021	.066
Q6	人との出会い	.350	.434	.072	.422	.412
Q18	自分で処理	.155	.127	.753	.086	.145
Q15	自由にできる	.311	.047	.689	.139	.141
Q23	やりたいこと	.314	.288	.649	.077	.204
Q20	自分の意志	.268	.406	.554	-.075	.135
Q4	集まりに参加	.069	.101	.058	.895	.041
Q3	世に役立つ	.433	.391	.267	.450	-.167
Q11	希望の生活	.084	.116	.285	-.046	.740

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 7 回の反復で回転が収束した。

表 5-8-3 因子分析（バリマックス回転, 因子数 4）19 項目

回転後の成分行列(a)

		成分			
		1	2	3	4
Q1	趣味の程度	.677	.011	.388	.214
Q12	優れた能力	.669	.303	.135	-.162
Q2	現在の健康	.652	.116	.219	.202
Q10	能力を生かす	.643	.379	.202	.125
Q15	自由にできる	.624	.151	.032	.305
Q23	やりたいこと	.591	.372	.033	.348
Q18	自分で処理	.538	.257	-.081	.347
Q20	自分の意志	.513	.473	-.081	.264
Q7	一緒に過ごす	.490	.114	.484	.347
Q8	何か手伝い	.483	.382	.397	-.026
Q5	生活の楽しみ	.471	.346	.340	.465
Q3	世に役立つ	.470	.405	.449	-.161
Q9	幸福な生活	.029	.712	.279	.080
Q16	生きる意味	.212	.689	.137	.263
Q17	自分の可能性	.434	.607	.190	.051
Q21	将来の生活	.490	.603	.073	.139
Q4	集まりに参加	.013	.119	.772	-.011
Q6	人との出会い	.226	.388	.589	.332
Q11	希望の生活	.151	.126	.067	.776

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 9 回の反復で回転が収束した。

1) 次のステップとして、観測変数 Q 1 1 を削除後 1 8 観測変数の信頼性分析を



行った結果、 $\alpha$ 係数は0.9207であった（表5-8-4）。IT関連のもっとも低い観測変数は、再度Q4「集まりに参加」IT相関=0.3035であった。

表5-8-4 信頼性分析 18項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases = 386.0					
Statistics for Scale	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
	43.9378	127.4143	11.2878	18	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	41.4845	109.5647	.6350	.4852	.9160
Q2	41.4067	112.7770	.6055	.4345	.9163
Q3	41.3057	115.2050	.6200	.4779	.9161
<b>Q4</b>	<b>40.6865</b>	<b>119.0158</b>	<b>.3035</b>	<b>.2102</b>	<b>.9247</b>
Q5	41.8057	111.7933	.7270	.5915	.9132
Q6	42.0311	115.7445	.6319	.4989	.9159
Q7	41.5285	112.7849	.6357	.4805	.9155
Q8	41.3031	112.9962	.6326	.4575	.9156
Q9	41.9301	118.2263	.4732	.3178	.9193
Q10	41.4689	110.0315	.7148	.5736	.9133
Q12	40.9482	116.5272	.5807	.4066	.9170
Q15	41.7383	115.2275	.5684	.4077	.9172
Q16	42.0829	115.1152	.5927	.4337	.9166
Q17	41.3912	113.2570	.6618	.5232	.9149
Q18	41.9585	116.3515	.5320	.3750	.9180
Q20	41.6166	113.8786	.6027	.4747	.9163
Q21	41.1399	113.0038	.6859	.5560	.9143
Q23	41.1166	113.7500	.6784	.5415	.9146
Reliability Coefficients		18 items			
Alpha = .9207		Standardized item alpha = .9223			

しかし、Q4はやはり重要な質問項目であり、削除したくない項目なので次の手順として、18観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べた。すると観測変数Q21「将来の生活」とQ17「自分の可能性」が相関係数0.6014でもっとも高く値であり、観測変数Q17が所属する同じ下位概念には観測変数

表5-8-5 相関係数行列 18項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
	Q12	Q15	Q16	Q17	Q18
Q12	1.0000				
Q15	.3837	1.0000			
Q16	.3296	.3446	1.0000		
Q17	.4470	.3592	.5149	1.0000	
Q18	.3168	.4807	.4145	.3496	1.0000
Q20	.3821	.4529	.3912	.4094	.3997
<b>Q21</b>	<b>.4293</b>	<b>.3632</b>	<b>.5100</b>	<b>.6014</b>	<b>.3889</b>
Q23	.4093	.5121	.4042	.5043	.4721

が2つ所属することがわかった(図5-1-1を参照)。そのため、重要度が低いQ17を削除することとした。削除後の観測変数の数は、17変数となった。(表5-8-5)

2) 次に、削除後の17観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$ 係数は0.9157であった。IT関連のもっとも低い観測変数は、再度Q4「集まりに参加」IT関連 $=0.2993$ となり、次の削除項目の候補となった。(表5-8-6)

表5-8-6 信頼性分析 17項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
n of Cases = 389.0					
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	41.4987	114.4620	10.6987	17	
Item-total Statistics					
	Scale	Scale	Corrected	Squared	Alpha
	Mean	Variance	Item-	Multiple	if Item
	if Item	if Item	Total	Correlation	Deleted
	Deleted	Deleted	Correlation	Correlation	Deleted
Q1	39.0386	97.4650	.6391	.4875	.9101
Q2	38.9614	100.4495	.6093	.4384	.9106
Q3	38.8612	103.0065	.6127	.4465	.9106
<b>Q4</b>	<b>38.2442</b>	<b>106.5304</b>	<b>.2993</b>	<b>.2092</b>	<b>.9203</b>
Q5	39.3599	99.7000	.7255	.5873	.9073
Q6	39.5861	103.3051	.6371	.5001	.9102
Q7	39.0771	100.3188	.6439	.4844	.9096
Q8	38.8535	100.5687	.6399	.4644	.9097
Q9	39.4833	105.7349	.4723	.3204	.9141
Q10	39.0180	97.8785	.7173	.5771	.9072
Q12	38.5039	104.2609	.5727	.3973	.9117
Q15	39.2956	102.7500	.5740	.4136	.9116
Q16	39.6350	102.7891	.5893	.4190	.9112
Q18	39.5167	103.8380	.5364	.3817	.9125
Q20	39.1748	101.5621	.6039	.4779	.9107
Q21	38.6941	100.9809	.6755	.5301	.9088
Q23	38.6761	101.6010	.6734	.5372	.9090
Reliability Coefficients		17 items			
<b>Alpha = .9157</b>		Standardized item alpha = .9175			

しかし、先の表5-7-3で行った説明と同様に、Q4は自己実現尺度として重要な質問項目であり残しておきたい項目である。よって次の手順として、17観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べると、観測変数Q12「優れた能力」とQ10「能力を生かす」の相関係数が0.5765でもっとも高かった。(表5-8-7)

表 5 - 8 - 7 相関係数行列 17 項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)

Correlation Matrix

	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
Q6	1.0000				
Q7	.5359	1.0000			
Q8	.4685	.4349	1.0000		
Q9	.4590	.2832	.3508	1.0000	
Q10	.4228	.4863	.5472	.3847	1.0000
Q12	.3424	.3913	.4354	.3017	.5765
Q15	.3476	.4127	.3499	.2365	.4026
Q16	.4250	.3892	.3965	.4143	.4694
Q18	.3235	.3302	.3303	.2119	.4029
Q20	.3761	.3953	.4547	.3049	.4829
Q21	.4048	.4284	.4586	.3724	.5251
Q23	.4003	.4109	.3999	.2838	.5372

しかし、観測変数 Q 1 2 と Q 1 0 はともに重要であり、削除することができない変数であり、項目数削除の作業は進展させず、17 観測変数を残した段階で終了し、次の確認の分析へ進むこととした。

## 第9節 因子分析による項目確定の最終確認

前節までに説明した項目分析作業により選定された17観測変数の最終の適否を確認するため、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った。抽出の基準の因子数に「6」、「5」、「4」をそれぞれ指定し、分析を行った。まず因子数「6」を指定し分析を行った結果、表5-9-1に示すように6因子が抽出された。回転後の成分行列から、第6因子に観測変数Q4「集まりに参加」が1因子のみ所属し、他の因子から遊離し、好ましくない結果となった。

次に因子数「5」を指定し分析を行ったところ、表4-9-2に示すように5因子が抽出された。回転後の成分行列から、第5因子に観測変数Q4「集まりに参加」の1観測変数のみが所属し、他の因子から遊離していた。

探索的因子分析を行う分析調査の目的は、同じ影響力を持つ共通の因子を発見し、自己実現17質問項目を複数の因子グループの領域にまとめ、潜在因子として命名することである。そのため、質問項目Q4が1項目だけ単独に、他の16質問項目から遊離して存在していることは、因子分析の目的からそぐわない結果となったことを証明しており、統計的に自己実現尺度の因子構造としてふさわしくない結果であるといえる。

表5-9-1 17尺度項目の因子分析（6因子）

		成分					
		1	2	3	4	5	6
Q7	一緒に過ごす	.758	.247	.158	.126	.131	.167
Q1	趣味の程度	.682	.100	.388	.291	-.001	.069
Q5	生活の楽しみ	.663	.439	.147	.156	.253	.093
Q6	人との出会い	.527	.192	.098	.133	.491	.327
Q20	自分の意志	.147	.739	.229	.245	.120	-.007
Q21	将来の生活	.247	.647	.313	.144	.248	.071
Q23	やりたいこと	.243	.619	.233	.416	.031	.125
Q12	優れた能力	.210	.287	.750	.074	.068	-.019
Q10	能力を生かす	.359	.386	.603	.161	.195	.006
Q8	何か手伝い	.185	.284	.570	.151	.241	.312
Q3	世に役立つ	.106	.013	.568	.374	.340	.388
Q18	自分で処理	.104	.291	.080	.780	.160	.009
Q15	自由にできる	.242	.345	.140	.651	.013	.083
Q2	現在の健康	.486	.002	.344	.547	.179	-.067
Q9	幸福な生活	.113	.111	.231	.062	.848	.019
Q16	生きる意味	.187	.479	.062	.221	.546	.110
Q4	集まりに参加	.154	.055	.086	.002	.060	.920

因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 8回の反復で回転が収束した。

表 5 - 9 - 2 17 尺度項目の因子分析 (5 因子)

回転後の成分行列(a)

		成分				
		1	2	3	4	5
子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化	Q18 自分で処理	.773	.148	.104	.104	.079
	Q15 自由にできる	.706	.282	.157	.028	.114
	Q23 やりたいこと	.675	.263	.270	.203	.081
	Q20 自分の意志	.603	.153	.285	.360	-.082
	Q7 一緒に過ごす	.195	.758	.151	.225	.155
	Q1 趣味の程度	.244	.709	.371	-.004	.106
	Q5 生活の楽しみ	.324	.659	.164	.401	.066
	Q2 現在の健康	.384	.528	.335	.051	.040
	Q6 人との出会い	.149	.516	.097	.512	.353
	Q12 優れた能力	.178	.231	.766	.136	-.018
	Q10 能力を生かす	.294	.375	.624	.287	.007
	Q8 何か手伝い	.234	.197	.579	.285	.322
	Q3 世に役立つ	.248	.134	.559	.211	.482
	Q9 幸福な生活	.019	.097	.256	.775	.101
	Q16 生きる意味	.398	.177	.103	.645	.107
	Q21 将来の生活	.449	.245	.358	.457	.013
	Q4 集まりに参加	.028	.142	.053	.095	.892

を伴わないハリマックス法

a 7 回の反復で回転が収束した。

次に、因子数「4」を指定し分析を行ったところ、表 5 - 9 - 3 に示すように 4 因子が抽出された。第 1 因子に 7 観測変数、第 3 因子に 2 観測変数が所属し、因子に所属する観測変数の数の差が大きく、ばらつきが見られる。特に、第 3 因子の所属観測変数は「2」と少なく、因子構造として貧弱であり、2 つの観測変

表 5 - 9 - 3 17 尺度項目の因子分析 (4 因子)

回転後の成分行列(a)

		成分			
		1	2	3	4
Q18	自分で処理	.726	.092	.183	.029
Q15	自由にできる	.716	.187	.076	.120
Q23	やりたいこと	.680	.286	.253	.095
Q20	自分の意志	.595	.272	.411	-.067
Q5	生活の楽しみ	.568	.310	.264	.378
Q2	現在の健康	.539	.448	.001	.214
Q21	将来の生活	.483	.369	.471	.084
Q12	優れた能力	.198	.783	.189	-.003
Q10	能力を生かす	.378	.676	.289	.113
Q8	何か手伝い	.203	.574	.347	.295
Q1	趣味の程度	.484	.541	-.111	.370
Q3	世に役立つ	.164	.533	.307	.385
Q9	幸福な生活	.046	.237	.744	.196
Q16	生きる意味	.422	.098	.632	.191
Q4	集まりに参加	-.044	.056	.129	.809
Q6	人との出会い	.317	.200	.397	.589
Q7	一緒に過ごす	.482	.337	.058	.501

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないハリマックス法

a 8 回の反復で回転が収束した。

数から構成される構成概念の領域があやふやで不明確となり、因子の解釈、命名が容易でない場合が多く、なるべく避けたい因子構造である。

以上の17項目に関する3モデルの因子分析による項目確認の結果をまとめると、6因子及び5因子モデルでは、観測変数Q4「集まりに参加」が無所属で遊離した結果であった。4因子モデルでは、第1因子に7項目、第2因子に5項目、第3因子に2項目、第4因子に3項目が所属し、4つの各因子に所属する観測変数の数の差が大きくアンバランスである。また、自己実現尺度として重要な「健康に関する因子」を構成する観測変数のQ2は7観測変数が所属する第1因子に所属し、第1因子を「健康に関する因子」とすることができない。つまり、図5-2-1の「健康な生活」に所属する他の観測変数は異なる別の因子に分散し所属したことなどにより「健康に関する因子」は存在しなくなる。無所属の遊離した因子は存在しないとはいえ、自己実現尺度の因子構造としては不適合であるといえる。

これらの分析結果から、6因子、5因子及び4因子の3モデルのいずれも、自己実現尺度の因子構造としては不適合であることが確認された。

つまり、先の表5-8-5において、18項目から17項目への項目削減にQ4の代わりにQ17を削除した結果、17項目における因子分析の結果、6因子、5因子、4因子モデルのいずれも不適合となった。

これらの分析結果から、17観測変数から元のQ17を残した18観測変数の段階（前節表5-8-4）へと開始時点に1つ戻り、再度項目分析を、別の条件でやり直すこととした。

18観測変数の段階で信頼性分析を行った結果から、すでに削除した観測変数Q17「人間の存在意義」は削除せず、元に戻しIT相関のもっとも低い観測変数Q4を先に削除し、それから前に進むこととした。（前節 表5-8-4）

1) 次の手順として、観測変数Q4を削除し残された17観測変数の信頼性分析を行った結果、 $\alpha$ 係数は0.9247であった（表5-9-4）。IT相関のもっとも低い観測変数は、Q9「幸福な生活」IT相関=0.4713であった。

表 5 - 9 - 4 信頼性分析 17 項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)					
Correlation Matrix					
n of Cases =		386.0			
Statistics for Scale	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
	40.6865	119.0158	10.9094	17	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Squared Multiple Correlation	Alpha if Item Deleted
Q1	38.2332	101.7741	.6343	.4841	.9207
Q2	38.1554	104.6771	.6146	.4303	.9207
Q3	38.0544	107.4490	.6060	.4600	.9208
Q5	38.5544	103.8944	.7285	.5914	.9176
Q6	38.7798	107.9592	.6178	.4865	.9206
Q7	38.2772	104.9593	.6312	.4782	.9201
Q8	38.0518	105.2545	.6233	.4486	.9203
<b>Q9</b>	<b>38.6788</b>	<b>110.1563</b>	<b>.4713</b>	<b>.3177</b>	<b>.9238</b>
Q10	38.2176	102.0824	.7215	.5730	.9176
Q12	37.6969	108.3936	.5865	.4056	.9213
Q15	38.4870	107.1076	.5750	.4077	.9215
Q16	38.8316	107.1274	.5924	.4321	.9211
Q17	38.1399	105.3154	.6627	.5232	.9193
Q18	38.7073	108.1089	.5436	.3704	.9223
Q20	38.3653	105.6714	.6162	.4673	.9205
Q21	37.8886	104.9928	.6913	.5560	.9186
Q23	37.8653	105.7480	.6819	.5379	.9190
Reliability Coefficients		17 items			
Alpha = .9247		Standardized item alpha = .9253			

しかし、観測変数 Q 9 「あなたは、ご自分の幸福な生活を希望しますか」は、当初の仮設の大項目「他者との関係性」に所属する中項目「他者への愛」の小項目「自分の幸福」を構成するただ 1 つの質問項目であり、自己実現尺度としてどうしても残しておきたい重要な質問項目である。よって、削除できないことから、次の手順として、17 観測変数の中でもっとも相関係数の高い観測変数を調べることにした（表 5 - 9 - 5）。その結果、観測変数 Q 2 1 「将来の生活」と Q 1 7 「自分の可能性」が相関係数 0.6014 でもっとも高かった。観測変数 Q 2 1 と Q 1 7 の相関関係の組み合わせは、前回までにすでに表 5 - 8 - 5 で抽出された項目分析と同じ結果を示した。

つまり、観測変数 Q 2 1 と Q 1 7 の同じ組み合わせとなった結果は、項目分析は 17 観測変数の段階で、収斂していると考えてよい。項目削除の作業は、観測変数 Q 4 を削除し、17 観測変数を残してここで終了することとした。

表 5 - 9 - 5 相関係数行列 18項目

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)

Correlation Matrix

	Q15	Q16	Q17	Q18	Q20
Q15	1.0000				
Q16	.3446	1.0000			
Q17	.3592	.5149	1.0000		
Q18	.4807	.4145	.3496	1.0000	
Q20	.4529	.3912	.4094	.3997	1.0000
Q21	.3632	.5100	.6014	.3889	.5549
Q23	.5121	.4042	.5043	.4721	.5678

2) 次に、選定された17観測変数の因子分析を行い、遊離した無所属の因子の存在の最終確認を行った。因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を、抽出の基準に因子数「6」を指定し行ったところ、表5-9-4に示すように6因子に収束した。遊離した因子はないが、因子数が多く、第5因子と第6因子は所属観測変数が「2」と少なく因子構造が貧弱な因子であり、良い因子構造といえない結果であった。

表 5 - 9 - 4 17尺度項目の因子分析（6因子バリマックス回転）

回転後の成分行列(a)

	成分					
	1	2	3	4	5	6
Q21 将来の生活	<u>.748</u>	.234	.298	.165	.121	.104
Q17 自分の可能性	<u>.667</u>	.138	.255	.078	.246	.381
Q16 生きる意味	<u>.614</u>	.176	.022	.232	.440	.083
Q23 やりたいこと	<u>.519</u>	.261	.301	.490	.006	.071
Q7 一緒に過ごす	.152	<u>.777</u>	.220	.168	.166	.086
Q5 生活の楽しみ	.427	<u>.664</u>	.177	.218	.205	.076
Q1 趣味の程度	.203	<u>.617</u>	.279	.174	-.058	.447
Q12 優れた能力	.210	.165	<u>.753</u>	.141	.058	.152
Q8 何か手伝い	.121	.235	<u>.647</u>	.162	.355	.127
Q10 能力を生かす	.354	.333	<u>.587</u>	.209	.127	.173
Q18 自分で処理	.221	.080	.050	<u>.776</u>	.140	.260
Q15 自由にできる	.079	.256	.248	<u>.748</u>	.098	.076
Q20 自分の意志	.452	.225	.424	<u>.461</u>	.111	-.258
Q9 幸福な生活	.230	.089	.169	.071	<u>.779</u>	.072
Q6 人との出会い	.100	.580	.167	.160	<u>.597</u>	.059
Q2 現在の健康	.208	.384	.150	.344	.053	<u>.592</u>
Q3 世に役立つ	.161	.064	.443	.154	.422	<u>.565</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 12回の反復で回転が収束した。

次に、抽出の基準に因子数を「5」及び「4」をそれぞれ指定し、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行ったところ、因子数を「5」及び「4」に指



表 5-9-5 17 尺度項目の因子分析 (5 因子)

回転後の成分行列(a)

	成分				
	1	2	3	4	5
Q20 自分の意志	<u>.709</u>	.172	.190	.260	.110
Q21 将来の生活	<u>.690</u>	.308	.204	.136	.264
Q23 やりたいこと	<u>.609</u>	.241	.234	.427	.077
Q17 自分の可能性	<u>.450</u>	.438	.136	.168	.405
Q12 優れた能力	.356	<u>.694</u>	.180	.089	.013
Q3 世に役立つ	.003	<u>.675</u>	.115	.291	.436
Q8 何か手伝い	.239	<u>.593</u>	.263	.107	.281
Q10 能力を生かす	<u>.438</u>	<u>.559</u>	.338	.174	.132
Q7 一緒に過ごす	.227	.182	<u>.779</u>	.146	.146
Q5 生活の楽しみ	.442	.154	<u>.650</u>	.189	.259
Q1 趣味の程度	.145	.427	<u>.631</u>	.287	-.017
Q6 人との出会い	.115	.148	<u>.602</u>	.131	.552
Q18 自分で処理	.251	.104	.080	<u>.797</u>	.177
Q15 自由にできる	.283	.156	.256	<u>.679</u>	.049
Q2 現在の健康	.059	.396	.408	<u>.513</u>	.123
Q9 幸福な生活	.135	.205	.116	.054	<u>.778</u>
Q16 生きる意味	.486	.070	.160	.220	<u>.567</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 7 回の反復で回転が収束した。

定したそれぞれの因子分析結果は両モデルともに、各因子のバランスの良い形に収束し、遊離した因子は存在せず、良い因子構造となった。(表 5-9-5、表 5-9-6)

表 5-9-6 17 尺度項目の因子分析 4 因子 (バリマックス回転)

回転後の成分行列(a)

	成分			
	1	2	3	4
Q23 やりたいこと	<u>.703</u>	.299	.222	.174
Q18 自分で処理	<u>.703</u>	.120	.210	.092
Q20 自分の意志	<u>.662</u>	.248	.124	.266
Q15 自由にできる	<u>.651</u>	.167	.348	.012
Q21 将来の生活	<u>.538</u>	.389	.128	.418
Q12 優れた能力	.265	<u>.723</u>	.168	.064
Q3 世に役立つ	.113	<u>.675</u>	.222	.313
Q8 何か手伝い	.174	<u>.617</u>	.275	.289
Q10 能力を生かす	.378	<u>.597</u>	.319	.204
Q17 自分の可能性	.366	<u>.496</u>	.123	.458
Q7 一緒に過ごす	.228	.185	<u>.753</u>	.218
Q1 趣味の程度	.267	.413	<u>.663</u>	-.013
Q6 人との出会い	.102	.159	<u>.610</u>	.556
Q5 生活の楽しみ	.403	.190	<u>.601</u>	.372
Q2 現在の健康	.352	.379	<u>.514</u>	.038
Q9 幸福な生活	.043	.244	.133	<u>.748</u>
Q16 生きる意味	.438	.139	.135	<u>.638</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 9 回の反復で回転が収束した。

これまでに分析した 3 モデルの因子分析の結果について説明する。4 因子モデルでは、5 因子モデルにおいて「健康に関する因子」に所属していた Q18、Q15、

Q2 の 3 つの質問項目が、Q18 は第 1 因子に所属し、Q15 は第 2 因子に、Q2 は第 3 因子へとそれぞれ異なる因子に分散して所属し、5 因子モデルの中項目「健康に関する因子」は成立していない。自己実現尺度の下位尺度として、先の図 3-2-1 の「健康に関する因子」は重要でどうしても必要な因子であり、このことから、4 因子モデルは、自己実現尺度の因子構造として不適合であるといえる。

6 因子モデルでは、第 5 因子と第 6 因子の所属観測変数が「2」と少なく、因子構造が貧弱であり、また、第 1 因子から順に 4 項目、3 項目、3 項目、2 項目、2 項目、と所属観測変数が 6 つの因子に分かれ、所属観測変数が少ない因子が多い。これらの理由から、17 質問項目の因子分析としては、6 因子モデルは因子数が多すぎ不適合であるといえる。

5 因子モデルでは、第 3 因子が「健康に関する因子」であり、因子数も第 1 因子から順に 4 項目、4 項目、3 項目、3 項目、2 項目とバランスよく観測変数が所属している。このような理由から、因子数「5」の 5 因子モデル（主成分分析、バリマックス回転、表 5-9-5）の分析結果は、3 モデルの中では因子構造が優れ、本調査前の仮説の自己実現 24 項目の概念の枠組み図の 7 つの中位概念との関連性（図 5-2-1）から、本研究の因子分析として採用することとした。

## 第10節 項目選定作業の総括

項目削除をまとめると、削除項目は Q13、Q22、Q19、Q24、Q14、Q11、Q4 の 7 項目となり、24 項目からの項目選定により自己実現尺度項目となる 17 項目が選定された。

一連の削除作業の概要を一覧表にし、表 5-10-7 に示した。

表 5-10-7 24項目からの項目削除の概要

No	候補 項目	表番号	IT関連	削除前 α 係数	削除後 α 係数	α 係数 増減	削除後 項目数	分析法
1	Q13	3-7-1	0.5695	0.9418	0.9400	0.0018	23	度数分布
2	Q22	3-7-2	0.7595	0.9400	0.9354	0.0046	22	相関係数
3	Q19	3-7-3	0.7855	0.9366	0.9308	0.0058	21	相関係数
4	Q24	3-7-4	0.6916	0.9308	0.9258	-0.0048	20	相関係数
5	Q14	3-7-5	0.6915	0.9258	0.9202	0.0056	19	相関係数
6	Q11	3-7-6	0.2502	0.9202	/	+0.0007	18	因子分析
7	Q4	3-8-2	0.3035	0.9207	0.9247	+0.0040	17	IT関連

表 5-10-8 自己実現尺度 17 項目のステートメント

観測変数名	自己実現尺度 17 項目のステートメント
Q1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか
Q2	同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか
Q3	世の中のために、役立つことをしたいですか
Q5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか
Q6	人との出会いは、楽しいと思いますか
Q7	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか
Q8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか
Q9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか
Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか
Q12	人より優れた能力が何かあると思いますか
Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか
Q16	あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えて入ますか
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか

最終的に選定された自己実現尺度 17 項目の各変数のステートメントを表 5-

10-8に示した。

選定された自己実現尺度 17 項目の信頼性分析を行った結果、クロンバックの  $\alpha$  係数は 0.9247、N = 386 であった。(表 5-10-9)

表 5-10-9 自己実現尺度 17 項目の信頼性分析  
RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)

N of Cases = 386.0					
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
Scale	61.3135	119.0158	10.9094	17	
Item-total Statistics					
	Scale	Scale	Corrected	Squared	Alpha
	Mean	Variance	Item-	Multiple	if Item
	if Item	if Item	Total	Correlation	Deleted
	Deleted	Deleted	Correlation	Correlation	Deleted
Q1	57.7668	101.7741	.6343	.4841	.9207
Q2	57.8446	104.6771	.6146	.4303	.9207
Q3	57.9456	107.4490	.6060	.4600	.9208
Q5	57.4456	103.8944	.7285	.5914	.9176
Q6	57.2202	107.9592	.6178	.4865	.9206
Q7	57.7228	104.9593	.6312	.4782	.9201
Q8	57.9482	105.2545	.6233	.4486	.9203
Q9	57.3212	110.1563	.4713	.3177	.9238
Q10	57.7824	102.0824	.7215	.5730	.9176
Q12	58.3031	108.3936	.5865	.4056	.9213
Q15	57.5130	107.1076	.5750	.4077	.9215
Q16	57.1684	107.1274	.5924	.4321	.9211
Q17	57.8601	105.3154	.6627	.5232	.9193
Q18	57.2927	108.1089	.5436	.3704	.9223
Q20	57.6347	105.6714	.6162	.4673	.9205
Q21	58.1114	104.9928	.6913	.5560	.9186
Q23	58.1347	105.7480	.6819	.5379	.9190

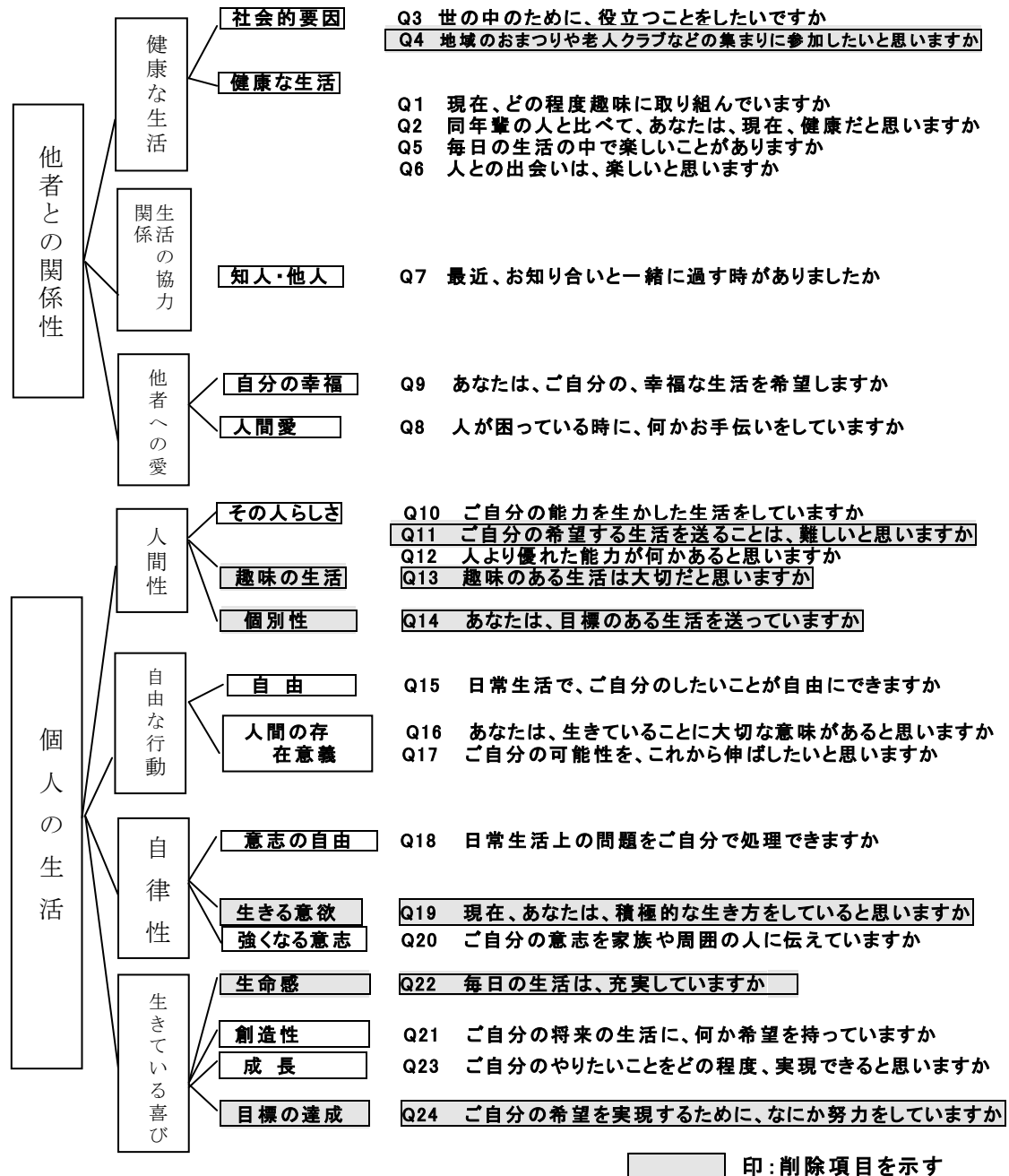
  

Reliability Coefficients		17 items
<b>Alpha =</b>	<b>.9247</b>	Standardized item alpha = .9253

24 項目から削減し、17 項目を選定した自己実現構成概念の枠組みを、図 5-10-1 に示した。削除項目は罫線で囲い表示した。項目削除は、1 項目を除いて、大項目の構成概念「個人の生活」の下位概念の領域で行われ、第 2 節の図 5-2-1 「自己実現 24 質問項目の概念の枠組み」で示した 17 下位概念から、5 つの下位概念「趣味の生活」、「個別性」、「生きる意欲」、「生命感」「目標の達成」が削除された。その結果、下位概念は 17 項目から 12 項目に削減した。

大項目の構成概念「他者との関係性」の領域では、下位概念の「社会的要因」に属する 2 つの質問項目のうち、一方の Q 4 「集まりに参加」は削除されたが、5 つの下位概念はまったく削除されることはなかった。

もう1つの大項目の構成概念の「個人の生活」は、相互に相関係数の高い項目が多かったことから削除項目が多く、その結果、所属する質問項目のない下位概念が生じ削除され、下位概念の全項目数は12項目から7項目に減少した。



(図5-2-1 本調査自己実現24質問項目の構成概念図を改変)

図5-10-1 自己実現構成概念の枠組み(残した項目と削除項目)

選定された17項目より構成される自己実現構成概念の枠組みを図5-10-2に示した。2つの上位概念、7つの中位概念、12の下位概念、17観測変数か

ら構成されている。下位概念は5つが「他者との関係性」に、7つが「個人の生活」の上位概念に属している。

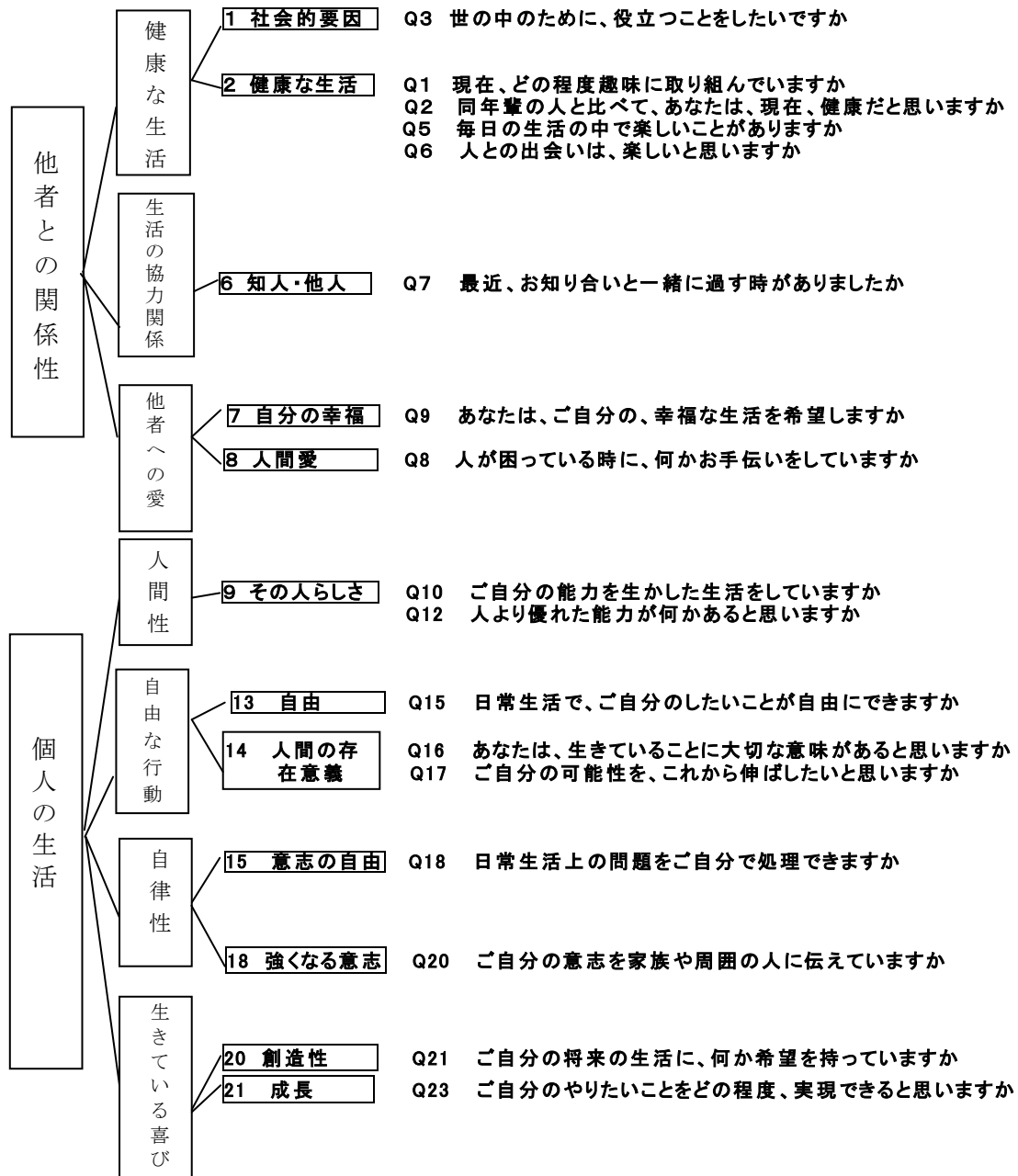


図5-10-2 自己実現構成概念の枠組み（17尺度項目）

[引用文献] :

茅ヶ崎市総務部行政総務課編 (2005)『茅ヶ崎市の人口と世帯 平成 17 年 7 月号』

茅ヶ崎市

総務省統計局編 (2004)『平成 16 年全国消費実態調査報告第 7 巻 高齢者世帯編』

総務省統計局 P368 収入

総務省統計局編 (2000)『平成 12 年国勢調査第 3 巻 その 1 全国編』総務省統計

局 P45 職業

総務省統計局編 (2000)『平成 12 年国勢調査第 3 巻 その 1 全国編』総務省統計

局 P296 学歴

## 目 次

### 第6章 自己実現尺度の因子分析による因子構造の選定

第1節	自己実現構成概念の仮説について	.....	163
第2節	因子抽出の方法	.....	164
第1項	主成分分析を採用した理由		
第2項	因子抽出の方法について		
第3項	直行回転を採用した理由について		
第3節	因子数「7」の因子分析	.....	165
第1項	7因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第2項	7因子モデルの評価		
第4節	因子数「6」の因子分析	.....	168
第1項	6因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第2項	6因子モデルの評価		
第5節	因子数「5」の因子分析	.....	170
第1項	5因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第2項	5因子モデルの評価		
第6節	因子数「4」の因子分析	.....	172
第1項	4因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量		
第2項	4因子モデルの評価		
第7節	5因子モデルの潜在因子への命名	.....	175
第1項	第1因子への命名		
第2項	第2因子への命名		
第3項	第3因子への命名		
第4項	第4因子への命名		
第5項	第5因子への命名		



## 第6章 自己実現尺度の因子分析による因子構造の選定

本章では、前章の自己実現概念の仮説に基づき、自己実現尺度 17 項目について因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った結果を報告する。

### 第1節 自己実現構成概念の仮説について

先行研究について詳細に検討して自己実現にかかわるとされる多数の単語あるいは語句を拾い出し、それらをもとに、思弁的に導き出した自己実現概念の仮

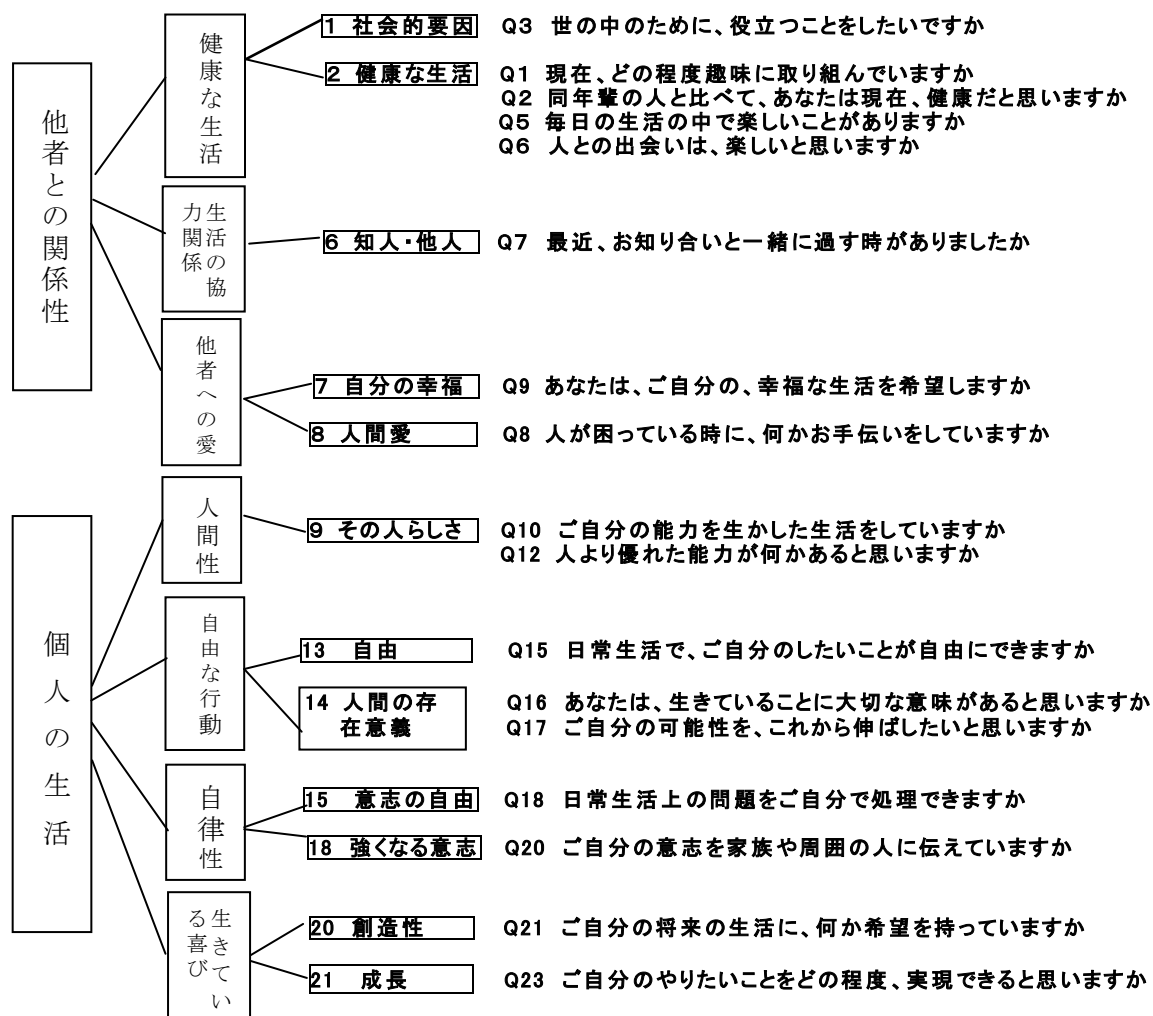


図6-1-1 自己実現構成概念の枠組み（仮説） 17 尺度項目

説を前第3章で解説し、提示した。前章で提示した仮説「自己実現構成の枠組み」(仮説) 17尺度項目を、図6-1-1に示した。仮説では、自己実現の構成概念は、2つの上位概念と7つの中位概念から構成されていることを示している。

## 第2節 因子抽出の方法

この研究における因子分析では、因子抽出法として、主成分分析を使用することとする。

用語として、主成分分析の場合、正確には「因子」ではなく、「成分」というべきであるが、本論文では、特に正確を期す必要がある場合を除き、原則として「因子」「因子寄与率」「因子負荷量」などの用語を用いることとする。

### 第1項 主成分分析を採用した理由

因子分析を行う因子抽出の方法として、SPSSソフトを使用する場合、主成分分析、主因子法、アルファ因子法、最尤法、イメージ因子法などをプログラムの中から選択し、使用することが可能である。しかし、本論文の因子分析では、次のような理由から「主成分分析」を使用することとした。

- 1) 主成分分析は、数学的に最も明確な手法であり数多くの因子を抽出しようとする場合に、最も適切であると思われること。
- 2) 本論文の分析では、7因子という数多くの因子から成り立つモデルから出発し、最終的に5因子モデルを選択することになったので、分析に使用する分散の比率が最も大きい主成分分析を使用するのが適切であると判断した。

## 第2項 直交回転を選定した理由について

因子分析の回転法は、直交回転（Varimax Rotation）を選定した。その理由は、次のとおりである。

- 1) 本論文における分析では、いくつかのモデルの比較を行うため、数学的に単純明快な直交回転を使用することとした。直行回転は、因子の分離が単純で明確になり、解釈が容易である。
- 2) 本論文における分析では、抽出因子数が多いので、数学的に単純明快な直交回転を使用することが、最も適切であると判断した。（注1）

## 第3節 因子数「7」の因子分析

本研究は、自己実現尺度の開発を目的としているが、尺度開発の場合、可能であれば下位尺度（サブスケール）をあわせて開発することが目指されている。その場合、下位尺度の数を何個に考えるのが適切であるかが問題となる。これまでに開発されている社会心理的尺度をみると、2～5の範囲内である。また下位尺度の数は当然、質問項目数の制限を受ける。論者が目指している自己実現尺度の場合、現時点での項目数は17である。この数からいって、下位尺度は最多で「5」程度以下とし、平均項目数は3、4と考えるのが適切であろう。

以上から、7因子モデルの因子分析を試みることは、論文の目的から考えるとあまり意味を持たない。しかし、3章で行った思弁的作業により作成したモデルでは、思考の順序から信頼性分析を中心的手法とした作業の結果、項目数が17まで絞られたにもかかわらず、中位概念は引き続き7つのまま残されている。そこで、本節では因子分析によるモデルの構造分析を下位尺度開発の出発点として、まず、7因子モデルを取り上げて因子の構造分析を試みることにした。

## 第1項 7因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量

7因子モデルの因子寄与率を表6-3-1に示した。なお、回転後の因子寄与

表6-3-1 因子数「7」モデルの因子寄与率（バリマックス回転）

### 説明された分散の合計

成分	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	2.405	14.147	14.147
2	1.087	6.392	52.256	1.951	11.476	25.623
3	.955	5.618	57.874	1.738	10.226	35.849
4	.843	4.957	62.830	1.699	9.993	45.842
5	.760	4.468	67.299	1.686	9.915	55.757
6	.707	4.159	71.458	1.657	9.750	65.507
7	.637	3.749	75.207	1.649	9.700	75.207
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

因子抽出法: 主成分分析

の最も高い第1因子の因子寄与率は14.147%であった。因子寄与の最も低い第7因子の因子寄与率は、9.700%であった。第7因子までの累積寄与率は75.207%であり、十分な大きさの値であった。

回転後の因子行列（主成分分析の用語では「成分行列」）を表4-2-2に示した。この表を精査してみると、Q1, Q23, Q21, Q6, Q8, Q3, Q2の7観測変数は、2つの因子にまたがりかなりの大きさの因子負荷量を示しており、特に、Q8とQ21は所属因子が明確とはいえない。

抽出された各7因子に所属する観測変数の数は、第1因子に「3」、第2因子に「2」、第3因子に「3」、第4因子に「2」、第5因子に「2」、第6因子に「3」、第7因子に「2」であった。

各々の因子を精査してみると、各因子ともそれなりに合理的な組み合わせで、命名も可能であるが、問題は図6-1-1に示した本研究の基本的仮説と比べると各因子を構成する変数が大きく入れ替わっている点である。思弁的に作成した7つの中位概念のモデルでは、当初各々の中位概念ごとに10項目以上のステートメント作り、それをプリテスト、本テストの分析過程で17項目に削減したのであ

るから、思弁的なモデルはそのまま保持されるはずはないのである。

表 6-3-2 因子数「7」モデルの因子負荷量（バリマックス回転）

		成分						
		1	2	3	4	5	6	7
Q7	一緒に過ごす	<b>.776</b>	.165	.095	.146	.200	.187	.096
Q5	生活の楽しみ	<b>.666</b>	.305	.339	.172	.143	.193	.111
Q1	趣味の程度	<b>.635</b>	.091	.148	.173	.274	-.058	<b>.440</b>
Q20	自分の意志	.175	<b>.814</b>	.116	.244	.161	.181	.036
Q23	やりたいこと	.245	<b>.604</b>	.280	<b>.350</b>	.145	.017	.246
Q16	生きる意味	.212	.094	<b>.710</b>	.293	.151	.336	-.036
Q17	自分の可能性	.158	.249	<b>.625</b>	.061	.228	.184	.417
Q21	将来の生活	.229	<b>.551</b>	<b>.556</b>	.051	.182	.098	.253
Q18	自分で処理	.104	.135	.241	<b>.799</b>	.094	.084	.193
Q15	自由にできる	.254	.286	-.005	<b>.709</b>	.209	.114	.104
Q12	優れた能力	.184	.123	.183	.173	<b>.848</b>	.092	.109
Q10	能力を生かす	.339	.287	.259	.181	<b>.578</b>	.150	.213
Q9	幸福な生活	.081	.084	.300	.080	.097	<b>.758</b>	.109
Q6	人との出会い	<b>.562</b>	.156	.091	.131	.057	<b>.617</b>	.123
Q8	何か手伝い	.200	.391	-.043	.057	<b>.436</b>	<b>.442</b>	.333
Q3	世に役立つ	.060	.120	.135	.132	.291	<b>.435</b>	<b>.674</b>
Q2	現在の健康	<b>.392</b>	.154	.135	.308	.036	.039	<b>.659</b>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 15 回の反復で回転が収束した。

## 第2項 7因子モデルの評価

17 変数のデータから強制的に 7 因子を抽出し主成分分析したのであるから、平均所属変数は、2.4 変数であり所属変数が「2」の因子がいくつか出るのは当然であるが、この結果をそのまま採用すると、下位尺度が 7 個のスケールとなってしまう、理論的に許容できるとしても実用上は好ましくないモデルと考えられる。

具体的に、7 因子の内、過半数を超える 4 因子は所属する観測変数が「2」と少なく、因子構造が貧弱であり、2つの観測変数で構成される構成概念の領域があいまいとなり解釈が容易でなく、好ましくない因子構造である。

## 第4節 因子数「6」の因子分析

前節で述べたように、6因子モデルは、下位尺度の数が「6」個となり、本研究の目的からいって、好ましいモデルではないが、念のために分析の結果を簡単に報告する。

### 第1項 6因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量

6因子モデルの因子寄与率を表6-4-1に示した。

回転後の因子寄与の最も高い第1因子の因子寄与率は14.549%であった。因子寄与の最も低い第6因子の因子寄与率は7.464%であった。第6因子の累積寄与率は71.458%であり、十分な大きさの値であった。

表6-4-1 因子数「6」モデルの因子寄与（バリマックス回転）

成分	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	7.797	45.864	45.864	2.473	14.549	14.549
2	1.087	6.392	52.256	2.409	14.173	28.722
3	.955	5.618	57.874	2.252	13.246	41.968
4	.843	4.957	62.830	2.070	12.179	54.147
5	.760	4.468	67.299	1.674	9.847	63.994
6	.707	4.159	71.458	1.269	7.464	71.458
7	.637	3.749	75.207			
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

因子抽出法: 主成分分析

回転後の因子行列を表6-4-2に示した。この表を精査してみると、Q20、Q3の2観測変数が、3つの因子にまたがり、かなり大きな因子負荷量を示しており、所属因子が明確となっていない。

また、Q17、Q16、Q23、Q5、Q1、Q8、Q10、Q6、Q2の9観測変数は、2つの因子にまたがり、かなり大きな因子負荷量を示していた。

表 6-4-2 因子数「6」モデルの因子負荷量（バリマックス回転法）  
**回転後の因子行列(a)**

	成分					
	1	2	3	4	5	6
Q21 将来の生活	.748	.234	.298	.165	.121	.104
Q17 自分の可能性	.667	.138	.255	.078	.246	.381
Q16 生きる意味	.614	.176	.022	.232	.440	.083
Q23 やりたいこと	.519	.261	.301	.490	.006	.071
Q7 一緒に過ごす	.152	.777	.220	.168	.166	.086
Q5 生活の楽しみ	.427	.664	.177	.218	.205	.076
Q1 趣味の程度	.203	.617	.279	.174	-.058	.447
Q12 優れた能力	.210	.165	.753	.141	.058	.152
Q8 何か手伝い	.121	.235	.647	.162	.355	.127
Q10 能力を生かす	.354	.333	.587	.209	.127	.173
Q18 自分で処理	.221	.080	.050	.776	.140	.260
Q15 自由にできる	.079	.256	.248	.748	.098	.076
Q20 自分の意志	.452	.225	.424	.461	.111	-.258
Q9 幸福な生活	.230	.089	.169	.071	.779	.072
Q6 人との出会い	.100	.580	.167	.160	.597	.059
Q2 現在の健康	.208	.384	.150	.344	.053	.592
Q3 世に役立つ	.161	.064	.443	.154	.422	.565

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
 a 12 回の反復で回転が収束した。

抽出された各 6 因子に所属する観測変数の数は、第 1 因子に「4」、第 2 因子に「3」、第 3 因子に「3」、第 4 因子に「3」、第 5 因子に「2」、第 6 因子に「2」であった。

## 第2項 6因子モデルの評価

6 因子モデルは、所属先の不明確な変数が存在し、夫々の因子を明確に分離できておらず、また本研究の目的の 1 つである下位尺度の開発の見地からも、自己実現尺度の因子モデルとして不適切であると考えられる。

## 第5節 因子数「5」の因子分析

因子数「5」を指定し、探索的因子分析を行い、自己実現尺度の因子モデルとして5因子モデルが適性であるかどうかを調べた。因子数「5」ということは下位尺度の数が「5」ということであり、本研究におけるもっとも重要なステップである。抽出方法は、主成分分析、回転法は直交回転（バリマックス回転）を指定した。以下に分析結果を説明する。

### 第1項 5因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量

5因子モデルの因子分析結果の因子寄与率を表6-5-1に示した。回転後の因子寄与の最も高い第1因子の因子寄与率は15.357%であった。因子寄与の最も低い第5因子の因子寄与率は11.225%であった。第5因子までの累積寄与率は67.299%と、十分大きな値であった。

表6-5-1 因子数「5」モデルの因子寄与（バリマックス回転）  
説明された分散の合計

成分	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	2.611	15.357	15.357
2	1.087	6.392	52.256	2.476	14.567	29.924
3	.955	5.618	57.874	2.447	14.397	44.321
4	.843	4.957	62.830	1.998	11.753	56.073
5	.760	4.468	67.299	1.908	11.225	67.299
6	.707	4.159	71.458			
7	.637	3.749	75.207			
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

因子抽出法: 主成分分析

回転後の因子行列の分析結果を表6-5-2に示した。

Q17, Q2の2観測変数が、3つの因子にまたがり、かなりの大きさの因子負荷量を示していた。Q23, Q12, Q3, Q10, Q5, Q1, Q6, Q16の8観測変数が、



2つの因子にまたがり 0.35 以上の因子負荷量を示していた。

特に Q 1 7 の因子負荷量は、第 1 因子で 0.450、第 2 因子で 0.438、第 5 因子で 0.405 であり、その差が小さいことから、Q 1 7 が所属する因子が不明確であり、そのため所属の不明確な Q 1 7 を削除することも考えられるが、削除せず、因子負荷量の大きな第 1 因子の所属とした。その理由を説明する。前第 5 章の表 5 - 9 - 1・2・3 の 3 モデルの分析において、Q 1 7 を削除し項目数を 1 8 項目から 1 7 項目に削減した結果、Q 1 7 削除後の 1 7 項目の因子分析において 6 因子、5 因子、4 因子の 3 つの分析モデルすべてにおいて、因子構造が不適合となった。こうした前章での経緯から、因子負荷量の差は小さいが、Q 1 7 を削除せず、因子負荷量の最も大きな第 1 因子の所属とした 5 因子モデルの因子構造を、完全ではないが適正な因子構造であると判断し、分析を進めることとした。このような判断の結果、5 因子モデルの各因子に所属する観測変数は、第 1 因子に「4」、第 2 因子に「4」、第 3 因子に「4」、第 4 因子に「3」、第 5 因子に「2」であり、バランスのとれたよい因子構造であるといえる。

表 6 - 5 - 2 因子数「5」モデルの因子負荷量（バリマックス回転）

回転後の因子行列(a)

	成分				
	1	2	3	4	5
Q20 自分の意志	<u>.709</u>	.172	.190	.260	.110
Q21 将来の生活	<u>.690</u>	.308	.204	.136	.264
Q23 やりたいこと	<u>.609</u>	.241	.234	.427	.077
Q17 自分の可能性	<u>.450</u>	.438	.136	.168	.405
Q12 優れた能力	.356	<u>.694</u>	.180	.089	.013
Q3 世に役立つ	.003	<u>.675</u>	.115	.291	.436
Q8 何か手伝い	.239	<u>.593</u>	.263	.107	.281
Q10 能力を生かす	.438	<u>.559</u>	.338	.174	.132
Q7 一緒に過ごす	.227	.182	<u>.779</u>	.146	.146
Q5 生活の楽しみ	.442	.154	<u>.650</u>	.189	.259
Q1 趣味の程度	.145	.427	<u>.631</u>	.287	-.017
Q6 人との出会い	.115	.148	<u>.602</u>	.131	.552
Q18 自分で処理	.251	.104	.080	<u>.797</u>	.177
Q15 自由にできる	.283	.156	.256	<u>.679</u>	.049
Q2 現在の健康	.059	.396	.408	<u>.513</u>	.123
Q9 幸福な生活	.135	.205	.116	<u>.054</u>	<u>.778</u>
Q16 生きる意味	.486	.070	.160	.220	<u>.567</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

第5因子の所属観測変数が「2」だけというのは少ないといえるが、因子分析では因子の解釈が明確であることから問題ではなく、時々見られる現象であり、バランスのとれた因子構造であると考えられる。

## 第2項 5因子モデルの評価

探索的因子分析からみて5因子モデルは、因子構造に前記したようないくつかの問題はあるが、総合的な見地からみて、「自己実現尺度17質問項目」の因子モデルとしてほぼ適合しているといえる。よって、5因子モデルを採用することとする。

## 第6節 因子数「4」の因子分析

前節で、5因子モデルをほぼ適切なモデルであるとしたが、この節では確認を明確にするために4因子モデルについて分析し、評価する。

抽出方法は、これまでと同じく主成分分析、回転法は直交回転（バリマックス回転）を指定した。

### 第1項 4因子モデルの因子寄与率及び因子負荷量

4因子モデルの因子分析結果の因子寄与率を表6-6-1に示した。回転後の因子寄与の最も高い第1因子の因子寄与率は18.487%であった。因子寄与の最も低い第4因子の因子寄与率は12.855%であった。第5因子までの累積寄与率は62.830%とほぼ十分大きな値であった。

表 6-6-1 因子数「4」モデルの因子寄与（バリマックス回転）

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	3.143	18.487	18.487
2	1.087	6.392	52.256	2.796	16.449	34.935
3	.955	5.618	57.874	2.557	15.040	49.976
4	.843	4.957	62.830	2.185	12.855	62.830
5	.760	4.468	67.299			
6	.707	4.159	71.458			
7	.637	3.749	75.207			
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

回転後の因子行列を表 6-6-2 に示した。

この 4 因子モデルの数学的側面での問題点は、Q 6 の所属因子がやや不明確なことであるが、それ以外に大きな問題点はない。

抽出された各 4 因子に所属する観測変数は、第 1 因子に「5」、第 2 因子に「5」、第 3 因子に「5」、第 4 因子に「2」であった。

表 6-6-2 因子数「4」モデルの因子負荷量（バリマックス回転）

回転後の因子行列(a)

		成分			
		1	2	3	4
Q23	やりたいこと	.703	.299	.222	.174
Q18	自分で処理	.703	.120	.210	.092
Q20	自分の意志	.662	.248	.124	.266
Q15	自由にできる	.651	.167	.348	.012
Q21	将来の生活	.538	.389	.128	.418
Q12	優れた能力	.265	.723	.168	.064
Q3	世に役立つ	.113	.675	.222	.313
Q8	何か手伝い	.174	.617	.275	.289
Q10	能力を生かす	.378	.597	.319	.204
Q17	自分の可能性	.366	.496	.123	.458
Q7	一緒に過ごす	.228	.185	.753	.218
Q1	趣味の程度	.267	.413	.663	-.013
Q6	人との出会い	.102	.159	.610	.556
Q5	生活の楽しみ	.403	.190	.601	.372
Q2	現在の健康	.352	.379	.514	.038
Q9	幸福な生活	.043	.244	.133	.748
Q16	生きる意味	.438	.139	.135	.638

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 9 回の反復で回転が収束した。

次に、表面的妥当性の見地から、各因子を精査してみると第 3 因子は、観測変

数Q7、Q1、Q6、Q5及び「Q2 現在の健康」の5つの観測変数から構成されているため、他の4つの因子の影響力を考慮すると「Q2 現在の健康」の観測変数の特性を強調し、健康に関する構成概念の因子名を命名することは不可能であり、本研究の目的の意図である「健康に関する因子」の確保は困難という問題がある。

## 第2項 4因子モデルの評価

探索的因子分析により抽出された分析結果について説明する。

4因子モデルの所属観測変数の数は、第1因子から順に、「5」「5」「5」「2」であり、第4因子の所属因子数が「2」と少ないが、因子構造は単純で安定している。

しかし、最大の問題点は、第3因子は「Q7 一緒に過ごす」、「Q1 趣味の程度」、「Q6 人との出会い」、「Q5 生活の楽しみ」、「Q2 現在の健康」、の5質問項目で構成されているが、「Q2 現在の健康」以外の残りの4つの観測変数が正確に「健康に関する因子」を測定し、逆に潜在因子である「健康に関する因子」から十分大きな影響力を受けているかという作用を考慮すると、「Q7 一緒に過ごす」、「Q1 趣味の程度」、「Q6 人との出会い」、「Q5 生活の楽しみ」の4つの観測変数は、別の因子も測定していることが予測される。このようなことから、第3因子に所属する5観測変数全体が1つの領域として「健康に関する構成概念」を測定しているというには、かなり無理な要因が働いているといえる。

つまり、本研究の自己実現尺度開発の基本的仮説の1つである「健康に関する構成概念」は重要であり必要な下位概念であるが、この4因子モデルでは「健康に関する因子」を提示することができない。よって結論として、4因子モデルの因子構造は、本研究の自己実現尺度の因子モデルとして不適合であるという結論となり、自己実現尺度の因子モデルとして採用できないと考えられる。

## 第7節 5因子モデルの潜在因子への命名

### 第1項 第1因子への命名

5因子モデルの第1因子を構成する4観測変数と因子負荷量を、表6-7-1に示した。

表6-7-1 第1因子の因子負荷量

Q20	自分の意志	.709
Q21	将来の生活	.690
Q23	やりたいこと	.609
Q17	自分の可能性	.450

第1因子を構成する4観測変数の各ステートメントを、次に示した。

- Q20 ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えてありますか。
- Q21 ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか。
- Q23 ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか。
- Q17 ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか

「意志を周囲に伝えている」、「将来の生活への希望を持つ」、「やりたいことが実現できる」の3つの構成要素を解釈し、「将来の生活の希望を実現する願望を表明している強さ」が高く負荷していることから、「自分の希望を実現する意欲の強さ」と命名した。

### 第2項 第2因子への命名

第2因子を構成する4観測変数と因子負荷量を、表6-7-2に示した。

表6-7-2 第2因子の因子負荷量

Q12	優れた能力	.694
Q3	世に役立つ	.675
Q8	何か手伝い	.593
Q10	能力を生かす	.559

第2因子 に所属する各観測変数のステートメントは、次のとおりである。

Q12 人より優れた能力が何かあると思いますか。

Q3 世の中のために、役立つことをしたいですか。

Q8 人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。

Q10 ご自分の能力を生かした生活をしていますか。

「優れた能力が何かある」、「世の中のため役立つ」、「人が困っている時にお手伝い」の3つの構成要素を解釈し、「優れた能力を困っている人や世の中のために役立てる」ことに高く負荷していることから、「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」と命名した。

### 第3項 第3因子への命名

第3因子を構成する4観測変数と因子負荷量を、表6-7-3に示した。

表6-7-3 第3因子の因子負荷量

Q7	一緒に過ごす	.779
Q5	生活の楽しみ	.650
Q1	趣味の程度	.631
Q6	人との出会い	.602

第3因子 に所属する各観測変数のステートメントは、次のとおりである。

Q7 最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか。

Q5 毎日の生活の中で楽しいことがありますか。

Q1 現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。

Q6 人との出会いは、楽しいと思いますか。

「お知り合いと一緒に過ごす」、「生活の中で楽しいこと」、「趣味に取り組んでいます」の3つの構成要素を解釈し、「出会いや趣味を通じ生活を楽しむ」ことに高く負荷していることから、「毎日の生活を楽しんでいる程度」と命名した。

#### 第4項 第4因子への命名

第4因子を構成する3観測変数と因子負荷量を、表6-7-4に示した。

第4因子に所属する各観測変数のステートメントは、次のとおりである。

表6-7-4 第4因子の因子負荷量

Q18	自分で処理	.797
Q15	自由にできる	.679
Q2	現在の健康	.513

Q18 日常生活上の問題をご自分で処理できますか。

Q15 日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか。

Q2 同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思えますか。

「生活上の問題をご自分で処理」、「生活で、自分のしたいことが自由に」、「あなたは、現在、健康だ」の3つの構成要素を解釈し、「健康であれば生活を自分で自由に処理し、したいことができる」ことに高く負荷していることから、「主観的健康度」と命名した。

#### 第5項 第5因子への命名

第5因子を構成する2観測変数と因子負荷量を、表6-7-5に示した。

表6-7-5 第5因子の因子負荷量

Q9	幸福な生活	.778
Q16	生きる意味	.567

第5因子に所属する各観測変数のステートメントは、次のとおりである。

Q9 あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか。

Q16 あなたは、生きていることに大切な意味があると思えますか。

「幸福な生活を希望」、「生きていることの大切な意味」の2つの構成要素を解

積し、「幸福に生きていることを大切にすること」に高く負荷していることから、「自分の人生を大切に考える程度」と命名した。

命名した5因子名を整理し、表6-7-6に示す。

表6-7-6 潜在因子への命名（5因子モデル）

因子	命名した因子名
第1因子	「自分の希望の実現への意欲の強さ」
第2因子	「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」
第3因子	「毎日の生活を楽しんでいる程度」
第4因子	「主観的健康度」
第5因子	「自分の人生を大切に考える程度」

これらの命名した因子名は、自己実現尺度の各下位尺の名称でもある。命名した因子名と各因子を構成する質問項目を次に示した。

#### 1. 第1因子

##### 自分の希望を実現する意欲の強さ

- Q20 自分の意志      ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えてありますか。
- Q21 将来の生活      ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか。
- Q23 やりたいこと      ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか。
- Q17 自分の可能性      ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いませんか

#### 2. 第2因子

##### 自分の能力の社会的活用意欲と活用度

- Q12 優れた能力      人より優れた能力が何かあると思いませんか。
- Q3 世に役立つ      世の中のために、役立つことをしたいですか。
- Q8 何か手伝い      人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。
- Q10 能力を生かす      ご自分の能力を生かした生活をしていますか

#### 3. 第3因子

##### 毎日の生活を楽しんでいる程度

- Q7 一緒に過ごす      最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか。
- Q5 生活の楽しみ      毎日の生活の中で楽しいことがありますか。
- Q1 趣味の程度      現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。
- Q6 人との出会い      人との出会いは、楽しいと思いませんか。

#### 4. 第4因子



### 主観的健康度

- Q18 自分で処理 日常生活上の問題をご自分で処理できますか。  
Q15 自由にできる 日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか。  
Q2 現在の健康 同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか。

#### 5. 第5因子

### 自分の人生を大切に考える程度

- Q9 幸福な生活 あなたは、ご自分の幸福な生活を希望しますか。  
Q16 生きる意味 あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか。

第1節ですでに提示した、図6-1-1 自己実現構成概念説明図（17尺度項目）（仮説）を参考とし、本章で分析した5因子モデルの探索的因子分析の結果を反映し、自己実現の概念化を行った。（巻末資料 図6-5-1）

これらの5つの因子のなかで、質問項目の組み換えと、下位概念の名称が新たに提示された第3因子「毎日の生活を楽しんでいる程度」を主に、因子を構成する4つの質問項目及び因子構造の変化について自己実現概念を関連させながら説明する。

第1の質問項目Q1の「現在、どの程度趣味に取り組んでいますか」は、質問文作成当初、基本仮説の小項目「趣味の生活」を測定する質問項目として作成されている（表3-3-12）。また、表4-3-1の基本仮説では、小項目の「趣味の生活」は、3つの小項目の「その人らしさ」、「個別性」、「完全への意思」とともに中項目「人間性」の概念を構成する小項目の1つであった。つまり、Q1の「現在、どの程度趣味に取り組んでいますか」は「人間性」の概念を測定する観測変数の1つでもあるといえる。また、中項目「人間性」は大項目「個人の生活」を支える4つの中項目の1つでもある。

次に、第3因子の第2の質問項目Q5の「毎日の生活の中で楽しいことがありますか」及び第3の質問項目Q6「人との出会いは、楽しいと思いますか」は、ともに、質問文作成当初、基本仮説の小項目「健康な生活」を測定する3つの質問項目のうち2つとして作成されている（表3-3-3）。また、表4-3-1に示したように基本仮説では、小項目「健康な生活」は、2つの小項目の「社会的要因」、「主観的健康度」とともに中項目の「健康な生活」の概念を構成する小

項目の1つであった。中項目「健康な生活」は大項目「他者との関係性」を支える3つの中項目の1つでもある。

第3因子の第4の質問項目Q7の「最近、(友人)お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか」は、質問文作成当初、基本仮説の小項目「友人」を測定する質問項目として作成されていた(表3-3-6)。また、図4-3-1に示したように、基本仮説では小項目「友人」は、3つの小項目の「家族」、「配偶者」、「知人・友人」とともに中項目「生活の協力関係」の概念を構成する1つの小項目であった。つまり、質問項目Q7「最近、(友人)お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか」は「生活の協力関係」の概念を構成する小項目の1つであった。また、中項目「生活の協力関係」は大項目「他者との関係性」を支える3つの中項目の1つでもある。

このように、探索的因子分析の結果、自己実現概念の個々の要素を測定する当初の質問文作成の理念と基本仮説を再考すると、第3因子の、Q1「趣味の生活」は「人間性」を測定する観測変数ではない。またQ5「生活の楽しみ」、Q6「人との出会いは楽しい」は健康関連概念の観測変数ではない。さらにQ7は「友人」として「生活の協力関係」の観測変数として捉えないことの方が適切である。自己実現の新しい5つの概念の1つである「毎日の生活を楽しんでいる程度」を測定する観測変数として捉えることが適切であると、最終的な自己実現尺度の概念構成であると探索的因子分析の結果から適切であると証明されたといえる。

ここで提示した5因子名と2つの上位概念との関係性及び構成概念の適合について、第8章の確認的因子分析で検証する。

(注1)

Garson (2006)によれば、斜交回転(プロマックス回転)は、一次元、二次元までは、直交回転(バリマックス回転)よりも、変数の因子負荷量の差をより大きくして、所属すべき因子をより明確にするが、多くの場合3次元以降までその機能を発揮するのは困難で、バリマックス回転との出力の違いを調べてみると、改善されていない場合や、逆にかえって曖昧さを増している場合が少なくない

(D. Garikuson 2006, P. 15) .

したがって、プロマックス回転は、抽出する因子数がせいぜい3因子くらいまでの時に用いるべきで、それ以上の場合には、数学的に直截な方法であるバリマックス回転の結果をゆがめてしまう場合が少なくない (D. garson 200, p. 15) 。

[引用文献] :

Garson, G. David (2006) Factory Analysis

<http://www2.chass.ncsu.edu/garson/pat65/factor.htm>

## 目 次

第 7 章	基本属性が自己実現トータルスコアと下位尺度に及ぼす影響	
第 1 節	自己実現トータルスコアと下位尺度スコアの計算	.....183
第 2 節	自己実現トータルスコアの分布	.....186
第 3 節	基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響	.....187
第 1 項	基本属性の項目名と内容	
第 2 項	自己実現トータルスコアを従属変数、16 基本属性を 独立変数とする一元配置の分散分析	
	1) Q26「性別」を独立変数とする一元配置分散分析	
	2) Q27「住まい」を独立変数とする一元配置分散分析	
第 3 項	自己実現トータルスコアを従属変数、基本属性を独立変数 とする多元配置分散分析	
第 4 項	一元配置分散分析と全独立変数同時投入多元配置分散分析 の結果の比較	
第 4 節	下位尺度に及ぼす基本属性の影響	.....201
第 1 項	一元配置分散分析による下位尺度に及ぼす基本属性の影響	
第 2 項	多元配置分散分析による基本属性の下位尺度への影響	
第 5 節	分散分析による基本属性が「自己実現」に及ぼす影響に 関する分析結果の総合的考察	.....204

## 第7章 基本属性が自己実現トータルスコアと下位尺度に及ぼす影響

本章では、自己実現トータルスコアと5つの自己実現下位尺度スコアを計算し、次いで、自己実現トータルスコアと下位尺度に及ぼす16基本属性の影響について分散分析により分析し、その結果について論じる。

### 第1節 自己実現トータルスコアと下位尺度スコアの計算

自己実現トータルスコアはいうまでもなく、下位尺度スコアの合計であるから、まず下位尺度スコアを計算する。

下位尺度スコアの計算に当たっては、各項目に、点数の高い方が自己実現のレベルが高くなるように、1=5点、2=4点、3=3点、4=2点、5=1点と配点した。

下位尺度スコアの計算式を次に示した。

$$\begin{aligned} \text{第1下位尺度スコア} = & \text{「Q12 優れた能力」} + \text{「Q3 世に役立つ」} + \\ & \text{「Q8 何か手伝い」} + \text{「Q10 能力を生かす」} - 4 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{第2下位尺度スコア} = & \text{「Q7 一緒に過ごす」} + \text{「Q5 生活の楽しみ」} + \\ & \text{「Q1 趣味の程度」} + \text{「Q46 人との出会い」} - 4 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{第3下位尺度スコア} = & \text{「Q20 自分の意志」} + \text{「Q21 将来の生活」} + \\ & \text{「Q23 やりたいこと」} + \text{「Q17自分の可能性」} - 4 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{第4下位尺度スコア} = & \text{「Q18 自分で処理」} + \text{「Q15 自由にできる」} + \\ & \text{「Q2 現在の健康」} - 3 \end{aligned}$$

$$\text{第5下位尺度スコア} = \text{「Q9 幸福な生活」} + \text{「Q16 生きる意味」} - 2$$

自己実現トータルスコアは上記5つの下位尺度スコアの合計となる。式で示せば以下の通りである。

$$\begin{aligned} \text{自己実現トータルスコア} = & \text{第1下位尺度スコア} + \text{第2下位尺度スコア} + \text{第3下位尺度スコア} \\ & + \text{第4下位尺度スコア} + \text{第5下位尺度スコア} \end{aligned}$$

5つの下位尺度の名称は、前章で命名したもので、次に示すとおりである。

第1下位尺度：「希望を実現する意欲の強さ」

第2下位尺度：「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」

第3下位尺度：「毎日の生活を楽しんでいる程度」

第4下位尺度：「主観的健康度」

第5下位尺度：「自分の人生を大切に考える程度」

下位尺度スコアおよび自己実現トータルスコアの基本統計量を、表7-1-1に示した。各スコアの有効度数の違いは、下位尺度によって欠損値の数が異なるためである。(そのため、下位尺度の平均値を合計しても、自己実現トータルスコアの平均値と完全に一致しないことを述べておく)

表7-1-1 下位尺度スコアおよび自己実現トータルスコアの基本統計量

	SUB1 希望を実現 する意欲	SUB2 能力の社会 的活用度	SUB3 生活を楽 しむ程度	SUB4 主観的健 康度	SUB5 人生を大 切に考える	自己実現 トータルスコア
度数 有効	396	402	403	411	400	386
欠損値	17	11	10	2	13	27
平均値	9.51	9.23	11.02	8.24	6.11	44.31
最頻値	9	9	11(a)	9	6	50
標準偏差	3.00	2.96	3.23	2.30	1.46	10.91

a 多重モードがあります。最小値が表示されます。

自己実現トータルスコアの平均値は、44.3点であった。

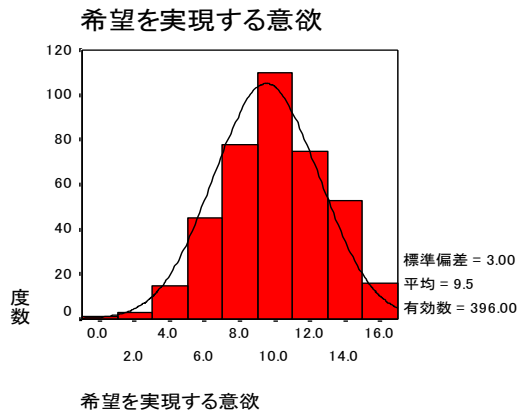
各下位尺度スコアのヒストグラムを、図7-1-1～図7-1-5に示した。

第1下位尺度「希望を実現する意欲の強さ」、および第2下位尺度「自分の能力の社会的活用意欲と活用度」は、きれいな正規分布を示している。

第3下位尺度の「毎日の生活を楽しんでいる程度」、および第4下位尺度「主観的健康度」、第5下位尺度「自分の人生を大切に考える程度」の3下位尺度は、

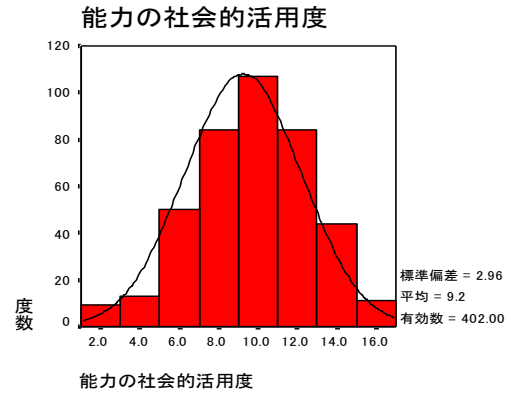
1) 第1下位尺度

図 7-1-1 「希望を実現する意欲の強さ」



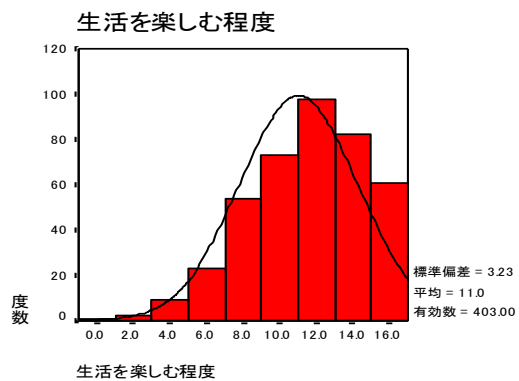
2) 第2下位尺度

図 7-1-2 「能力の社会的活用度」



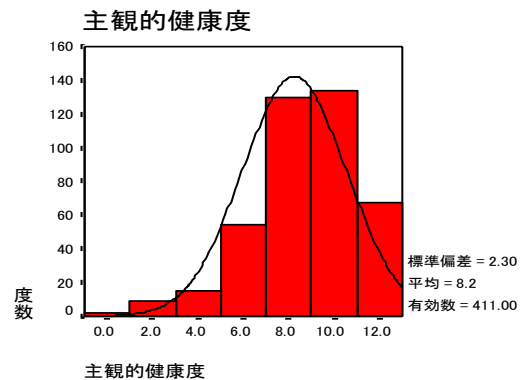
3) 第3下位尺度

図 7-1-3 「生活を楽しむ程度」



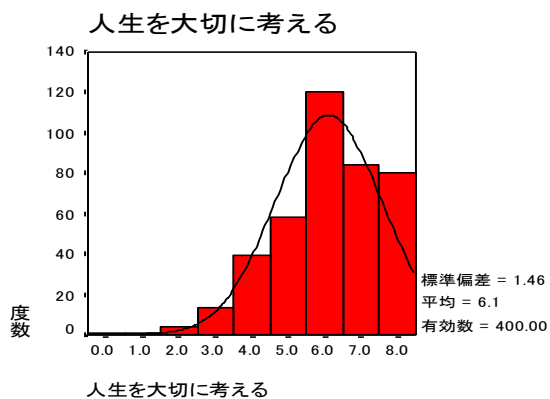
4) 第4下位尺度

図 7-1-4 「主観的健康度」



5) 第5下位尺度

図 7-1-5 「人生を大切に考える」

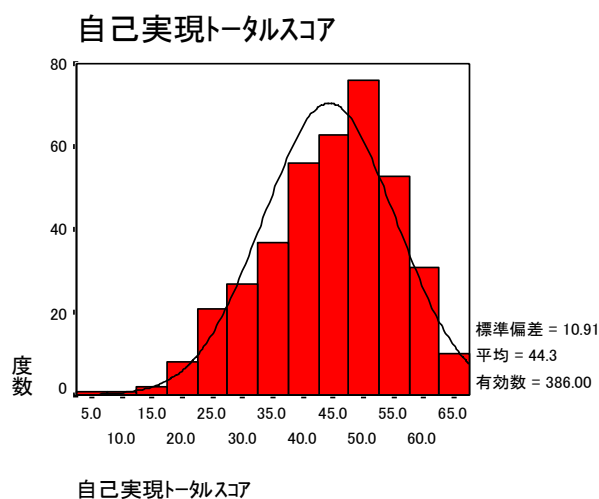


最頻値が右に寄っているが、両端が下がったノーマルカーブに近い分布曲線なので、次節以降の正規分布を扱う統計解析手法において、従属変数として使用することができると思う。

## 第2節 自己実現トータルスコアの分布

自己実現トータルスコアのヒストグラム（ $n=386$ ）を図7-2-1に示した。自己実現スコアの平均値は44.3点であり、最頻値は50点であった。最頻値が平均値より右に寄っているが、ノーマルカーブに近い曲線を描いており、正規分布のデータを扱う統計解析手法において従属変数として取り扱うことができると思う。

図 7-2-1 「自己実現トータルスコア」





自己実現尺度 17 質問項目は、表 7-1-2 のとおりである。

表 7-1-2 自己実現尺度 17 項目のステートメント

記号番号	自己実現尺度 17 項目のステートメント
Q01	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。
Q02	同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思えますか。
Q03	世の中のために、役立つことをしたいですか。
Q05	毎日の生活の中で楽しいことがありますか。
Q06	人との出会いは、楽しいと思えますか。
Q07	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか。
Q08	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。
Q09	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか。
Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか。
Q12	人より優れた能力が何かあると思えますか。
Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか。
Q16	あなたは、生きていることに大切な意味があると思えますか。
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思えますか。
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか。
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えていきますか。
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか。
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思えますか。

### 第3節 基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響

各種の基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響の程度を確認するため、「自己実現トータルスコア」を「従属変数」とし、「16 基本属性」を「独立変数」とする分散分析を行った。なお、ステップワイズの分析のために、まず、各基本属性を独立変数とする一元配置の分散分析を行った。

次に、2 要因から 16 要因まで 1 要因ずつ独立変数を増やし、ステップワイズに多元配置の分散分析を行った。

なお、「年齢」は、基本属性の最後に、「共変量」として投入した。

### 第3項 基本属性の項目名と内容

本章で用いる基本属性の全16ステートメントと各ステートメントの簡略化した名称を表7-1-3に示した。本論文の中では、今後基本属性には、以下の「略称」を使用することとする。

表7-1-3 基本属性16項目のステートメントと略称

観測変数	基本属性のステートメント	項目の略称
Q25	いつお生まれになりましたか（年齢は、いくつですか）	年齢
Q26	あなたの性別についてお答えください	性別
Q27	現在のお住まいは、次のどれでしょうか	住まい
Q28	現在どなたと同居されていますか（一人の場合は独居）	同居者
Q29	ご自分を含め同居されているご家族は何人ですか	同居人数
Q30	現在の収入になるお仕事は次のどれに該当しますか	収入の仕事
Q31	現在収入になるお仕事を、およそどの程度していますか	仕事の程度
Q32	最終学歴について、お答えください	最終学歴
Q33	移動の方法について最も該当するものを1つお選びください	移動の方法
Q34	これまでにあなたが最も長く働いた職業は、どのような仕事ですか	最長勤務
Q35	あなた自身の判断力について該当するものを1つ選んでください	判断力
Q36	食事について該当するものを1つお選びください	食事
Q37	聴力について該当するものを1つお選びください	聴力
Q38	どの位の頻度で電話をかけたり、手紙やEメールを送りますか	電話・メール
Q39	どの程度の頻度で外出しますか。（散歩、買い物や仕事を含め）	外出頻度
Q40	あなたが属する世帯の最近1年間の合計収入金額	収入金額

### 第2項 自己実現トータルスコアを従属変数、16基本属性を独立変数とする一元配置の分散分析

#### 1) Q26「性別」を独立変数とする一元配置分散分析

自己実現トータルスコアを従属変数とし、Q26「性別」を独立変数とする一元配置分散分析を行った結果を表7-1-4に示した。

Q26「性別」が自己実現トータルスコアに及ぼす影響力の程度は、有意確率が $p=0.512$ であり、統計的に有意な影響力はみられなかった。

表 7-1-4 Q26「性別」の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	51.381(a)	1	51.381	.431	.512
切片	596349.474	1	596349.474	5003.272	.000
性別	51.381	1	51.381	.431	.512
誤差	45769.689	384	119.192		
総和	642403.000	386			
修正総和	45821.070	385			

a R2乗 = .001 (調整済みR2乗 = -.001)

## 2) Q27「住まい」を独立変数とする一元配置分散分析

自己実現トータルスコアを従属変数とし、Q27「住まい」を独立変数とする一元配置分散分析を行った結果を表 7-1-5 に示した。

Q27「住まい」が自己実現トータルスコアに及ぼす影響力の程度は、有意確率が  $p=0.079$  であり、統計的に有意な影響力はみられなかった。

表 7-1-5 Q27「住まい」の分散分析結果

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	603.852(a)	2	301.926	2.561	.079
切片	143583.240	1	143583.240	1218.073	.000
住まい	603.852	2	301.926	2.561	.079
誤差	44793.407	380	117.877		
総和	637102.000	383			
修正総和	45397.258	382			

a R2乗 = .013 (調整済みR2乗 = .008)

以下、表 7-1-3 に示した基本属性のリストの順に従って、各種基本属性を独立変数とする一元配置分散分析の結果を、表 7-2-1 A 及び表 7-2-1 B に示した。なお「年齢」は従属変数との単相関係数である。

一元配置分散分析もしくは単相関係数では、自己実現トータルスコアに対し、統計的に有意の影響を及ぼしているのは、16 基本属性中、「収入の仕事」「仕事の程度」「最終学歴」「移動の方法」「最長勤務」「判断力」「食事」「聴力」「電話・メール」「外出頻度」「収入金額」「年齢」の 12 属性である。

表 7 - 2 - 1 A 基本属性別一元配置の分散分析結果

No	観測変数	変数ラベル (略称)	一元配置の 有意確率
1	Q30	収入の仕事	***0.000
2	Q31	仕事の程度	***0.000
3	Q32	最終学歴	**0.003
4	Q33	移動の方法	***0.000
5	Q34	最長勤務	*0.035
6	Q35	判断力	***0.000
7	Q36	食事	*0.024
8	Q37	聴力	***0.000
9	Q38	電話・メール	***0.000
10	Q39	外出頻度	***0.000
11	Q40	収入金額	***0.000
12	Q25	年齢	*0.005

\* :0.05>P>0.01    \*\* :0.01>P>0.001    \*\*\* : 0.001>P

有意でない属性は、次の表に示した。

表 7 - 2 - 2 B 基本属性別一元配置の分散分析結果 (参考)

No	観測変数	変数ラベル (略称)	一元配置の 有意確率
1	Q26	性別	0.512
2	Q27	住まい	0.079
3	Q28	同居人者	0.273
4	Q29	同居人数	0.875

\* :0.05>P>0.01    \*\* :0.01>P>0.001    \*\*\* : 0.001>P

### 第3項 自己実現トータルスコアを従属変数、基本属性を独立変数とする 多元配置分散分析

次に独立変数として複数の基本属性を投入し、「自己実現トータルスコア」を従属変数とする多元配置分散分析を行った。分析の順序は、調査票の属性の順番に従い、「性別」から順に行うこととした。

第1ステップは、前項で説明した「性別」のみを独立変数とする一元配置の分散分析、第2ステップは、「性別」と「住まい」の2変数を独立変数とした二元配置の分散分析、また第3ステップは、「性別」、「住まい」、「同居者」の3変数を独

立変数とする三元配置の分散分析である。

同様に、順次1ステップ増えるごとに1つの基本属性を独立変数に加え、「同居人数」、「収入の仕事」、「仕事の程度」、「最終学歴」、「移動の方法」、「最長勤務」、「判断力」、「食事」、「聴力」、「電話・メール」、「外出頻度」、「収入金額」、の順に投入した。

表7-3-1 16基本属性別分散分析結果(有意確率)

No	観測変数	変数ラベル (略称)	1元配置分散分析の 有意確率	ステップ16の 有意確率
1	Q26	性別	0.512	0.331
2	Q27	住まい	0.079	0.933
3	Q28	同居者	0.273	0.654
4	Q29	同居人数	0.875	*0.032
5	Q30	収入の仕事	***0.000	0.723
6	Q31	仕事の程度	***0.000	0.436
7	Q32	最終学歴	**0.003	0.913
8	Q33	移動の方法	***0.000	*0.017
9	Q34	最長勤務	*0.035	0.685
10	Q35	判断力	***0.000	***0.000
11	Q36	食事	*0.024	0.949
12	Q37	聴力	***0.000	*0.036
13	Q38	電話・メール	***0.000	***0.000
14	Q39	外出頻度	***0.000	0.975
15	Q40	収入金額	***0.000	0.355
16	Q25	年齢(連続量)	(相関係数)**0.005	0.422

\*: 0.05 > P > 0.01      \*\*: 0.01 > P > 0.001      \*\*\*: 0.001 > P

注) 16番目の「年齢」の数値は、従属変数との単相関係数である。

最後の第16ステップは、「年齢」を共変量として投入した。16ステップのそれぞれの段階ごとの各独立変数(基本属性)の有意確率を一覧表にまとめ、次の表5-3-2に示した。

各ステップで基本属性同士が相互に影響を及ぼしあうことから、新たに次の基本属性を独立変数に加えると相互の影響力が変化し、「自己実現トータルスコア」に及ぼす影響力の有意確率が変化する。表7-3-2の最右欄では、16基本属性を同時に投入し、他のすべての基本属性の影響力をコントロールした時の最終的な各基本属性の固有の影響力を、有意確率の値として確認することができる。

表 7-3-2 回答者の16基本属性と自己実現トータルスコアのステップワイズ分散分析結果

(従属変数：自己実現トータルスコア、独立変数：16基本属性)：有意確率

No	質問ラベル	ST1	ST2	ST3	ST4	ST5	ST6	ST7	ST8	ST9	ST10	ST11	ST12	ST13	ST14	ST15	ST16
1	q26 性別	0.512	0.341	0.158	0.168	0.040	0.021	0.001	0.000	0.002	0.109	0.469	0.628	0.367	0.357	0.313	0.331
2	q27 住まい	*	0.063	0.058	0.075	0.164	0.175	0.109	0.295	0.396	0.372	0.414	0.379	0.742	0.742	0.952	0.933
3	q28 同居者	*	*	0.275	0.163	0.231	0.271	0.639	0.500	0.591	0.863	0.821	0.898	0.904	0.922	0.599	0.654
4	q29 同居人数	*	*	*	0.534	0.549	0.568	0.726	0.978	0.849	0.574	0.540	0.452	0.306	0.267	0.023	0.032
5	q30 収入の仕事	*	*	*	*	0.000	0.414	0.633	0.802	0.574	0.514	0.526	0.577	0.334	0.301	0.714	0.723
6	q31 仕事の程度	*	*	*	*	*	0.142	0.079	0.160	0.129	0.116	0.118	0.178	0.547	0.610	0.460	0.436
7	q32 最終学歴	*	*	*	*	*	*	0.007	0.060	0.196	0.795	0.799	0.809	0.449	0.514	0.875	0.913
8	q33 移動の方法	*	*	*	*	*	*	*	0.000	0.000	0.004	0.011	0.003	0.017	0.079	0.021	0.017
9	q34 最長勤務	*	*	*	*	*	*	*	*	0.130	0.334	0.312	0.379	0.250	0.244	0.669	0.685
10	q35 判断力	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
11	q36 食事	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.661	0.709	0.528	0.649	0.981	0.949
12	q37 聴力	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.025	0.126	0.137	0.043	0.036
13	q38 電話・メール	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.000	0.000	0.000	0.000
14	q39 外出頻度	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.667	0.995	0.975
15	q40 収入金額	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.348	0.355	
16	q25 年齢	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0.422

注)「年齢」は共変量として投入した。

具体的に結果を説明すると、第1ステップのQ26「性別」の一元配置分散分析での影響力は  $p=0.512$  であるが、第2ステップで、Q26「性別」とQ27「住まい」の2変数を同時に投入すると、 $p=0.341$  となり、有意確率が小さくなっている。

一方、Q27「住まい」の独立変数の一元配置の分散分析の場合の影響力は、 $p=0.079$  (表 7-3-1) であるが、「性別」「住まい」の2変数を独立変数とした二元配置の分散分析では、「性別」の差異がコントロールされて、 $p=0.063$  となる。

換言すれば、「性別」が同じ人で比較すると、「住まい」の影響力は大きくなり、5%の有意水準にかなり近くなる。

同様に、第3ステップ、第4ステップと順次独立変数に1観測変数を加えるごとに、「自己実現トータルスコア」に及ぼす「住まい」の影響力の有意確率は変化する。

すでに先に説明したように、独立変数が1変数の一元配置の分散分析では、16基本属性中、「収入の仕事」「仕事の程度」「最終学歴」「移動の方法」「最長勤務」「判断力」「食事」「聴力」「電話・メール」「外出頻度」「収入金額」「年齢」の12観測変数が、「自己実現トータルスコア」に統計的な有意の影響力を示していた。し

かし、最終的な第 16 ステップで、統計的に有意の影響力を示した観測変数は、「判断力」(P < 0.000)、「電話・メール」(P < 0.000)、「移動の方法」(P = 0.017)、「同居人数」(P = 0.032)、「聴力」(P = 0.036)の 5 変数のみであって、「性別」「住まい」「同居者」「収入の仕事」「仕事の程度」「最終学歴」「最長勤務」「食事」「外出頻度」「収入の金額」「年齢」の 11 項目は有意の影響力を示さなかった。これは、第 16 ステップでは、当該変数以外の他のすべての変数の影響がコントロールされた当該変数固有の影響力が示されているためである。(表 7-3-1)

本章の第 3 項では、「自己実現トータルスコア」に対する独立変数である属性の影響力の変化をみようということが目的であり、属性同士の交互作用をみることは本質ではないことから、この分析においては特に関心ごとではない。重回帰分析が使用不能なので、そのかわりとして分散分析を用いたものである。

#### 第 4 項 一元配置分散分析と全独立変数同時投入多元配置分散分析の結果の比較

16 基本属性の中から、「同居人数」「収入の仕事」の 2 つの特徴的な基本属性を例として取り上げ、一元配置の分散分析の結果と、16 基本属性をすべて独立変数として投入した第 16 ステップの分散共分散分析の結果の違いについて考察し、その理由を論じる。なお「最終学歴」と「最長勤務」についても解析を行った。

##### 1) 「同居人数」と「自己実現トータルスコア」の関係

一元配置分散分析では、「同居人数」が従属変数の「自己実現トータルスコア」に及ぼす影響力は、有意確率が P = 0.875 であり、統計的に有意な影響力を示していない。(表 7-2-1 及び表 7-3-1)

また、第 14 ステップまでは別の基本属性を独立変数として次々に投入しても、「同居人数」の影響力は統計的に有意を示していない。ところが、第 15 ステップで「収入金額」を独立変数に投入すると、「自己実現トータルスコア」に及ぼす「同居

人数」の固有の影響力は、有意確率が  $P = 0.023$  となり、統計的に有意な影響力を示すようになる。(表 7-3-2)

このことは、「収入金額」が同じ高齢者の場合、「同居人数」が多い人ほど、「自己実現トータルスコア」が高いということを意味する。その理由として、「同居者」を一種の「他者」と捉えれば、「同居人数」は、日常的な生活の場で、直接的に他者との交流を行う頻度の多さを示した指標であるということができる。

つまり、「同居人数」は、「電話やメール」の回数が「自己実現トータルスコア」の得点に高い影響力を及ぼすことと同様の結果を「自己実現トータルスコア」に及ぼしていると解釈できる。

次に、「年齢」を共変量として投入した第 16 ステップにおける「同居人数」の「自己実現トータルスコア」への固有の影響力を見ると、有意確率が  $P = 0.032$  であり、第 15 ステップとほぼ同じ程度の統計的に有意な影響力を示している。このことは「年齢」には、第 15 ステップにおいて「同居人数」が示した有意な影響力を大きく弱めるほどの強い影響力がないということを示している。つまり、投入した他のすべての変数の値が同じであれば、「年齢」の違いは、「自己実現トータルスコア」の値に影響を及ぼさない、ということを示している。

## 2) 「収入の仕事」と「自己実現トータルスコア」の関係

満 65 歳を過ぎた高齢者で「収入のある仕事」に従事している者の職業の種類が「自己実現」にどの程度影響しているかを確認するために、「収入の仕事」と「自己実現トータルスコア」の関係を調べてみた。

一元配置分散分析では、「収入の仕事」が従属変数の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は、有意確率が  $P = 0.000$  であり、統計的に強い有意な影響力を示している。(表 7-2-1 及び表 7-3-1)

しかし、第 16 ステップでは、従属変数である「自己実現トータルスコア」に「収入の仕事」が及ぼす影響力は、有意確率が  $P = 0.723$  であり、統計的に有意な影響力を示していない(前項表 7-2-1 及び表 7-3-1 及び表 7-3-2)。その理由を解析し説明する。



表 7-3-3 「収入の仕事」の質問項目

30 あなたの現在の収入になる仕事は次のどれに該当しますか。  
 1) 働いていない 2) 自営業（開業医、開業司法書士、商工サービス業等、）  
 3) 自営業の家族従業員 4) 勤め 5) シルバー人材センターからの仕事  
 6) その他（具体的に： ）

解析手順として、一元配置の分散分析からはじめて、独立変数に「性別」、「住まい」、「同居者」、「同居人数」、「仕事の程度」の基本属性を順次1項目ずつ投入し、ステップワイズの分散分析を行った結果を表7-3-4に示した。

これらの分析結果から、第5ステップまでは、独立変数に「性別」「住まい」「同居者」「同居人数」が投入されても、「収入の仕事」の固有の影響力を示す有意確率はすべて $P=0.000$ であり、このことは「収入の仕事」が「自己実現トータルスコア」に統計的に強い有意の影響を及ぼすことを示している。

表 7-3-4 ステップワイズの分散分析による「収入の仕事」有意確率の変化

従属変数：自己実現トータルスコア

(有意確率)

ソース	変数ラベル	ST1	ST2	ST3	ST4	ST5	ST6
Q30	収入の仕事	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.414
Q26	性別	*	0.132	0.091	0.037	0.040	0.021
Q27	住まい	*	*	0.124	0.167	0.164	0.175
Q28	同居者	*	*	*	0.280	0.231	0.271
Q29	同居人数	*	*	*	*	0.549	0.568
Q31	仕事の程度	*	*	*	*	*	0.142

ところが、第6ステップで独立変数に「仕事の程度」を投入すると、「収入の仕事」の有意確率は $P=0.414$ となり、統計的に有意な影響力を失う。

その理由は次のように説明できる。

第6ステップで独立変数に投入した「仕事の程度」は「収入の仕事」に直接関連した仕事の頻度を問う項目であり、また「仕事の程度」と「収入の仕事」との相関関係（属性相関）が高く（ $P<0.000$ ）、そのため「仕事の程度」を独立変数に投入して、コントロールすると「収入の仕事」の影響力は、統計的に有意性を失う。

すなわち、「仕事の程度」が同じであれば、「収入の仕事」の仕事の種類が異なっても、「自己実現トータルスコア」に、統計的に有意な影響力を及ぼさないというこ

とである。

また、先の表 7-3-2 において、第 7 ステップ以降「最終学歴」、「移動の方法」、「最長勤務」、「判断力」と順次 1 項目ずつ第 16 ステップまで新たな独立変数を投入した場合の、「収入の仕事」が「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力を示す有意確率は、 $P = 0.301$  から  $P = 0.723$  の範囲ですべてのステップにおいて統計的に有意な影響力を示していない。

このことは「収入の仕事」が一元配置分散分析で示した統計的に有意な影響力 ( $P = 0.000$ ) は、いわゆる見かけの相関であって、「仕事の程度」を始めとする他の独立変数から受ける相互作用の影響をコントロールすると、「収入の仕事」が「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は、 $P = 0.723$  と非常に弱いものであることを示している。

### 3) 「最終学歴」と「自己実現トータルスコア」の関係

従属変数を「自己実現トータルスコア」とし、「最終学歴」を独立変数とした一元配置の分散分析では、「最終学歴」の有意確率は  $P = 0.003$  であり（表 7-2-1 及び表 7-3-1）、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意な影響力を示している。

しかし、第 16 ステップでは、従属変数である「自己実現トータルスコア」に及ぼす「最終学歴」の固有の影響力は、有意確率が  $P = 0.913$  であり、非常に弱いことがわかる（前項表 7-3-2）。その理由を解析し説明する。

解析手順として、一元配置の分散分析から始めて、独立変数に「収入の仕事」「仕事の程度」「同居人数」「同居者」の基本属性を順次 1 項目ずつ投入したステップワイズの分散分析の結果を表 7-3-5 に示した。

「収入の仕事」を投入した第 2 ステップでは、「自己実現トータルスコア」に及ぼす「最終学歴」の影響力の有意確率は  $P = 0.017$  であり、なお統計的に有意な影響力を示している。

以下、第 3 ステップから第 8 ステップまで、「仕事の程度」、「同居人数」、

表 7-3-5 ステップワイズの分散分析による「最終学歴」の有意確率の変化

従属変数：自己実現トータルスコア

(有意確率)

ソース	変数ラベル	ST1	ST2	ST3	ST4	ST5	ST6	ST7	ST8	ST9
Q32	最終の学歴	0.003	0.017	0.016	0.028	0.051	0.074	0.007	0.041	0.196
Q30	収入の仕事	*	0.004	0.677	0.584	0.599	0.658	0.633	0.491	0.574
Q31	仕事の程度	*	*	0.162	0.144	0.161	0.161	0.079	0.061	0.129
Q29	同居人数	*	*	*	0.952	0.764	0.757	0.726	0.550	0.849
Q28	同居者	*	*	*	*	0.710	0.786	0.639	0.636	0.591
Q27	住まい	*	*	*	*	*	0.150	0.109	0.146	0.396
Q26	性別	*	*	*	*	*	*	0.001	0.003	0.002
Q34	最長勤務	*	*	*	*	*	*	*	0.303	0.130
Q33	移動の方法	*	*	*	*	*	*	*	*	0.000

「同居者」、「住まい」、「性別」、「最長勤務」まで独立変数を順次一つずつ増やしてステップワイズに分散分析を行ってみると、第5ステップで「同居者」を新たに投入した場合に、「最終学歴」の有意確率は5%水準の危険率で $P = 0.051$ とわずかに統計的有意性を失い、また第6ステップで「住まい」を新たに投入した場合、5%水準の危険率で $P = 0.074$ と統計的有意性を失うこと以外は、どのステップにおいても「最終学歴」の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は統計的有意性を維持している。

しかし、第9ステップで「移動の方法」を独立変数の一つとして投入すると「最終学歴」の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は一気に $P = 0.196$ と値が大きくなり、統計的有意性を失う。その理由は以下のように説明できる。

「移動の方法」の度数分布は以下の表7-3-6の通りである。

表 7-3-6 「移動の方法」の度数分布

移動の方法

		度数	パーセント	有効パーセント
有効	自由に移動	359	86.9	89.5
	自分でタクシー利用	15	3.6	3.7
	付き添いと一緒	19	4.6	4.7
	介護用車で移動	8	1.9	2.0
	合計	401	97.1	100.0
欠損値	9	12	2.9	
合計		413	100.0	

「移動の方法」を独立変数とし、自己実現トータルスコアを従属変数として一元配置の分散分析を行い、推定周辺平均を計算してみると、表 5-3-7 の通りである。表に見られるように、「自由に移動」できる人の「自己実現トータルスコア」の平均値は、それ以外の人の平均値よりもはるかに大きくなっている。

先の第 3 項で示した表 7-3-2 のステップワイズ分散分析結果において、第 9 ステップ以降「最長勤務」、「判断力」、「食事」と順次第 16 ステップまで新たな独立変数を投入した場合の、「移動の方法」が「自己実現トータルスコア」に及ぼす影響力を示す有意確率は、 $P=0.000$  から  $P=0.021$  の範囲で、第 14 ステップ ( $P=0.079$ ) を除き、すべてのステップにおいて統計的に有意な影響力を示している。つまり、このことは、第 9 ステップ以降「移動の方法」が受ける他の独立変数からの相互作用の影響力は小さく、「自己実現トータルスコア」に及ぼす「移動の方法」の影響力の程度は、新たに独立変数に投入した基本属性の中でも特に強い影響力を持っていることを示している。

表 7-3-7 「移動の方法」の推定周辺平均

### 1. 全平均

従属変数: 自己実現トータルスコア

平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
		下限	上限
35.934	1.391	33.200	38.669

### 2 推定値(移動の方法)

従属変数: 自己実現トータルスコア

移動の方法	平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
			下限	上限
自由に移動	45.549	.559	44.449	46.648
自分でタクシー利用	36.133	2.659	30.906	41.361
付き添いと一緒	34.556	2.427	29.783	39.328
介護車で移動	27.500	4.204	19.234	35.766

一方、「最終学歴」は、第 9 ステップ以降どのステップにおいても、「移動の方法」を含めた複数の独立変数の相互作用を大きく受け、有意な影響力を最後の第 16 ステップまで示していない。

特に注目すべきは、第10ステップで「判断力」を新たに独立変数に投入すると「最終学歴」の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力を示す有意確率は、 $P = 0.196$ から $P = 0.795$ と一気に大きくなる。

そして、16基本属性全部が投入された第16ステップでは、 $P = 0.913$  という大きな値となり、「最終学歴」は投入された他のすべての独立変数の影響をコントロールした場合、「自己実現トータルスコア」に対して固有の影響をほとんど持たない基本属性であることが判明する。

#### 4) 「最長勤務」と「自己実現トータルスコア」の関係

若い時から65歳を過ぎた現在までに、最も長い期間従事した職業が、その人の自己実現に大きな影響を及ぼしているであろうとの予測を分析するために、「最長勤務」と「自己実現トータルスコア」の関係を調べることにした。

従属変数を「自己実現トータルスコア」とし、「最長勤務」を独立変数とした一元配置の分散分析では、「最長勤務」の影響力の有意確率は $P = 0.035$ であり(表7-2-1及び表7-3-1)、従属変数である「自己実現トータルスコア」に統計的に有意の影響力を示している。

しかし、第16ステップでは、従属変数である「自己実現トータルスコア」に及ぼす「最長勤務」の固有の影響力は、有意確率が $P = 0.685$ となり、統計的に有意な影響力を示していない(前項表7-3-2)。その理由を解析し説明する。

表7-3-8に、一元配置の分散分析からはじめて、独立変数に「性別」「住まい」「同居者」「同居人数」「収入の仕事」「仕事の程度」の基本属性を順次1項目ずつ投入した、ステップワイズの分散分析の結果を示した。

「性別」を独立変数に投入した第2ステップでは、「自己実現トータルスコア」に及ぼす「最長勤務」の固有の影響力の有意確率は $P = 0.031$ であり、一元配置分散分析の結果とほとんど変わらない。

表 7-3-8 ステップワイズの分散分析による「最長勤務」の有意確率の変化

従属変数：自己実現トータルスコア

(有意確率)

ソース	変数ラベル	ST1	ST2	ST3	ST4	ST5	ST6	ST7	ST8
Q34	最長勤務	0.035	0.031	0.016	0.026	0.020	0.073	0.048	0.303
Q26	性別	*	0.465	0.357	0.192	0.163	0.037	0.017	0.003
Q27	住まい	*	*	0.079	0.123	0.130	0.227	0.237	0.146
Q28	同居者	*	*	*	0.359	0.270	0.322	0.355	0.636
Q29	同居人数	*	*	*	*	0.331	0.281	0.315	0.550
Q30	収入の仕事	*	*	*	*	*	0.001	0.356	0.491
Q31	仕事の程度	*	*	*	*	*	*	0.089	0.061
Q32	最終学歴	*	*	*	*	*	*	*	0.041

以下、第3ステップから第7ステップまで、「住まい」、「同居者」、「同居人数」、「収入の仕事」、「仕事の程度」と、独立変数を順次一つずつ増やしてステップワイズの分散分析を行ってみると、第6ステップで「収入の仕事」を新たに投入した場合に、「最長勤務」の有意確率が5%水準の危険率で $P = 0.073$ となり、統計的有意性を失うこと以外は、どのステップにおいても「最長勤務」の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は統計的有意性を維持している。

しかし、第8ステップで「最終学歴」を独立変数の一つとして投入すると「最

表 7-3-9 「最終学歴」の推定周辺平均

### 1. 全平均

従属変数：自己実現トータルスコア

平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
		下限	上限
45.048	.724	43.625	46.471

### 2 推定値 (最終学歴)

従属変数：自己実現トータルスコア

最終学歴	平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
			下限	上限
新制中学校	41.155	1.268	38.661	43.649
新制高等学校	43.354	.850	41.683	45.026
新制各種専門学校	46.714	2.332	42.129	51.300
新制短期大学	47.071	2.019	43.100	51.043
新制大学・大学院	46.946	1.114	44.755	49.136

長勤務」の「自己実現トータルスコア」に及ぼす固有の影響力は一気に  $P = 0.303$  と値が大きくなり、統計的有意性を失う。

これは、「最終学歴」が同じであれば「最長勤務」の違いは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意の影響力を及ぼさない、ということの意味している。

なお、参考までに「最終学歴」の推定周辺平均（表 7-3-9）を示しておく。表に見られるように、「自己実現トータルスコア」の値は、学歴の高さにほぼ比例している。

## 第4節 下位尺度に及ぼす基本属性の影響

基本属性が 5 つの下位尺度に及ぼす影響力の大きさを分散分析により分析し、その結果を説明する。

### 第1項 一元配置分散分析による下位尺度に及ぼす基本属性の影響

5 つの下位尺度に及ぼす基本属性の影響力の程度を調べるため、各下位尺度を従属変数とし、16 の基本属性を独立変数とした一元配置の分散分析（「年齢」は従属変数との単相関係数）を行った結果を表 7-4-1 に示す。表に見られるように、「判断力」「電話・メール」「外出頻度」の 3 基本属性は、共通して、5 つの下位尺度すべてに  $P < 0.001$  の強い影響力を持っていた。

「収入金額」は、「主観的健康度」の下位尺度に  $P = 0.026$  の統計的に有意の影響力を持ち、他の 4 つの下位尺度には  $P < 0.001$  レベルの高い影響力を持っていた。

「収入の仕事」と「仕事の程度」は 5 つのすべての下位尺度に  $0.01 > P > 0.001$  レベルの影響力を持っていた。

「移動の方法」は、「人生を大切に考える」の下位尺度に  $P = 0.007$  の統計的に有意の影響力を持ち、また他の 4 つの下位尺度すべてに対し、 $0.01 > P > 0.001$  もしくはそれ以下の統計的に高い有意の影響力を持っていた。

表 7-4-1 一元配置の分散分析による下位尺度への基本属性の影響(有意確率)

一元 No	質問	変数ラベル	SUB1 希望を実現する意欲	SUB2 能力の社会的活用度	SUB3 生活を楽しむ程度	SUB4 主観的健康度	SUB5 人生を大切に考える	自己実現 トータルスコア
1	Q26	性別	0.339	0.489	0.156	0.463	0.762	0.512
2	Q27	住まい	0.224	*0.046	0.093	0.059	0.560	0.079
3	Q28	同居者	0.169	0.074	0.098	0.982	0.602	0.273
4	Q29	同居人数	0.514	0.556	0.872	0.726	0.704	0.875
5	Q30	収入の仕事	***0.000	***0.000	**0.039	**0.007	**0.003	***0.000
6	Q31	仕事の程度	**0.002	***0.000	**0.005	**0.003	***0.000	***0.000
7	Q32	最終学歴	**0.001	**0.005	**0.030	**0.001	0.177	**0.003
8	Q33	移動の方法	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	**0.007	***0.000
9	Q34	最長勤務	0.155	**0.006	*0.019	0.199	0.271	*0.035
10	Q35	判断力	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000
11	Q36	食事	*0.042	0.216	**0.003	**0.003	0.729	*0.024
12	Q37	聴力	**0.008	***0.000	***0.000	***0.000	**0.001	***0.000
13	Q38	電話・メール	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000
14	Q39	外出頻度	**0.001	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000
15	Q40	収入金額	***0.000	***0.000	***0.000	*0.026	***0.000	***0.000
16	Q25	年齢 注)	*0.021	0.120	***0.000	**0.002	0.113	**0.005

\*: 0.05 > P > 0.01, \*\*: 0.01 > P > 0.001, \*\*\*: 0.001 > P

注): 「年齢」は従属変数との単相関係数である。

基本属性の「聴力」は、「希望を実現する意欲」の下位尺度に  $0.01 > P > 0.001$  レベルの統計的に有意の影響を持ち、また他の4つの下位尺度すべてに、 $P < 0.001$  レベルの統計的に高い有意の影響を持っていることが確認された。

基本属性の「年齢」は、「希望を実現する意欲」と「主観的健康度」の2つの下位尺度に  $0.05 > P > 0.01$  レベルの統計的に有意の影響を持ち、また下位尺度の「生活を楽しむ程度」には、 $P < 0.001$  レベルの統計的に高い有意の影響を持っていた。

基本属性の「最終学歴」は、「人生を大切に考える」の下位尺度を除く4つの下位尺度に  $0.01 > P > 0.001$  レベルの統計的に有意の影響を持っていた。

「最長勤務」は、「能力の社会的活用度」と「生活を楽しむ程度」の2つの下位尺度に  $0.05 > P > 0.01$  レベルの統計的に有意の影響を持ち、一方「希望を実現する意欲」「人生を大切に考える」「主観的健康度」の3つの下位尺度にそれぞれ  $P > 0.05$  レベルの有意確率を持ち、統計的に有意でなかった。

「食事」は「希望を実現する意欲」「生活を楽しむ程度」「主観的健康度」の3つ



の下位尺度に  $0.01 > P > 0.001$  レベルの統計的に有意の影響力を持ち、一方「能力の社会的活用度」と「人生を大切に考える」の2つの下位尺度に  $P > 0.05$  レベルの有意確率をもち、統計的に有意でなかった。

なお、表7-4-1の最右欄に示すように、「性別」「住まい」「同居者」「同居人数」の4つの基本属性は、5つのすべての下位尺度に統計的に有意の影響力を持っていない。

## 第2項 多元配置分散分析による基本属性の下位尺度への影響

16基本属性を同時に独立変数として投入し、全基本属性の相互の影響力をすべ

表7-4-2 多元配置の分散分析による下位尺度への影響（有意確率）

多元 No	観測 変数	変数ラベル	SUB1 希望を実現する意欲	SUB2 能力の社会的活用度	SUB3 生活を楽しむ程度	SUB4 主観的健康度	SUB5 人生を大切に考える	自己実現 トータルスコア
1	Q26	性別	0.722	0.413	0.430	0.163	0.805	0.331
2	q27	住まい	0.837	0.704	0.630	0.613	0.963	0.933
3	Q28	同居者	0.556	0.788	0.769	0.321	0.368	0.654
4	Q29	同居人数	*0.036	0.142	**0.008	0.330	0.154	**0.032
5	Q30	収入の仕事	0.246	0.616	0.961	0.994	0.051	0.723
6	Q31	仕事の程度	0.253	0.153	0.681	0.934	**0.001	0.436
7	Q32	最終学歴	0.745	0.686	0.856	0.718	0.087	0.913
8	Q33	移動の方法	0.287	0.156	0.114	***0.000	*0.024	*0.017
9	Q34	最長勤務	0.667	0.737	0.312	0.970	0.728	0.685
10	Q35	判断力	***0.000	***0.000	***0.000	***0.000	**0.001	***0.000
11	Q36	食事	0.783	0.971	0.813	0.795	0.571	0.949
12	Q37	聴力	0.209	*0.047	0.075	0.203	0.386	*0.036
13	Q38	電話・メール	***0.000	**0.005	***0.000	**0.003	**0.009	***0.000
14	Q39	外出頻度	0.840	0.712	0.673	0.467	0.112	0.975
15	Q40	収入金額	0.163	0.423	0.450	0.140	0.164	0.355
16	Q25	年齢 注)	0.476	0.065	0.784	0.358	0.877	0.422

\*:  $0.05 > P > 0.01$ 、 \*\*:  $0.01 > P > 0.001$ 、 \*\*\*:  $0.001 > P$

注): 「年齢」は、共変量として投入した。

てコントロールした場合の影響力を分散共分散分析により分析した。なお、連続量である「年齢」は共変量として投入した。(表7-4-2)

その結果を見ると「判断力」と「電話・メール」は、すべての下位尺度に統計的に有意の影響力を及ぼしており、また「自己実現トータルスコア」への影響力も非常に

強く、自己実現尺度にかかわる最も重要な二つの要因であると考えられる。

次に重要なのは「移動の方法」であって、「主観的健康度」の下位尺度に $P < 0.001$ レベルの影響力を及ぼし、「人生を大切に考える」の下位尺度に $0.05 < P < 0.01$ レベルの影響力を及ぼしており、また、「自己実現トータルスコア」にも統計的に有意の影響力を及ぼしている。

また「同居人数」も「移動の方法」と同じ程度に重要で、「希望を実現する意欲」と「生活を楽しむ程度」の2つの下位尺度にそれぞれ $0.05 < P < 0.01$ 、及び $0.01 > P > 0.001$ レベルの影響力を持ち、また「自己実現トータルスコア」にも統計的に有意の影響力を持っている。

## 第5節 分散分析による基本属性が「自己実現」に及ぼす影響に関する分析結果の総合的考察

分散分析による基本属性の「自己実現トータルスコア」及び下位尺度スコアへの影響力の分析結果を考察し、主な論点を次にまとめた。

1) 高い「自己実現トータルスコア」を示す高齢者は、「判断力」が十分機能していて、「電話やメール」を使用する回数が多い人であることが確認された。

すなわち、「自己実現」のレベルの高い高齢者は、日常生活や社会的な場での状況を判断する「判断力」が適正に機能している人である傾向が強く、また、他者との「電話やメール」による情報の交流を頻繁に行っている人である傾向が強いことが確認された。

2) 「同居人数」は一元配置の分散分析では、有意確率 $P = 0.875$ と有意の影響力を示さないが、表7-3-2のステップワイズの多元配置分散分析結果を見ると、独立変数に「収入金額」を投入した場合、有意確率は $P = 0.023$ と有意の影響力を示すようになる。つまり「収入金額」でコントロールすると、「同居人数」の違いは「自己実現トータルスコア」に有意の影響を及ぼすように変化した。

このことは、収入が同じ人の場合、「同居人数」が多いほど「自己実現トータルスコア」

の得点が高くなるということを意味している。その理由として、「同居人」を一種の「他者」と考えれば、「同居人数」は他者との交流の多さを間接的に示す指標であるといえる。

「電話やメール」の回数は、生活の場で道具を通じて間接的に行われる他者との情報の交流の回数を示しているが、「同居人数」は、日常的な生活の場で、直接的に他者との交流が行われる頻度の多さを示す指標であるということができよう。

言い換えれば、間接的な他者との情報の交流の回数と直接的な他者との交流の頻度の多さの両者が、それぞれ独立的に「自己実現トータルスコア」を高める要因として大きく影響しているということになる。

3) 「自己実現トータルスコア」を従属変数とし、「最終学歴」を最初の独立変数としたステップワイズの多元配置分散分析において、第7ステップで「性別」が独立変数に加わると、「最終学歴」の有意確率は  $P=0.074$  から  $P=0.007$  となり、「自己実現トータルスコア」に有意の影響を示した。つまり「性別」でコントロールすると、「最終学歴」は、「自己実現トータルスコア」に有意の影響を及ぼすように変化した。(表7-3-5)

このことは、以下のように解釈できる。すなわち、男女を一緒にしたグループでは、「最終学歴」は「自己実現トータルスコア」に統計的に有意の影響を及ぼさないが、これは、表7-4-3に示したように、女性の場合、男性と比べれば高卒者が60.96%と非常に高く、最終学歴が低くなるが、女性同士の中では学歴の高い人(たとえば各種専門学校卒者)は、男性の大卒と同じように高い「自己実現トータルスコア」を示す傾向があり、そのため、男女を一緒にしたグループでは、「性別」は「自己実現トータルスコア」に統計的に有意の影響を及ぼさないが、「男」「女」を別けると、夫々に「最終学歴」の影響が「自己実現トータルスコア」に統計的に有意になるということが考えられる。

第5章4節でも述べたが、本調査の結果から「最終学歴」が「新制大学・大学院」以上の者は24.4%であった。「新制高等学校・旧制中学校」以上の者は81.77%であった。(表7-5-1、巻末資料68表7-4-5)

今後の他の地域での自己実現調査研究を行い、本論文の学歴と自己実現の調査研究結果と比較し、自己実現と属性との関係をさらに検証する必要があると考えている。

表 7-5-1 男女別の最終学歴の分布

		度数 %	新制 中学校	新制 高等学校	新制各種 専門学校	新制 短期大学	新制大学 ・大学院	合計
性別	女	度数 性別の%	38 20.32	114 60.96	11 5.88	16 8.56	8 4.28	187 100.00
	男	度数 性別の%	37 18.23	56 27.59	10 4.93	13 6.40	87 42.86	203 100.00
合計		度数 総和の%	75 19.23	170 43.59	21 5.38	29 7.44	95 24.36	390 100.00

表 7-5-2 に示したように、最終卒業学校に関する平成 12 年の国勢調査では、高学歴の短大・高専、大学・大学院以上の学歴の者(70~74歳)は、15.7%にすぎない。高校卒以上では、53.2%であり、本調査の81.8%の値から考えると、高齢者のうち大学・大学院卒業者及び高校卒者の居住率がかなり高い地域であることがわかる。

表 7-5-2 70~74 歳の最終卒業学校 (男女共)  
(万円)

区分	最終学校	人数	割合%
1	小学校・中学校	1,201,656	46.8%
2	高校・旧制中学校	961,722	37.5%
3	短大・高専	150,786	5.9%
4	大学・大学院	252,680	9.8%
合計		2,566,844	100%

出展：編集 総務省統計局「平成 12 年国勢調査第 3 卷その 1 全国編」

平成 12 年発行 総務省統計局 P284

## 目 次

第 8 章	自己実現スケールの確認的因子分析による検証	
第 1 節	1 次因子モデルの確認的因子分析	..... 208
第 2 節	2 次の確認的因子分析	..... 211
第 1 項	2 次因子の確認的因子分析の潜在変数と観測変数	
第 2 項	2 次因子の仮設モデルの確認的因子分析	
第 3 項	2 次因子モデルの確認的因子分析による適合度指標	

## 第8章 自己実現スケールの確認的因子分析による検証

先の第4章で行った探索的因子分析（Exploratory Factor Analysis）の結果、自己実現スケールは下記の5つの因子から構成されることが判明した。本章では、共分散構造分析（Covariance Structural Analysis）により、この5因子モデルの適合性を検証した。まず、5因子からなる1次因子モデルの適合性を確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis）によって検証した。その上で、5因子モデルの上位概念に2つの因子を想定した2次因子モデルを仮定して、2次因子モデルの適合性を検証した。

### 第1節 1次因子モデルの確認的因子分析

本節では、5因子からなる1次因子モデルの適合性を確認的因子分析により検証する。（ソフトは、Mplus Ver.3,11）

第1因子 「希望を実現する意欲の強さ」

第2因子 「能力の社会的活用意欲と活用度」

第3因子 「毎日の生活を楽しんでいる程度」

第4因子 「主観的健康度」

第5因子 「自分の人生を大切に考える程度」

全ケース413のうち、欠損値のない386ケースを分析対象とした。

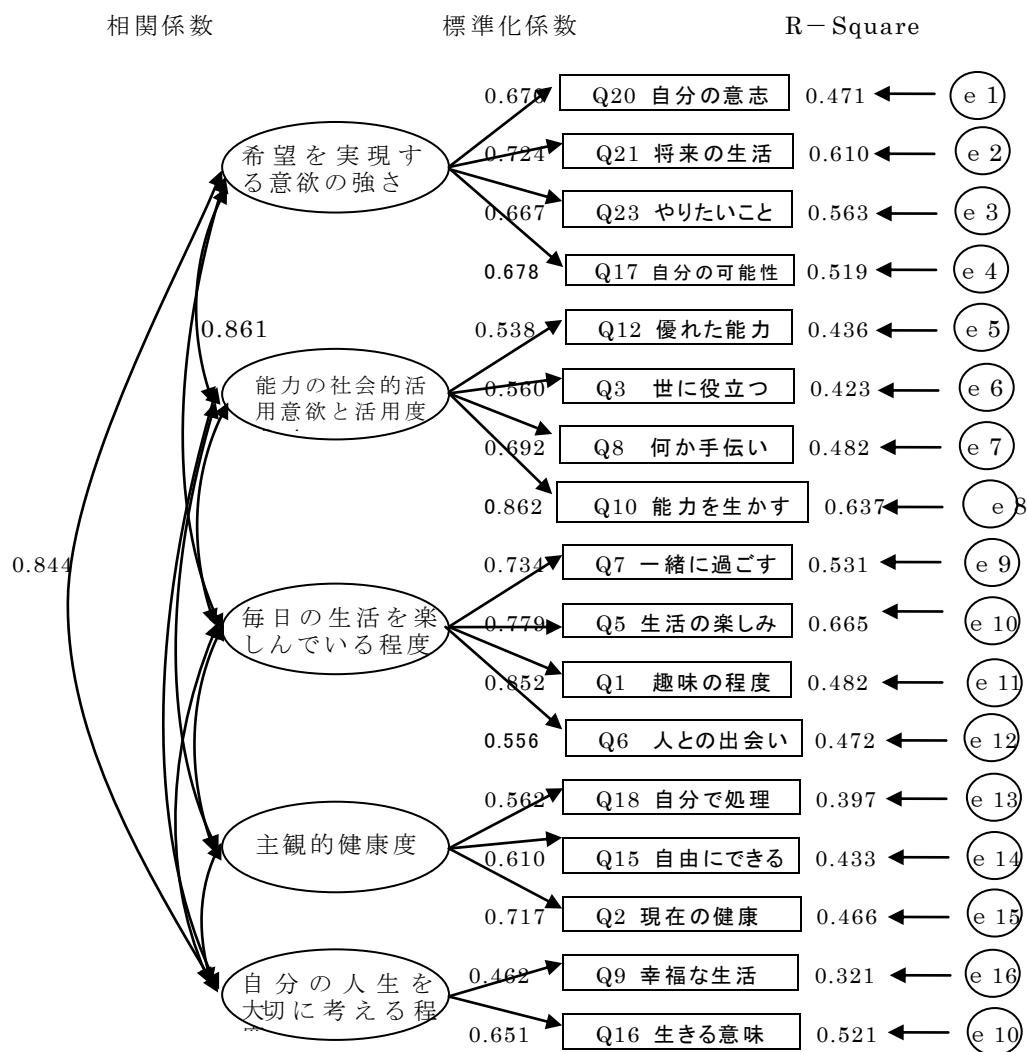
表8-1-1 確認的因子分析結果の因子間の相関行列（N=386）

因子	相 関 係 数				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	1.000	*	*	*	*
第2因子	0.861	1.000	*	*	*
第3因子	0.820	0.840	1.000	*	*
第4因子	0.852	0.819	0.842	1.000	*
第5因子	0.844	0.801	0.782	0.727	1.000

5 因子間の相関係数行列を表 8-1-1 に示した。第 1 因子「希望を実現する意欲の程度」と第 2 因子「能力の社会的活用意欲と活用度」の相関 (0.861) が最も高く、第 4 因子の「主観的健康度」と第 5 因子の「自分の人生を大切に考える程度」の間の相関 (0.727) が最も低かった。

5 個の因子からなる 1 次因子モデルは、図 8-1 に示す通りで、パスに付した数字は標準化係数である。なお、このモデルの適合度指標は、CFI : 0.939 TLI : 0.924 RMSEA: 0.066 (表 8-1-2) であり、後述するように十分な適合性を示している。

図 8-1 自己実現の確認的因子分析モデルの分析結果 (1 次因子モデル)



ここで、第 4 章で自己実現スケールのモデルの候補として採用した 5 因子モデル

ルと比較し、仮説との適合性が劣るとした4因子モデル及び6因子モデルの確認的因子分析の結果を、採用した5因子モデルと比較して、報告する。

表8-1-2に示すように、5因子モデルの適合性が予測通り最も高かった。

表 8-1-2 1次因子モデルの確認的因子分析結果  
主な適合度指標による比較

適合度指標	5因子モデル	4因子モデル	6因子モデル
CFI	0.939	0.934	0.937
TLI	0.924	0.921	0.918
RMSEA Estimate	0.066	0.067	0.068
Probability RMSFA $\leq 0.05$	0.003	0.001	0.001

(ソフト Mplus Ver, 3.11 使用)

- 1) 3つのモデルとも適合度は高いが、5因子モデルの適合度が最も高い。
- 2) CFI : Comparative Fit Index : 0~1 (1に近いほど適合がよい)  
TLI : Tucker-Lewis Index : (1に近いほど適合がよい)  
RMSEA : Root Mean Square Error of Approximation 0.08以下であれば許容範囲内であり、0.05以下が望ましく、0に近いほど適合性がよい。(山本嘉一郎・ほか 2006)(豊田秀樹 2006:177)

5因子からなる1次因子モデルの分析結果は、CFI:0.939、TLI:0.924 RMSEA:0.066(表6-1-2)であり、またRMSEAは基準とされる0.05よりは大きい、0.08以下という許容範囲であって、この分析結果は自己実現スケールの因子構造についての5因子モデルの仮説が調査結果に充分適合していることを示している。



## 第 2 節 2 次の確認的因子分析

共分散構造分析（Covariance Structure Analysis）により、2 次因子モデルの因子構造の適合性を確認的因子分析により検証した。

### 第 1 項 2 次因子の確認的因子分析の潜在変数と観測変数

前節で、一次因子モデルの確認的因子分析を行い、5 因子モデルの適合性を確認した。相関係数の分析(表 8-2-1)から、F 2 と F 3 の 2 つの因子間の相関係数は 0.840 であり、また F 1 と F 4 の 2 つの因子間の相関係数は 0.852 であった。また F 1 と F 5 の 2 つの因子間の相関係数は 0.844 であった。いずれの相関係数も高く、F 2 と F 3 を下位概念とする共通の上位概念の存在が予測され、また F 1、F 4、F 5 の 3 つの因子を下位概念とする共通の上位概念の存在を予測することができる。F 6 と F 7 の 2 つの 2 次因子間の相関係数は 0.986 であった。（表 8-2-1）

表 8 - 2 - 1 2 次因子の確認的因子分析による相関係数と上位概念

2次因子 F6			2次因子 F7			
	F2	F3		F1	F4	F5
F2	1.000	*	F1	1.000	*	*
F3	<b>0.840</b>	1.000	F2	<b>0.852</b>	1.000	*
			F5	<b>0.844</b>	0.727	1.000

F6		F7	
F6	1.000	F7	*
F7	<b>0.986</b>		1.000

高次の因子として、「F 2、F 3」の上位概念を F 6、「F 1、F 4、F 5」の上位概念を F 7 とし、表 8 - 2 - 1 のようなモデルを仮定した。（山本嘉一郎ほか 2006）

すでに第5章の、図5-10-2において「自己実現」スケールの構成概念を示したが、17観測変数の上に7つの下位概念を設定し、さらに「他者との関係性」と「個人の生活」の2つの上位概念を仮説として想定した。

第6章の表6-5-1・2に示した5因子モデルに、表6-7-6の自己実現尺度の5因子への解釈名と構成概念の仮説を整理し、表8-2-2に示した。

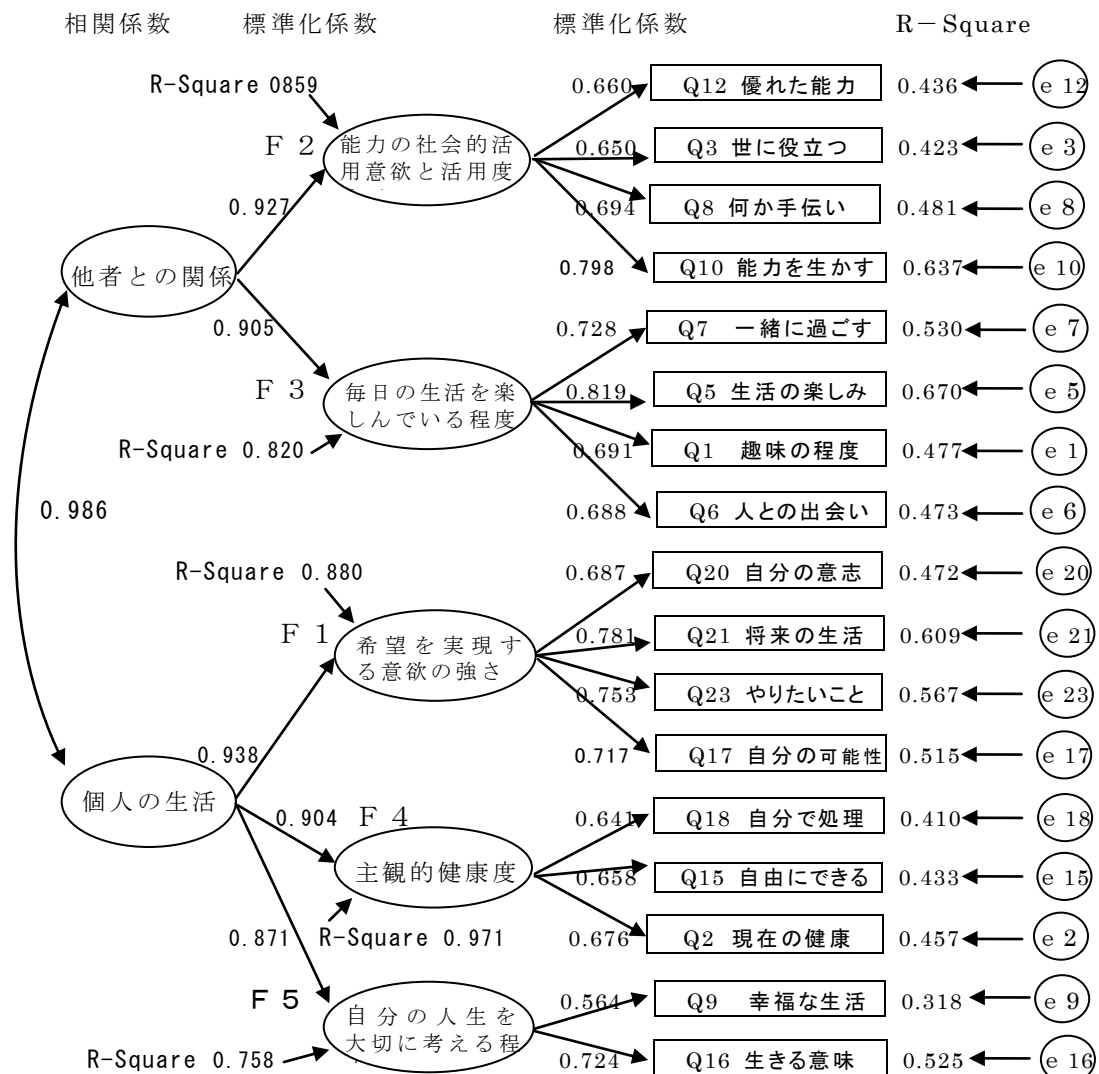
表8-2-2 2次因子確認的因子分析に用いる潜在因子  
と観測変数のモデル（仮説）

2次因子	1次因子	記号	観測変数
F7 他者との 関係性	F2 能力の社会的活用 意欲と活用度	Q12 Q3 Q8 Q10	人より優れた能力が何かあると思いますか 世の中のために、役立つことをしたいですか 人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか ご自分の能力を生かした生活をしていますか
	F3 毎日の生活を楽 しんでいる程度	Q7 Q5 Q1 Q6	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか 毎日の生活の中で楽しいことがありますか 現在、どの程度趣味に取り組んでいますか 人との出会いは、楽しいと思いますか
F6 個人の 生活	F1 希望を実現する 意欲の強さ	Q20 Q21 Q23 Q17	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えてありますか ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか
	F4 主観的健康度	Q18 Q15 Q2	日常生活上の問題をご自分で処理できますか 日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか 同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか
	F5 自分の人生 を大切に考える程度	Q9 Q16	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか

## 第2項 2次因子の仮設モデルの確認的因子分析

前項で説明した表8-2-2のモデルに基づき、2次因子モデルの確認的因子分析を行った結果を図8-2-1に示した。図のパスに付した数字は標準化係数である。（ソフト Mplus Ver. 3.11 使用）

図 8-2-1 自己実現の確認的因子分析モデルの分析結果（2次因子モデル）



注) 一次因子には夫々誤差項が示されるべきであるが、図が煩雑になるので省略した。

2つの2次因子の「他者との関係性」と「個人の生活」の相関係数は、0.986と大きい値を示している。このことは、「自己実現」の概念として大変興味深いことである。「自己実現」を果たしている人は「他者との関係性」が高く、かつ「個人の生活」を大切に考えている。健康で、かつ自分の人生を大切であると考えている、ことを示している。

### 第3項 2次因子モデルの確認的因子分析による適合度指標

2因子モデルの確認的因子分析の結果を、前節で採用した1因子モデルと比較して、表8-2-3に整理し、報告した。

表 8-2-3 2次因子モデルの確認的因子分析結果  
適合度指標の1次因子モデルとの比較

適合度指標	2因子モデル	1因子モデル
CFI	0.938	0.939
TLI	0.926	0.924
RMSEA		
Estimate	0.065	0.066
Probability RMSFA $\leq 0.05$	0.004	0.003

(ソフト Mplus Ver. 3.11 使用)

- 1) 2つのモデルとも適合度は高いが、1次因子モデルの方の適合度が少し高い。
- 2) CFI : Comparatative Fit Index : 0~1 (1に近い程適合がよい)  
TLI : Tucker-Lewis Index : (1に近いほど適合がよい)  
RMSEA : Root Mean Square Error of Approximation
- 3) RMSEAの分析値は、0.08であれば許容範囲内、0.05以下が望ましく、0に近づくことが理想である。(山本嘉一郎・ほか 2006)

適合度指標のCFIの値は、0.938であり、モデルの適合が完全であればCFIの値は、「1」を示し、1に近づくほど適合がよいことから、2次因子モデルの適合はよいといえる。適合度指標のTLIの値は、0.926であり、TLIの値は0から1の範囲で限定されない値をとるなかで、1に近づくほど適合がよいことから、2次因子モデルの適合はよいといえる。

モデルの分布と真の分布の乖離を表現した指標であるRMSEAの値は0.065であり、許容範囲は0.08以下である。この値は、0.05以下であることが好ましいことから、分析値は許容範囲以内であり「ほぼ適合がよい」といえる。このように、2次因子モデルは、よい適合を示しているといえる。

またこのことは、表6-5-2 探索的因子分析による5因子への表6-7-6による自己実現尺度の5因子への解釈名と構成概念の仮説の2つの上位概念「他者との関係性」及び「個人の生活」を含めて、統括的に探索的因子分析によ

り抽出された5つの潜在変数及び17観測変数から構成される5因子モデルを仮設とした図8-2-2の2次因子モデルの構成概念妥当性が、統計学的に確証されたといえる。

つまり、自己実現の構成概念の仮説とした2次因子モデルの上位概念の1つである。「他者との関係」は、「能力の社会的活用意欲と活用度」と「毎日の生活を楽しんでいる程度」の2つの下位概念を構成因子とし、またその2つの構成因子に影響を及ぼしている。また、もう1つの自己実現の構成概念の仮説とした2次因子モデルの上位概念の「個人の生活」は、「希望を実現する意欲の強さ」と「毎日の生活を楽しんでいる程度」及び「自分の人生を大切に考える程度」の3つの下位概念を構成因子として、その3つの構成因子に影響を及ぼしていることが確証された。

ここで説明したように、自己実現の構成概念の仮説とした2次因子モデルは観測変数のデータによく適合していることが確証されたといえる。

[引用文献]:

- 山本嘉一郎・小野寺孝義編著（2006）「Amosによる共分散構造分析と解析事例」  
第2版 ナカニシヤ出版.
- 豊田秀樹（2006）「共分散構造分析 入門編」朝倉書店.

第9章	要約と結論	
第1節	自己実現概念の構築	.....217
第1項	カント他4人の思想家の理念と自己実現の基礎理念	
第2項	自己実現の概念的定義	
第3項	自己実現の操作的定義	
第2節	自己実現尺度（SAT-17）の開発	.....220
第1項	自己実現尺度開発のプロセス	
第1項の1	キーワードプールの作成	
第1項の2	調査項目76原案文のステートメントの作成	
第1項の3	プリテスト用50項目の作成	
第1項の4	本調査用24項目の観測変数の選定と本調査の実施	
第1項の5	自己実現尺度17項目（SAT-17）の観測変数の選定	
第2項	尺度の検証	
第2項の1	確認的因子分析による検証	
第2項の2	自己実現尺度（SAT-17）の信頼性	
第3項	自己実現尺度の特性	
第3項の1	自己実現尺度スコアの統計的な特性	
第3項の2	自己実現トータルスコアと基本属性の関係	
第3節	結論	.....228
第1項	自己実現尺度（SAT-17）の構成	
第2項	自己実現の操作的定義の確定	
第4節	残された課題	.....229
・	謝辞	.....230
・	巻末資料	

## 第9章 要約と結論

本論文は、在宅高齢者を対象とした「自己実現尺度 (SAT-17)」の開発を目的とするものであり、すでに存在する仮説を論証するための論文ではない。これまでに試みられたことのない自己実現尺度の開発であり、尺度開発を通じ、自己実現の構成概念を操作的に定義し、共分散構造分析により構成概念のモデルを確証することを目的とするものである。

ここでは、本論文全体を要約し、結論をまとめた。まず、抽象的で哲学的、心理学的な自己実現の基礎概念が概念的定義を経て、操作的定義へと導かれたプロセスについて説明し、次にこの操作的定義をもとに自己実現の程度を数量的に測定するための尺度 (案) を開発した過程の概要について説明する。この章の後半では、尺度 (案) を用いて実施した調査により得られたデータを使って行った自己実現尺度の信頼性、並びにその特性についての分析結果を要約、総括した上で、残された課題について論ずる。

### 第1節 自己実現概念の構築

#### 第1項 カント他4人の思想家の理念と自己実現の基礎理念

社会福祉学の分野では、これまで「自己実現」に関する実証的研究及び概念定義の研究は行われてきていない。当然、「自己実現」の測定尺度は開発されていない。そのため最初に社会福祉学の視点から、自己実現の基本概念を構築することとした。

自己実現の概念化には、在宅高齢者は利用者である以前に、生きている人間であるとの認識に立ち、カント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の哲学者や心理学者の思想を基礎として、人間の本質論から出発し、自己実現の基本概念の構築を行った。

カントは、人間が行う行為と行為を実際に行う主体である人間の善い意志のあり方及び意志の自律の根本的理念について提示している。特に、「人間の人格は現に存在すること自体に目的があり、われわれは、人間を手段としてみなすのではなく、目的自体として捉え、自分の幸福ではなく、他者の幸福に参与することを

自分の人生の目的としてよい」と論じている。カントのこの思想を自己実現の基本概念に組み入れた。

ニーチェは、生きることの本質は、〈生〉きる意欲であると論じている。人間の存在は、意志が真に意欲的に〈生〉きることを意欲することにより、〈生〉きるとは「理性を持ち、一定の方向を目指し新しい自分を生成していく」ことであると主張している。特に自己否定し虚無に陥った人間に、生きていることの意義の存在の大切さを論じている。ニーチェのこの思想を自己実現の基本概念に組み入れた。

マズローは、5段階の「欠乏欲求理論」を提唱し、ゴールドシュタインから学んだ自己実現 (Self-actualization) について、欲求5段階説の高次欲求の最上位に、心理学者として初めて自己実現を欲求階層の1つの階層として位置づけた。低次欲求である食欲や睡眠などの基本的欲求は、生命維持のため、高次欲求である自己実現の欲求や他の欲求に先行し充足させる必要があるが、しかし、低次欲求を犠牲にし、高次欲求を先に充足させるという欲求もあることを論じている。マズローのこの思想を自己実現の基本概念に組み入れた。

シェーラーは、「人間とは何か」という命題に、人間は「いつも世界とのかかわりにおいて存在している」と論じ、4段階の価値序列を唱え、最高位に聖価値を位置づけ、現実的な自己成長を目指し、「愛の作用」により他者とのかかわり、世界平和や人類の幸せを絶対者に祈るといふことの普遍妥当性の重要性を論じている。シェーラーのこれらの思想を自己実現の基本概念に組み入れた。

これらの4人の思想に共通した理念は、「人間とはなにか」そして「生きることは何か」を命題とし、生きることの行為の主体は個人の間であるという人間の本質論を基本とし、個人の間での行為と自己の成長の意義を、他者との交わりの重要性を通じ論証している。

## 第2項 自己実現の概念的定義

自己実現の概念について、第1章で論じたカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の理念から抽出した自己実現の基礎理念、及びデンマークでの自己実現先行調査から得られた自己実現生活の実例など、また高齢者施設での実務経験の中から得られた思想を取り入れ、本論文で筆者が論じる在宅高齢者の自己実現の概念を次のように定義した。



自己実現とは「日々の生活の中で、自己の新しい人間の創造を目標とし、他者の協力を得ながら潜在能力を生かし、自己を成長させ、自由に生き生きと意欲的に生きている状態をいい、そのことを通じ他者の幸福に貢献していること」。

筆者の自己実現の概念の特徴の第1点は、個人の日々の生活を中心に捉えていること（高齢者福祉の実務経験から）である。第2点は、目標が達成された結果の評価だけではなく、むしろ結果にいたるプロセス、すなわち生き方に注目していること、そこに日常的な小さな課題の達成の積み重ねを自己実現の形態として認めていることである。第3点は個人の成長に留まらず、他者との関係性や他者の幸福に関与している必要性があることである。

### 第3項 自己実現の操作的定義

前項で定義した自己実現のレベルを測定するスケールを開発する第一歩としてカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の先行研究、並びに第2章で論じたサクセスフル・エイジング、QOL、生きがい、自己決定の各先行研究、及びデンマークでの調査、及び高齢者施設での筆者自身の経験から、自己実現に関連すると思われるキーワードを451個抽出した。

その中から、重要なキーワード111個を選定し、KJ法によりキーワードをカテゴリ別に分類し、最終的に2つの大項目、7つの中項目、25の小項目に分類した。

大項目の「個人の生活」は、4つの中項目「人間性」、「自由な行動」、「自律性」、「生きている喜び」から構成されている。大項目の「他者との関係性」は、3つの中項目「健康な生活」、「生活の協力関係」、「他者への愛」から構成されている。

この項目分類に基づき、2つの上位概念と7つの下位概念から構成される自己実現を、次のように操作的に仮定義した。

自己実現とは『「個人の生活」と「他者との関係性」の2つの上位概念から構成され、上位概念の「個人の生活」には「人間性」「自由な行動」「自律性」「生きている喜び」の4つの下位概念が所属し、もう1つの上位概念の「他者との関係性」には「健康な生活」「生活の協力関係」「他者への愛」の3つの下位概念が所属している』。

## 第2節 自己実現尺度(SAT-17)の開発

### 第1項 尺度開発のプロセス

#### 第1項の1 キーワードプールの作成

先に第1節第3項で論じたように、自己実現に関連すると思われる人間生活の各種の領域から451個の自己実現関連のキーワードを抽出した。このキーワードのプールから自己実現に関連の強い重要と思われるキーワード111個を抽出した。

この111のキーワードをKJ法によりカテゴリー別に分類し、最終的に2つの大項目、7つの中項目、25の小項目に分類した。

その作業の例として小項目「社会的要因」に所属する5つのキーワードを次に示した。

表3-3-1 小項目「社会的要因」に所属のキーワード

小項目	キーワード
社会的要因	社会的要因
	社会参加活動
	周囲を幸せにする
	社会生活行動
	社会的適応の場

#### 第1項の2 調査項目76原案文のステートメントの作成

次にこの111個のキーワードから、調査質問項目の候補となる74原案文を作成した。その一部10項目を表3-4-1-1に示した。

表3-4-1-1 74質問項目原案文(一部を掲載)

1. 周囲の人が幸せになるために何か手助けをしていますか。
2. 地域活動や交流の場に参加することを希望していますか。
3. 社会的な集まりの場に参加していますか。
4. 毎日の生活の中で楽しいことがありますか。
5. 現在、何か余暇活動をしていますか。
6. 人との出会いは、楽しいと思いますか。
7. 配偶者からの協力が得られますか。
8. 配偶者と生活を助け合っていますか。
9. 配偶者に配慮していますか。
10. 毎日、家族と食事をともにしていますか。

### 第1項の3 プリテスト用50項目のステートメントの作成とプリテストの実施

プリテストの実施前に、老人クラブに所属する3人の高齢者を対象に、74項目の原案文の必要性及び各項目の表現の適否のヒヤリングを行い、その結果73項目から63項目に削減した。

採用された63項目の質問項目を精査するために、その後さらに、デイサービスセンター利用者12人、大学教員1人、社会福祉士1人を対象に、3回の事前インタビューを行った。利用者の生活に関する現実的な意見を参考に、63質問項目の表現を1項目ごとに丁寧に吟味し、特定の概念を持つステレオタイプの表現や類似した質問、内容が重複した質問、答えにくい質問、わかりにくい質問文などの質問項目の改善を行った。

このような作業を慎重に行い、最終的にプリテスト調査票の質問項目として50項目を選定した。

プリテストは、5点式リッカートスケールで作成された自記式質問票をC市在住の65歳以上の高齢者から無作為に抽出した110人に郵送し、有効回収数42ケースが得られた。プリテストの実施概要は、以下のとおりである。

- 1) 自記式質問票 自己実現項目数50、基本属性15、合計65質問項目
- 2) 調査対象:住民基本台帳からランダムサンプリングを行い、調査対象を抽出
- 3) 郵送配布数 : 110人、回収総数48(回収率43.6%)
- 4) 有効回収数 : 42(38.1%)、データ分析は、ケース数42で実施した。

### 第1項の4 本調査用24項目の選定と本調査の実施

プリテストで用いた50項目を、本調査のために削減したやり方は以下のとおりである。(1) 無回答がある質問項目を削除する、(2) 同じ小項目に複数の質問項目がある場合は、必要最小限の数とする。(3) 現実的でない日常生活への質問など表面的妥当性に大きな問題がある、等の条件を削除の基準とした。そのうえで大学教員その他によって構成されたワーディング検討会を2回行い、問題のある項目を削除し、50項目から32項目まで削減した。

次に、残された32項目について信頼性分析を行い、その結果、IT関連の最も低い項目を最初の削除対象とした。IT関連と削除前のクロンバックの $\alpha$ 係数及び削除後の $\alpha$ 係数を比較し、 $\alpha$ 係数が高まることを確認し、削除が適切であることを検証しながら、32項目から24項目まで質問項目を削減した。

本調査は、5点式リッカートスケールで作成された自記式質問票をC市在住の65歳以上の高齢者から無作為に抽出した1120人に郵送し、有効回収数413ケースを得た。本調査の実施概要は、以下のとおりである。

- 1) 自記式質問票 自己実現項目数24、基本属性16、合計40質問項目
- 2) 調査対象:住民基本台帳よりランダムサンプリングを行い、調査対象を抽出
- 3) 郵送配布数 : 1120人、回収総数431(回収率38.5%)
- 4) 有効回収数 : 413(36.8%) データ分析は、ケース数413で実施した。

### 第1項の5 自己実現尺度17項目の選定

本調査の結果をもとに24観測項目を17項目まで削減したプロセスは、次の通りである。手順として最初に、度数分布が正規分布を示さない質問項目Q13を削除した。

次に、信頼性分析を行い、I-T相関が最も低い項目(項目を削除した時、クロンバックの $\alpha$ 係数が最も高い項目)を削除した。相関係数(I-T相関)の最も低い項目は、全ての項目との相関が低く、遊離している項目である。それでも項目選定ができない場合は、全ての観測変数相互の相関係数を調べ、最も相関係数の高い一組の2つの項目の一方を削除した。この作業を繰り返し行った。

次に、項目数を少なくした段階で、残された項目で因子分析を行い、遊離した項目及び因子負荷量が0.4以下の項目を削除することとした。

表 5 - 1 0 - 8 自己実現尺度 17 項目のステートメント

観測変数名	自己実現尺度 17 項目のステートメント
Q1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか
Q2	同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思えますか
Q3	世の中のために、役立つことをしたいですか
Q5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか
Q6	人との出会いは、楽しいと思えますか
Q7	最近、お知り合いと一緒に過す時がありましたか
Q8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか
Q9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか
Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか
Q12	人より優れた能力が何かあると思えますか
Q15	日常生活で、自分のしたいことが自由にできますか
Q16	あなたは、生きていることに大切な意味があると思えますか
Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思えますか
Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか
Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えて入ますか
Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
Q23	ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思えますか

項目数を削減した段階で、17 項目の因子分析を行い、スケールとして望ましい下位尺度（因子構造）の確認、抽出された因子への合理的で適切な命名ができることを確認した。こうして、最終的に 17 尺度項目を確定した。

## 第 2 項 尺度の検証

### 第 2 項の 1 確認的因子分析による検証

探索的因子分析により抽出された 1 次因子の 5 因子モデルの上位概念に、2 つの 2 次因子「他者との関係性」と「個人の生活」を加え仮設とした高次（2 次）因子モデルを想定し、この 2 次因子モデルと測定データの適合の程度を確認的因子分析により検証し、3 つの適合度指標 CFI、TLI、RMSEA により評価した。

CFI は 0.938 と十分高く、TLI も 0.926 と高い値であった。ともに十分な適合を示す高い満足度のいく値であった。モデルとデータの乖離を表現する指標である RMSEA は 0.065 であり（RMSEA の許容範囲は 0.08 以下）、分析値は、ほぼ十分な適合を示す結果であった。

3 つの適合度指標から、自己実現の構成概念の仮設、すなわち、2 つの 2 次因

子「他者との関係性」と「個人の生活」を上位概念とした2次因子モデルは、観測変数のデータによく適合していることが示された。

5つの下位因子の説明力は、2つの上位因子をどの位よく説明しているかを示す決定係数 ( $R^2$ ) の値で示される。

2つの2次因子のうちの一つである「他者との関係性」を説明する一次因子の「能力の社会的活用意欲と活用度」の R-Square の値は 0.859 であり、もう一つの一次因子である「毎日の生活を楽しんでいる程度」の R-Square の値は 0.820 であった。

また、もう一つの一次因子である「個人の生活」を説明する1つ目の一次因子の「希望を実現する意欲の強さ」の R-Square の値は 0.880 であり、2つ目の一次因子の「主観的健康」の R-Square の値は 0.971 であり、3つ目の一次因子の「自分の人生を大切に考える程度」の R-Square の値は 0.758 であった。

つまり、R-Square の値は最高 0.971 (F1) から最低 0.758 (F5) (図 8-2-1) であった。R-Square の値は、1に近い程、説明力が高いことから、2つの2次因子「他者との関係性」と「個人の生活」を持つ高次(2次)因子モデルは、5つの独立変数が2つの従属変数をよく説明していることが示された。

## 第2項の2 自己実現尺度(SAT-17)の信頼性

### 1) 自己実現尺度の信頼性と妥当性

本研究で開発した自己実現尺度 (SAT-17) の信頼性をクロンバック (Cronbach) の  $\alpha$  係数を求めて評価した。

本調査では最終的に 386 ケースの有効回答が得られたが、このデータに基づいて計算されたクロンバックの  $\alpha$  係数は、0.924 であり、統計学的に十分に高い信頼性を示す値であった。

妥当性は、プリテスト前の段階で4回のワーディング検討会を実施し、さらに、本調査前に福祉の専門家4人のチームで2回のワーディング検討会を行った。十分詳細に精査していることから、表面的妥当性は十分確認されたといえる。

表 9 - 1 自己実現尺度の  $\alpha$  係数

自己実現尺度の種類	N of Cases	Items	$\alpha$ 係数
プリテスト後 24 項目の仮尺度	42	24	0.891
本調査自己実現尺度 17 項目 (SA-17)	386	17	0.924

## 2) 下位尺度の信頼性

自己実現尺度は、5つの下位尺度から構成されている。下位尺度を構成する観測変数が、各々が所属している各下位尺度の構成概念をどの程度よく表現しているかの内的整合性について、クロンバックの  $\alpha$  係数を求め、評価した。

第 1 下位尺度から第 4 下位尺度までの  $\alpha$  係数は 0.703~0.819 であった。 $\alpha$  係数の値は概ね 0.6 以上であれば内的整合性を保持しているといわれていることから、4つの下位尺度は、十分な内的整合性が確保されていることが確認された。

表 9 - 2 下位尺度の  $\alpha$  係数

下位尺度	N of Cases	Items	$\alpha$ 係数
第1下位尺度 (F 1)	402	4	0.789
第2下位尺度 (F 2)	403	4	0.810
第3下位尺度 (F 3)	396	4	0.819
第4下位尺度 (F 4)	411	3	0.703
第5下位尺度 (F 5)	400	2	0.590

第 5 下位尺度の  $\alpha$  係数は 0.590 であったが、この下位尺度に属する項目数は、2項目であり、3~4項目の観測変数が所属する他の4つの下位尺度の  $\alpha$  係数より低い値を示すのはやむを得ぬことから、内的整合性は満足できると考えてよいと思われる。

## 第3項 自己実現尺度の特性

### 第3項の1 尺度スコアの特性

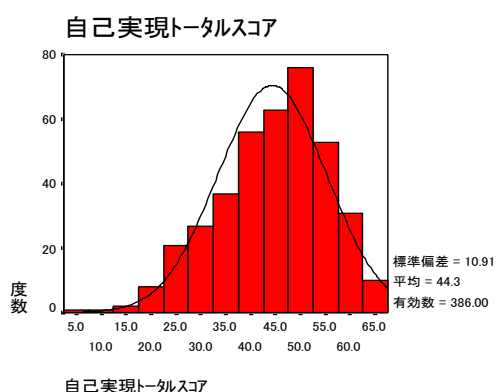
本研究の自己実現尺度 (SAT-17) のスコアについて説明する。本尺度は全 17 観測変数から直接求められる 5つのサブスコア (下位尺度スコア) と総合得点で

ある自己実現トータルスコアから構成されている。

自己実現トータルスコアは、5つの下位尺度スコアの合計点である。まず5つの下位尺度スコアを個別に計算する。自己実現トータルスコアは、第1下位尺度スコアから順次第5下位尺度スコアまでの5つの下位尺度スコアを合計し、総合得点として求められる。

図 7-2-1

この研究で実施した調査結果の集計を以下に報告すると、自己実現トータルスコアの平均値は、44.3点であり、最高値は65点、最頻値は50点であった。トータルスコアはやや長い裾野を左に持つ正規分布に近い曲線を描いており、ゆがみが少な



いことから正規分布のデータを扱う統計解析手法の従属変数として取り扱うことができると考えてよい。

### 第3項の2 自己実現トータルスコアと基本属性の関係

基本属性が自己実現トータルスコアに及ぼす影響を確認するため、「自己実現トータルスコア」を「従属変数」とし、「16の基本属性」を「独立変数」とする分散分析を行い、その主要な結果を以下のようにまとめた。

第1に、高い「自己実現トータルスコア」を示す高齢者は、日常生活や社会的な場での状況を識別し判断する「判断力」が適正に機能し、また、「電話やメール」を媒介として、他者との人間的交流や情報の交換を頻繁に行っている傾向があるということが確認された。

第2に、「同居人数」は、収入が同じ人の場合、「同居人数」が多いほど「自己実現トータルスコア」の得点が高いことが確認された。その理由は、「同居人」を一種の「他者」と見ると、「同居人数」は他者との交流の多さの間接的な指標といえるからである。

つまり、「電話やメール」の回数は、道具を媒介した間接的な他者との交流や



情報交換の頻度を示し、「同居人数」は、日常的な生活の場で、直接的に他者との交流の多さの頻度を示す指標であるといえるからである。

他者との交流の頻度の多さが、それぞれ独立的に「自己実現トータルスコア」を高める要因として影響を及ぼしている。つまり、上位概念である「他者との関係」の頻度の多さは、「自己実現トータルスコア」を高める基本的な要因であるといえる。

第3に、「自己実現トータルスコア」を従属変数とし、「最終学歴」を最初の独立変数としたステップワイズの多元配置分散分析では、「男」「女」を別にすれば、それぞれに、「最終学歴」の高さは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意に影響を及ぼしているといえることができる。

### 第3節 結論

#### 第1項 自己実現尺度(SAT-17)の構成

この研究で開発した自己実現尺度(SAT-17)は、表9-3-1に示したように、5つの1次因子及び2つの2次因子で構成されている。

表9-3-1 自己実現尺度17項目のステートメント

2次因子	1次因子	記号	自己実現尺度17項目のステートメント
F7 他者との 関係性	F2 能力の社会的活用 意欲と活用度	Q12	人より優れた能力が何かあると思いますか
		Q3	世の中のために、役立つことをしたいですか
		Q8	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか
		Q10	ご自分の能力を生かした生活をしていますか
	F3 毎日の生活を楽 しんでいる程度	Q7	最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか
		Q5	毎日の生活の中で楽しいことがありますか
F6 個人の 生活	F1 希望を実現する 意欲の強さ	Q1	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか
		Q6	人との出会いは、楽しいと思いますか
		Q20	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えてありますか
		Q21	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
	F4 主観的健康度	Q23	ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか
		Q17	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか
F5 自分の人生 を大切に考える程度	Q18	日常生活上の問題をご自分で処理できますか	
	Q15	日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか	
	Q2	同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思えますか	
	Q9	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか	
	Q16	あなたは、生きていることに大切な意味があると思えますか	

#### 第2項 自己実現の操作的定義

確認的因子分析で検証された2次因子モデルから、自己実現を以下のように操作的に定義した。

自己実現は、『「個人の生活」と「他者との関係性」の2つの上位概念から構成され、上位概念の「個人の生活」は「希望を実現する意欲」と「主観的健康度」及び「自分の人生を大切に考える」の3つの下位概念から構成される。上位概念の「他者との関係性」は「能力の社会的活用意欲と活用度」及び「毎日の生活を楽しんでいる程度」の2つの下位概念から構成される。』

## 第4節 残された課題

本尺度の研究の調査対象地域は、高齢者の最終学歴に占める高校卒業者以上の者の比率が81.8%であり、平成12年の国勢調査の53.2%と比較すると、高齢者のうち大学・大学院及び高校卒業者の高学歴高齢者の居住率がかなり高い地域である。

つまり、本研究の自己実現尺度（SAT-17）は、大都市近郊の学歴が高い者の居住率が高い住宅地域の元気高齢者をサンプルとして開発されたものであり、地方小都市や農村部などの地域にも適用可能かどうか不明である。

したがって、今後このような地域において、さらに継続調査を行い、地域的な交差妥当性を確認する必要がある。

なお、同じ在宅高齢者でも、自立歩行が困難などADLやIADLの水準の低い高齢者や、軽度の認知症高齢者にもこの尺度を使用することが可能かどうかにも検証する必要がある。

今回の研究で積み残した大きな課題は、今後はPGCモラールスケールや人生満足度尺度などの相関が高いと予測される他の尺度との比較検討である。高齢者の主観的幸福感尺度と自己実現尺度を一緒に用いた調査を行い、相関の程度やまた各種の独立変数との関連性の相違などを調べ、自己実現尺度の固有の性質を明らかにすることが必要である。

このような作業が積み重ねられ、改善が進んで、完成度の高い自己実現スケールができ上がれば、自立度の高い高齢者を対象とする各種サービスの効果を評価する尺度として活用することができよう。

高齢社会では、高齢者が可能な限りいつまでも、心身の健康のレベルを高く保ち、自立した生活を続けることが期待されている。そのためには、高齢者自身の若い時からの努力とともに、高齢者の心身の活動レベルを高く保つための社会サービスを充実する必要がある。現在までに身体的健康の保持増進のサービスについては、有効な方式がほぼ確立されているが、自己実現などの精神の活動レベルの維持、増進のためのサービスとして、どのようなものが、またどのようなやり方が有効なのか必ずしも明確になっていない。自己実現尺度は、有効な方法を開発するための具体的な道具の1つとして役立つことが期待される。

## 謝 辞

自己実現尺度の開発の本論文にご協力いただいた大勢の方々に心よりお礼申し上げます。

在宅高齢者の調査を展開した C 市の市役所の高齢福祉課でお世話になった方々、度々の住民基本台帳の閲覧に快く対応していただいた市民課の方々には大変お世話になり、感謝申し上げます。C市の調査票のアンケートにご協力いただいた大勢の在宅高齢者の方々には、心より感謝いたしております。また、老人クラブの3人の役員の方々には、ヒヤリングを快くご承諾いただき感謝申し上げます。またヒヤリングにご協力いただいた東京のR老人ホームの施設職員の方々及びデイサービスの利用者の12人の方々に、心より感謝申し上げます。元東京社会福祉士会会長の戸栗栄次様にも2度のヒヤリングにご協力いただき感謝申し上げます。ワーディング検討会で丁寧に専門的な助言をいただいた元日本女子大学教授牧野田恵美子先生、武蔵工業大学教授の山岸道子先生には、大変お世話になり感謝しております。

ルーテル学院大学大学院で本研究のご指導を頂いた諸先生方に感謝申し上げます。特に3年間、主査教授として、研究開発の専門的手法や博士論文の執筆の基本を根本からご指導いただいた前田大作先生には、退官後も、度重なる直接指導及び郵便やEメール等で、論文提出の最後まで丁寧に指導や励ましのことをいただき、心より深く感謝を申し上げます。主査教授の石川久展先生には、先行研究など論文の構成にご指導を頂き、心より感謝申し上げます。

主査教授の江藤直純先生には、哲学的、心理学的な側面から自己実現の理念や概念の確立に温かなご指導を頂き、心より感謝申し上げます。副査教授の平山佳須美先生には、論文の開始から提出まで長い間、英文表現や諸外国の引用文献についてご指導とやさしい励ましのことをいただき感謝申し上げます。また、社会福祉学専攻主任教授の和田敏明先生には、常に進行のご相談を受けていただき、学会発表や論文提出の進行に的確なご指導をいただき、心より感謝申し上げます。ルーテル学院大学大学院のゼミでともに熱く議論した博士課程の皆さんにも感謝申し上げます。

勤務校のNHK学園社会福祉士養成課程の職場の皆さん方には、時間的配慮をしていただき、大変感謝いたしております。

最後に、家庭で論文執筆を理解し、また直接郵送作業に協力をしてもらった妻清重恵子に感謝している。

2008年5月

清重哲男

< 巻末資料編 >

第2章	適用分	QOLの先行研究	.....	232
第3章	適用分	自己実現の定義用	.....	237
第4章	適用分	プリテスト用	.....	250
第5章	適用分	本調査用	.....	276
第6章	適用分	因子分析用	.....	303
第7章	適用分	スコア用	.....	311
第8章	適用分	確認的因子分析用	.....	321

表2-3-2 諸外国のQOL関連評価尺度の先行研究の概要  
(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (岩瀬・飛松 2005:26-78)

分野	尺度名称 開発者 開発年	特徴	構成	信頼性	妥当性
1 心身機能 癌疾患 尺度	Functional Assessment of Cancer Therapy (FACT) Cella . 1993	がん患者の臨床試験用QOL測定が目的である。下位尺度の追加可能	4下位尺度27項目(身体7.社会・家族7.心理6.活動7) 各下位尺度スコアを合計	信頼性が確認されている。	妥当性が確認されている。
2 心身機能 情緒うつ 疾患尺度	SDS (self-rating depression scale) Zung WW. 1965年開発	うつ病、神経症などの患者を対象に自覚的なうつ状態の強さを評価	1)抑うつ状態の主感情 2)生理的随伴症状 3)心理的随伴症状 3領域20項目 4件法回答	再テストの相関係数0.85、Spearman-Brownの信頼性係数推定値0.75、高い信頼性	1%及び0.1%の水準で有意に得点が確認されている。弁別妥当性
3 心身機能 情緒不安 尺度	MAS(manifest anxiety scale)(Minnesota multiphasic personality inventoryより) Taylor JA. 1953	状況を脅威的だと認知して不安な状態で反応する「特定不安」を測定	日本語版は、50項目と15項目の妥当性尺度の計65項目 3件法回答。男26、女23点以上は不安	十分な信頼性が確認されている	Cornel medical indexにより同時妥当性を確認。弁別妥当性も確認された
4 心身機能 失語症 尺度	WAB(Westeran Aphasia Battery) Kertesz A. 1982	障害を受けている全ての言語側面を検査する。多様な失語症タイプを判別できる	9領域から構成。(自発語(自発語・話し言葉の理解復唱・呼称・読み・書字行為・構成行為・視空間	検者間信頼性、再検査信頼性とも高い α係数は、0.8以上	α係数とθ係数は概ね0.8以上
5 心身機能 記憶 尺度	WSMS-R(Wechsler memory scale-revised)ウエクスラー記憶検査(改訂版) Wechsler 1987	成人(16~74歳)の記憶機能を総合的に測定。健常者の記憶能力・患者の記憶障害の程度を評価する。	13の下位検査から構成5つの記憶指標あり	信頼性係数、測定標準誤差が得られている。信頼性は高い	構成概念妥当性のデータが記載されている。
6 心身機能 視覚性記憶 尺度	Benton視覚記憶検査(Benton visual retention test) Benton AL. 1946	対象は5歳~成人脳損傷者を対象視覚性注意・記憶、視覚認識・構成能力評価	10枚の図版から構成されている。大型図形が2枚、周辺図形を含む大型図形が8枚である	再テストによる信頼性係数が得られている。信頼性は高い。	基準関連妥当性、構成概念妥当性の記載がある。
7 心身機能 知能検査 尺度	WAIS-RとWISC-III(Wechsler adult intelligence scale)(Wechsler intelligence scale for children) 1955, 1949	WAIS-Rは16~74歳、WISC-IIIは5~16歳が対象。偏差知能指数に基づき年齢階層別3指数算出	言語性課題と動作性課題の2領域から構成される。	標準化データの信頼性係数は全年齢で高い。下位尺度の信頼性も高い。	内容的妥当性 基準関連妥当性 構成概念妥当性が示されている
9 心身機能 認知機能 尺度	MMSE(mini-mental asate examination) Folstein MF, Foistein SE McHugh PR. 1975	短時間で道具なし、ベッドサイドでも可能。カットポイント(23/24)認知を識別。30点満点	11領域から構成1~7は口頭で回答、8~11は動作で応答する。30点満点である。	原著、その後の研究高い信頼性を確認	原著、その後の研究で高い妥当性を確認。
10 心身機能 神経症性 尺度	GHQ (general health questionnaire) Goldberg DP. 1972	神経症、心身症患者の症状把握する神経症症状と全般の活動状況を把握	6因子、30項目からなる6因子、28項目のものもある。4選択肢で回答。	高い内的整合性を確認。再テスト信頼性は0.75 析半法の信頼性は0.75	高い弁別妥当性を確認。再テスト信頼性は0.75 析半法の信頼性を示す。
11 心身機能 疼痛 尺度	MPQ (McGill pain questionnaire) Melzack R. 1975	疼痛理論に基づき、20グループ8項目の中から被験者が選択3側面を考慮している	20領域の78痛みの種類最も軽い痛みを1点とし、20領域ごとに評価点を計算。全ての評価点を合計	原著者の再テストで確認済み。	因子分析を含め各種妥当性評価が行われている。
12 心身機能 癌性疼痛 尺度	BPI (brief pain inventory) Clelland CSら 1982	鎮痛や癌性疼痛管理の国際比較に有用	14質問項目がある。14番質問項目は7下位質問項目から構成される10段階の痛みを回答。	各国語版で信頼性の評価が終了している	各国語版で妥当性の評価が終了している
13 心身機能 筋力 尺度	MMT (manual muscle testing)徒手筋力テスト Lovett 1912	個々の筋肉の筋力が低下している程度と徒手的に評価する	0から6までの順序尺度である。抵抗の加え方は、声かけによる、2方法あり	Florenceらにより1992年の研究で証明されている。	Bohannonの研究1998年に検証済み。
14 心身機能 関節疾患 尺度	ROM (range of motion)関節可動域テスト AAOS 1965	関節機能だけの評価は困難。筋や関節、靭帯伸展性、骨性の制限を知る。	目的は関節の可動域から患者の重症度の判定、制限因子の発見、治療効果の定量的評価である。	Allingtonらの研究で2002年に検者間信頼性が確認されている	Tousignantらの研究で200年に関節可動域測定の妥当性が示されている。
15 心身機能 関節疾患 尺度	Ashworth scale 1987年 報告 Ashworth. 1964	他動的に関節を動かした時の抵抗を評価したもの	グレードは6段階である約1秒かけて伸展し、5~8回程行う	BohannonとSmithの研究で1987年信頼性が報告されている。検者内信頼性は可	Pandyanらの研究報告あり。2003年妥当な麻痺評価は不可である

表2-3-3 諸外国のQOL関連評価尺度の先行研究の概要  
(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (岩瀬・飛松 2005: 79-142)

分野	尺度名称 開発者 開発年	特徴	構成	信頼性	妥当性
16 心身機能 発達 尺度	DDST (Denver developmental screening test) デンバー発達スクリーニング尺度 Frankenburg WK. 1967	保険医療者が子供の潜在的な発達上の問題の発見が目的。6ヶ月から6歳	養育者への質問と行動検査項目の2分野からなる。質問は、4領域で評価する。	再テスト法により高い信頼性が確認されている。	特に報告なし
17 心身機能 知能検査 尺度	田中・ピネー知能検査 (tanaka-binet test) 田中寛一 1947	被験者の知的能力を総合的に測定し、精神年齢と知能指数を算出する。	1~13歳の年齢級に96項目の検査を用意。知能指数は生活年齢に対する%で表示する。	現在検討中	内容的妥当性、基準関連妥当性構成概念妥当性が示されている。
18 心身機能 発達 尺度	S-M社会生活能力検査 三木安正 杉田裕 1958	1~13歳に適用。基本適な生活能力の発達を評価する 能力は6領域で構成	6領域130項目○×評価○の数が得点。身辺自律移動・作業・意志交換・集団参加・自己統制・6つ	内的整合性の検定α係数の算出、再テストの信頼性あり。全検査安定係数0.732	Adaptive behavior scale(ABS)の間に並存的妥当性が確認されている
19 活動と参加 歩行の検査 尺度	Hofferの歩行機能レベル Hoffer MMら 1973	歩行能力を社会的活動場面へ関連づけることが特徴 きわめて実用的	日常生活の歩行状態を4段階に分類。屋外自立屋外車椅子、屋内車椅子常時車椅子の4段階	記載なし	大腿四頭筋筋力とHoffer歩行機能レベルとの関連性の高いことが確認済み
24 活動と参加 包括的ハンデ キャップ 尺度	CHART(Craig handicap assessment and reporting technique) 尺度 Whiteneck GB・他 1996	国際的なハンデキャップ測定尺度 正式な日本語版のある誰一の尺度	6領域 32項目の設問で構成。必要な時間を回答領域ごとに評点し、100点が最高点である。	原版は脊髄損傷で日本語版は脳卒中確認されている	信頼性と同一条件で確認されている
29 QOL健康 包括的健康 尺度	SIP (sickness impact profile) Rergner M・他 1978	Sickness を病気ではなく、主観的な個人の罹患経験、日常活動感情の認識と見る	3領域(12グループ) 136項目に改定された。 (グループ:睡眠・食事・仕事など)	信頼性・妥当性に関し多くの報告があり、また他の健康評価尺度との比較研究も行われている。	
31 QOL健康 下肢切断者 尺度	PEQJ(日本語版PEQ) Legro MW. 1998	義足に関する健康関連QOLである。スコアはvisual analogue scaleで連続値分析が可能	84項目と15下位領域からなり、9下位尺度から構成される。VASで回答する。	証明されている	証明されている
32 QOL健康 変形性股・膝 関節症 尺度	WOMAC (Western Ontario and McMaste Universities osteoarthritis index) Bellamy 1988	変形性股・膝関節症に疾患特異的な評価尺度 自記式質問紙	3領域24項目で構成。 疼痛:5項目、こわばり:2項目 機能17項目計24項目。	開発者を含め多くの報告がある。 計量心理学的検討は済んでいる。	開発者を含め多くの報告がある。 計量心理学的検討済んでいる。
33 QOL健康 骨粗鬆症患者 者 尺度	JOQOL 日本骨代謝学会骨粗鬆症患者QOL評価質問表 日本骨代謝学会 2001	骨粗鬆症患者のQOLを測定。日常生活、心理への影響を測定 自記式質問紙	7領域39項目から構成 最高を5、最低1点の評価点。最終評価0~100 尺度。5段階Likert式	内的整合性 α 係数0.81 再テスト法による相関係数0.92	SF-36相当関連領域との評点との間に高い相関が認められた
34 QOL健康 変形性膝関 節症 尺度	JKOM (japanese knee osteoarthritis measure) 日本整形外科学会 2003	変形性膝関節症に疾患特異的な評価尺度	25項目4領域(日常生活全般の活動健康状態疼痛とこわばり)自記式5段階のLikertスケール	信頼性の計量心理学の検討は終了している	妥当性の計量心理学の検討は終了している。
35 QOL健康 関節疾患 尺度	AIMS2 (arthritis impact measurement scales) Meenan RF. 1980	関節患者に特異的な評価尺度。改訂版は、質問項目が12グループである。	18領域79質問項目で構成。5段階の回答。0、2.5,5,7.5,10点を配点各領域は平均点評価	日本語版の信頼性は、リウマチ学会により行われた。	日本語版の妥当性はリウマチ学会により行われた。
36 特異疾患 関節リウマチ 尺度	HAQ (health assessment questionnaire) Fries JF ほか. 1980	関節症状と生命予後副作用や医療費に及 各側面を階層モデルとして捉えている。	8動作の困難度を4段階「困難なし」「やや困難」「かなり困難」「できない」を行う。	きわめて高い信頼性が報告されている。	きわめて高い妥当性が報告されている。

表2-3-4 諸外国のQOL関連評価尺度の先行研究の概要  
(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (岩瀬・飛松 2005: 141-186)

分野	尺度名称 開発者 開発年	特徴	構成	信頼性	妥当性
37 特異疾患 脳卒中 尺度	SIAS (stroke impairment assessment set) 千野直一・他 1995	片麻痺の機能障害を神経学的検査や画像診断を行わず、診察と観察から行う	8領域22項目から構成 0,1,2,3,4の4段階評価 一部0,1,2,3,4,5の6段階評価を行う。	証明されている	証明されている
38 特異疾患 精神遅滞 尺度	AAMR (mental retardation) 初版 1921 最新 1992 米国精神遅滞学会	精神遅滞を定義し、社会適応上の問題点と必要な支援のレベル明確化の尺度	知能指数70以下、2つ以上の適応スキルに問題、18歳以上で発症する	知能指数は標準化された検査法の結果である。適応スキルは注意が必要である。	知能指数は標準化された検査法の結果である。適応スキルは注意が必要である。
39 特異疾患 慢性閉塞性 疾患 (COPD) 尺度	Hugh-Jones分類 Fletcher CM. 1952	どの程度の労力で息切れするかに着目。大まかな分類で日常臨床に簡便で使い易い	5項目の質問から構成 歩行を組み入れた質問項目である。	四人の評価者で再現性評価し、信頼性は十分である。	Hugh-Jonesの論文で各種客観指標に対し妥当性の確立が示されている。
30 特異疾患 心臓疾患 尺度	NYHA分類 (Criteria Committee of the New York Heart Association.) 1964	日常生活で出現する症状の程度から重症度を評価する。4段階に分類される。	4クラスの分類である。 歩く速度や階段の数などに影響される。	2人の医師の評価でクラス分類が一致する再現性は、56%であった。	運動負荷試験による評価と一致する妥当性は、51%から54%であった。
41 特異疾患 心臓疾患 尺度	SAS (specific activity scale) Goldman L ほか. 1981	再現性・妥当性に優れ、簡便な評価法。 身体活動能力を4段階に分類する。	21項目から構成。四領域に分かれる。「はい」「つらい」「？」の3段階項目回答。	2人の質問者の評価でクラス分類が一致する再現性は、73%であった。	運動負荷試験による評価と一致する妥当性は、68%であった。
42 特異疾患 筋萎縮性側 索硬化症 尺度	ALSAQ-40 (amyotrophic lateral sclerosis assessment questionnaire) Jenkinson C ほか. 1999	筋萎縮性側索硬化症の治療を目的にQOLを改善し寿命を延ばすため作成した尺度	5領域40項目から構成 領域ごとの項目は3,7,10,10,10項目。得点は0~100点で評価。	内的整合性は5領域とも0.91以上	構成概念妥当性は各領域がSF-36との相関が高いことから検証されている。
43 特異疾患 筋萎縮性側 索硬化症 尺度	Norrisスケール Norris FA. 1974	筋力、上下肢による日常生活動作、球症状の機能を3領域別に点数化している。	3領域の評価点で現す12種類の関節運動のMMT測定結果を総計する。4段階評価を行う	日本語版作成に当たり尺度として必要な検討がなされたかが不十分である。	日本語版作成に当たり尺度として必要な検討がなされたが不十分である。
44 特異疾患 筋萎縮性側 索硬化症 尺度	ALSFERS (amyotrophic lateral sclerosis functional rating scale) ALSCNTF治療グループ1996	筋力低下による日常生活の不自由さを測定する尺度	言語、嚥下、着衣、歩行等10活動について、0~4点の5段階評価	検者内(級内相関係数0.97)、検者間(k係数0.63)であり、信頼性が確認されている。	因子分析の結果、3因子に別れ、因子的妥当性が確認されている。
45 特異疾患 多発性硬化 症尺度	Kurtzke 総合障害度評価 尺度 (Kurtzke extended disability status scale: EDSS) Kurtzke JF. 1983	多発性硬化症 (MS) の神経症状と移動能に基づく重症度分類で実用的である。	8領域を6~7段階で評価を行う。EDSSは0から10まで0.5ずつ分けられている。	テスト・再テストによる信頼性のデータは示されていない。	患者の分布が正規分布であり、偏りがなく、階級の分け方は妥当である。
46 特異疾患 腰痛疾患 尺度	Oswestry low back pain disability questionnaire Fairbank JC 1980	腰痛・下肢痛による機能障害を評価する自記尺度	疼痛強度1項目 日常動作の制限9項目 計10項目から構成 6段階で評価する。	原著者による信頼性の検討があるが、さらに検討が必要である。	原著者による妥当性の検討があるが、さらに検討が必要である。



表 2-7-2 日本の近年のQOL関連尺度の先行研究

分野	論文名称 著者 発表年	特徴	構成	(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (老年社会科学学会雑誌 1997~2007)	
				信頼性	妥当性
1 高齢者 記憶能力 尺度	高齢者の記憶能力の 自己評価法の開発 長田由紀子・他 1997	記憶の自己評価に関 する3つの尺度を検 討(一般的記憶活動、 情動、覚える動機)	メタ記憶尺度:40項目22 ~88得点情動尺度:17 項目17~68得点動機 尺度:7項目7~28得点	3尺度とも、共通して高 い信頼性が得られた $\alpha$ 係数0.83~0.88で 内的一貫性確認	今後の再確認が 必要
2 高齢者 介護必要度 尺度	高齢者の介護必要度に関 するADL尺度と痴呆尺度を 利用した数量化モデルの 研究 北島英治 1997	フアジ(あいまい)理 論を応用し、新たに 介護必要度の数量 化の提示が目的	ADL尺度:4項目に痴呆 尺度:6項目を加え、 介護必要度を数量化 した	信頼性に言及して いない	妥当性に言及して いない。
3 高齢者 ADL 尺度	ADL・IADLから見た日常 生活自立度判定基準 石橋智昭・他 1998	総合生活機能指標の 障害老人の日常生 活自立度判定基準と 生活機能関連を検討	ADL項目:8質問項目 IADL項目:8質問項目 生活自律、準寝たきり、寝 たきりの3カテゴリ分類	信頼性に言及して いない	妥当性に言及してい ない。
4 高齢者 健康度 尺度	高齢者の健康度自己 評価に関する要因 青木邦男 1998	健康度自己評価に関 し調査、配偶者 と女性高齢者に ついて分析した。	健康度自己評価項目は 非常に健康など5段階 評価。ソーシャルサポ ート測定尺度16項目を分析	信頼性に触れて いない	妥当性に触れてい ない。
7 青年・中年 高齢者 セクシュアリティ 尺度	SD法による青年、中年、老 年のセクシュアリティについて 佐々木直美・他 2000	青年・中年・老年の 自己及び他の2群 のセクシュアリティを調査 評価した。	明るい、きれいなど10質 問項目の調査の因子 分析。2因子を青年・中 年、老年の全てで確認	信頼性に触れて いない	妥当性に触れてい ない。
8 高齢者 認知症 尺度	痴呆性高齢者QOL尺度 の開発と検証(その1・2) 鎌田ケイ子・他 2000	痴呆高齢者のQOLに 影響する痴呆ケア評 価のQOL尺度開発 を行った。	Rabinsらの5領域48項 目を5領域53項目の に改良した。4件法回答	内的整合性 $\alpha$ 係数 0.80~0.4を確認。評 価者間信頼性0.3以下 の質問削除した。	因子分析により3因 子を抽出。妥当性は 高い。
9 高齢者 介護ストレス 尺度	主観的介護ストレス評価尺度 の作成とストレス-及びうつ 気分との関連について 安部幸志 2001	介護ストレスの主観的 評価の測定尺度を 作成、要介護者と介 護者との関連を分析	22項目 2因子を抽出	高い信頼性が得られ た介護ストレス認知評価 $\alpha$ 係数:0.867。ストレス 反応 $\alpha$ 係数:0.783	項目の内容的妥当 性を検討。因子分析 により解釈可能な因 子構造を得た
10 高齢者 認知症 尺度	痴呆性高齢者環境配慮 尺度(施設版)の開発 (その1・2) 山口結花・他 2001	痴呆性高齢者の居 住環境の建築と保 健福祉両分野が共 有する尺度を開発。	8領域、60質問から 構成される。 4件法又は5件法で 回答	8下位尺度の $\alpha$ 係数 は、 $\alpha$ 係数の値が 0.574~0.749 と低い 値もあり、課題が残る	特に触れていない
11 在宅 高齢者 介護の意味 づけ尺度	在宅高齢者の介護をになう 女性介護者の「介護の意味 づけ」の構成概念と規定要 因の検討 鈴木規子・他 2004	介護の意味づけ構成 概念と規定要因を明 らかにする目的	質問項目29項目から18 項目を選択し、因子分析 から、5因子を抽出。 各項目に1~4評点化	高い信頼性が確認さ れ内的整合性を確認 $\alpha$ 係数:0.70~0.85で あった。	今後、尺度の妥当性 についてさらなる検討 必要である。
12 高齢者 ホームヘルプ 介護技術 尺度	ホームヘルパー介護技術チ ェックシートの開発 小谷野亘 2004	訪問介護員の介護技 術を評価するチェッ クシートを開発し構成概念妥 当性と信頼性を検討	4課題20項目から構成 因子分析で3因子抽出 20項目の得点を合計。	十分な信頼性を有 する	十分な妥当性を有 する。
13 高齢者 介護負担感 尺度	介護負担感尺度に関する 研究 久世淳子 2004	介護保険の主介護者 の介護負担尺度UFJ 版負担感尺度を改定 する。	12項目、3因子から構 成。3下位尺度からな る。介護の全体的 負担感(7段階)から なる。	$\alpha$ 係数:A0.77 B 0.80であった。十分 な信頼性が確認 された。	A・B両県において 因子分析で同じ3因 子を抽出。妥当性が 確認された。
14 高齢者 介護充実感 尺度	家族介護者における介護 体験への肯定的認識の 測定 西村昌記 2004	介護充実感尺度を開 発し、構成概念妥当 性、交差妥当性及び 信頼性を検討した。	2領域8項目から構成 れ、各領域に4項目が 所属する。	信頼性係数0.819 であった。全体の $\alpha$ 係数は十分な値 を示した。	交差妥当性(因子普 遍性)が2次因子モ デルの検証で確認さ れた。

表 2-7-3 日本の近年のQOL関連尺度の先行研究

(信頼性・妥当性が検討されている尺度) (老年社会科学学会雑誌 1997~2007)

分野	論文名称 著者 発表年	特徴	構成	信頼性	妥当性
15 高齢者 エイジズム 尺度	日本語版Fraboniエイジズム 尺度(FSA)短縮版の作成 原田謙・他 2004	Fraboni エイジズム尺度 (FSA)の日本語短縮 版を作成。都市部 25~39歳男性対象	19項目を因子分析で 3因子を抽出した。確認 的因子分析から3因子 14項目を最後に確認	信頼性は、 $\alpha$ 係数: 0.85 内の整合性 を確認。	因子分析により3因子 に解釈可能であり、構 成概念妥当性が確認 された。
16 高齢者 訪問介護 尺度	訪問介護の質を測る利用 者満足度尺度案の開発 須賀美明 2003	訪問介護の質を評価 する信頼性と妥当性 が検討された満足度 尺度の開発が目的	26項目中15項目を介 護評価尺度案として 信頼性と妥当性を検討 した。	$\alpha$ 係数は0.90であり、 信頼性は十分である。	利用者との面接により 表面的妥当性を確認。 因子分析で構成概念 妥当性を確認した。
17 高齢者 介護水準 尺度	介護技術の測定 滝波順子 2005	介護技術の水準を 客観的に評価する ダイヤ式介護技術チ ェックシートの作成	4課題20項目から構成 「おむつ交換,食事な ど」の項目数は4種類 15,10,8,16項目である	信頼性係数0.923 と 高い信頼性が得られ た項目信頼性を確保 した。	2次因子モデルの適合 度が高く、構成概念 妥当性が確認された。
18 高齢者 学生用 ケア尺度	学生用老年人コミュニケーション 態度尺度の開発 清水裕子・他 2005	老年人に専門的ケア を行う職種看護学生 とのコミュニケーション態度 の測定尺度の開発	42項目を因子分析、4 因子を抽出。5・4・3・3 項目分布であった。4 概念、15項目を確認	下位尺度の信頼性の $\alpha$ 係数は0.76~0.67 であった。全体の $\alpha$ 係 数は0.811であった。	5名の研究者による内 容的妥当性が確認 された。
19 高齢者 援助希求 尺度	一般生活者を対象とした認知 症における援助希求行動尺度 の作成と妥当性に関する検討 安部幸志・他 2006	家族が認知症になっ た場合、受診・治療を 求める援助希求行動 の測定尺度の開発	内的妥当性が確認でき た。20項目に4件法の 回答。因子分析から4 因子が確認された。	十分な信頼性が明ら かとなった。	検証的因子分析 を行い、十分な 妥当性を有して いることを確認した。

< 巻末資料 6 > 第 3 章適用

○ 先行研究から抽出したキーワードを思想家別に示した。

表 3-3-1 「カント」哲学のキーワード

- 1 悪でありえない意志
- 2 自律としての意志の自由
- 3 強制は道徳的責任を排除
- 4 悪と判定される意志行為の自由
- 8 自分の為したことに責任をもつ
- 6 自律は意志と実践理性との調和
- 7 選択意志の自由が人格の本質
- 8 人間性の尊厳の根拠は自律にこそ存する
- 9 意志の自由とは自律以外の何ものでもない
- 1 0 人間性の尊厳の根拠は、自律にこそ存する
- 1 1 対象関係に拘束されずに振舞う上級欲求能力
- 1 2 自律は自由意志が一切の感性的傾向から独立している
- 1 3 意志の自律とは、意志が自分自身に対して法則となる
- 1 4 自由な選択意志は、欲求の対象とその実現の意識を伴う
- 1 5 幸福は、同時に義務となる目的ではない
- 1 6 周囲を幸せにする

表 3-3-2 「ニーチェ」哲学のキーワード

- 1 虚無の超克
- 2 進化の思想
- 3 無力なのである
- 4 ニヒリズムからの脱却
- 5 芸術は生命感情を高めるもの
- 6 願望はまだ意欲ではない
- 7 不毛な精神的状況の打開
- 8 心理的状态としてのニヒリズム
- 9 真昼の砂漠こそ虚無主義である
- 1 0 権力への意志を本質とする生命体
- 1 1 芸術は生を可能ならしめる偉大な形成者
- 1 2 意志は絶えることなき意欲である
- 1 3 不毛な精神的状況の打開
- 1 4 科学的合理性に支配された近代世界
- 1 5 現状維持に甘んじたら、それはもはや権力ではない
- 1 6 より弱くより小さくならうとする意志などありえない
- 1 7 プラトン以来の超自然的原理をニヒリズムという
- 1 8 一つを中心から発して、世界へ働きかけるある特殊な作用の仕方に還元

表 3-3-3 「マズロー」心理学のキーワード

〈マズロー〉		
・成熟	・融合	・表現する
・自然に	・無邪気	・自発的
・依存しない	・健康な成長	・心理的健康
・病的でない	・抑圧しない	・情緒の安定
・魅了される	・相互に結びつける	・認める
・自我の超越	・性急でない	・未知のもの
・統合性	・気楽な気持ち	・禁止されない
・気安い	・子どもらしさ	・憶測しない
・慎重さ	・精神的な自己	・自己実現への成長
・嘲笑なく	・経験から開放	・完全にはたらくこと
・没頭する	・反カタリシス	・内面の自己を承認する
・拘束なく	・逃げ出さない	・自分の考えを恐れない
・表現能力	・恐怖心がない	・人間の内的な統合能力
・無理がない	・不協和を統一	・不健康な精神でないもの
・否定しない	・自己受容が大きい	・自己実現の定義の一致点
・創造的目的	・敵意を感じない	・感情の動きに身をゆだねる
・驚かない	・干渉を受けない	・人間性の本質を活用する
・受け入れ		

表 3-3-4 「シェラー」価値倫理学のキーワード

〈シェラー〉		
・善い	・健康	・持続
・弱さ	・優秀な	・純粹な
・広がり	・独立した	・永続力
・美しい	・機能価値	・物件価値
・技術価値	・象徴価値	・人格価値
・文明価値	・高貴なもの	・相対的でない
・有用価値	・学問の価値	・強さの感情
・高次の水準	・善きもの	・人びとを統合する
・感性的価値	・文化的作品	・快適なもの
・価値の本質	・内的満足	・客観主義的
・病気の状態	・共有できる	・絶対的なもの
・不快なもの	・生命的様態	

表 3-3-5 「サクセスフルエイジング」に関するキーワード

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 所有資源</li> <li>・ 選択的最適化</li> <li>・ 機能的を克服</li> <li>・ 他者との肯定的関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標達成の代替的手段</li> <li>・ 自己責任は好ましい</li> <li>・ 障害の発生の可能性が低い</li> <li>・ 高齢期の機能低下を克服</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内的か外的かともによい</li> <li>・ 日常生活への積極的関与</li> <li>・ 選択された目標達成</li> <li>・ 人生の目標を選択</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標への過程</li> <li>・ 目標達成過程の制御</li> <li>・ 他人に助けをもらう</li> <li>・ 個人が達成していく過程</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会的な機能の低下と喪失</li> <li>・ 喪失の最小化と獲得の最大化</li> <li>・ 身体的 心理学的 社会的</li> <li>・ 認知的機能および身体的機能の水準が高い</li> </ul>	

表 3-3-6 「QOL」に関するキーワード

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 意欲</li> <li>・ 個別性</li> <li>・ スポーツ</li> <li>・ 身体を動かす</li> <li>・ 存在</li> <li>・ 欲求</li> <li>・ 達成感</li> <li>・ 自律性</li> <li>・ 意思能力</li> <li>・ お達者</li> <li>・ 主導感</li> <li>・ 低自立度</li> <li>・ 身辺自立</li> <li>・ お達者度</li> <li>・ 移動自立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 運動習慣</li> <li>・ 活動水準</li> <li>・ 社会参加</li> <li>・ 社会生活問題行動</li> <li>・ 生き方</li> <li>・ 自己決定</li> <li>・ 意思能力</li> <li>・ 意欲向上</li> <li>・ 生きがい観</li> <li>・ 健康状態</li> <li>・ 現実認識</li> <li>・ 動機付け</li> <li>・ 手段的自立</li> <li>・ 自己リスク</li> <li>・ 健康志向意欲</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身体活動</li> <li>・ 疲れやすい</li> <li>・ 社会参加活動</li> <li>・ 判断能力</li> <li>・ 自己実現</li> <li>・ 創造の喜び</li> <li>・ 尊厳の保持</li> <li>・ 倫理的意欲決定</li> <li>・ 働きかける</li> <li>・ 平均自立期間</li> <li>・ 自己のあり方</li> <li>・ 日常生活自立度</li> <li>・ 求めているもの</li> <li>・ 日常生活への活力</li> </ul>
---	--	---

表 3 - 3 - 7 B - 1 「QOL」に関するキーワード

○ 障害 (disability) に関する要素		
・性差	・百寿者下	・臓器障害
・言語障害	・機能訓練	・体が痛む
・記憶障害	・能力低下	・日常生活習慣
・身体機能	・視力障害	・痴呆とうつ状態
・能力障害	・障害の程度	・精神的健康状態
・知的機能	・生活機能障害	・変化に対する反応性
・移動手段	・健康生活習慣	・コミュニケーション障害
・障害の有無	・精神衛生意識	
○ 歩行、アクティビティに関する要素		
・転倒	・身辺作業	・生活習慣
・栄養	・要介護期間	・健康状態
・聴力	・歩行移動力	・歩く動作
・移動動力	・日常レベル	・準寝たきり
・社会参加	・生活活動範囲	・友人の有無
・要介護状態	・生活の規則性	・食事のバランス
・活動的日常生活	・アクティビティ	・日常生活への活力
・残された能力	・生活の場を拡げる	
○ QOL (生きがい)に関する要素		
・奉仕	・貢献	・冗長適応
・娯楽	・存在感	・屋外活動
・省みる	・タバコ	・知的能動性
・生き生き	・社会性	・肯定的認識
・創作活動	・活動性	・その人らしい
・屋内活動	・活動水準	・当たり前を楽しむ
・楽しむ主体	・充実した生活	・健康的な生活習慣
・介護生活の受容	・固執的行動傾向	・社会的環境への適応能力
・収入	・配偶者	・余暇活動
・経済状態	・経済状況	・経済的自立
・睡眠時間		

表 3-3-7B-2 「QOL」に関するキーワード

- |                    |               |               |
|--------------------|---------------|---------------|
| ○ プラス要因（肯定的要因）     |               |               |
| ・ 喜び               | ・ 表情          | ・ 楽しい         |
| ・ 気分               | ・ 幸福感         | ・ 自由である       |
| ・ 自覚               | ・ 肯定的         | ・ 生活満足度       |
| ・ 決断               | ・ 気分転換        | ・ 主観的健康感      |
| ・ 明るさ              | ・ 大切に思う       | ・ 充実した生活      |
| ・ 幸福度              | ・ 生きがい観       | ・ 主観的幸福感      |
| ・ 主体的              | ・ 自尊心が高い      | ・ 楽しいと感じる     |
| ・ パーソナリティ          | ・ 全体的健康感      |               |
| ○ 「他者との関係」から抽出した要素 |               |               |
| ・ 交流               | ・ 信頼性         | ・ 頼られ感        |
| ・ 対人関係             | ・ 仕事や役割       | ・ 不一致の解決      |
| ・ 家族の意向            | ・ 社会性の拡大      | ・ 特性に合わせた活動   |
| ・ 老人クラブ            | ・ 諸活動への参加     | ・ 地域の人々との交流   |
| ・ 電話               | ・ 生活の場        | ・ 生活環境        |
| ・ 車椅子              | ・ キャンプ        | ・ 社会的適応の場     |
| ・ テレビ              | ・ 車椅子で宿泊      | ・ 好みの過ごす場所    |
| ・ 交流範囲             | ・ 趣味活動の場の拡張   |               |
| ・ 妥当性              | ・ 継続性         | ・ 介護の継続       |
| ・ 利用者本位            | ・ 選ぶ福祉        | ・ 総合機能評価      |
| ・ 在宅ケア             | ・ 権利擁護        | ・ WHO国際分類     |
| ・ 実施頻度             | ・ 外食の制限       | ・ ゴールドプラン 2 1 |
| ・ 障害の構造            | ・ 生活満足度       |               |
| ・ 生活支援             | ・ 個別対応        | ・ 人的サポート      |
| ・ 食事療法             | ・ 間食の制限       | ・ ケアプラン       |
| ・ 作業療法             | ・ 多職種チームアプローチ |               |

表 3 - 3 - 8 「生きがい」に関するキーワード

・ 奉仕	・ 楽しい	・ 達成感
・ 貢献	・ よろこび	・ 意欲向上
・ 明るさ	・ 創作の喜び	・ 不安要素
・ 言語障害	・ 記憶喪失	・ 表情が乏しい
・ 価値意識	・ 不平不満	・ 諸活動への参加
・ 無気力状態	・ 社会参加	・ 日常生活への活力
・ 老人クラブ	・ 頼られ感	・ 活動的日常生活の喪失
・ アクティビティ	・ 生きがい感	・ 趣味の生活の場の拡張
・ 危険因子	・ 生活満足度	・ 心理的社会的

表 3 - 3 - 9 「自己決定」に関するキーワード

・ 自律性	・ 権利擁護	・ 主体的決定
・ 動機付け	・ 大切に思う	・ ケアプラン
・ 判断能力	・ 尊厳の保持	・ 残されたもの
・ 他者決定	・ 自己リスク	・ 不一致の解決
・ 選ぶ福祉	・ 自己のあり方	・ 倫理的意決定
・ いわれるまま	・ 求めているもの	・ 自己判断



< 巻末資料 1 2 > 第 3 章適用

- 全 111 個の要素より作成した選択前の全 173 質問原案文である。

表 3 - 1 : 「社会的要因」から作成した全 11 質問原案文

- 1) 健康な社会活動
- 2) 何か活動グループに属していますか。
- 3) 社会参加の場がありますか。
- 4) 社会貢献をしていますか。
- 5) 周囲の人が幸せになるために手助けをしていますか。
- 6) 家族が幸せになるよう努力し配慮していますか。
- 7) 地域の人のことを考えていますか。
- 8) 同じ仲間のことを考えていますか。
- 9) 社会的な場に出ていますか。
- 10) 交流の場がありますか。
- 11) 交流の場に出ることを望んでいますか。

表 3 - 2 : 「健康な生活」から作成した全 6 質問原案文

- 1) 健康意志意欲
- 2) 主観的健康感
- 3) 健康になりたいと思いますか。
- 4) 自分の健康状態に満足していますか。
- 5) 生活を楽しむことができる。
- 6) 余暇を楽しんでいますか。

表 3 - 3 : 「配偶者」から作成した全 3 質問原案文

- 1) 配偶者からの協力が得られますか。
- 2) 配偶者と生活を助け合っていますか。
- 3) 配偶者に配慮していますか

表 3 - 4 : 「家族」から作成した全 5 質問原案文

- 1) 家族関係は、良好ですか。
- 2) 家族と食事をともにしていますか。
- 3) ご家族による日常生活の手助けを頼むことができますか。
- 4) 家族との会話はこの 1 週間に、何回ありましたか。
- 5) 家族と同居していますか

表3-5: 「友人」から作成した全4質問原案文

- 1) 日常生活の困りごとの協力をお願いできる友人がいますか。
- 2) 友人と一緒に会って過ごす時間が、1週間に何回くらいありましたか。
- 3) 友達と一緒に外出しましたか。
- 4) 友人に何回くらい電話しますか。

表3-6: 「知人・他人」から作成した全7質問原案文

- 1) 集まりに参加していますか
- 2) 地域で活動していますか
- 3) 気にかける人がいますか
- 4) 世話する人がいますか
- 5) 地域の人と付き合いがありますか
- 6) 交流がありますか
- 7) 付き合いがありますか

表3-7: 「自分の幸福」から作成した全8質問原案文

- 1) 自分の必需や傾向性に全部満足
- 2) 自分の必要とすることが満たされていますか。
- 3) 個性的な生活ができていますか。
- 4) 自分が幸福になる
- 5) 生活が満たされている
- 6) 自分らしい生活が送れていますか。
- 7) 自分は、今幸せに暮らしていると思いますか。
- 8) 今のままの生活を継続したと思いますか。(で満足していますか。

表3-8: 「人間愛」から作成した全8質問原案文

- 1) 人格の純粋な作用
- 2) 人間的な触れ合いがありますか。
- 3) 親しい交流がありますか。
- 4) 他者の幸福
- 5) 他者のために役立てていることがありますか。
- 6) 周りの人が幸福になることを望んでいますか。
- 7) 他人が幸福になることに手を差し伸べたいですか。
- 8) 社会の皆さんの幸せを望んでいますか。

< 巻末資料 1 4 > 第 3 章適用

表 3 - 9 : 「文化的要素」から作成した全 10 質問原案文

- 1) 生命価値を高める
- 2) 行動がスマートである。
- 3) お話が上手である。
- 4) 料理が上手である。
- 5) 刺繍ができる。
- 6) 音楽が演奏できる。
- 7) 歌が上手である。
- 8) 絵を描く (デンマークの在宅高齢者より)
- 9) 絵葉書を作る。 (デンマークの在宅高齢者より)
- 10) 身だしなみを良くする (デンマークの在宅高齢者より)

表 3 - 10 : 「その人らしさ」から作成した全 11 質問原案文

- 1) 生き生きしていますか。
- 2) 毎日が楽しいですか。
- 3) 充実を感じていますか。
- 4) 自分らしい老後送っていますか。
- 5) 好みにあった生活をしていますか。
- 6) 持ち味が生かしていますか
- 7) 個性的な生活を送っていますか。
- 8) 生活に苦痛がありますか。(逆)
- 9) 能力が生かしていますか。
- 10) 自分らしい努力をしていますか。
- 11) 自分の良さを出していますか。

表 3 - 11 : 「個別性」から作成した全 5 質問原案文

- 1) 個別的で自分らしい活動
- 2) 自分に合った活動をしていますか。
- 3) 個性的な生活を送るのに無理がありますか。
- 4) 個人的な生活課題がありますか。
- 5) 個人的な生活目標を持っていますか。

表 3 - 12 : 「完全への意志」から作成した全 7 質問原案文

- 1) 人間性の自然な目的
- 2) より良い生活を望む
- 3) 自己的人間的成長を望む
- 4) 他人の成長を望む
- 5) 自分の行なった行動に責任を持つ
- 6) 自分の話したことに責任を持つ。
- 7) 他人のよりよい生活を望む

表3-13:「選択」から作成した全9質問原案文)

- 1) 選んで行動する
- 2) 誰が選びましたか?
- 3) 選択し、意志が決定する。
- 4) 今の生活の変わりに別の生活を選択する
- 5) 自分で福祉サービスを選んだ。
- 6) 自分で住むところを選びましたか
- 7) 毎日の生活は自分で決めている
- 8) 老後の世話をお願いする人を選ぶことができますか。
- 9) 今の生活は、家族を選びましたか。

表3-14:「自由」から作成した全9質問原案文

- 1) 自由意志で行動
- 2) 自分の意志で生活を決めていますか。
- 3) 家族の方の考えを尊重して、生活していますか。
- 4) 相談してから決める
- 5) そうせざるを得ない
- 6) 今の生活を続けるしか方法がない
- 7) 自分の好きなことができない。
- 8) 誰にも気兼ねせずに外出できる。
- 9) 決めることを任されている。

表3-15:「人間の存在意義」から作成した全8質問原案文

- 1) より大きくより強くなる意志
- 2) 他人の生きていることに、手を差しのべたいと思いますか。
- 3) より良い自分になりたいですか
- 4) あなたは、自分が生きていることに大切な意味があると思いますか。
- 5) あなたは、成長を望みますか。または、成長の努力をしていますか。
- 6) これから、自分の生活を高めて(広げて)いきたいですか。
- 7) 社会のために、何かを創造していきたいですか。
- 8) 社会の皆さんの幸せな生活に役立ちたいですか。

表3-16:「意志の自由」から作成した全8質問原案文

- 1) 自由とは自律していることである。
- 2) あなたは自分自身を自由にコントロールできますか。
- 3) あなたは、ご自分が自律していると思いますか。
- 4) あなたは、自分の意志で感情をコントロールすることができますか。
- 5) あなたは、自分で調整し生活していると思いますか。
- 6) あなたは、家族から自律していると思いますか。
- 7) あなたは、周りの人々から自律していると思いますか。
- 8) あなたの意志は、日々の生活の上で、他人から自由だと思いますか

表3-17:「生きる意欲」から作成した全8質問原案文

- 1) 前向きな心構え
- 2) 意欲向上
- 3) 自分の希望や夢を実現させたいと思う。
- 4) 求めているものがたくさんありますか
- 5) 毎日の生活を意欲的に生きていますか。
- 6) 前向きな姿勢で生きていますか。
- 7) 活動的な生活をしていますか。
- 8) 主体的に生きることに価値を持っている。

表3-18:「生き方」から作成した全6質問原案文

- 1) 人生に対する前向きな気持ち
- 2) 人生を前向きな姿勢で生きていますか。
- 3) 主体的に生きる価値を持っている
- 4) 自分自身で問題の解決に取り組めますか。
- 5) 行動には、自分でリスクを背負う覚悟でいる
- 6) 自分の行動には自分でリスクを背負いますか。

表3-19:「強くなる意志」から作成した全7質問原案文

- 1) 感情的世界の全体性を権力の意志という。
- 2) 意志を持って態度や行動を示す
- 3) より大きな人間になろうと思いませんか
- 4) 自分の生活はできる限り自分で頑張ろうと思いませんか
- 5) 自分の意志を態度や行動で示していますか。
- 6) より強い自分になるよう努力していますか。
- 7) 自分の気持ちや意志を表現していますか。

表3-20:「生命感」から作成した全7質問原案文

- 1) あなたの表情は生き生きしていると思いませんか。
- 2) 将来に希望を持っていますか
- 3) 毎日の生活が充実していると思いませんか
- 4) 生活に満足を感じていますか。
- 5) 生きていることが楽しいと感じますか
- 6) 生き生きした生活が送れていますか。
- 7) あなたは生活の改善に努力しますか。

表3-21:「創造性」から作成した全7質問原案文

- 1) 潜在可能性
- 2) 精神的な自己を受け入れる。
- 3) 自分の潜在的な能力を高めたいと思いますか
- 4) 自分の可能性を高めたいと思いますか。
- 5) 新しい生活を始めたいと思いますか
- 6) 自分の努力により、新しい能力を見つけますか
- 7) 新しい自分を生み出したいと思いますか。

表3-22:「成長」から作成した全7質問原案文

- 1) 十分その働きを生かす
- 2) 自分の能力を十分生かしていますか
- 3) 自分の夢の実現に向けて成長していますか。
- 4) 十分力を発揮していますか。
- 5) 自分の生活の目標は自分で立てていますか
- 6) 自分の持つ個性や適性を生かしていますか。
- 7) 他人お成長に社会的または個人的に手を差し伸べていますか。

表3-23:「目標の達成」から作成した全6質問原案文

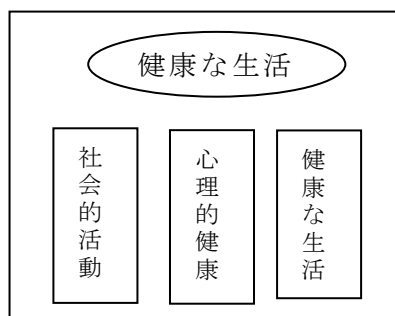
- 1) これからの残された人生に目標がありますか
- 2) 自己の人的成長に向けた目標がありますか。
- 3) 成長への目標の実現に努力していますか。
- 4) 自分らしさを生かすための余暇活動を行なっていますか。
- 5) 自分の心の中の希望を実現したいですか
- 6) 社会や人のために助けになることをしたいですか。

< キーワードの分類とKJ法 >

先行研究から選び出した抽象的な理念や思考の1つ1つのキーワードのそれぞれの情報を物理的に取り扱うことが可能な分類整理の方法であるKJ法を利用した。利用できるよう、1枚のカードに1キーワードを記入し、すべてのキーワードをカード化した。

カードを作成し、KJ法の準備作業により、先行研究から収集した抽象概念や理念や思想のことばは、情報として、簡単に同じ表現のカードとして、カテゴリーとして同一領域にまとめることができる。

図3-1 KJ法によるカードを使用した分類法



注) KJ法とは、川喜田二次郎氏が考案した、カードに個々の情報を個別に記入し、情報を分類グループ化し、小グループ、中グループ、大グループにまとめ、図解し整理する手法である。

表4-1-1 最初に削除した13削除項目

番号	削除項目
3)	「社会的な場に出て、集まりに参加していますか」
16)	「日常生活で不便な時に、助けをお願いできる友人がいますか」
17)	「最近、友人に何回くらい電話をしましたか」
19)	「あなたは今、地域の人々との付き合いがありますか」
24)	「世の中の人々が幸せに暮らせるよう何かお手伝いをしていますか」
26)	「本来の自分の個性にふさわしい生活を送っていますか」
27)	「今よりも、もっと個性的な自分になるための努力をしていますか」
36)	「これからの生活を通じ、人間らしい成長を希望しますか」
37)	「これから先、生活の世話をお願いする人を自分で選ぶことができますか」
50)	「あなたは、毎日することがたくさんありますか」
52)	「最近、あなたは、活動的に生きていますか」
60)	「これから、あなたは何か新しいことを始めたいと考えていますか」



表 4-5-1 プリテスト調査依頼文

平成 17 年 8 月 15 日

茅ヶ崎市在住の在宅高齢者  
自己実現調査 依頼各位 様

ルーテル学院大学大学院  
人間福祉学自己実現調査委員会  
事務局：  
ルーテル学院大学大学院博士後期課程  
人間福祉学研究科 清重哲男

「在宅高齢者の自己実現に関する調査票」  
の事前テスト調査実施依頼について

暑さ厳しき折、皆様にはお元気にお過ごしのこととお喜び申し上げます。この度は、「自己実現調査」にご協力いただくこととなり、真にありがとうございます。この調査は、茅ヶ崎市在住の高齢者（65歳～79歳）の方々80名に調査をお願いいたしました。

この調査の目的は、長寿社会の中で、高齢者の皆様一人ひとりがいつまでも長く地域社会で生きがいを持って、ご自分の能力や才能を成長させ、個性的で有意義に生きて行くことができる「自己実現」に向けた社会福祉の方法を構築するために行っております。依頼者は、茅ヶ崎市高齢者保健福祉計画推進委員を勤めさせていただいております。

日本は、戦後の疲弊した時代から、大きく経済発展をしてきました。今後、高齢者の方が自由で文化的、社会的に、個性を生かしながら社会に貢献し、一人ひとりの高齢者の方々が個性的な人生を送ることのできる社会が望まれています。社会福祉サービスは、そのために支援することが目的となります。

本調査でご協力いただいた情報は地域全体の傾向や方向性を把握するために活用したいと考えています。

なお、本調査は無記名での調査としており、「このような生活の方が〇〇%」のように表現し活用いたします。個人が特定されることはありません。また、皆様方個人に一切ご迷惑をおかけすることはございませんので、どうかご安心ください。

記

- 1 目的：本調査（400人）前の調査項目の適正確認のための事前テスト調査
- 2 実施時期：調査票記入及び回収 8月下旬 迄に実施。
- 3 調査人数：80人 （年齢：65～79歳位までの方 様々な生活をされている在宅高齢者）
- 4 回答の仕方  
日々の日常生活の中で、深く考えることなく感じていることを直感的に、各質問にお答えください。ご記入いただいた皆様の情報を守るため、無記名で調査を行っております。なるべく、ご自身でお答えください。
- 5 調査場所及び方法：
  - 1) 調査票ご記入場所：各自のご自宅
  - 2) 各質問に、五者択一により答えの中から1つを選び、○で囲ってください。（一部4者択一があります）  
本調査では郵送致しました質問票の返送は、同封の返信用封筒（切手付き）をご使用し、そのままご返送ください。あて先の表書きはしてあります。皆様方のご住所の裏書、お名前は不要です。調査票を入れ、封印されるだけで結構です。ご郵送をお願いいたします。
- 6 ご返送期日：8月25日 までにお手数ですが、是非ご郵送ください。  
ご返送がないと本調査研究が進みませんので、必ずご返送くださいますよう  
宜しく願い申し上げます。（2～3日遅れても結構です）  
どうか、ご協力宜しく願い申し上げます。

< 巻末資料 2 1 > 第 4 章適用

表 4 - 5 - 2 プリテスト用調査票

平成 17 年 8 月 1 3 日

No :

## 在宅高齢者の自己実現に関する調査票

(茅ヶ崎市における在宅高齢者社会福祉調査)

ルーテル学院大学大学院人間福祉学研究科自己実現調査委員会

事務担当 :

博士後期課程人間福祉学研究科

0 4 G - D001 清重哲男

この調査は、皆様方お一人おひとりがどのように個性的で有意義なその人なりの人生を送られているかという「自己実現」に向けた生活についていろいろお伺いし、在宅生活を送られている高齢者の方がたの生活の質の向上と充実した地域福祉の推進方法を構築するために活用させていただきます。

まだお暑い中、またお忙しいところ、お体が十分でない方もおいでかと思いますが、ぜひご質問にご協力いただけますよう宜しくお願いいたします。

なお、ご協力いただいた情報は、「このような生活の方が〇〇%」のように地域全体の傾向や方向性を把握するために活用し、皆様方個人に一切ご迷惑をおかけすることはありませんので、どうかご安心ください。

尚、ご質問にご不明な点がございましたら、次のところまでお問い合わせください。

電話 090-470-60309 清重哲男

プリテスト用  
在宅高齢者の自己実現調査項目 P1  
調 査 日： 年 月 日

基本属性

**基本属性**

質問のご回答は、最も近いと思われるお答えの 番号を ○ でお囲みください。  
(平成 17 年 4 月 1 日現在の年齢)

1. あなたは、いつお生まれになりましたか。

1. 大正                      2. 昭和

年 月 日

2. あなたのご住所は、何町ですか。 例(浜須賀、赤羽など)

茅ヶ崎市 \_\_\_\_\_ (番地以降は不要)

3. あなたの現在のお住まいは、次のどれでしょうか。

- 1) 自宅    2) 家族の家に同居    3) 賃貸アパート    4) 高齢者住宅  
5) その他 (                      )

4. あなたは、現在どなたと同居されていますか。お一人の場合、独居とお答えください。

- 1) 独居    2) 配偶者    3) 子供    4) きょうだい    5) その他

5. ご自分を含め同居されているご家族は何人ですか。独居の場合は、1人とお答えください。

- 1) 1人    2) 2人    3) 3人    4) 4人    5) 5人以上

6. あなたは現在収入になる仕事をしていますか。

- 1) なし    2) たまに(月1日程度)    3) 週1～2日    4) 週3日  
5) ほぼ毎日勤務(週4回以上)

7. あなたの職業は次のどれに該当しますか。

- 1) 勤務職員    2) 自営業(床屋等)    3) 自営業の手伝い  
4) ボランティア(手当有)    5) 無職

8. あなたの最終学歴について、お答えください。

- 1) 尋常小学校    2) 中学校    3) 高等学校    4) 大学    5) 大学院  
6) 高等専門学校    7) その他 (                      )

9. 移動の方法について最も該当するものを1つお選びください。

- 1) 自分で公的交通機関を利用したり、またはご自分で自家用車を運転したり、移動することができる。  
2) 自分でタクシーを利用して移動するが、公的交通機関は利用しない。  
3) 付き添いがいれば、または皆と一緒にあれば、公的交通機関で移動できる。  
4) 付き添いと一緒なら、タクシーや自家用車で移動できる。  
5) 車椅子利用のため、介護用の車でないと移動できない。

10. 判断力について該当するものを1つお選びください。

- 1) ほとんどのことを思い出して日々の問題をきちんと考え、解決することができる。  
2) ほとんどのことを思い出すが、日々の問題を解決するのは、少し苦勞を要する。  
3) いくぶん忘れっぽく、日々の問題を解決するには、努力を要する。  
4) 大変忘れっぽく、日々の問題を解決することは、かなり困難である。  
5) 質問の意味が理解できない。

11. 食事について該当するものを1つお選びください。

- 1) 自分で料理し、または外食を利用し、自分の好みの食事を自由に楽しんで

- 食べている。
- 2) 病気による食事制限以外は、自分で自由に食材を買い、または外食を利用し楽しんで食べている。
  - 3) 食材が準備されれば自分で料理し、または外食を配達で注文し、食事を楽しんで食べている。
  - 4) 自分の好みの料理を表現できるが、食事内容は、他人まかせである。
  - 5) 常に、他の人が準備したものを食べている。
12. 入浴について該当するものを1つお選びください。
- 1) 時には自分で計画し、旅行や温泉に行き、または日帰り温泉に行っている。
  - 2) だれかが計画すれば、皆と一緒に旅行や温泉や日帰り温泉に行く。
  - 3) いつも自宅の風呂に、自分で準備し、入っている。
  - 4) 一部の介助や準備があれば、自宅の風呂にほぼ自分で入ることができる。
  - 5) 他人の介助や援助計画により入浴している。
13. 聴力について該当するものを1つお選びください。
- 1) 補聴器なしで、3人以上の多人数の中で会話を聴くことができる。(普通に聞こえる)
  - 2) 補聴器なしで、静かな部屋の中なら相手の会話を聴くことができる。(やや大きな声で話せば聞こえる)
  - 3) 補聴器をつければ、3人以上の多人数の中で会話を聴くことができる。(かなり大きな声で話せば聞こえる)
  - 4) 補聴器をつければ、静かな部屋で相手の会話を聴くことができる。(耳元で大きな声で話せば聞こえる)
  - 5) ほとんど聴くことができない。(ほとんど聞こえない)
- 14) あなたは、何回くらい、電話をかけたり、Eメールを送ったりしますか。(仕事用を含めた合計回数)
- 1) 週30回以上(毎日4回以上)
  - 2) 週7～14回(毎日1～2回以内)
  - 3) 週1～6回
  - 4) 月に1～2回
  - 5) ほとんどしない
15. あなたは、どの程度の頻度で外出しますか。(買い物や仕事を含めて)
- 1) 毎日2回以上(週14)以上
  - 2) 毎日1回程度
  - 3) 週1～6回程度
  - 4) 週1回以下(月1回～3回)
  - 5) ほとんど外出しない。
18. 現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。
- 1) いつもしている
  - 2) たいていしている
  - 3) たまにしている
  - 4) 殆どしていない
  - 5) 全くしていない
19. あなたは、現在、健康だと思えますか。
- 1) とても健康である
  - 2) ほぼ健康である
  - 3) 普通
  - 4) あまり健康でない
  - 5) 非常に悪い
20. あなたは、現在、医者にかかっていますか。
- 1) よくかかっている
  - 2) たびたびかかっている
  - 3) たまにかかっている
  - 4) 滅多にかからない
  - 5) 全くかからない
21. あなたの今の健康は、普通の暮らしをするには支障がありますか。
- 1) 全く支障がない
  - 2) 殆どない
  - 3) たまにある
  - 4) よくある
  - 5) 非常によく支障がある

22. 世の中のために、役立つことをしたいですか。  
 1) 是非したい 2) したい 3) 少しならしたい 4) 殆どしたくない  
 5) 全くしたくない
23. 自分の生活を、自分で行っている人を見て尊敬しますか。  
 1) とても尊敬する 2) ほぼ尊敬する 3) たまに尊敬する  
 4) 殆ど尊敬しない 5) 全く尊敬しない
24. 地域の集まりの場に参加したいと思いませんか。  
 1) いつもそう思う 2) しばしばそう思う 3) たまに思う  
 4) 殆ど思わない 5) 全くそう思わない
25. 毎日の生活の中に楽しいことがありますか。  
 1) いつもある 2) しばしばある 3) たまにある  
 4) 殆どない 5) 全くない
26. 人との出会いは、楽しいと思いませんか。  
 1) 非常に思う 2) かなり思う 3) 少し思う 4) 殆ど思わない  
 5) 全く思わない
27. 家族や他の人から、生活についてどのくらい介護の世話を受けていますか。  
 1) 全く受けていない 2) 殆ど受けていない 3) 少し受けている  
 4) 普通に受けている 5) たくさん受けている
28. 生活についての世話をしてくれる人に、ご自分の希望がいえませんか。  
 1) 非常にたくさんいえる 2) かなりいえる 3) 少しいえる  
 4) 滅多にいえない 5) 全くいえない
29. 食事を一緒にすることをだれかに頼めますか。  
 1) いつも頼める 2) ほぼ頼める 3) たまに頼める  
 4) 殆ど頼めない 5) 全く頼めない
30. あなたは、家族以外の誰かの指図(さしず)に従って生活をしていませんか。  
 1) 全て従っている 2) かなり従っている 3) 少し従っている  
 4) ほとんど従っていない 5) 全く従っていない
31. 現在、あなたは家族の指図(さしず)に従って生活をしていませんか。  
 1) 全て従っている 2) かなり従っている 3) 少し従っている  
 4) ほとんど従っていない 5) 全く従っていない
34. 日々のくらしで困っている時に、どなたか助けをお願いできる知り合いがいますか。  
 1) いつもいる 2) たいていいる 3) 時々にいる  
 4) いない場合もある 5) 全くいない
37. 自分から何かの集まりに参加することがありますか。  
 1) 頻繁にあった 2) たびたびあった 3) 時々あった。  
 4) ほとんどない 5) 全くなかった
38. 最近、お知り合いと会って一緒に過ごす時がありましたか。  
 1) 頻繁にあった 2) たびたびあった 3) 時々あった  
 4) ほとんどない 5) 全くなかった。
39. 人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。  
 1) いつもしている 2) たびたびしている 3) たまにしている  
 4) 殆どしてない 5) 全くしてない
40. あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか。  
 1) とても希望する 2) かなり希望する 3) 少し希望する  
 4) 殆ど希望しない 5) 全く希望しない
41. 手助けを必要としている人のために、何かをしてあげたいと思いませんか。  
 1) とてもしたい 2) かなりしたい 3) 少ししたい  
 4) 殆どしたくない 5) 全くしたくない
42. ご自分には、幸せな暮らしはあまり縁がないと思いませんか。  
 1) 非常に思う 2) かなり思う 3) 少し思う 4) 殆ど思わない  
 5) 全く思わない

44. あなたは、何か自分が持っている能力を生かして生活をしていますか。  
 1) いつもしている 2) たいていしている 3) 時々している  
 4) する場合もある
45. 色々な制約で、ご自分が希望する生活を営むことは、困難になっていると思いませんか。  
 1) 全くそう思う 2) だいたいそう思う 3) 時々そう思う  
 4) そう思う場合もある。 5) 全く思わない
46. これからも、今までの生活習慣を継続することができますか。  
 1) 全くそう思う 2) だいたいそう思う 3) 少しそう思う  
 4) そう思う場合もある 5) ぜんぜん思わない
47. 普通の人より優れた才能を何か持っていますか。  
 1) 特別に優れたものがある 2) 少し優れたものがある  
 3) 優れたものがある 4) どちらともいえない 5) なにもない
49. 趣味は、費用や時間がかかっても、生活に必要なだと思いませんか。  
 1) 非常にそう思う 2) かなりそう思う 3) 少しそう思う  
 4) 思う場合もある。 5) 全く思わない
50. 現在の生活の中で、何か趣味を持つことは大切だと思いませんか。  
 1) 非常に思う 2) かなり思う 3) 少し思う 4) 思う場合もある。  
 5) 全く思わない
51. あなたは、目標のある生活を送っていますか。  
 1) いつもそうしている 2) ほぼそうしている  
 3) 時々そうしている 4) 殆どしていない 5) まったくしていない
53. 今の生活は、ご自分の意志で選び送っていると思いませんか。  
 1) おおむね自分の意志である 2) だいたい自分の意志である  
 3) どちらともいえない 4) まれにそうでない 5) すべて自分の意志でない
54. 今住んでいる家(場所)は、ご自分で選び、決めましたか  
 1) すべて自分で選んだ 2) だいたいそうだ 3) どちらともいえない  
 4) ほとんど自分で選んでいない 5) すべて自分で選んでいない
55. これから先、生活の世話を願うする人を、ご自分で選ぶことができますか。  
 1) すべて選ぶことができる 2) だいたいできる 3) 少しできる  
 4) できない場合が多い 5) 全く選べない
57. その日の生活を決めるのに、だれかに相談する必要がありますか。  
 1) すべて相談する必要がある 2) ほぼ相談する必要がある 3) どちらともいえない  
 4) 相談する必要がある場合もある 5) まったく相談する必要はない
58. あなたは、自分の意志で自由に活動することができますか。  
 1) だいたい自由である 2) どちらともいえない  
 3) 自由でない場合もある 4) 全く自由でない
59. 誰にも気兼ねせずに、ご自分で外出を自由に決められますか。  
 1) まったく自由である 2) だいたい自由である 3) どちらともいえない  
 4) 自由でない場合もある 5) 全く自由でない
60. あなたが生きていることに、大切な意味があると思いませんか  
 1) とても重要な意味がある 2) かなり重要な意味がある  
 3) どちらともいえない 4) 重要だと思わない場合もある 5) 全く重要だと思わない
61. これからの生活の中で、自分の可能性を高めて行きたいと思いませんか。  
 1) 非常に高めたい 2) かなり高めたい 3) わずかに高めたい  
 4) 高めたくない場合もある 5) 全く高めたくない
62. ご自分の成長のために何か努力をしていますか。  
 1) 大変努力している 2) かなり努力している 3) わずかに努力している  
 4) ほとんど努力していない 5) 全く努力していない
65. ご自分の日常生活はご自分ですべて処理できますか。  
 1) すべて処理できる 2) ほぼ処理できる 3) わずかに処理できる  
 4) 処理できない場合もある 5) 全く処理できない

66. ご自分の生活問題を、ご自分でどれ位解決できますか。  
1) すべて解決できる 2) ほぼ解決できる 3) わずかに解決できる  
4) 解決できない場合がある 5) 全く解決できない
68. 現在、あなたは積極的な生き方をしていると思いますか。  
1) 大変積極的である 2) かなり積極的である 3) わずかに積極的である  
4) 積極的でない場合もある 5) 全く積極的でない
70. ご自分の行動の結果を、自分で素直に受け止めると考えていますか。  
1) 常に受止めると考えている 2) ほぼ考えている 3) すこし考えている  
4) ほとんど考えていない 5) 全く受止めると考えていない
71. ご自分が話した言葉の責任は、自分で素直に受け止めると考えていますか。  
1) 常に考えている 2) ほぼ考えている 3) すこし考えている  
4) ほとんど考えていない 5) 全く考えていない
72. 自分の意志を態度や行動に現していますか。  
1) 常に現してしている 2) ほぼ現している 3) 時々現している  
4) 現さない場合もある 5) 全く現していない
73. 自分の気持ちや意志を家族や周囲の人に伝えていますか。  
1) 常に現してしている 2) ほぼ現している 3) 時々現している  
4) 現さない場合もある 5) 全く現していない
74. あなたは、ご自分の将来の生活に何か希望を持っていますか  
1) 非常に希望を持っている 2) かなり希望を持っている 3) わずかに希望を持っている  
4) ほとんど希望を持ってない 5) 全く希望を持っていない
75. あなたの現在の生活は、生き生きしていると思いますか。  
1) 非常に生き生きしている 2) ほぼ生き生きしている 3) 少し生き生きしている  
4) 生き生きしていない時もある 5) 全く生き生きしていない
76. あなたの毎日の生活は充実していると思いますか。  
1) 非常に充実している 2) ほぼ充実している 3) わずかに充実している  
4) 充実していない時もある 5) 全く充実していない
77. ご自分がやりたいと考えていることをどれ位実現したいと思いますか。  
1) どうしても実現したい。 2) ほぼ実現したい 3) 少し実現したい  
4) 少し実現したいとは思わない 5) 全く実現したいとは思わない
78. 自分の持っている能力を生かした生活を送りたいと思いますか。  
1) 非常にそう思う 2) ほぼそう思う 3) わずかにそう思う  
4) 殆ど思わない 5) 全くそう思わない
79. ご自分の希望を実現するためになにか努力をしていますか。  
1) 常に努力している 2) だいたい努力している 3) わずかに努力している  
4) 努力する場合もある。 5) 全く努力していない

終了

アンケートにご協力どうもありがとうございました。  
お疲れのところ、今後ともよろしくお願い申し上げます。

表 4 - 6 - 1 基本属性 「年齢」 の度数分布

Q1 年齢

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 65.00	2	4.8	5.0	5.0
66.00	2	4.8	5.0	10.0
67.00	2	4.8	5.0	15.0
68.00	5	11.9	12.5	27.5
69.00	3	7.1	7.5	35.0
70.00	2	4.8	5.0	40.0
71.00	2	4.8	5.0	45.0
72.00	4	9.5	10.0	55.0
73.00	1	2.4	2.5	57.5
74.00	1	2.4	2.5	60.0
75.00	2	4.8	5.0	65.0
76.00	5	11.9	12.5	77.5
77.00	3	7.1	7.5	85.0
78.00	5	11.9	12.5	97.5
79.00	1	2.4	2.5	100.0
合計	40	95.2	100.0	
欠損値 .00	1	2.4		
システム欠損値	1	2.4		
合計	2	4.8		
合計	42	100.0		

統計量

Q1 年齢

度数	有効	40
	欠損値	2
平均値		72.2500
中央値		72.0000
最頻値		68.00(a)
標準偏差		4.36037
最小値		65.00
最大値		79.00



**基本属性**

表 4-6-2 プリテスト用基本属性の 度数分布

**統計量**

	Q1 年齢	Q3 家	Q4 同居家族	Q5 家族数	Q6 収入 の仕事	Q7 職業	Q8 最終学歴
度数 有効	40	42	42	41	42	38	40
欠損値	2	0	0	1	0	4	2
平均値	72.2500	1.5714	2.1429	2.9268	1.8333	4.2632	3.4500
中央値	72.0000	1.0000	2.0000	3.0000	1.0000	5.0000	3.0000
標準偏差	4.36037	1.15067	.71811	1.29210	1.42994	1.42723	1.82504
分散	19.01282	1.32404	.51568	1.66951	2.04472	2.03698	3.33077
最小値	65.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	79.00	5.00	5.00	5.00	5.00	6.00	7.00

**統計量**

	Q9 移動方法	Q10 判断力	Q11 食事	Q12 入浴	Q13 聴力	Q14 電話回数	Q15 外出回数
度数 有効	39	42	42	41	41	42	41
欠損値	3	0	0	1	1	0	1
平均値	1.3333	1.4048	1.9762	2.3902	1.2195	3.0476	2.2683
中央値	1.0000	1.0000	1.0000	3.0000	1.0000	3.0000	2.0000
標準偏差	.95513	.73450	1.50589	.86250	.47498	.96151	.83739
分散	.91228	.53949	2.26771	.74390	.22561	.92451	.70122
最小値	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	6.00	3.00	5.00	4.00	3.00	5.00	4.00

**Q4 同居家族1**

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1.00	5	11.9	11.9	11.9
2.00	28	66.7	66.7	78.6
3.00	8	19.0	19.0	97.6
5.00	1	2.4	2.4	100.0
合計	42	100.0	100.0	

**Q5 家族数**

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1.00	3	7.1	7.3	7.3
	2.00	17	40.5	41.5	48.8
	3.00	10	23.8	24.4	73.2
	4.00	2	4.8	4.9	78.0
	5.00	9	21.4	22.0	100.0
	合計	41	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	2.4		
	合計	42	100.0		

**Q6 収入の仕事**

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1.00	29	69.0	69.0	69.0
	2.00	3	7.1	7.1	76.2
	3.00	3	7.1	7.1	83.3
	4.00	2	4.8	4.8	88.1
	5.00	5	11.9	11.9	100.0
	合計	42	100.0	100.0	

**Q8 最終学歴**

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1.00	4	9.5	10.0	10.0
	2.00	9	21.4	22.5	32.5
	3.00	12	28.6	30.0	62.5
	4.00	8	19.0	20.0	82.5
	6.00	1	2.4	2.5	85.0
	7.00	6	14.3	15.0	100.0
		合計	40	95.2	100.0
欠損値	.00	2	4.8		
	合計	42	100.0		

**Q9 移動方法**

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1.00	33	78.6	84.6	84.6
	2.00	2	4.8	5.1	89.7
	3.00	3	7.1	7.7	97.4
	6.00	1	2.4	2.6	100.0
		合計	39	92.9	100.0
欠損値	.00	3	7.1		
	合計	42	100.0		

< 卷末資料 2 4 > 第 4 章適用 プリテスト

表 4 - 1 プリテスト度数分布 自己実現項目

統計量

		Q18 18趣味	Q19 19健康	Q20 20医 者診察	Q21 21健 康生活	Q22 22役立つ	Q23 23自分で	Q24 24地 域の集まり
度数	有効	40	41	41	41	41	41	41
	欠損値	2	1	1	1	1	1	1
合計		100.00	100.00	104.00	83.00	103.00	76.00	115.00

統計量

		Q25 25毎 日の生活	Q26 26出会い	Q27 27介 護の世話	Q28 28希 望を話す	Q29 29食 事を一緒	Q30 30従う	Q31 31家 族に従う
度数	有効	41	41	41	30	31	37	36
	欠損値	1	1	1	12	11	5	6
合計		86.00	84.00	52.00	70.00	60.00	164.00	129.00

統計量

		Q34 34知 り合い	Q37 37参 加する	Q38 38一 緒に過す	Q39 39人 を助ける	Q40 40幸 福な生活	Q41 41何 かをする	Q42 42幸 せな暮らし
度数	有効	38	40	39	40	39	40	40
	欠損値	4	2	3	2	3	2	2
合計		87.00	111.00	108.00	124.00	79.00	101.00	155.00

統計量

		Q44 44能 力を生かす	Q45 45困 難になる	Q46 46習 慣を継続	Q47 47優 れた才能	Q49 49趣 味と費用	Q50 50生 活の趣味	Q51 51目 標の生活
度数	有効	39	39	39	39	40	40	39
	欠損値	3	3	3	3	2	2	3
合計		106.00	140.00	79.00	139.00	99.00	86.00	92.00

統計量

		Q53 53生 活を意志で	Q54 54家 を自分で	Q55 55世 話の人	Q57 57生 活を相談	Q58 58自 由な活動	Q59 59自 由な外出	Q60 60大 切な意味
度数	有効	40	40	39	38	41	41	41
	欠損値	2	2	3	4	1	1	1
合計		66.00	77.00	97.00	160.00	58.00	68.00	97.00

統計量

	Q61 61自 分の可能性	Q62 62自 分の成長	Q65 65日常 生活処理	Q66 66生 活の解決	Q68 68積 極的な生	Q70 70自 分の行動	Q71 71言 葉の責任
度数 有効	40	41	41	40	40	41	41
欠損値	2	1	1	2	2	1	1
合計	100.00	115.00	65.00	71.00	99.00	68.00	66.00

統計量

	Q72 72態 度や行動	Q73 73自 分の気持ち	Q75 75生き 生き生活	Q76 76毎 日の生活	Q77 77実 現する	Q78 78能力 を生かす	Q79 79希 望の実現
度数 有効	42	42	42	42	42	42	42
欠損値	0	0	0	0	0	0	0
合計	85.10	90.00	100.00	99.00	95.00	92.00	103.00

表 4 - 2 削除項目と理由

No	削除項目	項目内容	削除理由	無回答数 (42 人中)
1	Q21	健康生活	健康関連質問項目が多い	1 人
2	Q23	自分で	健康関連質問項目が多い	1 人
3	Q28	希望を話す	無回答が多い	12 人
4	Q29	食事を一緒	無回答が多い	11 人
5	Q30	従う	無回答が多い	5 人
6	Q31	家族に従う	質問が生活に馴染まない 無回答が多い	6 人
7	Q34	知り合い	無回答が多い 分布が 1・2 に偏っている	4 人 1・2 で 60%
8	Q37	参加する	無回答がある 分布が 1 に偏っている	2 人
9	Q41	何かをする	無回答がある	2 人
10	Q46	習慣を継続	無回答がある 分布の 1 に偏り	3 人
11	Q49	趣味と費用	無回答がある	2 人
12	Q57	生活を相談	無回答が多い	4 人
13	Q62	自分の成長	抽象的な質問である	1 人
14	Q66	生活の解決	無回答がある	2 人
15	Q70	自分の行動	無回答がある 分布が 1 に偏っている	1 人
16	Q72	態度や行動	Q72 と Q73 は同じことを確認している	1 人
17	Q75	生き生き生活	Q76 と同じ質問内容と考えられる	0
18	Q78	能力を生かす	Q44 の質問内容が同じである	0

表 4 - 8 - 1B 信頼性分析 32 項目 (Q59 選定)

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	74.0119	167.9045	12.9578	32
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	71.5119	156.7313	.3430	.8718
Q19	71.5738	157.7322	.4225	.8693
RQ20	70.5452	163.7845	.1144	.8773
Q22	71.5000	161.5595	.2568	.8729
Q24	71.2048	157.8400	.3873	.8701
Q25	71.9143	158.2803	.4739	.8685
Q26	71.9643	156.1082	.5186	.8673
Q27	72.7429	163.7781	.2762	.8723
Q38	71.2405	159.2493	.3911	.8701
Q39	70.9119	154.0445	.5617	.8660
Q40	71.9738	157.7664	.4459	.8689
RQ42	71.8881	162.2347	.1623	.8764
Q44	71.2881	155.2420	.4754	.8680
RQ45	71.6024	156.5680	.2904	.8744
Q47	70.4524	153.6011	.5046	.8671
Q50	71.8595	150.9966	.6845	.8629
Q51	71.6571	153.1532	.7019	.8636
Q53	72.3643	162.9804	.2940	.8720
Q54	72.0881	163.8299	.1257	.8765
Q55	71.5310	162.3417	.2049	.8742
Q58	72.5976	159.5544	.3395	.8712
<b>Q59</b>	<b>72.3548</b>	<b>166.1484</b>	<b>.0564</b>	<b>.8766</b>
Q60	71.6452	153.5767	.5339	.8664
Q61	71.5071	154.1914	.6109	.8652
Q65	72.4238	161.9702	.2749	.8724
Q68	71.5357	152.9033	.6748	.8638
Q71	72.4024	165.5017	.1536	.8739
Q73	71.8690	159.3651	.3406	.8712
Q74	71.2548	156.2040	.4812	.8680
Q76	71.6548	155.6508	.5058	.8674
Q77	71.7500	159.8260	.4848	.8690
Q79	71.5595	150.2376	.7264	.8619
R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Reliability Coefficients				
N of Cases = 42.0		N of Items = 32		
Alpha = .8735				

表 4-8-2B 信頼性分析 31 項目 (Q20 選定)

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	72.3548	166.1484	12.8899	31
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	69.8548	155.2630	.3346	.8753
Q19	69.9167	155.9912	.4241	.8725
<b>RQ20</b>	<b>68.8881</b>	<b>162.3074</b>	<b>.1044</b>	<b>.8807</b>
Q22	69.8429	159.8215	.2574	.8761
Q24	69.5476	155.9289	.3962	.8732
Q25	70.2571	156.5635	.4744	.8718
Q26	70.3071	154.2099	.5285	.8703
Q27	71.0857	162.0159	.2781	.8754
Q38	69.5833	157.5278	.3915	.8733
Q39	69.2548	151.9928	.5783	.8689
Q40	70.3167	155.7834	.4595	.8718
RQ42	70.2310	160.3363	.1684	.8795
Q44	69.6310	153.3837	.4825	.8711
RQ45	69.9452	155.2674	.2778	.8782
Q47	68.7952	151.6917	.5137	.8702
Q50	70.2024	149.3339	.6843	.8662
Q51	70.0000	151.4795	.7016	.8669
Q53	70.7071	161.5407	.2748	.8755
Q54	70.4310	162.2710	.1183	.8799
Q55	69.8738	160.4083	.2139	.8773
Q58	70.9405	158.4230	.3126	.8750
Q60	69.9881	151.5825	.5470	.8694
Q61	69.8500	152.3587	.6181	.8683
Q65	70.7667	159.9793	.2888	.8753
Q68	69.8786	151.2525	.6735	.8671
Q71	70.7452	163.6255	.1632	.8770
Q73	70.2119	157.7094	.3379	.8745
Q74	69.5976	154.5017	.4814	.8712
Q76	69.9976	154.2919	.4904	.8710
Q77	70.0929	158.1563	.4818	.8722
Q79	69.9024	148.5066	.7295	.8651
R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Reliability Coefficients				
N of Cases = 42.0		N of Items = 31		
Alpha = .8766				

表 4 - 8 - 3 B 信頼性分析 30 項目 (Q54 選定)

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	68.8881	162.3074	12.7400	30
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	66.3881	151.3489	.3414	.8796
Q19	66.4500	152.4260	.4164	.8771
Q22	66.3762	156.0911	.2553	.8805
Q24	66.0810	152.2206	.3953	.8776
Q25	66.7905	152.8760	.4719	.8762
Q26	66.8405	150.1771	.5447	.8744
Q27	67.6190	158.4143	.2637	.8799
Q38	66.1167	154.0848	.3761	.8780
Q39	65.7881	147.9177	.5966	.8729
Q40	66.8500	152.0191	.4614	.8762
RQ42	66.7643	156.6775	.1636	.8840
Q44	66.1643	148.9872	.5126	.8748
RQ45	66.4786	151.7373	.2715	.8829
Q47	65.3286	148.1401	.5085	.8748
Q50	66.7357	145.5716	.6896	.8705
Q51	66.5333	147.8018	.7020	.8713
Q53	67.2405	158.0366	.2557	.8800
<b>Q54</b>	<b>66.9643</b>	<b>158.5175</b>	<b>.1161</b>	<b>.8843</b>
Q55	66.4071	156.6343	.2135	.8816
Q58	67.4738	154.8200	.3054	.8795
Q60	66.5214	147.9081	.5470	.8739
Q61	66.3833	148.9912	.6024	.8731
Q65	67.3000	156.2590	.2859	.8797
Q68	66.4119	147.4440	.6806	.8714
Q71	67.2786	159.8359	.1614	.8813
Q73	66.7452	153.7611	.3470	.8787
Q74	66.1310	150.8929	.4767	.8758
Q76	66.5310	150.4022	.4989	.8752
Q77	66.6262	154.2112	.4946	.8763
Q79	66.4357	144.5258	.7457	.8692
R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Reliability Coefficients			N of Items = 30	
N of Cases = 42.0				
Alpha = .8807				



表 4 - 8 - 4 B 信頼性分析 29 項目 (Q 7 1 選定)

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	66.9643	158.5175	12.5904	29
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	64.4643	147.3053	.3552	.8831
Q19	64.5262	148.5386	.4264	.8807
Q22	64.4524	152.3030	.2584	.8842
Q24	64.1571	148.8006	.3838	.8817
Q25	64.8667	149.3891	.4611	.8801
Q26	64.9167	146.2531	.5584	.8779
Q27	65.6952	154.6029	.2686	.8835
Q38	64.1929	150.5187	.3692	.8819
Q39	63.8643	144.6209	.5813	.8771
Q40	64.9262	148.3220	.4626	.8799
RQ42	64.8405	152.6137	.1760	.8876
Q44	64.2405	145.2537	.5168	.8785
RQ45	64.5548	147.7635	.2808	.8866
Q47	63.4048	144.2619	.5188	.8784
Q50	64.8119	142.0962	.6841	.8745
Q51	64.6095	144.2887	.6963	.8752
Q53	65.3167	154.3419	.2524	.8838
Q55	64.4833	153.2473	.1979	.8858
Q58	65.5500	150.9952	.3108	.8832
Q60	64.5976	144.1783	.5515	.8776
Q61	64.4595	145.4478	.5978	.8770
Q65	65.3762	152.5526	.2849	.8835
Q68	64.4881	143.8040	.6818	.8752
<b>Q71</b>	<b>65.3548</b>	<b>156.2260</b>	<b>.1498</b>	<b>.8851</b>
Q73	64.8214	150.0959	.3456	.8825
Q74	64.2071	146.8943	.4926	.8792
Q76	64.6071	146.8192	.4955	.8791
Q77	64.7024	150.8573	.4718	.8804
Q79	64.5119	140.7577	.7546	.8728
R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Reliability Coefficients				
N of Cases =	42.0			
Alpha =	.8843			
			N of Items = 29	

表 4 - 8 - 5 B 信頼性分析 2 8 項目 ( Q 4 2 選定 )

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	65.3548	156.2260	12.4990	28
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	62.8548	145.1308	.3536	.8841
Q19	62.9167	146.1390	.4349	.8814
Q22	62.8429	150.2503	.2488	.8853
Q24	62.5476	146.6328	.3812	.8826
Q25	63.2571	147.2879	.4540	.8811
Q26	63.3071	143.9704	.5624	.8786
Q27	64.0857	152.3169	.2702	.8844
Q38	62.5833	148.2200	.3725	.8827
Q39	62.2548	142.4874	.5785	.8780
Q40	63.3167	146.0122	.4672	.8807
<b>RQ42</b>	<b>63.2310</b>	<b>150.5383</b>	<b>.1691</b>	<b>.8887</b>
Q44	62.6310	143.1841	.5111	.8795
RQ45	62.9452	145.7625	.2736	.8878
Q47	61.7952	142.2619	.5109	.8795
Q50	63.2024	140.0788	.6769	.8755
Q51	63.0000	142.2410	.6887	.8761
Q53	63.7071	152.1470	.2478	.8847
Q55	62.8738	151.1083	.1925	.8868
Q58	63.9405	148.5395	.3210	.8839
Q60	62.9881	141.6845	.5648	.8781
Q61	62.8500	143.0801	.6064	.8776
Q65	63.7667	150.2789	.2861	.8843
Q68	62.8786	141.5178	.6870	.8759
Q73	63.2119	147.6260	.3566	.8831
Q74	62.5976	144.4378	.5044	.8798
Q76	62.9976	144.6183	.4951	.8800
Q77	63.0929	148.7265	.4647	.8814
Q79	62.9024	138.4866	.7598	.8735
Reliability Coefficients				
N of Cases =	42.0		N of Items = 28	
Alpha =	.8851			

表 4 - 8 - 6 B 信頼性分析 2 7 項目 ( Q 5 5 選定 )

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	63.2310	150.5383	12.2694	27
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	60.7310	139.1529	.3719	.8876
Q19	60.7929	140.8299	.4250	.8855
Q22	60.7190	144.2450	.2693	.8888
Q24	60.4238	141.1789	.3780	.8866
Q25	61.1333	141.6296	.4614	.8848
Q26	61.1833	138.4658	.5644	.8824
Q27	61.9619	147.0990	.2392	.8886
Q38	60.4595	142.5298	.3799	.8864
Q39	60.1310	136.9705	.5823	.8817
Q40	61.1929	140.5119	.4668	.8846
Q44	60.5071	137.7119	.5118	.8834
RQ45	60.8214	140.6851	.2590	.8924
Q47	59.6714	136.9421	.5058	.8836
Q50	61.0786	134.0461	.7076	.8786
Q51	60.8762	136.9819	.6792	.8802
Q53	61.5833	146.5126	.2489	.8885
<b>Q55</b>	<b>60.7500</b>	<b>145.8713</b>	<b>.1753</b>	<b>.8911</b>
Q58	61.8167	143.5078	.2956	.8883
Q60	60.8643	136.2258	.5662	.8820
Q61	60.7262	137.0010	.6393	.8807
Q65	61.6429	145.1932	.2584	.8887
Q68	60.7548	135.7777	.7040	.8793
Q73	61.0881	142.3899	.3421	.8873
Q74	60.4738	138.5873	.5226	.8832
Q76	60.8738	138.9815	.5027	.8837
Q77	60.9690	143.1139	.4687	.8851
Q79	60.7786	133.0256	.7648	.8772
Reliability Coefficients				
N of Cases = 42.0			N of Items = 27	
Alpha = .8887				

表 4 - 8 - 7 B 信頼性分析 2 6 項目 ( Q 5 3 選定 )

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	60.7500	145.8713	12.0777	26
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	58.2500	134.0421	.3956	.8896
Q19	58.3119	136.0630	.4372	.8878
Q22	58.2381	139.7224	.2665	.8914
Q24	57.9429	137.1069	.3567	.8897
Q25	58.6524	137.2811	.4507	.8875
Q26	58.7024	133.8105	.5735	.8847
Q27	59.4810	142.3182	.2520	.8909
Q38	57.9786	138.2500	.3655	.8892
Q39	57.6500	132.8557	.5655	.8847
Q40	58.7119	135.9967	.4668	.8871
Q44	58.0262	133.2020	.5135	.8859
RQ45	58.3405	136.0400	.2627	.8951
Q47	57.1905	132.5677	.5020	.8863
Q50	58.5976	129.3539	.7215	.8808
Q51	58.3952	132.4707	.6823	.8826
<b>Q53</b>	<b>59.1024</b>	<b>142.2261</b>	<b>.2263</b>	<b>.8914</b>
Q58	59.3357	138.4892	.3178	.8904
Q60	58.3833	131.8883	.5612	.8847
Q61	58.2452	132.6484	.6337	.8834
Q65	59.1619	140.4385	.2676	.8911
Q68	58.2738	131.3878	.7016	.8819
Q73	58.6071	137.6602	.3509	.8897
Q74	57.9929	134.0134	.5270	.8857
Q76	58.3929	134.6943	.4926	.8865
Q77	58.4881	138.7742	.4538	.8878
Q79	58.2976	128.4983	.7717	.8795
Reliability Coefficients			N of Items = 26	
N of Cases = 42.0				
Alpha = .8911				

表 4 - 8 - 8 B 信頼性分析 2 5 項目 ( Q 2 7 選定 )

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	59.1024	142.2261	11.9259	25
Item-total Statistics				
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	56.6024	130.6017	.3929	.8901
Q19	56.6643	132.5194	.4381	.8881
Q22	56.5905	136.1102	.2684	.8918
Q24	56.2952	133.6883	.3508	.8903
Q25	57.0048	133.7014	.4529	.8878
Q26	57.0548	130.0728	.5864	.8847
<b>Q27</b>	<b>57.8333</b>	<b>138.7550</b>	<b>.2488</b>	<b>.8914</b>
Q38	56.3310	135.0193	.3478	.8900
Q39	56.0024	129.3051	.5687	.8849
Q40	57.0643	132.4141	.4698	.8874
Q44	56.3786	129.5603	.5205	.8861
RQ45	56.6929	132.7236	.2552	.8959
Q47	55.5429	128.9898	.5061	.8865
Q50	56.9500	125.9084	.7219	.8809
Q51	56.7476	129.0699	.6780	.8829
Q58	57.6881	135.0864	.3100	.8910
Q60	56.7357	128.3731	.5631	.8849
Q61	56.5976	129.1510	.6346	.8836
Q65	57.5143	136.8432	.2683	.8915
Q68	56.6262	127.9254	.7016	.8821
Q73	56.9595	134.0400	.3544	.8900
Q74	56.3452	130.5538	.5249	.8860
Q76	56.7452	131.2289	.4903	.8868
Q77	56.8405	135.1912	.4555	.8881
Q79	56.6500	124.8870	.7811	.8795
Reliability Coefficients				
N of Cases =	42.0	N of Items = 25		
Alpha =	.8914			

表 4 - 8 - 9 B 信頼性分析 2 4 項目 ( Q 6 5 ・ Q 7 9 選定 )

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)				
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables
SCALE	57.8333	138.7550	11.7794	24
Item-total Statistics	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted
Q18	55.3333	127.3989	.3875	.8903
Q19	55.3952	129.2517	.4334	.8882
Q22	55.3214	132.5593	.2760	.8918
Q24	55.0262	130.2732	.3528	.8903
Q25	55.7357	130.1780	.4621	.8877
Q26	55.7857	126.7705	.5852	.8847
Q38	55.0619	131.5639	.3515	.8900
Q39	54.7333	125.9267	.5719	.8848
Q40	55.7952	129.0224	.4718	.8873
Q44	55.1095	126.2121	.5218	.8860
RQ45	55.4238	129.6121	.2462	.8964
Q47	54.2738	125.5859	.5101	.8863
Q50	55.6810	122.6313	.7223	.8807
Q51	55.4786	125.8081	.6752	.8829
Q58	56.4190	131.9723	.2960	.8914
Q60	55.4667	125.0559	.5637	.8848
Q61	55.3286	125.7187	.6412	.8834
<b>Q65</b>	<b>56.2452</b>	<b>133.9260</b>	<b>.2399</b>	<b>.8921</b>
Q68	55.3571	124.3869	.7150	.8816
Q73	55.6905	130.9438	.3403	.8904
Q74	55.0762	127.1482	.5287	.8859
Q76	55.4762	127.6097	.5045	.8865
Q77	55.5714	131.6733	.4648	.8880
<b>Q79</b>	<b>55.3810</b>	<b>121.6055</b>	<b>.7825</b>	<b>.8792</b>
Reliability Coefficients				
N of Cases =		42.0		
Alpha =		.8914		
			N of Items = 24	

表 4 - 8 - 1 0 相関係数行列 2 4 項目 ( Q 7 9 )

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )					
Correlation Matrix					
	Q18	Q19	Q22	Q24	Q25
Q18	1.0000				
Q19	.1321	1.0000			
Q22	.2103	.0572	1.0000		
Q24	.3156	.1903	.2439	1.0000	
Q25	.2241	.2631	.4472	.3675	1.0000
Q26	.3484	.3590	.1322	.0420	.3690
Q38	.3095	.3104	.1267	.4587	.3061
Q39	.1608	.3313	.2133	.4331	.4036
Q40	.0682	.1761	.0904	-.0034	.0712
Q44	.2649	.1420	.2227	.1091	.1542
RQ45	-.0081	.3021	-.0646	-.1780	-.0993
Q47	.2771	.1387	.2281	.3466	.2166
Q50	.5116	.1680	.3410	.2212	.3809
Q51	.3812	.4544	.0515	.1682	.2276
Q58	.2191	.3553	-.2865	-.2416	-.1128
Q60	.1183	.4288	.1585	.3926	.2938
Q61	.1937	.1389	.4330	.4048	.4444
Q65	.0014	.1507	-.1725	-.1873	-.1728
Q68	.1988	.2978	.3408	.3133	.4153
Q73	.0709	.2689	-.1128	-.1710	-.0531
Q74	.3570	.0630	.2015	.3269	.3977
Q76	.0821	.1652	.1668	.3967	.5158
Q77	.0847	.1398	.3790	.4176	.4576
Q79	.3721	.3708	.1891	.2104	.4143

R E L I A B I L I T Y A N A L Y S I S - S C A L E ( A L P H A )					
Correlation Matrix					
	Q26	Q38	Q39	Q40	Q44
Q26	1.0000				
Q38	.1148	1.0000			
Q39	.2391	.5142	1.0000		
Q40	.3773	.1103	.3383	1.0000	
Q44	.4212	.0790	.4706	.4640	1.0000
RQ45	.1770	.0969	.1729	.0111	.2995
Q47	.1863	.0791	.2134	.1320	.3021
Q50	.5552	.1779	.3709	.4811	.4752
Q51	.4467	.2651	.3336	.2854	.4660
Q58	.3161	.1151	-.0397	.2736	.2891
Q60	.3368	.2249	.3605	.4150	-.0007
Q61	.4069	.3956	.4307	.4196	.2523
Q65	.2288	-.0021	.2167	.4267	.3712
Q68	.3356	.3545	.5173	.4756	.3823
Q73	.3403	-.0545	.1863	.4438	.1555
Q74	.3752	.1287	.1915	.2046	.1635
Q76	.2297	.0807	.3005	.1352	.2386
Q77	.1583	-.0137	.3256	.0176	.1198
<b>Q79</b>	<b>.7303</b>	.1962	.5028	.5312	.5994
	RQ45	Q47	Q50	Q51	Q58
RQ45	1.0000				
Q47	.2431	1.0000			
Q50	.1348	.4891	1.0000		
Q51	.5338	.5206	.5104	1.0000	
Q58	.4403	.0908	.1577	.4069	1.0000
Q60	.0083	.2892	.3958	.2885	.1038
Q61	.0855	.3848	.5480	.3464	-.0692
Q65	.2312	.0917	.1535	.2771	.5076
Q68	.0888	.4547	.5803	.4836	.0942
Q73	.1673	.0165	.3104	.2197	.5075
Q74	-.0005	.3350	.4464	.2764	.0619
Q76	.2133	.4495	.3825	.2217	.1155
Q77	.1207	.4738	.4549	.3403	-.1567
Q79	.2004	.3895	.6286	.6145	.3849

RELIABILITY ANALYSIS - SCALE (ALPHA)

Correlation Matrix					
	Q60	Q61	Q65	Q68	Q73
Q60	1.0000				
Q61	.5401	1.0000			
Q65	.2290	.0504	1.0000		
Q68	.5773	.6835	.0966	1.0000	
Q73	.4799	.0879	.6199	.2742	1.0000
Q74	.4860	.5806	-.0529	.4180	.1456
Q76	.3612	.4037	-.2050	.4521	.0257
Q77	.3080	.4022	-.2274	.4668	.0618
Q79	.3867	.4601	.2311	.5889	.3249
	Q74	Q76	Q77	Q79	
Q74	1.0000				
Q76	.5608	1.0000			
Q77	.4674	.6472	1.0000		
Q79	.5154	.4062	.3312	1.0000	
N of Cases =		42.0			



表 4 - 8 - 1 1 信頼性分析 2 3 項目 ( Q 2 3 )

R E L I A B I L I T Y		A N A L Y S I S		S C A L E ( A L P H A )	
Statistics for	Mean	Variance	Std Dev	N of Variables	
SCALE	55.7857	126.7705	11.2592	23	
Item-total Statistics					
	Scale Mean if Item Deleted	Scale Variance if Item Deleted	Corrected Item-Total Correlation	Alpha if Item Deleted	
Q18	53.2857	116.0974	.3783	.8836	
Q19	53.3476	117.8099	.4258	.8812	
Q22	53.2738	120.7688	.2789	.8849	
Q24	52.9786	118.3564	.3668	.8829	
Q25	53.6881	118.6718	.4550	.8806	
Q38	53.0143	119.7383	.3595	.8828	
Q39	52.6857	114.3227	.5811	.8769	
Q40	53.7476	117.5806	.4645	.8802	
Q44	53.0619	114.9375	.5133	.8788	
RQ45	53.3762	118.0267	.2441	.8900	
Q47	52.2262	113.9371	.5206	.8786	
Q50	53.6333	111.5491	.7124	.8730	
Q51	53.4310	114.4427	.6723	.8752	
Q58	54.3714	120.4645	.2852	.8849	
Q60	53.4190	113.6504	.5643	.8772	
Q61	53.2810	114.3289	.6399	.8757	
Q65	54.1976	122.2402	.2334	.8855	
Q68	53.3095	112.8926	.7235	.8735	
Q73	53.6429	119.4820	.3297	.8838	
Q74	53.0286	115.7436	.5244	.8786	
Q76	53.4286	115.9806	.5110	.8789	
Q77	53.5238	119.8584	.4748	.8807	
Q79	53.3333	110.7964	.7605	.8717	
Reliability Coefficients					
N of Cases =		42.0			
Alpha =		.8847			
			N of Items = 23		

<巻末資料 37> 第5章適用 本調査

表5-1 在宅高齢者の自己実現調査依頼文

平成17年12月15日

茅ヶ崎市在住の在宅高齢者

自己実現調査 依頼先の皆様

ルーテル学院大学 大学院 総合人間学研究科

社会福祉学専攻 自己実現調査委員会

委員長 教授 前田 大作

「在宅高齢者の自己実現に関する調査」のお願い

師走となり、寒さが日増しに厳しくなってきましたが、皆様は日々お元気にお過ごしでしょうか。

標記「在宅高齢者の自己実現に関する調査」について、この度調査をお願いする皆様方は、茅ヶ崎市在住の高齢者の中から抽選で(無作為抽出)選ばせていただきました。

この調査は、高齢者の皆様が、いつまでも地域で生きがいを持ち、社会に貢献し、一人ひとりが個性的に生きることのできる社会を実現するために、その方法を研究することを目的としています。

調査は無記名であり、報告書では「このような考え方の方が〇〇%」のように表現し、個人が特定されることは全くありません。また、皆様方個人に一切ご迷惑をおかけすることはありませんので、どうか安心してご回答ください。

記

- 1 調査人数 : 約1,000人の方に調査をお願いしています。
- 2 ご返送期日 : 12月28日(水)までにご投函ください。
- 3 調査票の回答の仕方  
質問は最初を感じられたことで、お答えください。  
答えの中から最もあなたの考えに近いと思われる番号を1つ選び、○印で囲ってください。
- 4 無記名で調査を行っております。
- 5 返送方法

同封の返信用封筒(80円切手付き)に質問票を入れ、ご返送ください。  
送り先の表書きはしてあります。皆様方のご住所、お名前の記入は不要です。  
何かご不明な点がありましたら、お電話で下記連絡先までお問い合わせください。

連絡先:

東京都三鷹市大沢3-10-20  
ルーテル学院大学 大学院 総合人間学研究科  
社会福祉学専攻 自己実現調査委員会  
事務局担当: 清重 哲男  
電話 090-470-60309(直通)

No :

## 在宅高齢者の自己実現調査票

ルーテル学院大学 大学院 総合人間学研究科  
社会福祉学専攻 自己実現調査委員会

事務局担当： 清 重 哲 男

電話 090-470-60309

回答の仕方

- 1) 質問は、最初に関じられたことで、お答えください。
- 2) 答えの中から最もあなたの考えに近いと思われる番号を1つ選び、○印で囲ってください。
- 3) 回答は12月28日(水)までに返送して下さるようお願いいたします。

## 在宅高齢者の自己実現調査項目

調 査 日： 17年12月 日

次の各質問について、答えの中から最も当てはまる番号に1つだけ○を付け、お選びください。

### 自己実現 24質問項目

1 現在、どの程度趣味に取り組んでいますか。

- 1) いつも取り組んでいる      2) たいてい取り組んでいる
- 3) 時々取り組んでいる      4) ほとんど取り組んでいない
- 5) 全く取り組んでいない

2 同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思いますか。

- 1) とても健康である      2) ほぼ健康である      3) 普通
- 4) あまり健康でない      5) 非常に悪い

3 世の中のために、役立つことをしたいですか。

- 1) とてもしたい      2) かなりしたい      3) 少しならしたい
- 4) ほとんどしたくない      5) 全くしたくない

4 地域のおまつりや老人クラブなどの集まりに参加したいと思いますか。

- 1) ぜひ参加したいと思う      2) かなり参加したいと思う

- 3) たまに参加したいと思う      4) ほとんどそうは思わない  
5) 全く参加したくない

5 毎日の生活の中で楽しいことがありますか。

- 1) いつもある      2) しばしばある      3) たまにある  
4) ほとんどない      5) 全くない

6 人との出会いは、楽しいと思いますか。

- 1) 非常にそう思う      2) かなりそう思う      3) 少しそう思う  
4) ほとんどそうは思わない      5) 全くそうは思わない

7 最近、お知り合いと一緒に過ごす時がありましたか。

- 1) 頻繁にあった      2) かなりあった      3) たまにあった  
4) ほとんどなかった      5) 全くなかった

8 人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか。

- 1) いつもしている      2) たいていしている      3) たまにしている  
4) ほとんどしてない      5) 全くしてない

9 あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか。

- 1) 非常に希望する      2) かなり希望する      3) 少し希望する  
4) ほとんど希望しない      5) 全く希望しない

10 ご自分の能力を生かした生活をしていますか。

- 1) 十分に生かしている      2) かなり生かしている      3) 時々生かしている  
4) 生かしていない場合が多い      5) 全く生かしていない

11 ご自分の希望する生活を送ることは、難しいと思いますか。

- 1) 非常に難しいと思う      2) かなり難しいと思う      3) 時々難しいと  
思うことがある      4) あまり難しいとは思わない      5) 難しくない

12 人より優れた能力が何かあると思いますか。

- 1) たくさんあると思う      2) かなりあると思う      3) 少しあると思う  
4) あまりないと思う      5) 全くなにもないと思う

13 趣味のある生活は大切だと思いますか。

- 1) 非常にそう思う      2) かなりそう思う      3) 少しそう思う  
4) そう思う場合もある。      5) 全くそうは思わない

14 あなたは、目標のある生活を送っていますか。

- 1) とてもはっきりした目標がある      2) かなりはっきりした目標がある  
3) まあまあ目標のある生活をしている      4) ほとんど目標のある  
生活はしていない      5) 目標ある生活は全くしていない

15 日常生活で、ご自分のしたいことが自由にできますか。

- 1) まったく自由にできる      2) ほぼ自由にできる      3) ある程度自由  
にできる      4) あまり自由にできない      5) 全く自由にできない

16 あなたは、生きていることに大切な意味があると思いますか。

- 1) 非常に大切だと思う      2) かなり大切だと思う      3) 少し大切だと  
思う      4) あまり大切だとは思わない      5) 全く大切だとは思わない

17 ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思いますか。

- 1) 非常に伸ばしたい      2) かなり伸ばしたい      3) 少し伸ばしたい  
4) あまり伸ばしたくない      5) 全く伸ばしたくない

18 日常生活上の問題をご自分で処理できますか。

- 1) すべて処理できる      2) ほぼ処理できる      3) まあ処理できる  
4) あまり処理できない      5) 全く処理できない
- 19 現在、あなたは、積極的な生き方をしていると思いますか。
- 1) 非常にそう思う      2) かなりそう思う      3) まあそう思う  
4) あまりそうは思わない      5) 全くそうは思わない
- 20 ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えていますか。
- 1) 常に伝えている      2) ほぼ伝えている      3) まあ伝えている  
4) 伝えない場合もある      5) 全く伝えていない
- 21 ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
- 1) 大変希望を持っている      2) かなり希望を持っている  
3) まあ希望を持っている      4) あまり希望を持っていない  
5) 全く希望を持っていない
- 22 毎日の生活は、充実していますか。
- 1) 非常に充実している      2) かなり充実している      3) まあ充実している  
4) あまり充実していない      5) 全く充実していない
- 23 ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思いますか。
- 1) 必ず実現できると思う。      2) ほぼ実現できると思う  
3) まあ実現できると思う      4) あまり実現できるとは思わない  
5) 全く実現できるとは思わない
- 24 ご自分の希望を実現するために、なにか努力をしていますか。
- 1) 常に努力している      2) かなり努力している      3) まあ努力している  
4) あまり努力していない      5) 全く努力していない

### 基本属性 調査項目

次に、あなたご自身のことについて、おたずねいたします。

25 あなたは、いつお生まれになりましたか。 □ の中に ご記入ください。

1




1) . 大正

2) . 昭和

年

月

生

(平成18年1月1日現在の年齢)

26 あなたの性別についてお答えください。

1) 女性

2) 男性

27 あなたの現在のお住まいは、次のどれでしょうか。

1) 持ち家一戸建て

2) 持ち家分譲マンション

3) 県営住宅、公

社、公団(賃貸)

4) 民間借家、民間アパート

5) 社宅・官舎

6) その他( )

28 あなたは、現在どなたと同居されていますか。お一人の場合は独居とお答えください。

1) 一人暮らし

2) 配偶者のみと一緒

3) 既婚の子ども世帯と同居

(孫や親戚の者含む)

4) 未婚の子どものみと同居

5) その他( )

29 ご自分を含め同居されているご家族は何人ですか。独居の場合は、1人とお答えください。

1) 1人

2) 2人

3) 3人

4) 4人

5) 5人以上

30 あなたの現在の収入になる仕事は次のどれに該当しますか。

- 1) 働いていない 2) 自営業（開業医、開業司法書士、商工サービス業等、）  
3) 自営業の家族従業員 4) 勤め 5) シルバー人材センターからの仕事  
6) その他（具体的に： ）

**31 あなたは現在収入になる仕事を、およそどの程度していますか。**

- 1) 働いていない 2) たまに（月 1 日程度） 3) 週 1～2 日  
4) 週 3～4 日 5) ほぼ毎日勤務（週 5 回以上）  
6) その他（具体的に： ）

**32 あなたの最終学歴について、お答えください。**

- 1) 新制中学校（旧制小学校、高等小学校）  
2) 新制高等学校（旧制中学校、旧制高等女学校、師範学校）  
3) 新制各種専門学校（新制高等学校卒業後）  
4) 新制短期大学、新制高等専門学校、旧制高等学校・大学予科、旧制高等専門学校  
5) 新制大学、旧制大学 6) 大学院 7) その他（ ）

**33 移動の方法について最も該当するものを1つだけ選びください。**

- 1) 自分で自家用車を運転し、または自分で公共交通機関を利用し自由に移動している。  
2) 公的交通機関の利用は困難だが、自分でタクシーを利用して移動している。  
3) 付き添いがいれば、公共交通機関で移動できる。  
4) 付き添いがいれば、タクシーや自家用車を利用し移動できる。  
5) 介護用の車でないと外出できない。

**34 これまでにあなたが最も長く働いた職業は、どのような仕事ですか。（最も長い職業）**

- 1) 民間会社（従業員 10 人以上）の管理職、技術職、事務、経理などの仕事  
2) 民間会社（従業員 10 人以上）製造・輸送等の技能職、警備、販売員、外交員などの仕事  
3) 役所、公団、公社、公益法人などへの勤め（管理職、技術職、事務、経理などの仕事）  
4) 役所、公団、公社、公益法人などへの勤め（製造・輸送等の技能職、警備、販売員、外交員などの仕事）  
5) 自営業（開業医、開業司法書士等）、商工サービス業経営者（従業員 9 人以下）、およびその家族従業員  
6) 自営農林漁業、およびその家族従業員  
7) 収入のある仕事に就いたことはない（専業主婦を含む）  
8) その他（具体的に： ）

**35 あなた自身の判断力について該当するものを1つ選び、○印を付けてください。**

- 1) ほとんどのことを思い出し、日々の問題をきちんと考え、解決する判断力がある。  
2) ほとんどのことは思い出せるが、日々の問題を解決するには、少し苦勞を要する。  
3) いくぶん忘れっぽく、日々の問題を解決するには、かなり努力を要する。  
4) 大変忘れっぽく、日々の問題の解決は、ほぼ困難である。

**36 食事について該当するものを1つお選びください。**

- 1) 主に自分で料理し、または、外食を利用し、好みの食事を自由に選んで食べている。  
2) 自分で料理をすることはあまりなく、食事内容は、家族やヘルパー等の他者まかせである。  
3) 自分で料理することはなく、常に、他の人が準備したものを食べている。

**37 聴力について該当するものを1つお選びください。**

- 1) 普通に聞こえ、困ることはない。(補聴器なしで、3人以上の大勢の中で会話を聴くことができる)
  - 2) やや大きな声で話せば聞こえる。(補聴器なしで、静かな部屋の中なら相手の会話を聴くことができる)
  - 3) かなり大きな声で話せば聞こえる。(補聴器をつければ、3人以上の大勢の中で会話を聴くことができる)
  - 4) 耳元で大きな声で話せば聞こえる。(補聴器をつければ、静かな部屋で相手の会話を聴くことができる)
  - 5) ほとんど聞こえない。(ほとんど聴くことができない。)
- 38 あなたは、どの程度の頻度で電話をかけたり、手紙やEメールを送りますか。(仕事を含めた合計回数)
- 1) 毎日3回以上
  - 2) 毎日1～2回以内
  - 3) 週1～6回
  - 4) 月に1～3回
  - 5) ほとんどしない
- 39 あなたは、どの程度の頻度で外出しますか。(散歩、買い物や仕事を含めて)
- 1) 毎日1回以上
  - 2) 週1～6回程度
  - 3) 週1回以下(月1回～3回)
  - 4) ほとんど外出しない。
  - 5) 全く外出しない。
- 40 あなたが属する世帯の最近1年間の合計収入金額(税込み)について、ご回答ください。お答えになりたくない場合は、6番目に○をお付けください。
- 1) 100万円以下
  - 2) 100万円～299万円
  - 3) 300万円～499万円
  - 4) 500万円～699万円
  - 5) 700万円以上
  - 6) わからない、答えたくない

質問は以上で終わりです。おそれいりますが、記入漏れがないかどうか、もう一度最初から点検してくださるようお願いいたします。  
お疲れのところ、まことにありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

< 巻末資料 39 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 3 基本属性 16 項目の度数分布

統計量

	Q25 25年齢	Q26 26性別	Q27 現在の住まい	Q28 28どなたと同居	Q29 29同居家族人数	Q30 収入の仕事
度数	408	410	403	399	401	399
有効						
欠損値	5	3	10	14	12	14
平均値	72.44	1.51	1.20	2.66	2.69	1.59
標準偏差	3.926	.501	.563	1.139	1.241	1.003

統計量

	Q31 仕事の程度	RCQ32 最終学歴	Q33 移動の方法	Q34 最長勤務	Q35 判断力
度数	397	392	401	396	404
有効					
欠損値	16	21	12	17	9
平均値	1.62	2.75	1.19	2.66	1.33
標準偏差	1.114	1.486	.609	1.735	.633

統計量

	Q36 36食事について	Q37 聴力	Q38 38電話やメール	Q39 外出頻度	Q40 40収入金額
度数	401	405	402	398	265
有効					
欠損値	12	8	11	15	148
平均値	1.60	1.23	2.65	1.49	3.14
標準偏差	.742	.483	1.188	.630	1.130

表 5 - 4 「年齢」

Q 2 5 年 齢

	度数	ハ ° - セ	有効 ハ ° -	累積 ハ ° -
有効	65	11	2 .	2 .
	66	19	4 .	7 .
	67	27	6 .	1 4 .
	68	19	4 .	1 8 .
	69	34	8 .	2 7 .
	70	35	8 .	3 5 .
	71	31	7 .	4 3 .
	72	20	4 .	4 8 .
	73	37	9 .	5 7 .
	74	32	7 .	6 5 .
	75	29	7 .	7 2 .
	76	33	8 .	8 0 .
	77	35	8 .	8 8 .
	78	36	8 .	9 7 .
	79	6	1 .	9 9 .
	80	4	1 .	1 0 0
合計	408	9 8 .	1 0 0	
欠損値	-99	5	1 .	
合計	413	1 0 0		



< 巻末資料 40 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 5 「性別」

Q 2 6 2 6 性別

		度数	ハ ° - セ	有効ハ °	累積ハ °
有効	1	201	4 8	4 9	4 9
	2	209	5 0	5 1	1 0 0
	合計	410	9 9	1 0 0	
欠損値	9	3	.7		
合計		413	1 0 0		

表 5 - 6 「現在の住まい」

Q27 現在の住まい

		度数	ハ ° - セ	有効ハ ° - セ	累積ハ ° - セ
有効	持ち家1戸建て	352	85.2	87.3	87.3
	分譲マンション	20	4.8	5.0	92.3
	賃貸県営住宅等	1	.2	.2	92.6
	民間借家等	25	6.1	6.2	98.8
	社宅・官舎	1	.2	.2	99.0
	その他	4	1.0	1.0	100.0
	合計	403	97.6	100.0	
欠損値	9	10	2.4		
合計		413	100.0		

表 5 - 7 「どなたと同居」

Q 2 8 どなたと同居

		度数	ハ ° - セ	有効ハ °	累積ハ °
有効	1 一人暮らし	36	8 .	9 .	9 .
	2 配偶者と同居	196	4 7 .	4 9 .	5 8 .
	3 既婚の同居	82	1 9 .	2 0 .	7 8 .
	4 未婚の同居	39	9 .	9 .	8 8 .
	5 その他	46	1 1 .	1 1 .	1 0 0
合計		399	9 6 .	1 0 0	
欠損値	9	14	3 .		
合計		413	1 0 0		

表 5 - 8 「どなたと同居」と「同居家族人数」のクロス集計

Q28 28どなたと同居 と Q29 29同居家族人数 のクロス表

		Q29 29同居家族人数					合計	
		1 1人	2 2人	3 3人	4 4人	5 5人以上		
Q28 28ど なた と 同 居	1 一人暮らし	度数	36	0	0	0	0	36
		Q28 28どなたと同居 の %	100.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
		Q29 29同居家族人数 の %	87.8%	.0%	.0%	.0%	.0%	9.0%
	2 配偶者と一緒	度数	2	175	15	2	1	195
		Q28 28どなたと同居 の %	1.0%	89.7%	7.7%	1.0%	.5%	100.0%
		Q29 29同居家族人数 の %	4.9%	87.5%	24.2%	6.3%	1.6%	49.0%
	3 既婚の子供世帯	度数	1	3	3	18	57	82
		Q28 28どなたと同居 の %	1.2%	3.7%	3.7%	22.0%	69.5%	100.0%
		Q29 29同居家族人数 の %	2.4%	1.5%	4.8%	56.3%	90.5%	20.6%
	4 未婚の子供のみ	度数	0	20	16	3	0	39
		Q28 28どなたと同居 の %	.0%	51.3%	41.0%	7.7%	.0%	100.0%
		Q29 29同居家族人数 の %	.0%	10.0%	25.8%	9.4%	.0%	9.8%
	5 その他	度数	2	2	28	9	5	46
		Q28 28どなたと同居 の %	4.3%	4.3%	60.9%	19.6%	10.9%	100.0%
		Q29 29同居家族人数 の %	4.9%	1.0%	45.2%	28.1%	7.9%	11.6%
合計	度数	41	200	62	32	63	398	
	Q28 28どなたと同居 の %	10.3%	50.3%	15.6%	8.0%	15.8%	100.0%	
	Q29 29同居家族人数 の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

・「どなたと同居」と「同居家族人数」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗 尤度比	773.561(a)	16	.000
線型と線型による連関 有効なケースの数	604.148	16	.000
	103.101	1	.000
	398		

a 6 セル (24.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 2.89 である。

< 巻末資料 4 2 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 9 「同居家族人数」

Q29 同居家族人数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 1人	42	10.2	10.5	10.5
	2 2人	200	48.4	49.9	60.3
	3 3人	62	15.0	15.5	75.8
	4 4人	34	8.2	8.5	84.3
	5 5人以上	63	15.3	15.7	100.0
	合計	401	97.1	100.0	
欠損値	9	12	2.9		
	合計	413	100.0		

表 5 - 1 0 「収入の仕事」

R C Q 3 0 収入の仕事

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 働いて	280	67	70	70
	2 自営業	41	9	10	80
	3 勤めの	41	9	10	90
	4 その他	37	9	9	100
	合計	399	96	100	
欠損値	9	14	3		
	合計	413	100		

表 5 - 1 1 「仕事の程度」

Q31 仕事の程度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 働いていない	279	67.6	70.3	70.3
	2 月1～週2回	46	11.1	11.6	81.9
	3 週3～4回	25	6.1	6.3	88.2
	4 ほぼ毎日	36	8.7	9.1	97.2
	5 その他	11	2.7	2.8	100.0
	合計	397	96.1	100.0	
欠損値	9	16	3.9		
	合計	413	100.0		

< 巻末資料 4 3 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 1 2 「最終学歴」

Q 3 2 3 2 最 終 学 歴

	度数	ハ ° - セ	有 効 ハ °	累 積 ハ °
有効				
1 新制中学	75	1 8 .	1 9 .	1 9 .
2 新制高等	170	4 1 .	4 3 .	6 2 .
3 新制各種	21	5 .	5 .	6 7 .
4 新制短期学	29	7 .	7 .	7 5 .
5 新制大学	94	2 2 .	2 4 .	9 9 .
6 大学院	3	. 7	. 8	1 0 0 .
合計	392	9 4 .	1 0 0 .	
欠損値				
7 その他	10	2 .		
9	11	2 .		
合計	21	5 .		
合計	413	1 0 0 .		

表 5 - 1 3 「移動の方法」

Q 3 3 移 動 の 方 法

	度数	ハ ° - セ	有 効 ハ ° - セ	累 積 ハ ° - セ
有効				
1 自由に移動	359	86.9	89.5	89.5
2 自分でタクシー利用	15	3.6	3.7	93.3
3 付き添いと一緒	19	4.6	4.7	98.0
4 介護用車で移動	8	1.9	2.0	100.0
合計	401	97.1	100.0	
欠損値				
9	12	2.9		
合計	413	100.0		

表 5 - 1 4 「最長勤務」

Q 3 4 最 長 勤 務

	度数	ハ ° - セ	有 効 ハ ° - セ	累 積 ハ ° - セ
有効				
1 民間管理職等	163	39.5	41.2	41.2
2 民間技能職	49	11.9	12.4	53.5
3 役所勤務	53	12.8	13.4	66.9
4 自営業と家族	63	15.3	15.9	82.8
5 就いたことなし	28	6.8	7.1	89.9
6 その他	40	9.7	10.1	100.0
合計	396	95.9	100.0	
欠損値				
9	17	4.1		
合計	413	100.0		

< 巻末資料 4 4 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 1 5 「自分の判断力」

Q35 自分の判断力

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 解決の判断力あり	306	74.1	75.7	75.7
	2 解決に少し苦勞する	62	15.0	15.3	91.1
	3 解決にかなり努力する	28	6.8	6.9	98.0
	4 解決はほぼ困難である	8	1.9	2.0	100.0
	合計	404	97.8	100.0	
欠損値	9	9	2.2		
合計		413	100.0		

表 5 - 1 6 「食事について」

Q36 食事について

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 自分で料理する	222	53.8	55.4	55.4
	2 たまに料理する	117	28.3	29.2	84.5
	3 料理しない	62	15.0	15.5	100.0
	合計	401	97.1	100.0	
欠損値	9	12	2.9		
合計		413	100.0		

表 5 - 1 7 「聴力」

Q37 聴力

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 普通に聞こえる	322	78.0	79.5	79.5
	2 大きな声は聞こえる	72	17.4	17.8	97.3
	3 かなり大きな声か聞こえない	11	2.7	2.7	100.0
	合計	405	98.1	100.0	
欠損値	9	8	1.9		
合計		413	100.0		

< 巻末資料 4 5 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 1 8 「電話やメール」

電話やメール

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	毎日3回以上	84	20.3	20.9	20.9
	毎日2回以内	97	23.5	24.1	45.0
	週6回まで	126	30.5	31.3	76.4
	月3回まで	66	16.0	16.4	92.8
	ほとんどしない	29	7.0	7.2	100.0
	合計	402	97.3	100.0	
欠損値	9	11	2.7		
合計		413	100.0		

表 5 - 1 9 「外出頻度」

Q39 外出頻度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 毎日1回以上	230	55.7	57.8	57.8
	2 週1~6回まで	139	33.7	34.9	92.7
	3 週1回以下	29	7.0	7.3	100.0
	合計	398	96.4	100.0	
欠損値	9	15	3.6		
合計		413	100.0		

表 5 - 2 0 「収入金額」

収入金額

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	100万円以下	17	4.1	6.4	6.4
	299万円まで	60	14.5	22.6	29.1
	499万円まで	100	24.2	37.7	66.8
	699万円未満	46	11.1	17.4	84.2
	700万円以上	42	10.2	15.8	100.0
	合計	265	64.2	100.0	
欠損値	6	138	33.4		
	9	10	2.4		
	合計	148	35.8		
合計		413	100.0		

< 巻末資料 4 6 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 1 「電話・メールの頻度」と

「現在の健康」のクロス集計

電話やメールと現在の健康のクロス表

		現在の健康					合計	
		非常に悪い	あまり健康でない	普通	ほぼ健康である	とても健康である		
電話やメール	毎日3回以上	度数	0	4	20	33	27	84
		電話やメールの%	.0%	4.8%	23.8%	39.3%	32.1%	100.0%
		現在の健康の%	.0%	7.5%	14.6%	27.0%	37.5%	20.9%
	毎日2回以内	度数	5	13	34	27	18	97
		電話やメールの%	5.2%	13.4%	35.1%	27.8%	18.6%	100.0%
		現在の健康の%	27.8%	24.5%	24.8%	22.1%	25.0%	24.1%
	週6回まで	度数	2	16	51	38	19	126
		電話やメールの%	1.6%	12.7%	40.5%	30.2%	15.1%	100.0%
		現在の健康の%	11.1%	30.2%	37.2%	31.1%	26.4%	31.3%
	月3回まで	度数	4	13	22	21	6	66
		電話やメールの%	6.1%	19.7%	33.3%	31.8%	9.1%	100.0%
		現在の健康の%	22.2%	24.5%	16.1%	17.2%	8.3%	16.4%
ほとんどしない	度数	7	7	10	3	2	29	
	電話やメールの%	24.1%	24.1%	34.5%	10.3%	6.9%	100.0%	
	現在の健康の%	38.9%	13.2%	7.3%	2.5%	2.8%	7.2%	
合計	度数	18	53	137	122	72	402	
	電話やメールの%	4.5%	13.2%	34.1%	30.3%	17.9%	100.0%	
	現在の健康の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

・「現在の健康」と「電話やメールの頻度」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	66.276(a)	16	.000
尤度比	59.408	16	.000
線型と線型による連関有効なケースの数	39.673	1	.000
	402		

a 5セル(20.0%)は期待度数が5未満です。最小期待数は1.30である。

< 巻末資料 47 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 2 「外出頻度」と「電話・メールの頻度」

のクロス集計

電話やメール と 外出頻度 のクロス表

			外出頻度			合計
			毎日1回以上	週1～6回まで	週1回以下	
電話 やメ ール	毎日3回以上	度数	69	13	2	84
		電話やメールの%	82.1%	15.5%	2.4%	100.0%
		外出頻度の%	30.3%	9.4%	6.9%	21.2%
	毎日2回以内	度数	56	26	9	91
		電話やメールの%	61.5%	28.6%	9.9%	100.0%
		外出頻度の%	24.6%	18.7%	31.0%	23.0%
	週6回まで	度数	62	61	3	126
		電話やメールの%	49.2%	48.4%	2.4%	100.0%
		外出頻度の%	27.2%	43.9%	10.3%	31.8%
	月3回まで	度数	27	31	8	66
		電話やメールの%	40.9%	47.0%	12.1%	100.0%
		外出頻度の%	11.8%	22.3%	27.6%	16.7%
ほとんどしない	度数	14	8	7	29	
	電話やメールの%	48.3%	27.6%	24.1%	100.0%	
	外出頻度の%	6.1%	5.8%	24.1%	7.3%	
合計	度数	228	139	29	396	
	電話やメールの%	57.6%	35.1%	7.3%	100.0%	
	外出頻度の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

・「外出頻度」と「電話・メールの頻度」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗 尤度比	55.099(a)	8	.000
	54.000	8	.000
線型と線型による連関 有効なケースの数	28.716 396	1	.000

a 2セル(13.3%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は2.12である。



< 巻末資料 4 8 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 3 「食事について」と「性別」のクロス集計

Q26 26性別 と Q36 36食事について のクロス表

			Q36 36食事について			合計
			1 自分で料理する	2 たまに料理する	3 料理しない	
Q26 26性別	1 女	度数	172	18	6	196
		Q26 26性別の %	87.8%	9.2%	3.1%	100.0%
		Q36 36食事についての %	78.2%	15.4%	9.7%	49.1%
	2 男	度数	48	99	56	203
		Q26 26性別の %	23.6%	48.8%	27.6%	100.0%
		Q36 36食事についての %	21.8%	84.6%	90.3%	50.9%
合計		度数	220	117	62	399
		Q26 26性別の %	55.1%	29.3%	15.5%	100.0%
		Q36 36食事についての %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

・「食事について」と「性別」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗尤度比	166.219(a)	2	.000
	182.300	2	.000
線型と線型による連関有効なケースの数	142.091	1	.000
	399		

a 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度は 30.46 である。

< 巻末資料 49 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 4 「外出頻度」と「食事について」のクロス集計

Q39 外出頻度 と Q36 36 食事について のクロス表

		Q36 36 食事について			合計	
		1 自分で料理する	2 たまに料理する	3 料理しない		
Q39 外出頻度	1 毎日1回以上	度数	135	54	34	223
		Q39 外出頻度の %	60.5%	24.2%	15.2%	100.0%
		Q36 36 食事についての %	62.8%	47.8%	57.6%	57.6%
		総和の %	34.9%	14.0%	8.8%	57.6%
	2 週1~6回まで	度数	76	43	19	138
		Q39 外出頻度の %	55.1%	31.2%	13.8%	100.0%
		Q36 36 食事についての %	35.3%	38.1%	32.2%	35.7%
		総和の %	19.6%	11.1%	4.9%	35.7%
	3 週1回以下	度数	4	16	6	26
		Q39 外出頻度の %	15.4%	61.5%	23.1%	100.0%
		Q36 36 食事についての %	1.9%	14.2%	10.2%	6.7%
		総和の %	1.0%	4.1%	1.6%	6.7%
合計	度数	215	113	59	387	
	Q39 外出頻度の %	55.6%	29.2%	15.2%	100.0%	
	Q36 36 食事についての %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	総和の %	55.6%	29.2%	15.2%	100.0%	

・ 外出頻度と食事

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗尤度比	21.189(a)	4	.000
	21.930	4	.000
線型と線型による連関有効なケースの数	6.841 387	1	.009

a 1 セル (11.1%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度は 3.96 である。

< 巻末資料 50 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 5 「収入金額」と「最長勤務」のクロス集計

Q40 収入金額と Q34 最長勤務のクロス表

			Q34 最長勤務						合計
			1 民間管理職等	2 民間技能職	3 役所勤務	4 自営業と家族	5 就いたことなし	6 その他	
Q40 収入金額	1 100万円以下	度数	10	1	1	4	0	1	17
		Q40 収入金額の%	58.8%	5.9%	5.9%	23.5%	.0%	5.9%	100.0%
		Q34 最長勤務の%	7.9%	4.0%	3.1%	10.8%	.0%	4.3%	6.6%
2 299万円まで	度数	16	12	7	11	1	8	55	
	Q40 収入金額の%	29.1%	21.8%	12.7%	20.0%	1.8%	14.5%	100.0%	
	Q34 最長勤務の%	12.7%	48.0%	21.9%	29.7%	7.7%	34.8%	21.5%	
3 499万円まで	度数	49	10	16	8	6	9	98	
	Q40 収入金額の%	50.0%	10.2%	16.3%	8.2%	6.1%	9.2%	100.0%	
	Q34 最長勤務の%	38.9%	40.0%	50.0%	21.6%	46.2%	39.1%	38.3%	
4 699万円未満	度数	25	2	6	9	2	2	46	
	Q40 収入金額の%	54.3%	4.3%	13.0%	19.6%	4.3%	4.3%	100.0%	
	Q34 最長勤務の%	19.8%	8.0%	18.8%	24.3%	15.4%	8.7%	18.0%	
5 700万円以上	度数	26	0	2	5	4	3	40	
	Q40 収入金額の%	65.0%	.0%	5.0%	12.5%	10.0%	7.5%	100.0%	
	Q34 最長勤務の%	20.6%	.0%	6.3%	13.5%	30.8%	13.0%	15.6%	
合計	度数	126	25	32	37	13	23	256	
	Q40 収入金額の%	49.2%	9.8%	12.5%	14.5%	5.1%	9.0%	100.0%	
	Q34 最長勤務の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

・「収入金額」と「最長勤務」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗尤度比	37.656(a)	20	.010
線型と線型による連関有効なケースの数	41.921	20	.003
	1.455	1	.228
	256	699	

a 14 セル (46.7%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .86 である。

< 巻末資料 5 1 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 6 「収入金額」と「収入の仕事の頻度」のクロス集計

Q31 仕事の程度と Q40 収入金額のクロス表

		Q40 収入金額					合計	
		1 100万円以下	2 299万円まで	3 499万円まで	4 699万円未満	5 700万円以上		
Q31 仕事の程度	1 働いていない	度数	12	42	79	26	15	174
		Q31 仕事の程度の%	6.9%	24.1%	45.4%	14.9%	8.6%	100.0%
		Q40 収入金額の%	70.6%	75.0%	80.6%	57.8%	36.6%	67.7%
		2 月1～週2回	度数	2	9	7	6	11
		Q31 仕事の程度の%	5.7%	25.7%	20.0%	17.1%	31.4%	100.0%
		Q40 収入金額の%	11.8%	16.1%	7.1%	13.3%	26.8%	13.6%
	3 週3～4回	度数	2	4	5	5	4	20
		Q31 仕事の程度の%	10.0%	20.0%	25.0%	25.0%	20.0%	100.0%
		Q40 収入金額の%	11.8%	7.1%	5.1%	11.1%	9.8%	7.8%
		4 ほぼ毎日	度数	1	0	2	8	11
	Q31 仕事の程度の%		4.5%	.0%	9.1%	36.4%	50.0%	100.0%
		Q40 収入金額の%	5.9%	.0%	2.0%	17.8%	26.8%	8.6%
5 その他		度数	0	1	5	0	0	6
	Q31 仕事の程度の%	.0%	16.7%	83.3%	.0%	.0%	100.0%	
	Q40 収入金額の%	.0%	1.8%	5.1%	.0%	.0%	2.3%	
	合計	度数	17	56	98	45	41	257
Q31 仕事の程度の%		6.6%	21.8%	38.1%	17.5%	16.0%	100.0%	
	Q40 収入金額の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

「収入金額」と「収入の仕事の頻度」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗尤度比	56.029(a)	16	.000
線型と線型による連関	58.220	16	.000
有効なケースの数	17.016	1	.000
	257	699万	

a 14 セル (56.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .40 である。

< 巻末資料 5 2 > 第 5 章 適用 本調査

表 5 - 2 7 「収入金額」と「最終学歴」のクロス集計

Q32 最終学歴 と Q40 収入金額 のクロス表

	Q40 収入金額					合計		
	1 100万円以下	2 299万円まで	3 499万円まで	4 699万円未満	5 700万円以上			
Q32 最終学歴	1 新制中学校	度数	9	12	11	4	1	37
		Q32 最終学歴の%	24.3%	32.4%	29.7%	10.8%	2.7%	100.0%
		Q40 収入金額の%	52.9%	21.4%	11.2%	8.9%	2.4%	14.4%
2 新制高等学校		度数	6	31	46	13	12	108
		Q32 最終学歴の%	5.6%	28.7%	42.6%	12.0%	11.1%	100.0%
		Q40 収入金額の%	35.3%	55.4%	46.9%	28.9%	29.3%	42.0%
3 新制各種専門学校		度数	1	3	7	2	2	15
		Q32 最終学歴の%	6.7%	20.0%	46.7%	13.3%	13.3%	100.0%
		Q40 収入金額の%	5.9%	5.4%	7.1%	4.4%	4.9%	5.8%
4 新制短期大学		度数	1	3	8	4	3	19
		Q32 最終学歴の%	5.3%	15.8%	42.1%	21.1%	15.8%	100.0%
		Q40 収入金額の%	5.9%	5.4%	8.2%	8.9%	7.3%	7.4%
5 新制大学・大学院		度数	0	7	26	22	23	78
		Q32 最終学歴の%	.0%	9.0%	33.3%	28.2%	29.5%	100.0%
		Q40 収入金額の%	.0%	12.5%	26.5%	48.9%	56.1%	30.4%
合計		度数	17	56	98	45	41	257
		Q32 最終学歴の%	6.6%	21.8%	38.1%	17.5%	16.0%	100.0%
		Q40 収入金額の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

・「収入金額」と「最終学歴」

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	58.387(a)	16	.000
尤度比	57.794	16	.000
線型と線型による連関有効なケースの数	44.104	1	.000
	257		

a 9 セル (36.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .99 である。

< 巻末資料 5 3 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 8 - 1 A 自己実現尺度 17項目の因子分析結果

(1) 17項目 6 因子(バリマックス)

回転後の成分行列(a)

		成分					
		1	2	3	4	5	6
Q21	将来の生活	.748	.234	.298	.165	.121	.104
Q17	自分の可能性	.667	.138	.255	.078	.246	.381
Q16	生きる意味	.614	.176	.022	.232	.440	.083
Q23	やりたいこと	.519	.261	.301	.490	.006	.071
Q7	一緒に過ごす	.152	.777	.220	.168	.166	.086
Q5	生活の楽しみ	.427	.664	.177	.218	.205	.076
Q1	趣味の程度	.203	.617	.279	.174	-.058	.447
Q12	優れた能力	.210	.165	.753	.141	.058	.152
Q8	何か手伝い	.121	.235	.647	.162	.355	.127
Q10	能力を生かす	.354	.333	.587	.209	.127	.173
Q18	自分で処理	.221	.080	.050	.776	.140	.260
Q15	自由にできる	.079	.256	.248	.748	.098	.076
Q20	自分の意志	.452	.225	.424	.461	.111	-.258
Q9	幸福な生活	.230	.089	.169	.071	.779	.072
Q6	人との出会い	.100	.580	.167	.160	.597	.059
Q2	現在の健康	.208	.384	.150	.344	.053	.592
Q3	世に役立つ	.161	.064	.443	.154	.422	.565

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 12 回の反復で回転が収束した。

(2) 17項目 5 因子(バリマックス)

回転後の成分行列(a)

		成分				
		1	2	3	4	5
Q20	自分の意志	.709	.172	.190	.260	.110
Q21	将来の生活	.690	.308	.204	.136	.264
Q23	やりたいこと	.609	.241	.234	.427	.077
Q17	自分の可能性	.450	.438	.136	.168	.405
Q12	優れた能力	.356	.694	.180	.089	.013
Q3	世に役立つ	.003	.675	.115	.291	.436
Q8	何か手伝い	.239	.593	.263	.107	.281
Q10	能力を生かす	.438	.559	.338	.174	.132
Q7	一緒に過ごす	.227	.182	.779	.146	.146
Q5	生活の楽しみ	.442	.154	.650	.189	.259
Q1	趣味の程度	.145	.427	.631	.287	-.017
Q6	人との出会い	.115	.148	.602	.131	.552
Q18	自分で処理	.251	.104	.080	.797	.177
Q15	自由にできる	.283	.156	.256	.679	.049
Q2	現在の健康	.059	.396	.408	.513	.123
Q9	幸福な生活	.135	.205	.116	.054	.778
Q16	生きる意味	.486	.070	.160	.220	.567

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 7 回の反復で回転が収束した。

< 巻末資料 5 4 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 2 9 - 1 B 自己実現尺度 17項目の因子分析結果

( 3 ) 17項目 4 因子(バリマックス)

回転後の成分行列(a)

	成分			
	1	2	3	4
Q23 やりたいこと	<u>.703</u>	.299	.222	.174
Q18 自分で処理	<u>.703</u>	.120	.210	.092
Q20 自分の意志	<u>.662</u>	.248	.124	.266
Q15 自由にできる	<u>.651</u>	.167	.348	.012
Q21 将来の生活	<u>.538</u>	.389	.128	.418
Q12 優れた能力	.265	<u>.723</u>	.168	.064
Q3 世に役立つ	.113	<u>.675</u>	.222	.313
Q8 何か手伝い	.174	<u>.617</u>	.275	.289
Q10 能力を生かす	.378	<u>.597</u>	.319	.204
Q17 自分の可能性	.366	<u>.496</u>	.123	.458
Q7 一緒に過ごす	.228	.185	<u>.753</u>	.218
Q1 趣味の程度	.267	.413	<u>.663</u>	-.013
Q6 人との出会い	.102	.159	<u>.610</u>	.556
Q5 生活の楽しみ	.403	.190	<u>.601</u>	.372
Q2 現在の健康	.352	.379	<u>.514</u>	.038
Q9 幸福な生活	.043	.244	.133	<u>.748</u>
Q16 生きる意味	.438	.139	.135	<u>.638</u>

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 9 回の反復で回転が収束した。

< 巻末資料 5 5 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 3 0 最長勤務と性別のクロス集計表

最長勤務と性別のクロス表

		性別		合計	
		女	男		
最長勤務	民間管理職等	度数	<b>54</b>	<b>109</b>	<b>163</b>
		最長勤務の%	33.1%	66.9%	100.0%
		性別の%	28.4%	53.4%	41.4%
		総和の%	13.7%	27.7%	41.4%
	民間技能職	度数	<b>27</b>	<b>22</b>	<b>49</b>
		最長勤務の%	55.1%	44.9%	100.0%
		性別の%	14.2%	10.8%	12.4%
		総和の%	6.9%	5.6%	12.4%
	役所勤務	度数	<b>16</b>	<b>35</b>	<b>51</b>
		最長勤務の%	31.4%	68.6%	100.0%
		性別の%	8.4%	17.2%	12.9%
		総和の%	4.1%	8.9%	12.9%
	自営業と家族	度数	<b>36</b>	<b>27</b>	<b>63</b>
		最長勤務の%	57.1%	42.9%	100.0%
		性別の%	18.9%	13.2%	16.0%
		総和の%	9.1%	6.9%	16.0%
	就いたことなし	度数	<b>28</b>	<b>0</b>	<b>28</b>
		最長勤務の%	100.0%	.0%	100.0%
		性別の%	14.7%	.0%	7.1%
		総和の%	7.1%	.0%	7.1%
	その他	度数	<b>29</b>	<b>11</b>	<b>40</b>
		最長勤務の%	72.5%	27.5%	100.0%
		性別の%	15.3%	5.4%	10.2%
		総和の%	7.4%	2.8%	10.2%
合計		度数	<b>190</b>	<b>204</b>	<b>394</b>
		最長勤務の%	48.2%	51.8%	100.0%
		性別の%	100.0%	100.0%	100.0%
		総和の%	48.2%	51.8%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	63.115(a)	5	.000
尤度比	74.698	5	.000
線型と線型による連関	40.346	1	.000
有効なケースの数	394		

a 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 13.50 である。



< 巻末資料 5 6 > 第 5 章適用 本調査

表 5 - 3 1 平成 1 2 年国勢調査他

1 世帯別年間収入

表 3-30 65 歳以上の夫婦のみの世帯年間収入  
(万円)

区分	収入階級	人数	割合%
1	200	663	6.6%
2	300	1,368	13.7%
3	400	3,112	31.2%
4	500	2,120	21.2%
5	600	1,041	10.4%
6	700	910	9.1%
7	800	323	3.2%
8	1000	217	2.2%
9	1250	61	0.6%
10	1500 以上	183	1.8%
合計		10,000	100%

出展：総務省統計局編集「平成16年全国消費実態調査報告第7巻 高齢者世帯編」  
平成19年3月発行 総務省統計局 P368

2 学歴

表 3-31 70~74 歳の最終卒業学校  
(万円)

区分	最終学校	人数	割合%
1	小学校・中学校	1,201,656	46.8%
2	高校・旧制中学校	961,722	37.5%
3	短大・高専	150,786	5.9%
4	大学・大学院	252,680	9.8%
合計		2,566,844	100%

出展：編集 総務省統計局「平成12年国勢調査 第3巻 その1 全国編」  
平成12年発行 総務省統計局 P284

3 70~74 歳就業上の地位、就業者数 女性

表 3-30 70~74 歳就業上の地位、就業者数 女性  
(万円)

区分	地位、形態	人数	割合%
1	役員	46,356	11.4%
2	雇人のある業主	18,522	4.5%
3	雇人のない業主	91,516	22.5%
4	家族従業者	241,884	59.4%
5	家庭内職者	9,027	2.2%
	総数	407,305	100%

出展：編集 総務省統計局「平成12年国勢調査第3巻 その1 全国編」  
平成12年発行 総務省統計局 P45

図 5 - 1 - 1 自己実現 24 質問項目の本調査での構成概念の枠組み (仮説)

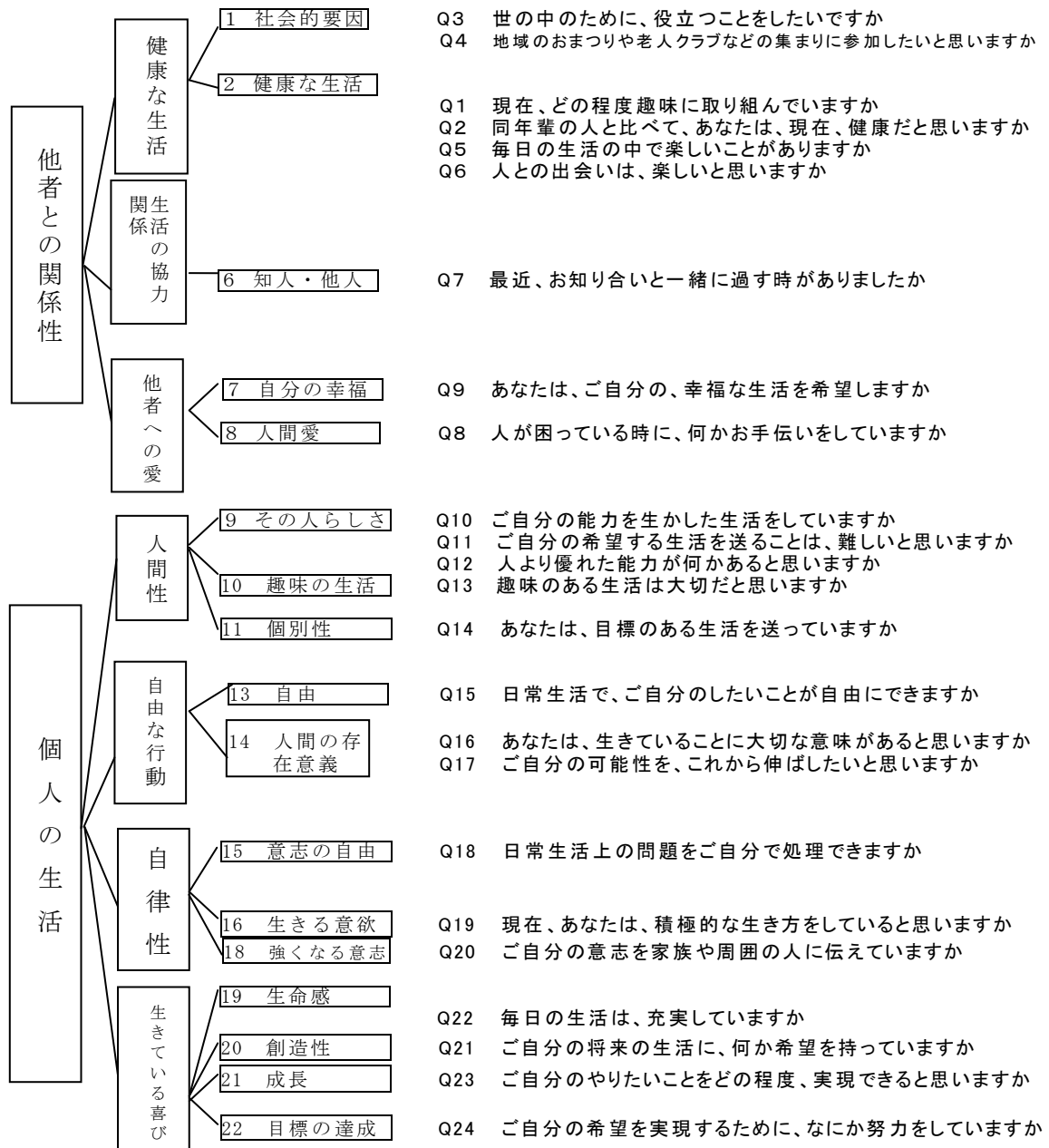
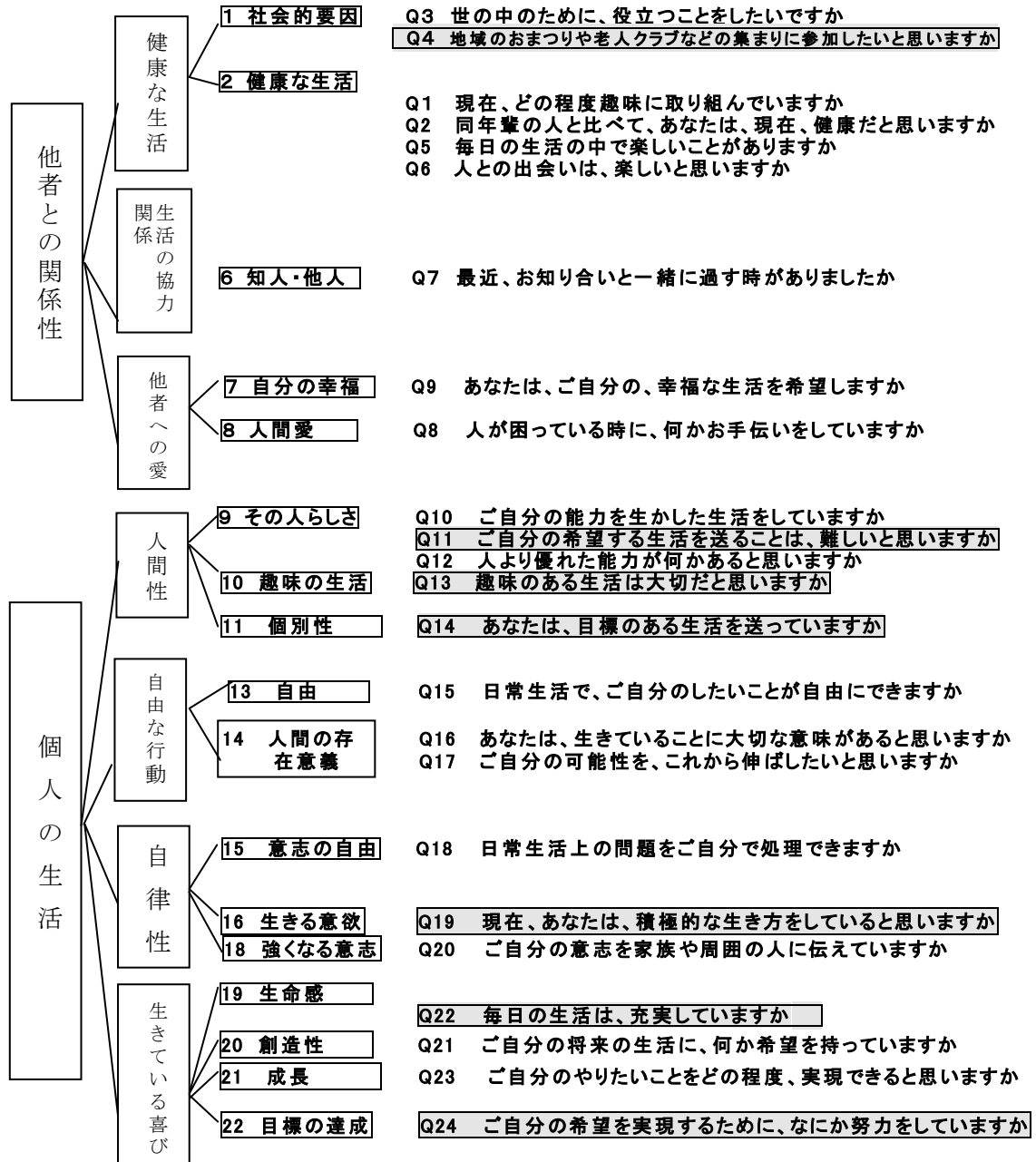
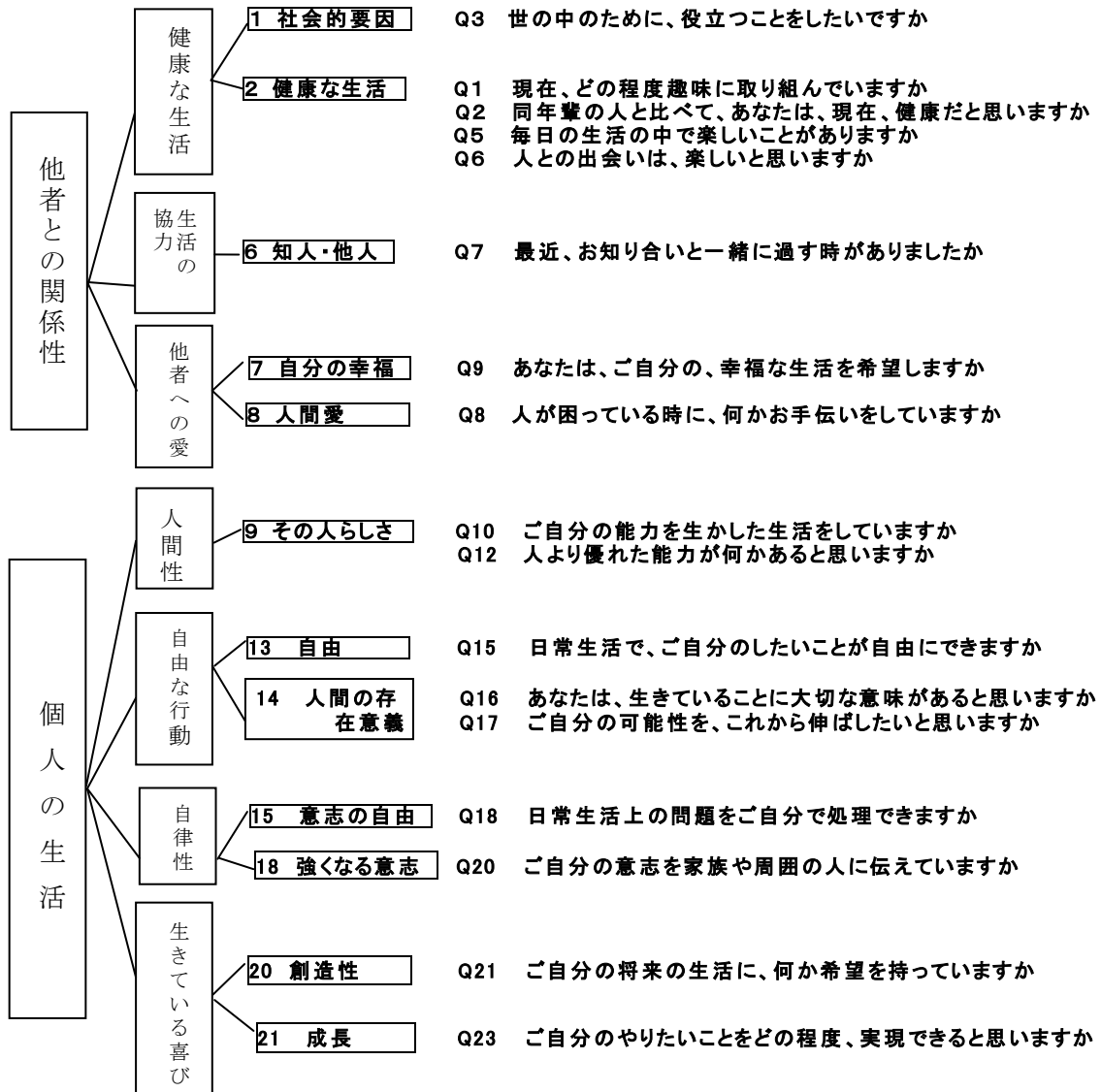


図 5-10-1 自己実現構成概念削除項目説明図 (17 尺度項目)



(表3-2-1 本調査自己実現 24 質問項目の構成概念図を改変)

図 5-10-2 自己実現構成概念の枠組み(仮説)(17尺度項目)



<巻末資料60> 第6章適用 本調査

図6-1-1 自己実現構成概念図（仮説） 17尺度項目

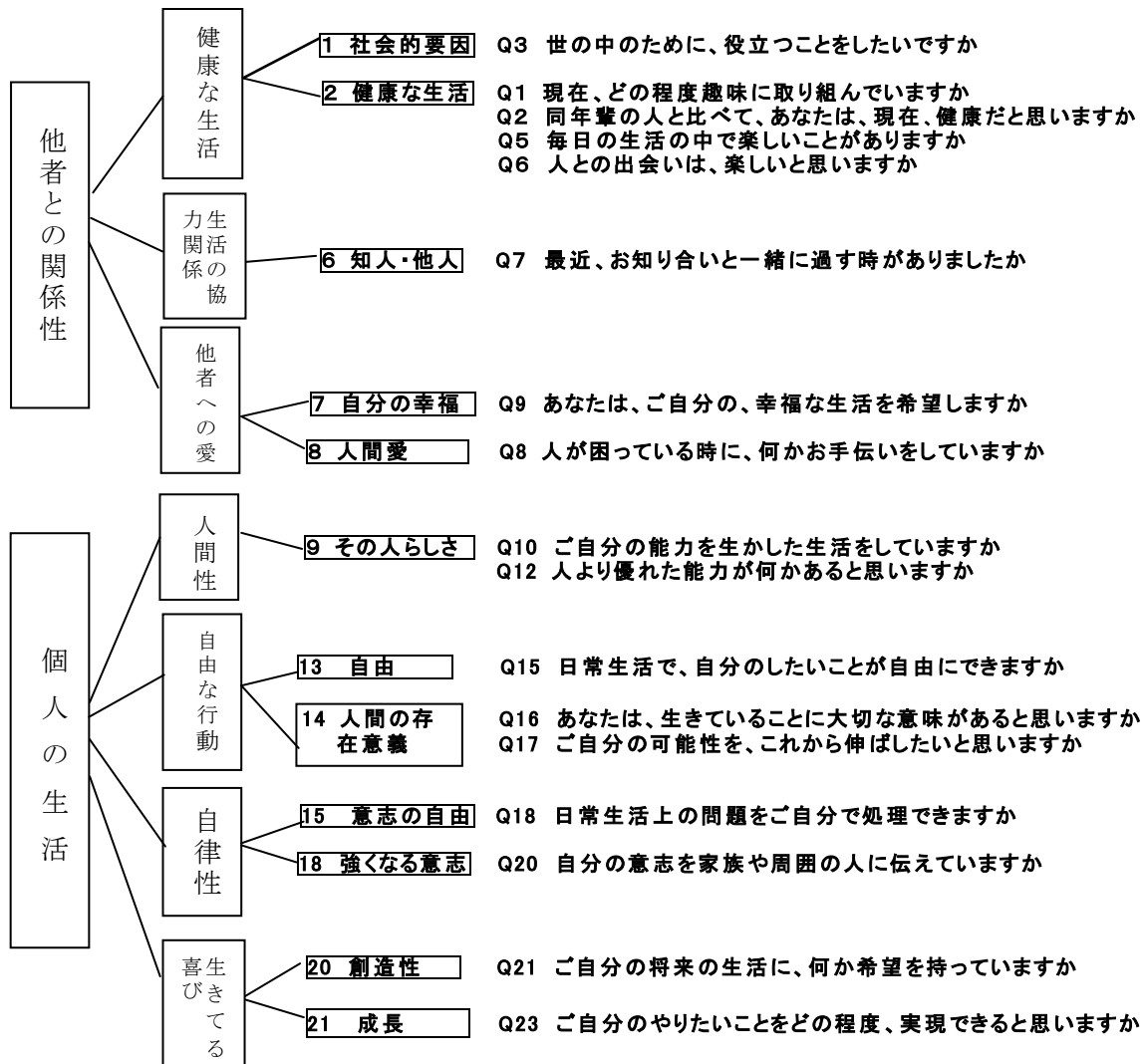
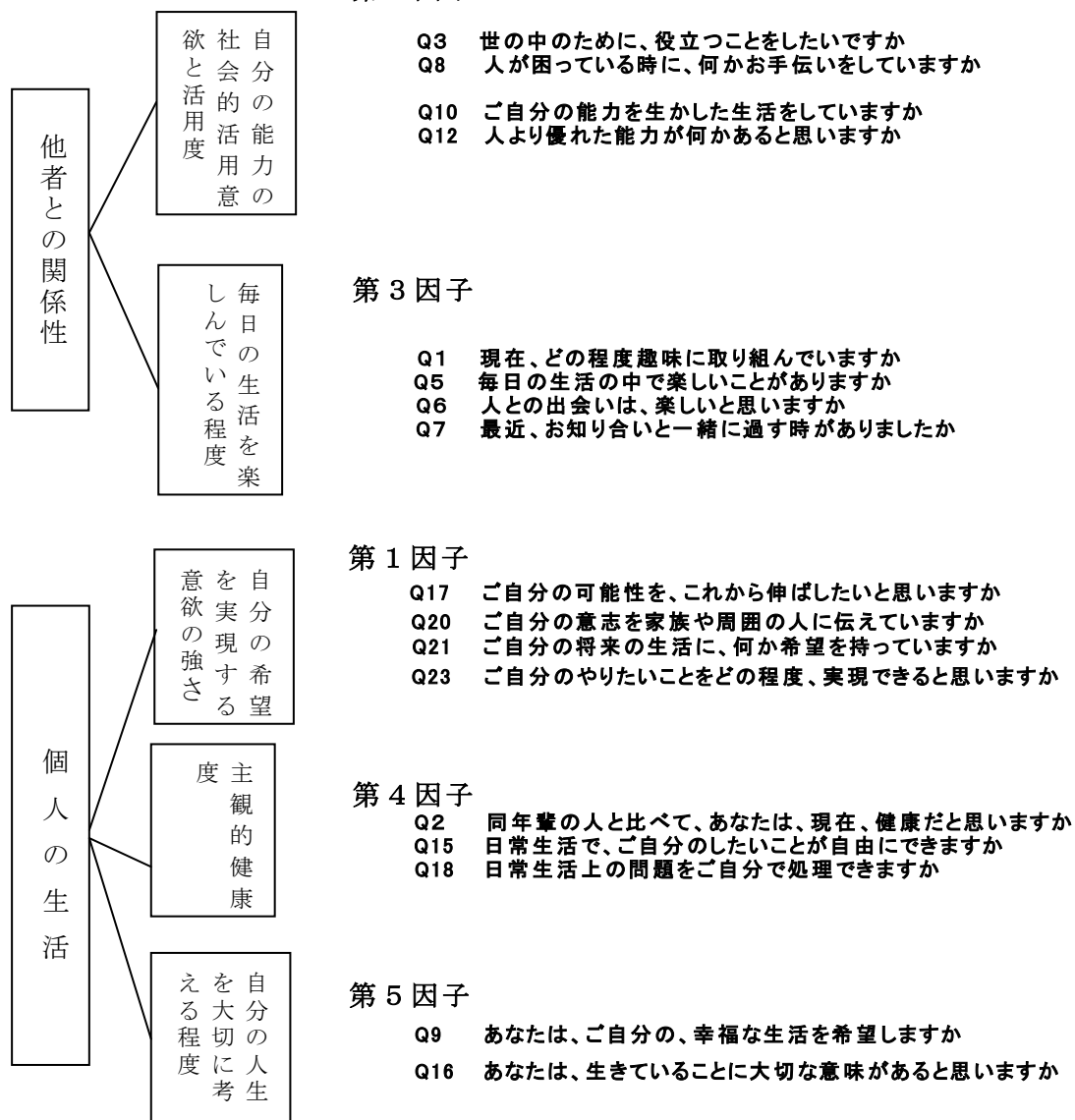


図 6 - 5 - 1 探索的因子分析による自己実現尺度の因子名と構成概念

( 5 因子モデル、17 観測変数 )



注) 2つの上位概念と5つの下位概念の関係は「仮説」である。

表 1 5 因子 主成分分析（バリマックス回転）の因子寄与  
説明された分散の合計

成分	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	2.611	15.357	15.357
2	1.087	6.392	52.256	2.476	14.567	29.924
3	.955	5.618	57.874	2.447	14.397	44.321
4	.843	4.957	62.830	1.998	11.753	56.073
5	.760	4.468	67.299	1.908	11.225	67.299
6	.707	4.159	71.458			
7	.637	3.749	75.207			
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

因子抽出法: 主成分分析

5 因子 主成分分析（バリマックス回転）因子負荷量  
回転後の成分行列(a)

	成分				
	1	2	3	4	5
Q20 自分の意志	.709	.172	.190	.260	.110
Q21 将来の生活	.690	.308	.204	.136	.264
Q23 やりたいこと	.609	.241	.234	.427	.077
Q17 自分の可能性	.450	.438	.136	.168	.405
Q12 優れた能力	.356	.694	.180	.089	.013
Q3 世に役立つ	.003	.675	.115	.291	.436
Q8 何か手伝い	.239	.593	.263	.107	.281
Q10 能力を生かす	.438	.559	.338	.174	.132
Q7 一緒に過ごす	.227	.182	.779	.146	.146
Q5 生活の楽しみ	.442	.154	.650	.189	.259
Q1 趣味の程度	.145	.427	.631	.287	-.017
Q6 人との出会い	.115	.148	.602	.131	.552
Q18 自分で処理	.251	.104	.080	.797	.177
Q15 自由にできる	.283	.156	.256	.679	.049
Q2 現在の健康	.059	.396	.408	.513	.123
Q9 幸福な生活	.135	.205	.116	.054	.778
Q16 生きる意味	.486	.070	.160	.220	.567

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 7 回の反復で回転が収束した。

表2 5因子 主因子法 バリマックス法  
説明された分散の合計

因子	初期の固有値			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	2.102	12.364	12.364
2	1.087	6.392	52.256	2.059	12.111	24.476
3	.955	5.618	57.874	1.895	11.145	35.621
4	.843	4.957	62.830	1.620	9.527	45.148
5	.760	4.468	67.299	1.499	8.820	53.968
6	.707	4.159	71.458			
7	.637	3.749	75.207			
8	.616	3.624	78.831			
9	.572	3.366	82.197			
10	.472	2.775	84.972			
11	.437	2.571	87.543			
12	.412	2.422	89.965			
13	.382	2.247	92.212			
14	.370	2.175	94.387			
15	.338	1.989	96.376			
16	.327	1.926	98.302			
17	.289	1.698	100.000			

因子抽出法: 主因子法

5因子 主因子法 バリマックス法  
回転後の因子行列(a)

	因子				
	1	2	3	4	5
Q1 趣味の程度	.639	.174	.258	.278	.105
Q7 一緒に過ごす	.581	.177	.233	.131	.347
Q5 生活の楽しみ	.542	.386	.274	.077	.406
Q10 能力を生かす	.437	.408	.262	.391	.147
Q2 現在の健康	.419	.178	.356	.308	.141
Q21 将来の生活	.248	.670	.243	.233	.204
Q17 自分の可能性	.201	.490	.204	.392	.271
Q20 自分の意志	.214	.462	.421	.138	.179
Q16 生きる意味	.122	.439	.258	.193	.395
Q15 自由にできる	.265	.153	.618	.160	.140
Q18 自分で処理	.159	.202	.587	.174	.147
Q23 やりたいこと	.286	.460	.512	.176	.120
Q3 世に役立つ	.181	.160	.209	.660	.287
Q8 何か手伝い	.294	.267	.198	.439	.269
Q12 優れた能力	.331	.309	.215	.398	.088
Q6 人との出会い	.350	.125	.183	.212	.663
Q9 幸福な生活	.070	.265	.090	.298	.449

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 14 回の反復で回転が収束した。



表3 5因子 主因子法 プロマックス回転

説明された分散の合計

因子	初期の固有値			回転後の負荷量平方和(a)
	合計	分散の %	累積 %	合計
1	7.797	45.864	45.864	5.909
2	1.087	6.392	52.256	6.190
3	.955	5.618	57.874	5.058
4	.843	4.957	62.830	4.580
5	.760	4.468	67.299	3.766
6	.707	4.159	71.458	
7	.637	3.749	75.207	
8	.616	3.624	78.831	
9	.572	3.366	82.197	
10	.472	2.775	84.972	
11	.437	2.571	87.543	
12	.412	2.422	89.965	
13	.382	2.247	92.212	
14	.370	2.175	94.387	
15	.338	1.989	96.376	
16	.327	1.926	98.302	
17	.289	1.698	100.000	

因子抽出法: 主因子法

a 因子が相関する場合は、負荷量平方和を加算しても総分散を得ることはできません。

パターン行列(a)

		因子				
		1	2	3	4	5
Q1	趣味の程度	.785	-.068	.002	.123	-.092
Q7	一緒に過ごす	.670	-.044	.001	-.068	.230
Q5	生活の楽しみ	.532	.304	-.007	-.205	.258
Q2	現在の健康	.394	-.042	.222	.200	-.020
Q10	能力を生かす	.372	.337	-.024	.238	-.079
Q21	将来の生活	.026	.861	-.066	-.010	-.021
Q17	自分の可能性	-.030	.535	-.048	.267	.098
Q20	自分の意志	-.005	.505	.297	-.073	.006
Q16	生きる意味	-.151	.488	.102	.031	.296
Q23	やりたいこと	.085	.454	.394	-.046	-.089
Q15	自由にできる	.099	-.075	.681	.027	.012
Q18	自分で処理	-.074	.041	.658	.057	.027
Q3	世に役立つ	-.025	-.078	.070	.726	.171
Q8	何か手伝い	.171	.131	-.008	.379	.129
Q12	優れた能力	.264	.228	-.007	.312	-.102
Q6	人との出会い	.248	-.126	.028	.095	.660
Q9	幸福な生活	-.160	.229	-.056	.250	.415

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a 14 回の反復で回転が収束した。

構造行列

		因子				
		1	2	3	4	5
Q5	生活の楽しみ	.764	.694	.585	.426	.628
Q1	趣味の程度	.761	.525	.529	.514	.356
Q7	一緒に過ごす	.725	.524	.505	.411	.544
Q10	能力を生かす	.698	.698	.564	.636	.411
Q2	現在の健康	.630	.516	.566	.519	.359
Q21	将来の生活	.579	.814	.540	.522	.445
Q23	やりたいこと	.610	.711	.709	.469	.367
Q17	自分の可能性	.535	.708	.489	.614	.480
Q20	自分の意志	.525	.666	.612	.412	.387
Q16	生きる意味	.452	.638	.484	.442	.546
Q15	自由にできる	.546	.499	.718	.403	.335
Q18	自分で処理	.466	.501	.677	.397	.323
Q3	世に役立つ	.501	.522	.455	.773	.465
Q8	何か手伝い	.560	.569	.461	.621	.462
Q12	優れた能力	.556	.558	.458	.572	.307
Q6	人との出会い	.597	.506	.453	.470	.780
Q9	幸福な生活	.343	.471	.305	.455	.541

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5
1	1.000	.718	.701	.605	.549
2	.718	1.000	.701	.651	.564
3	.701	.701	1.000	.527	.439
4	.605	.651	.527	1.000	.442
5	.549	.564	.439	.442	1.000

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表 4 7 因子 主成分分析 (バリマックス回転) の因子寄与  
説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	7.797	45.864	45.864	2.405	14.147	14.147
2	1.087	6.392	52.256	1.087	6.392	52.256	1.951	11.476	25.623
3	.955	5.618	57.874	.955	5.618	57.874	1.738	10.226	35.849
4	.843	4.957	62.830	.843	4.957	62.830	1.699	9.993	45.842
5	.760	4.468	67.299	.760	4.468	67.299	1.686	9.915	55.757
6	.707	4.159	71.458	.707	4.159	71.458	1.657	9.750	65.507
7	.637	3.749	75.207	.637	3.749	75.207	1.649	9.700	75.207
8	.616	3.624	78.831						
9	.572	3.366	82.197						
10	.472	2.775	84.972						
11	.437	2.571	87.543						
12	.412	2.422	89.965						
13	.382	2.247	92.212						
14	.370	2.175	94.387						
15	.338	1.989	96.376						
16	.327	1.926	98.302						
17	.289	1.698	100.000						

因子抽出法: 主成分分析

7 因子 主成分分析 (バリマックス回転) の因子負荷量

回転後の成分行列(a)

	成分						
	1	2	3	4	5	6	7
Q7 一緒に過ごす	.776	.165	.095	.146	.200	.187	.096
Q5 生活の楽しみ	.666	.305	.339	.172	.143	.193	.111
Q1 趣味の程度	.635	.091	.148	.173	.274	-.058	.440
Q20 自分の意志	.175	.814	.116	.244	.161	.181	.036
Q23 やりたいこと	.245	.604	.280	.350	.145	.017	.246
Q16 生きる意味	.212	.094	.710	.293	.151	.336	-.036
Q17 自分の可能性	.158	.249	.625	.061	.228	.184	.417
Q21 将来の生活	.229	.551	.556	.051	.182	.098	.253
Q18 自分で処理	.104	.135	.241	.799	.094	.084	.193
Q15 自由にできる	.254	.286	-.005	.709	.209	.114	.104
Q12 優れた能力	.184	.123	.183	.173	.848	.092	.109
Q10 能力を生かす	.339	.287	.259	.181	.578	.150	.213
Q9 幸福な生活	.081	.084	.300	.080	.097	.758	.109
Q6 人との出会い	.562	.156	.091	.131	.057	.617	.123
Q8 何か手伝い	.200	.391	-.043	.057	.436	.442	.333
Q3 世に役立つ	.060	.120	.135	.132	.291	.435	.674
Q2 現在の健康	.392	.154	.135	.308	.036	.039	.659

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法  
a 15 回の反復で回転が収束した。

表 5 6 因子 主成分分析 (バリマックス回転) の因子寄与

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	7.797	45.864	45.864	2.473	14.549	14.549
2	1.087	6.392	52.256	1.087	6.392	52.256	2.409	14.173	28.722
3	.955	5.618	57.874	.955	5.618	57.874	2.252	13.246	41.968
4	.843	4.957	62.830	.843	4.957	62.830	2.070	12.179	54.147
5	.760	4.468	67.299	.760	4.468	67.299	1.674	9.847	63.994
6	.707	4.159	71.458	.707	4.159	71.458	1.269	7.464	71.458
7	.637	3.749	75.207						
8	.616	3.624	78.831						
9	.572	3.366	82.197						
10	.472	2.775	84.972						
11	.437	2.571	87.543						
12	.412	2.422	89.965						
13	.382	2.247	92.212						
14	.370	2.175	94.387						
15	.338	1.989	96.376						
16	.327	1.926	98.302						
17	.289	1.698	100.00						

因子抽出法: 主成分分析

6 因子 バリマックス回転 因子負荷量

回転後の成分行列(a)

		成分					
		1	2	3	4	5	6
Q21	将来の生活	.748	.234	.298	.165	.121	.104
Q17	自分の可能性	.667	.138	.255	.078	.246	.381
Q16	生きる意味	.614	.176	.022	.232	.440	.083
Q23	やりたいこと	.519	.261	.301	.490	.006	.071
Q7	一緒に過ごす	.152	.777	.220	.168	.166	.086
Q5	生活の楽しみ	.427	.664	.177	.218	.205	.076
Q1	趣味の程度	.203	.617	.279	.174	-.058	.447
Q12	優れた能力	.210	.165	.753	.141	.058	.152
Q8	何か手伝い	.121	.235	.647	.162	.355	.127
Q10	能力を生かす	.354	.333	.587	.209	.127	.173
Q18	自分で処理	.221	.080	.050	.776	.140	.260
Q15	自由にできる	.079	.256	.248	.748	.098	.076
Q20	自分の意志	.452	.225	.424	.461	.111	-.258
Q9	幸福な生活	.230	.089	.169	.071	.779	.072
Q6	人との出会い	.100	.580	.167	.160	.597	.059
Q2	現在の健康	.208	.384	.150	.344	.053	.592
Q3	世に役立つ	.161	.064	.443	.154	.422	.565

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 12 回の反復で回転が収束した。

表 6 4 因子 主成分分析 (バリマックス回転) の因子寄与

説明された分散の合計

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	7.797	45.864	45.864	7.797	45.864	45.864	3.143	18.487	18.487
2	1.087	6.392	52.256	1.087	6.392	52.256	2.796	16.449	34.935
3	.955	5.618	57.874	.955	5.618	57.874	2.557	15.040	49.976
4	.843	4.957	62.830	.843	4.957	62.830	2.185	12.855	62.830
5	.760	4.468	67.299						
6	.707	4.159	71.458						
7	.637	3.749	75.207						
8	.616	3.624	78.831						
9	.572	3.366	82.197						
10	.472	2.775	84.972						
11	.437	2.571	87.543						
12	.412	2.422	89.965						
13	.382	2.247	92.212						
14	.370	2.175	94.387						
15	.338	1.989	96.376						
16	.327	1.926	98.302						
17	.289	1.698	100.000						

因子抽出法: 主成分分析

4 因子 主成分分析 (バリマックス回転) の因子負荷量

回転後の成分行列(a)

	成分			
	1	2	3	4
Q23 やりたいこと	.703	.299	.222	.174
Q18 自分で処理	.703	.120	.210	.092
Q20 自分の意志	.662	.248	.124	.266
Q15 自由にできる	.651	.167	.348	.012
Q21 将来の生活	.538	.389	.128	.418
Q12 優れた能力	.265	.723	.168	.064
Q3 世に役立つ	.113	.675	.222	.313
Q8 何か手伝い	.174	.617	.275	.289
Q10 能力を生かす	.378	.597	.319	.204
Q17 自分の可能性	.366	.496	.123	.458
Q7 一緒に過ごす	.228	.185	.753	.218
Q1 趣味の程度	.267	.413	.663	-.013
Q6 人との出会い	.102	.159	.610	.556
Q5 生活の楽しみ	.403	.190	.601	.372
Q2 現在の健康	.352	.379	.514	.038
Q9 幸福な生活	.043	.244	.133	.748
Q16 生きる意味	.438	.139	.135	.638

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

a 9 回の反復で回転が収束した。

表7-4-2 「収入の仕事」基準の多元配置の分散分析結果  
第1ステップ 1要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	2407.430(a)	3	802.477	7.046	.000
切片	335839.083	1	335839.083	2948.639	.000
Q30	2407.430	3	802.477	7.046	.000
誤差	42711.119	375	113.896		
総和	629561.000	379			
修正総和	45118.549	378			

a R2乗 = .053 (調整済みR2乗 = .046)

第2ステップ 2要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	2666.133(a)	4	666.533	5.872	.000
切片	331478.356	1	331478.356	2920.279	.000
Q30	2622.811	3	874.270	7.702	.000
Q26	258.704	1	258.704	2.279	.132
誤差	42452.415	374	113.509		
総和	629561.000	379			
修正総和	45118.549	378			

a R2乗 = .059 (調整済みR2乗 = .049)

第3ステップ 3要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	3142.954(a)	6	523.826	4.630	.000
切片	124825.667	1	124825.667	1103.282	.000
Q30	2443.632	3	814.544	7.199	.000
Q26	324.625	1	324.625	2.869	.091
Q27	474.844	2	237.422	2.098	.124
誤差	41975.060	371	113.140		
総和	627961.000	378			
修正総和	45118.013	377			

a R2乗 = .070 (調整済みR2乗 = .055)

第4ステップ 4要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	3818.982(a)	10	381.898	3.367	.000
切片	107489.138	1	107489.138	947.548	.000
Q30	2371.169	3	790.390	6.968	.000
Q26	495.951	1	495.951	4.372	.037
Q27	407.962	2	203.981	1.798	.167
Q28	578.367	4	144.592	1.275	.280
誤差	40951.588	361	113.439		
総和	619824.000	372			
修正総和	44770.570	371			

a R2乗 = .085 (調整済みR2乗 = .060)

第5ステップ 5要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4166.521(a)	14	297.609	2.617	.001
切片	95756.402	1	95756.402	841.912	.000
Q30	2373.592	3	791.197	6.956	.000
Q26	483.102	1	483.102	4.248	.040
Q27	412.925	2	206.462	1.815	.164
Q28	639.716	4	159.929	1.406	.231
Q29	347.539	4	86.885	.764	.549
誤差	40604.049	357	113.737		
総和	619824.000	372			
修正総和	44770.570	371			

a R2乗 = .093 (調整済みR2乗 = .057)

第6ステップ 6要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4950.870(a)	18	275.048	2.432	.001
切片	79596.578	1	79596.578	703.749	.000
Q30	324.090	3	108.030	.955	.414
Q26	604.979	1	604.979	5.349	.021
Q27	396.635	2	198.317	1.753	.175
Q28	586.200	4	146.550	1.296	.271
Q29	333.016	4	83.254	.736	.568
Q31	784.646	4	196.161	1.734	.142
誤差	39020.746	345	113.104		
総和	605286.000	364			
修正総和	43971.615	363			

a R2乗 = .113 (調整済みR2乗 = .066)

表 5 - 4 - 3 「最終学歴」基準の多元配置の分散分析結果

第1ステップ 1 要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	1824.979(a)	4	456.245	3.996	.003
切片	349830.449	1	349830.449	3063.658	.000
Q32	1824.979	4	456.245	3.996	.003
誤差	41678.319	365	114.187		
総和	614886.000	370			
修正総和	43503.297	369			

a R2乗 = .042 (調整済みR2乗 = .031)

第2ステップ 2 要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	3422.639(a)	7	488.948	4.417	.000
切片	248849.670	1	248849.670	2247.890	.000
Q32	1356.512	4	339.128	3.063	.017
Q30	1478.764	3	492.921	4.453	.004
誤差	39410.512	356	110.704		
総和	604069.000	364			
修正総和	42833.151	363			

a R2乗 = .080 (調整済みR2乗 = .062)

第3ステップ 3 要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4158.509(a)	11	378.046	3.421	.000
切片	160245.496	1	160245.496	1450.267	.000
Q32	1359.283	4	339.821	3.075	.016
Q30	168.306	3	56.102	.508	.677
Q31	728.133	4	182.033	1.647	.162
誤差	38230.857	346	110.494		
総和	594971.000	358			
修正総和	42389.366	357			

a R2乗 = .098 (調整済みR2乗 = .069)



第4ステップ 4要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4302.739(a)	15	286.849	2.565	.001
切片	141526.342	1	141526.342	1265.343	.000
Q32	1236.880	4	309.220	2.765	.028
Q30	218.004	3	72.668	.650	.584
Q31	771.898	4	192.974	1.725	.144
Q29	77.934	4	19.483	.174	.952
誤差	38028.393	340	111.848		
総和	592657.000	356			
修正総和	42331.132	355			

a R2乗 = .102 (調整済みR2乗 = .062)

第5ステップ 5要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4446.666(a)	19	234.035	2.072	.006
切片	125677.985	1	125677.985	1112.822	.000
Q32	1079.440	4	269.860	2.389	.051
Q30	212.156	3	70.719	.626	.599
Q31	745.849	4	186.462	1.651	.161
Q29	208.351	4	52.088	.461	.764
Q28	241.795	4	60.449	.535	.710
誤差	37607.776	333	112.936		
総和	588683.000	353			
修正総和	42054.442	352			

a R2乗 = .106 (調整済みR2乗 = .055)

第6ステップ 6要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4893.391(a)	21	233.019	2.069	.004
切片	71764.904	1	71764.904	637.299	.000
Q32	970.616	4	242.654	2.155	.074
Q30	181.117	3	60.372	.536	.658
Q31	743.357	4	185.839	1.650	.161
Q29	212.428	4	53.107	.472	.757
Q28	194.327	4	48.582	.431	.786
Q27	429.656	2	214.828	1.908	.150
誤差	37160.629	330	112.608		
総和	587083.000	352			
修正総和	42054.020	351			

a R2乗 = .116 (調整済みR2乗 = .060)

第7ステップ 7要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	6199.887(a)	22	281.813	2.586	.000
切片	72497.364	1	72497.364	665.241	.000
Q32	1548.823	4	387.206	3.553	.007
Q30	187.304	3	62.435	.573	.633
Q31	920.667	4	230.167	2.112	.079
Q29	223.967	4	55.992	.514	.726
Q28	275.938	4	68.985	.633	.639
Q27	485.896	2	242.948	2.229	.109
Q26	1306.496	1	1306.496	11.988	.001
誤差	35854.133	329	108.979		
総和	587083.000	352			
修正総和	42054.020	351			

a R2乗 = .147 (調整済みR2乗 = .090)

第8ステップ 8要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	6868.694(a)	27	254.396	2.317	.000
切片	64809.131	1	64809.131	590.254	.000
Q32	1107.975	4	276.994	2.523	.041
Q30	265.649	3	88.550	.806	.491
Q31	1000.573	4	250.143	2.278	.061
Q29	335.110	4	83.777	.763	.550
Q28	280.259	4	70.065	.638	.636
Q27	424.898	2	212.449	1.935	.146
Q26	1019.724	1	1019.724	9.287	.003
Q34	666.037	5	133.207	1.213	.303
誤差	35025.807	319	109.799		
総和	579083.000	347			
修正総和	41894.501	346			

a R2乗 = .164 (調整済みR2乗 = .093)

第9ステップ 9要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	9235.813(a)	25	369.433	3.690	.000
切片	24991.590	1	24991.590	249.645	.000
Q32	914.977	4	228.744	2.285	.060
Q30	99.998	3	33.333	.333	.802
Q31	663.614	4	165.904	1.657	.160
Q29	44.857	4	11.214	.112	.978
Q28	336.827	4	84.207	.841	.500
Q27	245.627	2	122.813	1.227	.295
Q26	1264.633	1	1264.633	12.633	.000
Q33	3167.776	3	1055.925	10.548	.000
誤差	32335.109	323	100.109		
総和	583849.000	349			
修正総和	41570.923	348			

a R2乗 = .222 (調整済みR2乗 = .162)

表5-4-4 「最長勤務」基準の多元配置の分散分析結果

第1ステップ 1要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	1425.206(a)	5	285.041	2.422	.035
切片	415569.688	1	415569.688	3531.443	.000
Q34	1425.206	5	285.041	2.422	.035
誤差	43305.147	368	117.677		
総和	618744.000	374			
修正総和	44730.353	373			

a R2乗 = .032 (調整済みR2乗 = .019)

第2ステップ 2要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	1488.286(a)	6	248.048	2.105	.052
切片	405966.605	1	405966.605	3445.482	.000
Q34	1466.006	5	293.201	2.488	.031
Q26	63.080	1	63.080	.535	.465
誤差	43242.067	367	117.826		
総和	618744.000	374			
修正総和	44730.353	373			

a R2乗 = .033 (調整済みR2乗 = .017)

第3ステップ 3要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	2275.223(a)	8	284.403	2.450	.014
切片	128372.194	1	128372.194	1105.645	.000
Q34	1635.884	5	327.177	2.818	.016
Q26	98.708	1	98.708	.850	.357
Q27	594.823	2	297.411	2.562	.079
誤差	42030.416	362	116.106		
総和	613443.000	371			
修正総和	44305.639	370			

a R2乗 = .051 (調整済みR2乗 = .030)

第4ステップ 4要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	2843.233(a)	12	236.936	2.028	.021
切片	107763.019	1	107763.019	922.515	.000
Q34	1505.369	5	301.074	2.577	.026
Q26	199.173	1	199.173	1.705	.192
Q27	493.201	2	246.601	2.111	.123
Q28	511.087	4	127.772	1.094	.359
誤差	41118.669	352	116.814		
総和	605306.000	365			
修正総和	43961.901	364			

a R2乗 = .065 (調整済みR2乗 = .033)

第5ステップ 5要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	3391.141(a)	16	211.946	1.813	.028
切片	93412.672	1	93412.672	798.984	.000
Q34	1586.004	5	317.201	2.713	.020
Q26	228.390	1	228.390	1.953	.163
Q27	480.600	2	240.300	2.055	.130
Q28	607.129	4	151.782	1.298	.270
Q29	539.299	4	134.825	1.153	.331
誤差	40569.277	347	116.914		
総和	603862.000	364			
修正総和	43960.418	363			

a R2乗 = .077 (調整済みR2乗 = .035)

第6ステップ 6要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	5291.376(a)	19	278.493	2.465	.001
切片	83069.822	1	83069.822	735.224	.000
Q34	1151.864	5	230.373	2.039	.073
Q26	493.684	1	493.684	4.369	.037
Q27	336.354	2	168.177	1.488	.227
Q28	531.021	4	132.755	1.175	.322
Q29	574.991	4	143.748	1.272	.281
Q30	1883.640	3	627.880	5.557	.001
誤差	38641.133	342	112.986		
総和	601106.000	362			
修正総和	43932.508	361			

a R2乗 = .120 (調整済みR2乗 = .072)

第7ステップ 7要因

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	6275.409(a)	23	272.844	2.427	.000
切片	69551.659	1	69551.659	618.762	.000
Q34	1273.255	5	254.651	2.265	.048
Q26	642.463	1	642.463	5.716	.017
Q27	325.279	2	162.639	1.447	.237
Q28	496.394	4	124.098	1.104	.355
Q29	534.844	4	133.711	1.190	.315
Q30	365.498	3	121.833	1.084	.356
Q31	915.408	4	228.852	2.036	.089
誤差	37430.709	333	112.405		
総和	594924.000	357			
修正総和	43706.118	356			

a R2乗 = .144 (調整済みR2乗 = .084)

表7-4-5 「最長勤務」の一元配置の分散分析結果

一変量の分散分析.

被験者間因子			
	値ラベル	N	
最終学歴	1	新制中学校	71
	2	新制高等学校	158
	3	新制各種専門学校	21
	4	新制短期大学	28
	5	新制大学・大学院	92

被験者間効果の検定

従属変数: 自己実現トータルスコア

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	1824.979(a)	4	456.245	3.996	.003
切片	442635.887	1	442635.887	3876.406	.000
Q32	1824.979	4	456.245	3.996	.003
誤差	41678.319	365	114.187		
総和	769536.000	370			
修正総和	43503.297	369			

a R2乗 = .042 (調整済みR2乗 = .031)

推定周辺平均

1. 全平均

従属変数: 自己実現トータルスコア

平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
		下限	上限
45.048	.724	43.625	46.471

2. 最終学歴

推定値

従属変数: 自己実現トータルスコア

最終学歴	平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
			下限	上限
新制中学校	41.155	1.268	38.661	43.649
新制高等学校	43.354	.850	41.683	45.026
新制各種専門学校	46.714	2.332	42.129	51.300
新制短期大学	47.071	2.019	43.100	51.043
新制大学・大学院	46.946	1.114	44.755	49.136

< 巻末資料 70 > 第 8 章適用

表 8 - 2 - 3 2 つのモデルの標準化係数の比較

MODEL RESULTS		標準化係数	
Mplus Ver. 3.11			
		1 次因子 モデル	2 次因子 モデル
F1	BY		
RQ20		0.686	0.687
RQ21		0.781	0.781
RQ23		0.750	0.753
RQ17		0.720	0.717
F2	BY		
RQ12		0.660	0.660
RQ3		0.650	0.650
RQ8		0.694	0.694
RQ10		0.798	0.798
F3	BY		
RQ7		0.729	0.728
RQ5		0.815	0.819
RQ1		0.694	0.691
RQ6		0.687	0.688
F4	BY		
RQ18		0.630	0.641
RQ15		0.658	0.658
RQ2		0.683	0.676
F5	BY		
RQ9		0.567	0.564
RQ16		0.722	0.724
F6	BY		
F2			0.927
F3			0.905
F7	BY		
F1			0.938
F4			0.904
F5			0.871

< 巻末資料 7 1 > 第 8 章適用

表 8 - 2 - 4 2 次因子モデルの R-Square

No	観測変数	R-Square
1	Q1	0.477
2	Q2	0.457
3	Q3	0.423
4	Q5	0.470
5	Q6	0.473
6	Q7	0.530
7	Q8	0.481
8	Q9	0.318
9	Q10	0.637
10	Q12	0.436
11	Q15	0.433
12	Q16	0.525
13	Q17	0.515
14	Q18	0.410
15	Q20	0.472
16	Q21	0.609
17	Q23	0.567
	因子	R-Square
1	F1	0.880
2	F2	0.859
3	F3	0.820
4	F4	0.817
5	F5	0.758

表 8 - 2 - 5 2 次因子モデルの相関係数

因子	F6	F7
F6	1.000	0.986
F7	0.986	1.000



1 確認的因子分析結果 (Mplus VERSION 3.11)

1 次 5 因子

MODEL RESULTS

		Estimates	S. E.	Est. /S. E.	Std	StdYX
F1	BY					
	RQ20	1.000	0.000	0.000	0.670	0.686
	RQ21	1.081	0.079	13.633	0.724	0.781
	RQ23	0.995	0.076	13.172	0.667	0.750
	RQ17	1.011	0.080	12.699	0.678	0.720
F2	BY					
	RQ12	1.000	0.000	0.000	0.538	0.660
	RQ3	1.041	0.094	11.094	0.560	0.650
	RQ8	1.286	0.110	11.718	0.692	0.694
	RQ10	1.603	0.123	13.082	0.862	0.798
F3	BY					
	RQ7	1.000	0.000	0.000	0.734	0.729
	RQ5	1.061	0.070	15.076	0.779	0.815
	RQ1	1.161	0.090	12.902	0.852	0.694
	RQ6	0.758	0.059	12.772	0.556	0.687
F4	BY					
	RQ18	1.000	0.000	0.000	0.563	0.630
	RQ15	1.084	0.105	10.339	0.610	0.658
	RQ2	1.275	0.120	10.619	0.717	0.683
F5	BY					
	RQ9	1.000	0.000	0.000	0.468	0.567
	RQ16	1.391	0.149	9.326	0.651	0.722

MODEL RESULTS

F2	WITH					
	F1	0.310	0.036	8.499	0.861	0.861
F3	WITH					
	F1	0.403	0.046	8.746	0.820	0.820
	F2	0.332	0.038	8.630	0.840	0.840
F4	WITH					
	F1	0.322	0.040	8.131	0.852	0.852
	F2	0.248	0.032	7.832	0.819	0.819
	F3	0.348	0.042	8.276	0.842	0.842
F5	WITH					
	F1	0.264	0.036	7.421	0.844	0.844
	F2	0.201	0.028	7.137	0.801	0.801
	F3	0.269	0.037	7.325	0.783	0.783
	F4	0.191	0.029	6.548	0.727	0.727

2 2 次確認の因子分析結果 (Mplus VERSION 3.11)

2 次 : 下位 5 因子・上位 2 因子

MODEL RESULTS

		Estimates	S. E.	Est. /S. E.	Std	StdYX
F1	BY					
	RQ20	1.000	0.000	0.000	0.671	0.687
	RQ21	1.079	0.079	13.634	0.724	0.781
	RQ23	0.997	0.075	13.217	0.669	0.753
	RQ17	1.006	0.079	12.663	0.675	0.717
F2	BY					
	RQ12	1.000	0.000	0.000	0.538	0.660
	RQ3	1.040	0.094	11.094	0.560	0.650
	RQ8	1.286	0.110	11.713	0.691	0.694
	RQ10	1.603	0.123	13.083	0.862	0.798
F3	BY					
	RQ7	1.000	0.000	0.000	0.733	0.728
	RQ5	1.067	0.071	15.090	0.782	0.819
	RQ1	1.157	0.090	12.811	0.848	0.691
	RQ6	0.759	0.059	12.758	0.556	0.688
F4	BY					
	RQ18	1.000	0.000	0.000	0.572	0.641
	RQ15	1.066	0.102	10.423	0.610	0.658
	RQ2	1.241	0.117	10.631	0.710	0.676
F5	BY					
	RQ9	1.000	0.000	0.000	0.466	0.564
	RQ16	1.402	0.152	9.230	0.653	0.724
F6	BY					
	F2	1.000	0.000	0.000	0.927	0.927
	F3	1.332	0.121	10.972	0.905	0.905
F7	BY					
	F1	1.000	0.000	0.000	0.938	0.938
	F4	0.821	0.081	10.182	0.904	0.904
	F5	0.644	0.074	8.695	0.871	0.871

MODEL RESULTS

F7	WITH					
	F6	0.309	0.036	8.525	0.986	0.986

END